第二の神聖経典の宝石

(トライタ定理における福音)



著者：三宗教（ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教）の唯一の導師、霊的王国の帝王、100冊以上の神聖な書物の著者、インドゥ・グニャーナ・ダルマ・プラダータ、センセーショナルな作家、トライタ教義のアディ・カルタ.

シュリー・シュリー・シュリー・アチャリヤ・プラボーダーナンダ・ヨギーシュワルル



第二の神聖経典の宝石

(トライタ定理における福音)

著者:

三宗教（ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教）の唯一の導師、霊的王国の帝王、100冊以上の神聖な書物の著者、インドゥ・グニャーナ・ダルマ・プラダータ、センセーショナルな作家、トライタ教義のアディ・カルタ.

シュリー・シュリー・シュリー・アチャリャ・プラボーダーナンダ・ヨギーシュワル

翻訳者

鈴木正樹

出版社

スヴァルタ・クライストヴァ・サンガム

用語集

アチャラ・プラクリティ：不変の五大元素 - 空、風、火、水、地。それら（プラクリティ）はカルマを持たない。プラパンチャ。パンチャ・ブータ。

アダルマ：ダルマに反するもの。良いカルマ、悪いカルマ、またはその両方を引き起こす。『バガヴァッド・ギーター』において言及されるアダルマ - ヴェーダの学習、慈善活動、供犠（ヤジナ）、苦行（タパス）など。

アガミ・カルマ：生まれてから死ぬまでの間に新たに生じる罪や功徳。差し迫ったカルマ。

アハム：身体の中にあるが、グナ（性質）ではない部分。

アンタッカラナ：5つの微細な身体の部分 - ジーヴァ（ジーヴァートマ）、マナス、ブッディ、チッタム、アハム。

占星術：霊的な知恵を持つ者は、他者のカルマをその知恵で理解し、伝える。未来を知るには知恵の目が必要。知恵の光で知るもの。

アートマ：死すべき存在と共に住む者。不滅の存在。すべての生物の中にある者。アートマ。アクシャラ・プルシャ。不滅の魂。

バガヴァン：神から来た者。神の情報を携えて来た者。キリスト、スヴァヤンブー、または慰め主、唯一の生まれし子。助言者、助け手。神の使者。グル。

ブッディ：身体における知性で、行動の良し悪しを分析する。

チャラ・プラクリティ：変化するプラクリティ。ジャガット（世界）。生き物。チャラ・プラクリティ。すべての生物における身体の全パーツは25。

契約の血：知恵の力。知恵の本質。カルマの束縛を受けない神の知恵。

デーヴァタ：目に見えない人々。半神。

ダルマ・シャーストラ：ダルマ（知恵）を記した聖典。神の戒律。ブラフマ・ヴィディヤ（超知識）。超科学。

ダルマ：神聖な知恵。神聖な教義や原則。戒律。ダルマに従うことで、生と死から解放される。

幽霊：微細な身体を持って生きている者。悪霊、悪魔。

ジーヴァートマ：身体に宿る死すべき魂。クシャラ・プルシャ、またはジーヴァ。

感覚器官：5つの感覚器官 - 目、耳、鼻、舌、皮膚。

グナニ：神聖な知恵とダルマを知っている人。ブラフマ・グナニ。

カルマ・チャクラ：108の部分で構成される。カルマ・チャクラの12の部分それぞれが異なる種類のカルマを持ち、各カルマはさらに9つに分けられる。

カルマ・ヴィサルガ：カルマを小さな部分に分割すること。

カルマ・ヨーガム：ジーヴァートマが身体の中のアハムを認識し、アハムの言うことを聞かなければ、カルマは生じない。これはジーヴァがアハムと戦うことである。

カルマ・ヨーギ：知恵を知り、カルマ・ヨーガムを実践する者。

カルマ：目に見えない罪や功徳。

カルメンドリヤ**：**手、足、口、肛門、生殖器。

マナス：脳と器官の間の伝達者として機能し、記憶し、思い出す。

モクシャム：生、死、苦しみなどからの解放。神との合一。パラロカ、ムクティ、または救済。解放。

パラマートマ：アートマとは異なる存在。すべての生物と五大元素の父。神、聖霊、アッラー、プルショッタマ、ウッタマ・プルシャ、またはパラロカの父。至高の魂。

プラクリティ：チャラ・プラクリティとアチャラ・プラクリティの組み合わせ。自然、本質。

プララブダ・カルマ：生まれた時点で決定されるカルマ。この人生で生まれてから死ぬまでの間に起こる。プララブダ・カルマは人が生まれた時に決まる。

プンヤ：善行から生じるもの。人生における快楽をもたらすもの。

プルシャ：すべての生き物においてパラマートマに関連するもの。

サンチタ・カルマ：すべての生で経験したカルマの積み重ねをサンチタ・カルマと呼ぶ。

罪 ：悪行から生じるもの。困難や悲しみを引き起こす。

タットマトラ：感覚器官に関連する派生エネルギー（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）。

ウパデーシャ：知恵の火を施すこと。国でない国（知恵の目を持つ者は誰でも見るべきである）。知恵のエネルギー、パラマートマ。洗礼。知恵の啓示。

ヨーギ ：ヨーガムを実践する者。神聖な知恵を知り、ダルマを実践する人。

神の道

イエスが地上に来る前にも歴史がありました。また、彼の死後にも歴史があります。彼の誕生以前に記録された歴史は旧約聖書として知られており、彼の到来後に記録された歴史は新約聖書と呼ばれています。彼の誕生以前の時代を扱う旧約聖書、新約聖書における彼の生涯、そして彼の死後のキリスト教共同体の広がりは、キリスト教徒にとって大きな意義を持ちます。旧約聖書と新約聖書を合わせたものは聖書として知られています。キリスト教の聖書とヒンドゥー教のバガヴァッド・

ギーターは、どちらも人間を高め、神へと導くことを目的としていますが、それぞれに小さな違いがあります。バガヴァッド・ギーターはクリシュナの教えのみで構成されていますが、聖書にはイエス以前と以後の歴史的記録が含まれています。キリスト教の教えは、キリストの誕生以前の旧約聖書と、彼の死後に彼の信徒たちによって広められた新約聖書から引き出されています。これには本質的に問題はありませんが、深く考えると、聖書の中で人々を神への道に導くために本当に必要な部分はごく一部であることが分かります。劇の中で特定の登場人物を好んだり、複数のエピソードがある物語の中で一つを特に気に入ったりするように、聖書の場合も、イエス・キリストに焦点を当てた新約聖書の部分―彼の地上への到来から旅立ちまで―が、解脱（モクシャ）を達成する上で最も神聖で重要な部分です。聖書の核心はイエスの歴史にあることを理解することが重要です。イエスの言葉は聖書の中のダイヤモンドの袋のようなもので、人類が把握すべきすべてのことは**マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書**の中に見出すことができます。人類が求める神との親密さは、これら 4 つの福音書の中で発見できます。これらの福音書に含まれる最も崇高な知恵は、人間の知性を超越したヨハネの福音書の中にあります。聖書は全部で 1029 ページありますが、イエスの歴史は新約聖書の中のわずか 102 ページを占めるに過ぎません。聖書を 10 の部分に分けるとすれば、1 つの部分が他の 9 つの部分を凌駕しており、イエスの価値を理解する人々は、この 1 つの部分に含まれる深遠な知恵を認識していま。

私たちはここで、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書からイエスの言葉のいくつかを解説しようとしています。これらの言葉は深遠な知恵に満ちています。多くの神父や牧師、司教がすでに解釈を提供しているのに、なぜ私たちがこれらの言葉を繰り返すのかと疑問に思う人もいるかもしれません。これに対する私の答えは次のとおりです：説教者たちは旧約聖書と新約聖書の節を効果的に教えていますが、キリストの

歴史を包含する４つの福音書の節の説明には隔たりがあるように見えます。ヒンドゥー教徒がバガヴァッド・ギーターの秘密をまだ完全に解き明かしていないのと同様に、４つの福音書の中にはキリスト教徒がまだ発見していない数多くの隠された真理があるかもしれません。これは説教者たちに対する嫉妬の表明ではなく、むしろキリストへの信仰の表現です。私たちの目的は真理を共有し、人々がイエスを正しく理解し、彼の偉大さと力を認識できるようにすることです。

ヒンドゥー教徒は、キリストの名前が記された私の本を見ると、それがキリスト教文献だと思い込んで読むことを拒否することがよくあります。逆に、キリスト教徒はヒンドゥー教のグルが著した本に警戒心を抱き、キリスト教の文献に固執することを好みます。ヒンドゥー教徒は、キリスト教の著者は真のヒンドゥー教徒ではありえないと考えて私の作品を嫌います。一方、キリスト教徒の中には、私の本がキリスト教徒をヒンドゥー教に改宗させることを目的としていると警告する人もいるかもしれません。ヒンドゥー教徒は私たちが彼らの人々をキリスト教に改宗させようとしていると非難し、キリスト教徒は私たちが彼らをヒンドゥー教徒に変えようとしていると非難します。しかし、私たちの意図を明確にすることが重要です。私たちは誰かを改宗させようとしているのではなく、むしろ私たちの目標は人々が真の神の知恵を求めるよう励ますことです。神の子供である全ての人は、神についての自分の信念を表現する権利を持っています。したがって、私たちは他の人々が何を考えたり想定したりするかにかかわらず、忍耐強く神の教えを分かち合います。

疑いや嫉妬を抱いているかもしれない人々に質問があります。神は人間として地上に来て去っていきましたが、彼はまた戻ってくると約束しました。神が一度だけ現れると自信を持って主張できる人はいるでしょうか？そのような主張は真の知恵と相容れないように思われます。神は地上に必要があるときはいつでも戻ってくると宣言しています。ダルマの原則が脅

かされる逆境の時に彼は来ます。この宣言はバガヴァッド・ギーターと聖書の両方に明らかです。神はどのような形でも取ることができ、その教えを伝えることができます。ヒンドゥー教徒がクリシュナの帰還をクリシュナとして期待したり、キリスト教徒がイエスの帰還をイエスとして期待したりするのは間違いです。神が来ることを選んだとき、時期、場所、形に関する制約はありません。彼は人間の認識を超えた形で現れるかもしれませんが、彼のメッセージは時代を超えて変わりません。神聖な原則としてのダルマは、本質的に一貫しており、科学の法則のように変化しません。したがって、神は常に同じダルマを伝えるでしょう。それは彼の名前、形、または彼が生まれる宗教にかかわらずです。

神は地上に現れたときに特定の宗教を確立したことは一度もありません。彼の教えは特定の宗教的枠組みに縛られておらず、彼は特定の宗教を支持したり、所属したりしませんでした。代わりに、彼は特定の宗教に言及することなく、彼の神聖な原則、つまりダルマを伝えました。宗教の創造は人間の営みです。神は宗教集団の人々の間で悪事を観察したとき、彼らの誤りを指摘し、神の正しい道に導き、宗教的所属にかかわらずダルマの実践を奨励しました。ダルマ自体が宗教を作り出したわけではありません。人々は神の知恵についての理解、彼らが話す言語、そして彼らの行動に基づいて宗教を形成しました。

各宗教はそれぞれ独自の方法論に従い、特定の神を崇拝します。宗教の信者がその信仰に関連する儀式を遵守することは慣習です。しかし、これらの宗教的実践が人間の創造物であることを理解することが重要です。神が地上で人間の形を取るとき、彼は特定の宗教的儀式や習慣に従いません。また、他の神々を崇拝することもありません。宗教的実践と儀式は人間のためのものであり、神のためのものではありません。代わりに、神の役割は人々を正しい道に導き、彼らの信仰心の不足を明らかにすることです。神が人間として受肉するとき、彼の焦

点は人間が行うような神々の崇拝に参加することではなく、神と神のダルマについての知識を伝えることにあります。

神がドヴァーパラ・ユガにクリシュナとして受肉したとき、彼はいかなる神の崇拝にも従事しませんでした。代わりに、時が来たとき、彼はパラマートマ（至高の魂）の知恵を完全に明らかにしました。同様に、神がカリ・ユガにイエス・キリストとして受肉したとき、彼は神々の崇拝に従事せず、彼が伝えようとした知恵を説きました。彼の真の偉大さと神性は、彼が知恵を伝えるときに明らかになります。他の時には、彼は他の誰もが普通の人間として現れることがあります。無知な人々は彼を普通の人間と間違えるかもしれませんが、知恵のある人々は彼を神として認識することができます。完全な知恵を持つ人々は、彼が地上に降りてくるときはいつでも彼を識別することができます。しかし、マーヤの影響下にある個人は、いかなる状況でも彼を認識することができません。さらに、人間は時々彼を普通の個人として認識し、彼を侮辱したり、さまざまな問題を引き起こしたりします。

神が数千年に一度、人間として地上に来るとき、蛇の子孫である人間は彼を認識することができません。彼らは彼を認識できないだけでなく、彼を拷問にもかけます。人間は通常、同胞を拷問しないのに、なぜ彼が拷問を受けるのかと不思議に思う人もいるかもしれません。答えは、神が人間として受肉するとき、彼は普通の生活を送らないという事実にあります。彼の目的はダルマに沿った神聖な知恵を伝えることです。その結果、無知な者やダルマを理解しない者は、彼に対して敵意を抱くかもしれないです。そして、その憎しみが彼に対する迫害へとつながる可能性があります。神聖な教えがなければ、そのような敵対者はいないでしょう。しかし、彼が人間の行動におけるアダルマ（非道徳的行為）を指摘すると、自分たちは

ダルマに従っていると信じながらアダルマに固執している人々は怒りを感じるでしょう。歴史を通じて、人間は彼が人間として受肉するたびに彼に対して敬意を払わなかった。イエスが神聖な知恵を教えたとき、一部の人々は彼を嫉妬しました。彼らは彼の偉大さと知恵を理解できず、最終的に彼を死刑に処しました。彼は自分たちがグニャーニ（知者）だと思っている宗教的な追随者たちの手によって死んだのです。蛇の子孫は無知の毒を持っています。そのため、キリストの生涯は蛇の子孫の手によって終わりました。

神は神についてのすべてを知っていますが、人間は何も知りません。人間は神が明らかにするときにのみ、神のダルマ（神聖な原則）を理解することができます。神の性質と教えについての洞察を得るためには、神聖な啓示が不可欠です。宇宙のすべての原子に存在する神の一部が人間として受肉します。一定期間世界に存在するためには、カルマとして知られるシステムが関与します。人間の誕生の原因はカルマに起因しますが、神自身はカルマを超越しています。したがって、神は自身の誕生に必要なカルマを生成し、そのカルマとともに受肉します。そのような個人は、**スヴァヤンブー（自己生成）**と呼ばれ、カルマに縛られていないことを意味します。そのような存在は、**バガヴァン（神）またはコンフォーター（慰め主、アダラナ・カルタ）**として知られています。神がバガヴァンとして過去に地上に何度も現れたと信じられていますが、正確に何回ダルマが地上で復活されたかは不明です。過去数百万年にわたって多くの謎が解明されてきましたが、記録された歴史はわずか数千年しかありません。その結果、過去の出来事についての私たちの知識は限られていますが、歴史的記録は神が人類を導くために人間として受肉した例を示しています。

神が時折地上で人間として生まれ、死ぬことは明らかです。深く考え、私たちが持つ知恵で、神が約 5,000 年前にイ

ンドで、そして約 2,000 年前にイスラエルで生まれたことが明らかになります。このイスラエルでの神聖な受肉は、当時イエス・キリストとして知られていました。彼は自身が事前に決定したカルマに導かれて、33 年間という限られた期間、地上の人間の間に存在しました。イエスの人生の最初の 30 年間、彼は普通のジーヴァートマ（個人の魂）として生きました。その後の 3 年間で、彼は時にアートマ（魂）として生きながら、人類にアートマの知恵を伝えました。

ある人々は、「神性は地上で人間として生まれる。神性（神）は宇宙のすべての原子に広がっている」という私の発言に疑問を持つかもしれません。神が人間として生まれたとき、神は全宇宙に広がらないのでしょうか？バガヴァンとして地上に生まれた後、すべてに存在すると言われる神は、私たち全員の中に存在しないのでしょうか？これについて、比喩を用いて答えを探ってみましょう。海を考えてみましょう。海は水で満ちています。もし小さな容器でその水の一部を海から取り出したとしても、容器には海水が入っていますが、海は依然として水で満ちています。容器の水は「分離した水」と呼ばれ、海の水は「分離していない水」と呼ばれます。海と容器の両方に同じ水があり、水の特性に違いはありません。ただし、容器の水は海から分離されているだけです。同様に、神を海に例えることができます。バガヴァンは容器の中の分離された水のようなもので、海としての神とは区別されます。しかし、容器の水と海水は同じものです。同様に、バガヴァンと神は同一です。水を容器に入れても海は減少せず、海は満たされたままです。同様に、神の一部がバガヴァンとして受肉しても、神は以前と同様に遍在し続けます。バガヴァンとして現れても、神、神の神聖な原則、または神の遍在性に変化はありません。神の一部がバガヴァンになりますが、神全体ではありません。バガヴァンは神の一部に過ぎませんが、同じ特性を持っています。したがって、神が生まれると言っても間違いではありません。

神の一部だけが地上に生まれるのです。したがって、イエスを「神」と呼ぶことに問題はありません.

ある人々は別の質問をするかもしれません：もしイエスが神なら、なぜ人々が彼を傷つけたときに苦しみを耐え忍んだのでしょうか？なぜ彼は人間の拷問と屈辱を受けたのでしょうか？彼らはまた、なぜイエスは自分の神聖なアイデンティティを彼らに明かさず、彼を虐待した人々を罰するために神聖な力を使わなかったのかと尋ねるかもしれません。これに対する私たちの回答は次のとおりです：これを理解するためには、まず神聖な秘密を把握する必要があります。普通の人の体内には、ジーヴァートマ、アートマ、パラマートマという３つの魂が存在します。これら３つの魂のうち、ジーヴァートマとアートマは両方とも体内に存在します。これら２つの魂は体の外にはありません。３番目の魂であるパラマートマは、体内と体外に広がり、宇宙のすべての原子に浸透しています。しかし、パラマートマは体内や体外で積極的に行動を起こしません。２番目の魂であるアートマは、すべての身体機能を担当します。１番目の魂であるジーヴァートマは、快楽と悲しみを経験すること以外には何もしません。多くの個人は、自分（ジーヴァートマ）がすべての行動を行っていると考えるかもしれませんが、それは人間の体内では当てはまりません。私たちが意識せずに体内に存在するアートマが、すべての作業を行っています。アートマさえも自分の意志で何かを行うわけではありません。アートマはカルマに従って働きます。カルマはすべての任務の根本的な原因です。カルマの法則によると、ジーヴァートマは喜びと悲しみを経験する運命にあります。ジーヴァートマが体内でこれらの経験をするために、体全体に広がるアートマが、これらの身体機能を促進します。これには、食物の消化、心臓の鼓動の調整、血液からの尿や汗の分離などの生理的プロセスが含まれます。アートマがこれらの身体機能を実行することで、ジーヴァートマは体内で共存することができます。体内では、ジーヴァートマの主な機能は経験することです。これは、すべ

ての人間の体を支配する固有の法則であり、変化せず一定です。

神が人間として生まれても、彼の体は普通の人間の体と同様のシステムで機能します。彼の体内では、パラマートマが存在し、アートマがすべての仕事を行い、ジーヴァートマが経験します。神が人間の形を取るとき、彼の体内でも同じプロセスが起こります。神がイエスとして来たとき、彼の体は普通の人間の体と何ら変わりありませんでした。したがって、彼はジーヴァートマとして、あらゆる苦しみと喜びを経験しました。イエスは人生で多くの課題に直面しましたが、それらすべてをジーヴァートマとして経験しなければなりませんでした。地上での生活でこれらの経験をするために、彼は自身のカルマを作り出し、人間として受肉しました。ここで、あなたは彼が私たちと何が違うのかと尋ねるかもしれません。確かに、一つの重要な違いがあります。以前、すべての人間の体内では、アートマだけが機能すると学びました。バガヴァンの体内でも同様に、アートマが機能を果たします。しかし、バガヴァンの体内では、何か異なることが起こる特別な瞬間があります。そのような瞬間には、3つの魂が通常の役割から逸脱し、異なる方法で機能します。このような状態では、ジーヴァートマは経験のない状態に入り、アートマがジーヴァートマの役割を引き受けます。この状態でバガヴァンの体から発せられる言葉は、アートマからのものであり、完全に霊的な性質を持ちます。深遠な霊的真理と神のダルマは、アートマが直接語るときにのみ明らかにされます。稀に、アートマとジーヴァートマが沈黙し、パラマートマが主導権を握って語ることがあります。このような出来事は、バガヴァンの生涯で１回か２回起こることがあります。イエス、クリシュナ、ラーヴァナ・ブラフマの生涯では、パラマートマが語る瞬間がありました。パラマートマが語るとき、プラクリティ（物質的自然）は彼の言葉に従います。同様に、アートマが語るとき、深遠な知恵は彼のコントロール

下にあります。これらの神聖な化身の生涯では、次のようなことが起こりました：**1) パラマートマの言葉はプラクリティを支配しました。2) アートマの言葉は純粋なアートマの知恵を伝えました。3) ジーヴァートマは喜びと悲しみを経験しました。**イエスの生涯で、嵐が海で起こったときにパラマートマが語り、嵐を静めるよう命じました。プラクリティが彼の言葉に従い、鎮まったことが明らかになりました。アートマとして、彼は純粋な知恵を表現しました。また、彼は残りの人生の大部分で、ジーヴァートマとしてさまざまな喜びと悲しみを経験しました。クリシュナの生涯でも同様の出来事が起こりました。彼は太陽に命じ、サインダヴァを殺しました。また、クリシュナが普遍的な形を現し、「私はパラマートマである」と宣言した機会もありました。アートマとして、彼はバガヴァッド・ギーターの形で深遠な知恵を伝えました。そして、残りの時間はジーヴァートマとして人生の喜びと悲しみを経験しました。3つの魂が異なる役割を果たすこのような相互作用は、バガヴァンの体内でのみ起こります。神性は数千年または数百万年に一度だけ人間の形を取ります。神が地上に生まれるとき、彼は主に他の人々と同様にジーヴァートマとして生きます。一度または二度、非常にまれに話すことがあるか、まったく話さないこともある。アートマとして語る必要性は、彼がダルマを伝えるために来たからです。これは、マーヤのシステムとは異なる神のシステムを表しています。

神が普通の人間のように振る舞う限り、問題はありません。しかし、神がアートマとして知恵を伝えるとき、マーヤは反対します。マーヤは根本的に神の知恵に反対しています。したがって、サタンとも呼ばれるマーヤは、個人がマーヤの側から神の知恵を受け入れる側に移行するのを防ぐために警戒しています。さらに、マーヤは知恵に興味を示し理解を示す人々を積極的に探し出し、彼らをマーヤの側に引き戻そうとします。これが、多くの人々が真の神の知恵を受け入れることに限

られた関心しか持たない理由です。主にマーヤの影響によるものです。結果として、ある程度の知恵を持っている人でさえ、道を外れる可能性があります。この時点で、あなたは次のような質問をするかもしれません：「今日、深い信仰を持つ多くの信者がいます。彼らはさまざまな精神的指導者から知恵を求め、神々に対して揺るぎない献身を示しています。無神論者を除いてほぼ全ての人が神に献身的です。サイ・ババやアイヤッパの信者を変えることは可能でしょうか？国内の長年の寺院に加えて、シルディ・サイ・ババやアイヤッパ・スワミを称える新しい寺院が多数建設されています。マーヤは彼らの献身を妨げていないようです。あなたの見方をどのように受け入れればいいのでしょうか？」これに対する私の回答は次のとおりです：

マーヤは神の道と最高の知恵に直接対立します。神の深遠な知恵に対する反対は、マーヤの大きな力を示しています。これはバガヴァッド・ギーターで「マーヤ・ドゥラティヤヤ」（克服困難なマーヤ）と呼ばれています。神はバガヴァッド・ギーターでマーヤを征服することは不可能だと言いました。したがって、マーヤは想像を絶するほど人間を欺いていることがわかります。このように、マーヤの働きは大部分が不明瞭で神秘的なままであり、個人はその欺瞞に対して脆弱です。マーヤは独自のバージョンの知恵を作り出すことで機能します。神が数千年に一度だけバガヴァンとして地上に受肉するため、マーヤは多くの偽のバガヴァンを生み出し、人々が本物のバガヵンを認識できないように混乱させます。マーヤは多くのタイプの知恵を導入し、多くの人々が真の知恵と偽物を区別することを困難にします。地上にマーヤに関連する多くのバガヴァンがいるとき、誰が稀にしか来ない真のバガヴァンを認識できるでしょうか？数多くの超自然的な偉業と奇跡（マハトヤ）を示すバガヴァンがいるとき、生涯で１つか２つのマハトヤしか示さない真のバガヴァンを誰が識別できるでしょうか？このように、神の知恵とバガヴァンを認識することは不可能になっ

ています。神は普遍的な形で自らの現実を示しました。これは誰も見たことがなく、理解できないものです。しかし、マーヤは一部の人々に影響を与えて、多くの神々が普遍的な形を示したと書かせました。サイババやヴィーラブラフマムを含めて、人々がクリシュナの普遍的な形を最高のものとして数えないようにしました。バガヴァッド・ギーターでクリシュナが示した普遍的な形が最も偉大だと考える人は誰でしょうか？このように、キリスト教徒はイエス・キリストをバガヴァンとして認識できず、同様にヒンドゥー教徒はクリシュナをバガヴァンとして知ることができませんでした。ヒンドゥー教徒はクリシュナを真の神とみなすことができませんでした。一部の人々は彼を他のすべての神々の最後のものとして見なしますが、他の人々は彼の行動をいたずらっぽいと認識するため、彼を小さな神としてさえ認識できません。シルディ・サイ・ババのように、誰もクリシュナを神として数えません。同様に、キリスト教の伝統では、イエス・キリストを神の子と考えているにもかかわらず、多くの人々が彼の教えの本質を把握していません。マーヤの影響下で、キリスト教徒はイエス自身ではなく、イエスの十字架刑の道具となった十字架を崇拝しています。彼らはイエスの偶像を崇拝すればヒンドゥー教徒と見なされると考え、代わりに十字架に祈ります。イエスが「私を見た者は私の父を見たのである」と言ったにもかかわらず、キリスト教徒がイエスの偶像の代わりに、イエスの死の原因となった十字架を尊重することは、マーヤの仕業ではないでしょうか？マーヤは戦略的に人々を神の道から遠ざけます。たとえ彼らがその道にしっかりと立っていると信じていても、です。マーヤは神の知恵を理解し、真実を語る人々の信頼性を損なわせ、彼らの言葉を劣っているように、あるいは聞こえないようにします。さらに、マーヤは様々な宗教の形成と、各宗教に異なる神々が存在するという幻想に寄与してきました。宇宙を支配する一つの最高の力があるにもかかわらず、マーヤは異なる宗教に対応する複数の神々への信仰を育んできました。マーヤの影響は深遠で、多数の神々と宗教的信念の出現につながっています。キリスト教信

仰の中でさえ、一部の信者はマリアを崇拝し、他の人々はキリストを崇拝します。同様に、ヒンドゥー教には数多くの神々がいます。この多様性を踏まえると、すべての神々と宗教の究極の長を見分ける探求に乗り出すことが今や不可欠です。しかし、この課題は容易ではありません。**まずマーヤとその影響を認識することで、その後神への道を求めることができます。**したがって、あなたが現在歩んでいる道が神に導くものなのか、それともマーヤの影響を受けているのかを判断することが重要です。

無限の超自然的な力が存在し、それは形がなく、名前がなく、定義されていません。これを「パラマートマ」と呼びましょう。すべての存在の源であるパラマートマについては、ほとんど知られていません。パラマートマはすべての原子に浸透していますが、私たちはパンチャ・ブータ（五大元素）の理解に限られているため、パラマートマ自身が現れて自らを明らかにする必要があります。私たちの感覚は、その範囲内にあるものしか知覚できず、パラマートマは私たちの感覚の把握を超えています。私たちは彼が人間の形を取り、自らを可視化し、その知恵を明らかにするときにのみ、彼を理解することができます。そうでなければ、私たちは彼について無知のままです。したがって、パラマートマは人間として受肉し、その知恵を伝える必要があります。彼は自らのダルマを開示するために現れますが、これらの教えは時間とともに薄れていくため、彼はそれらを再確立するために戻ってくる必要があります。宇宙の創造者であるパラマートマは、しばしば人間として現れることを選び、普通の人と同様の存在を送り、その目的を果たします。そのような形でパラマートマを識別することは困難な課題です。パラマートマが地上に数多く受肉してきたにもかかわらず、人間は今日に至るまでその存在を認識するのに苦労してきました。

パラマートマが現前しているときに彼を認識できなかった人々は、彼が去った後に大きな献身をもって彼を崇拝し始めることがよくあります。彼らは彼がパラマートマだからではなく、彼が大きな知恵を持っていると信じているか、彼らの願いが叶うと信じているから崇拝します。しかし、彼らはまだ彼がパラマートマであることを認識していません。私たちは特定の原則を通じてパラマートマの化身を認識することができます。このようにして、パラマートマがドヴァーパラ・ユガの終わりにクリシュナとして来て、後にカリ・ユガでイエスとして来たことを識別できます。パラマートマはその後の時期にも来たかもしれませんが、私たちにはわかりません。

パラマートマが何度生まれようとも、そのダルマ以外に一つの誕生から別の誕生への類似点はありません。ドヴァーパラ・ユガに生まれたクリシュナと、カリ・ユガに生まれたイエスの中でパラマートマの本質は同じですが、彼らの外面的な生活は大きく異なります。シュリー・クリシュナは裕福な生活を楽しみ、８人の妻を持っていました。彼はまた、最初の妻を彼女の同意を得て誘拐し、敵を殺しました。これらすべてを観察した後、パラマートマの一部を宿したバガヴァンとして彼を認識することは、誰にとっても困難になります。

カリ・ユガに生まれたイエスの人生には、嘘や欺瞞はありませんでした。イエスは温和で、敵に頬を打たれたら他の頬を向けました。彼には女性への欲望がありませんでした。クリシュナとイエスは世俗的な事柄において非常に異なっています。両宗教のグルでさえ、この二人について誤解しています。ヒンドゥー教のグルはイエスを批判し、「なぜイエスは普通の人々の手によって死んだのか、なぜ自分自身を救わなかったのか？死者を蘇らせる神聖な力を持っていたのなら、なぜ彼は死ななければならなかったのか？十字架に釘付けにされたとき、

なぜ彼は苦しんだのか？」と問います。同様に、教会の牧師たちはクリシュナを批判し、「多くの妻を持っていた彼がどうして神になれるのか？」と論じます。このように、彼らはイエスとクリシュナの生涯の世俗的な側面に焦点を当てていますが、なぜそのような出来事が彼らの生涯で起こったのかを誰も熟考しません。パラマートマ自身が、彼が地上に来たときに誰も彼を認識できないだろうと言いました。彼の役割は、誰も彼を認識しないように装うことです。彼の使命は、私たちの無知を盗む正体不明の泥棒として私たちの間にいることです。

先ほど、神は世俗的な事柄を通して理解することはできないと述べました。**神は神の知恵を通してのみ認識できます。**グルを自称する人々でさえ、しばしばこの原則を把握できず、世俗的な基準で神を測ろうとします。その結果、神が地上に来ても、誰も彼を認識しません。世俗的な事柄に基づいて奇跡を行う人々は偉大で神のように見えるかもしれませんが、真の神はしばしば見過ごされます。これは、神の存在が外的な、世俗的な要因に基づいて識別できないためです。代わりに、神の化身はダルマに基づいて認識できます。同じダルマがバガヴァッド・ギーターとイエスの教えの中に見出され、それによって彼らを一つのものとして認識することができます。しかし、外的な、世俗的な事柄においては、彼らの間に他の類似点はありません。

全世界にとって神は一人だけです。その神が多くの名前と形を持って人間として受肉し、人類を自分に導きます。残念ながら、多くの人間はこれを理解せず、どの神がより偉大かを論じる宗教を作り出します。彼らは自分の宗教の神と他の宗教の神が同じであることを理解できません。人間は神よりも自分の宗教を愛する傾向があり、これは大きな無知です。神は一人だけであり、私たちが異なる名前で呼んでいるだけだということを知ることが重要です。パラマートマは時代、国、人々に

基づいて自分の役割を決定し、バガヴァンとして受肉して自らのダルマを教えます。彼の誕生は同じではありませんが、彼の目的は常に同じです - 自らのダルマを教えることです。彼がイエスやクリシュナとして来たとき、彼が教えたダルマは同じでした。パラマートマがクリシュナとイエスとして生まれたとき、彼らの名前、生まれた国、性格が異なっていたため、神と彼のダルマは異なって見えるかもしれません。

例として、パラマートマが述べたダルマを取り上げてみましょう。シュリー・クリシュナはギーターで**「パリトラナーヤ・サードゥーナム・ヴィナーシャーヤ・チャ・ドゥシュクリターム」**と言いました。これは**「私は正義の人々を守り、邪悪な者たちを滅ぼす」**という意味です。一部のキリスト教の説教者はこれらの言葉を取り上げ、ヒンドゥー教徒に言います。「あなたがたの宗教には保護がなく、あなたがたの神は罪人を殺すだけです。しかし、私たちの宗教では、すべての罪人のための保護があり、イエスは罪人を救うために地上に来ました。あなたがたの宗教では、あなたがたの神が罪人と邪悪な人々を滅ぼすかもしれませんが、私の神（イエス）はあなたがたを守ります。」したがって、キリスト教徒は自分たちの神が真の神であると主張します。キリスト教徒はこの点についてイエスが言ったことの真の意味を理解しておらず、ヒンドゥー教徒はギーターでクリシュナが言ったシュローカの意味を理解していませんでした。そのため、クリシュナの言葉とイエスの言葉は彼らには異なって見えます。彼らはクリシュナとイエスが異なると信じましたが、彼らが同じであり、彼らが発した言葉が同じ意味を持っていたことを知りませんでした。

「罪人と邪悪な者を滅ぼす」という言葉は、彼らが**「教え」**という武器を使って罪と悪のカルマを取り除き、彼らを純粋にすることを意味します。邪悪な者が純粋になると、彼らは罪に捕らわれなくなり、正義の人々になります。そうすれば、邪悪な人々はいなくなります。したがって、ギーターでクリシュナが「邪悪な者を取り除く」と言うことと、聖書でイエ

スが「あなたがたを罪から守る」と言うことは、同じことを意味します。イエスとクリシュナは異なる言語を話し、異なる個人で、異なる名前を持っていましたが、彼らの言葉の目的は同じでした。人々が神の概念を完全に把握できず、自分たちの好みに合わせて彼の言葉を解釈する傾向があるため、彼らは同じダルマを宣言した神を分裂させました。ヒンドゥー教徒がイエスを批判し、キリスト教徒がクリシュナを神やパラマートマ、パラローカの王と父、宇宙の支配者、全世界に遍在し私たちの内に住む存在ではないと主張するとき、目を持ちながら盲目であるこれらの人々を知って、神は笑います。クリシュナはギーターで「ダルマが脅かされるときに私は来る」と言いました。しかし、ヒンドゥー教徒は、彼が以前と同じように - 孔雀の羽、笛、チャクラを持って - 現れた場合にのみ、彼を神として認識します。神が異なる形で生まれると、彼らは「あなたは私たちの神ではない」と言います。聖書では、イエス・キリストは再び来ると言いました。キリスト教徒はイエス・キリストを、彼が以前と同じように - 手に釘の跡があり、脇腹に槍の跡がある - 現れた場合にのみ認識するでしょう。彼が異なる形で来れば、彼らは「あなたは私たちの主ではない」と言うでしょう。彼らの外見と行動の違いのために、キリスト教徒はイエスがクリシュナであったことを認識できず、同様にヒンドゥー教徒はクリシュナがイエスであったことを認めることができませんでした。だからこそ神はギーターで「**人々は私を知らず、私のマハトヤ（偉大さ）を知らないので、私を侮辱する**」と言ったのです。

一部のヒンドゥー教のグルは、クリシュナが再び来ても、彼が形と名前を変えていれば、彼に知恵を教え、ウパデーシャ（教え）を与えるでしょう。同様に、イエスが聖書で言及されているように再び来ても、彼を認識できないかもしれないキリスト教の説教者たちは、彼に洗礼を施すでしょう。クリシュナが形と名前を変えたときに彼に知恵を教えるグルがいる限り、ヒンドゥー教には無知があると言えます。同様に、イエス

が形を変えて彼らの前に現れたときに聖書の節を説明するキリスト教徒がいる限り、彼らは神を完全に認識していないと言えるかもしれません。

偉大なグニャーニ（知者）たちでさえ、神が地上に来たときに神を認識したり神の知恵を理解したりできなかった強い理由があります。その理由を理解する前に、目に見える創造について知っておく必要があります。神に対する重要な対抗者が存在し、これが神が完全に理解されない理由です。キリスト教徒はそれを「サタン」と呼び、ヒンドゥー教徒は「マーヤ」と呼び、イスラム教徒は「シャイターン」と呼びます。マーヤ、サタン、シャイターンのような名前を持つものの秘密を理解するためには、まず創造の秘密を理解する必要があります。以下で詳細を見ていきましょう。

創造の秘密

パラマートマ（神）は、宇宙が創造される前は男性でも女性でもありませんでした。パラマートマは宇宙を創造したいと望み、そのため女性的なプラクリティまたはマーヤ（サタン）を存在させました。彼はそれに必要な特性とすべての必要な方法を決定しました。プラクリティが女性であったため、パラマートマは彼女と対照的な存在となり、この特性はプルシャ（男性）として知られています。パラマートマはプラクリティが彼と完全に反対であることを望んだので、両方の対抗者が同等の強さを持つときにゲームがより面白くなると信じて、彼女に同等の権限を与えました。プラクリティ（サタン）はパラマートマとは反対ですが、敵ではありません。神（パラマートマ）がサタン（プラクリティ）から反対に直面するのは自然なことですが、彼らはお互いの敵ではありません。

プラクリティを創造したパラマートマは、最終的に彼女を自身に吸収します。彼はプラクリティの父であり、夫であり、破壊者であり、また彼女の中にある力でもあります。広大なパラマートマはプラクリティを創造し、「ジャガト」と呼ばれるゲームに従事しています。このゲームで、パラマートマは劇の外では男性でも女性でもないにもかかわらず、プルシャ（男性）として変装します。プラクリティは空、風、火、水、地の５つの要素に分かれており、プラパンチャと名付けられています。プラクリティを創造した後、パラマートマは誕生と死を経験する生きている存在からなるジャガトを創造したいと望みました。彼はアートマを持つ生きている存在を創造し、プラパンチャの中にジャガトを構築することでこれを達成しました。テルグ語で「ジャ」は誕生を意味し、「ガティ」は死を意味します。したがって、すべての生きている存在は適切に「ジャガト」と名付けられ、それが誕生と死から成ることを示しています。

パラマートマはプラクリティの中に生きている存在からなるジャガトを創造しました。プラクリティ（女性）とパラマートマ（プルシャ）は同等とみなされますが、ジャガティは後に別個に生まれました。ここまでで、パラマートマはプラクリティ（プラパンチャ）とジャガトを創造し、パラマートマを含めて３つの要素が生じました。最初、男性でも女性でもなかったパラマートマはプラクリティを創造しました。その後、パラマートマはプルシャ（アートマ）に変容し、プラクリティを妻として、一緒にジャガトという特別な子孫を生み出しました。これらの関係を無視すれば、パラマートマはプラクリティ、プルシャ、ジャガトという３つの異なる部分を創造したことになります。プラクリティは女性、パラマートマは男性（プルシャ）、そしてジャガトはノンバイナリー（男性でも女性でもない）と考えるべきです。主要なゲームは、パラマートマとプラクリティが、彼らの間に存在するジャガト（ノンバイナリー）を引っ張ることです。このゲームにはルールがあります。

パラマートマはルールを定義しましたが、彼はすべての創造者であり、すべてに優れているにもかかわらず、彼自身が確立したそのルールに従ってゲームに参加します。このゲームは他のゲームと同様に時間制限があります。ジャガトのゲームの時間制限は 1000 ユガまたは 108 クローレ（10.8 億）年で、サッカーが 90 分の時間制限を持つのと同様です。ゲームは夜に休憩し、昼に続き、各プレイ期間と休息期間は 108 クローレ（10.8 億）年続きます。

非特定で未定義のパラマートマは、最初にプラパンチャ（生命体なし）を創造し、その後生きている存在（ジャガト）を生み出しました。パラマートマはプラクリティを創造し、プルシャとして認識されるようになりました。彼はアートマを創造し、アートマの種を受け入れるプラクリティを 5 つの部分に分割しました。そのようなプラクリティはパンチャ・ブータまたはプラパンチャと呼ばれます。パラマートマは、アートマとジーヴァートマを 3 つの部分に分けました。それは、ジーヴァートマ（生命体ジャガト）、アートマ、そしてパラマートマ です。彼はジーヴァートマとアートマを創造した後、パラマートマとして認識されるようになりました。また、ジーヴァートマとアートマと共にパラマートマとして、プラクリティと共にプルシャとして認識されるようになりました。

プラクリティはプルシャの特性とは反対の特性を持っています。しかし、ジャガトはプラクリティとプルシャの両方の属性から成り立っています。生命体ジャガトは、パラマートマに関連するジーヴァートマとアートマ、そしてプラクリティに関連する体とグナの両方を具現化しています。神の存在への信念はアートマに一致し、神が存在しないという反対の見解はプラクリティに一致します。ジャガトの人間はプラクリティとプルシャの両方の特徴を示します。プラクリティとプルシャの特徴を象徴するために、女性の体はプラクリティに似せて作られ、男性の体はパラマートマを表すように設計されました。ノンバイナリーの個人もジャガトを象徴するために創造され、ジ

ャガトがプラクリティとパラマートマに加えて存在することを示しています。女性、男性、ノンバイナリーの個人はそれぞれプラクリティ、パラマートマ、そして生きているジャガトを象徴しています。プラクリティ＝女性、ジャガト＝ノンバイナリー、パラマートマ＝プルシャ（男性）です。神は、プラクリティに似せて女性を、ジャガトを象徴するためにノンバイナリーの個人を、そしてパラマートマを表すために男性を創造することで、自らの創造を知らしめました。神は、生きているジャガトがアートマとプラクリティから生まれることを示すために、男性と女性の結合を通じて子供を世界にもたらしました。目に見える母親、父親、そして子供は、創造が最初にどのように起こったかを示しています。多くの個人は、その知性にもかかわらず、なぜ男性が女性と異なるのか、そしてなぜ子供が男性と女性の両方から生まれるのかについてしばしば考えません。霊性を真に理解するためには、霊的教育における「**創造の秘密**」の基本を理解することが不可欠です。

　　神とプラクリティの間のゲームが友好的な性質のものであることを理解することが重要です。プラクリティとパラマートマは、このゲームで優しい綱引きを行い、それぞれジーヴァートマを自分たちの側に引き寄せようとします。パラマートマの義務は、ジーヴァートマに知恵を授け、彼らを彼の方へ導くことです。逆に、プラクリティは、マーヤの形でグナの武器を用いて、人間を忙しくさせ、神について考えることを妨げます。プラクリティは、欲望と関連するグナの影響を通じて、個人を日常的な活動に捕らえ、彼らの完全な注意を世俗的な追求に向けさせ、神に向かうことを妨げます。パラマートマとプラクリティの間の最も壮大なゲームは名前がありません。マーヤの形で、プラクリティはさりげなく誰もが気づかないうちにすべての人をその側に引き寄せます。ジャガトの中で誰かが神について考え、彼について知識を求めると、マーヤ（プラクリティ）はその人に焦点を当て、捕らえる傾向があります。神とサタンのこの継続的な闘争において、マーヤ（サタン）は神より

も強く見えます。現在、人類の 99 パーセントがその忠誠を保っています。このような状況で、神の敗北が避けられないように見えるかもしれませんが、パラマートマは勝利するよう努力すべきです。

彼の努力の一環として、パラマートマは人類の中で人間として受肉し、自身について語り、人々を彼の方へ導こうとします。前述のように、真の敵対者はおらず、それぞれの側が自身の戦略を用います。サタン（マーヤ）と神は、すべての人間の中に共存していますが、個人はしばしばその存在に気づかず、神やマーヤを認識するのに苦労します。人間はしばしば、自分がどちらの側にいるのかを意識せずにいます。神はマーヤの影響に捕らわれた個人を解放しようと努め、この追求において、パラマートマは神の子として地上に生まれます。しかし、宇宙のゲームのルールに従って、彼は神の子としてのアイデンティティを明かしてはいけません。したがって、神が人間として受肉するとき、彼は普通の個人としてパラマートマについて語ります。パラマートマは彼の知恵を伝え、彼のダルマを再確立します。逆に、マーヤは神の子を無知で愚かに描写する戦略を立てます。それはグルやスワミジを作り出し、マーヤのアダルマをダルマとして促進し、神の子の教えをアダルマとして提示します。マーヤはこれらのグルやスワミジを通じて神の子と競争し、人間に神の知恵の代わりにその教えを受け入れさせます。マーヤはパラマートマ、モクシャム、知恵、実践などの言葉を用いて人間にそのアダルマを伝え、神のダルマをサタンのアダルマから区別することを困難にします。

誰かが神を見つけようとすると、マーヤは彼らがダルマとアダルマを区別できなくし、彼らに提示されたものを何でも信じさせます。サタン（マーヤ）と神の両方が地上でその存在を明らかにしないことは、宇宙のゲームの基本的なルールです。パラマートマが地上でバガヴァンとして受肉するとき、彼は「私はパラマートマである」と宣言しません。同じルールで、プラクリティが地上に生まれるとき、それは「私はマーヤ

である」と宣言しません。しかし、マーヤが受肉するとき、それは「私はバガヴァンである」と主張することができます。この原則に従って、マーヤ（サタン）は自身をバガヴァン（神の子）として宣言し、多くの奇跡を行い、様々なスワミジの形で現れます。パラマートマが地上の一か所で生まれるとき、プラクリティはバガヴァンという名前を持つ多くの個人を作り出します。パラマートマの誕生は、バガォンとして公然と認識されることなく、彼のダルマを伝えることだけを目的としています。同時に、マーヤはパラマートマの誕生の前にさえバガヴァンという名前を持つ多くの者を生み出します。マーヤは人間にその言葉を聞かせ、本物のバガヴァンの言葉を聞くことを妨げます。この宇宙のゲームで、マーヤはその影響力を発揮し、神は彼の目的を果たします。

一ヤは人間の体内で常にグナの形を取り続ける一方で、神は体内でアートマの形で存在しています。以前、マーヤとパラマートマが地上で人間として受肉すると述べましたが、彼らが取る体について理解することが重要です。マーヤは男性の体でバガヴァンとして、女性の体でバガヴァティとして受肉します。パラマートマは常に男性の体で受肉します。女性であるプラクリティは通常女性の体を着ますが、他者を欺くために男性の体で現れることもあります。バガヴァティとバガヴァンの形で真のバガヴァンを見分けるのは難しいかもしれません。バガヴァンは常に男性として受肉することに注意することが重要です。天の父であるパラマートマは、イエスとして男性の形で受肉しました。彼の誕生は人間の父親の関与なく処女の胎内を通じて起こりました。パラマートマは必要が生じたときに地上に受肉し、イエスはそのような受肉の一つでした。聖霊も将来地上に受肉すると期待されています。

我々はこの聖典を、同じパラマートマが何度生まれても、彼が同じダルマを明らかにするということを伝えるために書きました。この聖典の目的は、読者が聖書の新約聖書におけるイエスの本質的な言葉を理解し、それらをバガヴァッド・ギ

ーターの教えと比較できるようにすることです。これを読むことで、あなたがイエスの偉大さとクリシュナの内なる精神を知ることを望みます。

著者： 三つの宗教の唯一のグル、トライタの創始者、 百の神聖な聖典の著者 シュリー・シュリー・シュリー・アチャーリャ・プラボーダーナンダ・ヨギースワルル

マタイの福音書

1) マタイによる福音書 第 3 章 7 節

(3:7) まむしの子らよ。来るべき怒りを免れると、だれが教えたのか。

この節では、「**まむしの子ら**」という新しい表現が使われています。この表現は人間を指すために使用されていますが、人間を蛇の子孫と見なすことができるかどうかには疑問が残ります。この節を読む人なら誰でも、この疑問を抱くでしょう。また、この節では「**来るべき怒り**」の詳細な意味についても掘り下げる必要があります。さらに、この節の別の言葉である「だれが教えたのか」という表現は過去の時点を指しており、過去に誰が人間に警告したのかを理解する必要があります。この節には答えを必要とする３つの質問があります。

鳥は蛇の敵です。鳥は蛇を殺すことができます。蛇は最初に鳥を怖がらせるためにシューッと音を立てますが、鳥は怖がりません。鳥は蛇を餌として食べることができます。これ

は一般的な知識です。蛇と鳥は霊的教育の文脈で比喩として使用されます。鳥の中でも鳩はアートマに例えられ、蛇はマーヤに例えられます。この節では鳥について言及されていませんが、蛇については言及されています。蛇がマーヤ（サタン）に例えられる場合、「まむしの子ら」は「マーヤの子孫」と理解することができます。より正確には、「まむしの子ら」は「マーヤを持つ人間」の代わりに使用されています。

マーヤとはグナの構成を指します。常にグナに囚われ、神に関心を示さない人々は「まむしの子ら」と呼ばれます。マーヤに絡め取られた人々には差し迫った怒りが待ち受けていることが分かります。**この文脈での怒りは、恐ろしいものや耐え難いものを意味します。**「来るべき怒り」という表現は、現在は存在しないが将来現れるものを示唆しています。人間が最初は持っていないが、マーヤ（グナ）によって獲得するものは、あらゆる種類の善（プンニャ）と悪のカルマ（罪）です。悪いカルマから生じる経験は非常に恐ろしいものになりかねません。したがって、**「来るべき怒り」は人生で現れるカルマを示唆しています。**生まれた人間は誰でもカルマを蓄積するため、**「まむしの子らよ。来るべき怒りを免れると、だれが教えたのか」**という節は人間への警告として機能します。

「だれが教えたのか」という表現が使われているとき、それは過去に誰かが人間にカルマを逃れる知恵を与えたことを示唆しています。この節は、過去に誰かが人々に差し迫ったカルマを避けるためのアイデアを伝えたことを暗示しています。したがって、人間はこの人物の正体を突き止め、彼が何を言ったのか、いつこの知恵を伝えたのかを理解することが重要です。過去の歴史的出来事を思い出すのは難しい課題かもしれません。四福音書の最初の章で提起された最初の質問の答えが分からない場合、第二の神聖な聖典の内容は理解できないでしょう。その結果、第二の神聖な聖典の以降の節も理解できなくなります。したがって、最初の質問の答えを見極めることが不

可欠です。この点に関する真実を明らかにする前に、この第二の神聖な聖典の重要性を探ってみましょう。

神が伝えた知恵は約 5000 年前に聖典となりました。この聖典は 18 章で構成され、マハーバーラタの 18 のパルヴァ（巻）の中央に位置しています。これら 18 章は最初の神聖な聖典と呼ばれています。創造の始まりに、神は空を通じて知恵を伝えました。この知恵は当時「ジャパゥラの知恵」として知られていました。テルグ語で「パゥラ」は分離または異なることを意味し、「ジャ」は生まれることを意味します。したがって、「ジャパゥラ」は「誕生から分離または区別される」と訳されます。神は決して誕生の対象とならないため、この名前が付けられました。ジャパゥラの知恵は最初に第一の神聖な聖典となり、3000 年後、つまり現在から約 2000 年前に第二の神聖な聖典となりました。約 1400 年前、同じ知恵が第三の神聖な聖典として書き写されました。我々は今、第二の神聖な聖典からの文を解釈しています。

「だれが教えたのか」という質問が提起されたとき、我々は過去に知恵を伝えた者について話すべきです。これによると、第一の神聖な聖典で知恵を伝えた者が、最初に人間に警告した者です。過去に伝えた者を知ることには理由があります。神だけが自身の知恵を伝えることができ、神は唯一の存在であるため、同じ神が必要なときにいつどこでも自身の知恵を教えます。したがって、以前に伝えた同じ者が再び節で伝えています。それゆえ、第二の神聖な聖典で知恵を伝えた者を知りたいのであれば、まず過去に知恵を語った者を知る必要があります。そのため、「だれが教えたのか」という質問をする必要が生じました。過去に誰が語ったかを突き止めることができれば、現在誰が語っているかを認識する機会を得ることができます。第一の神聖な聖典を伝えた個人が第二の神聖な聖典の源でもあるという信念を持ってこの聖典にアプローチすることをお勧めします。

第二の神聖な聖典を読む前に、第一の神聖な聖典を語った神が聖書の聖典でどのような節を語ったかを知る必要があります。聖書は全部で 66 章から成り、そのうち 4 章には神が直接語った節が含まれています。残りの 62 章には他のグニャーニ（知者）からの節があります。これらの章は、1) マタイによる福音書、2) マルコによる福音書、3) ルカによる福音書、4) ヨハネによる福音書として知られています。これら 4 つの福音書は聖書の中央部分に位置し、効果的に聖書を 3 つの主要部分に分割しています。最初の 39 章が第一部を形成し、4 つの福音書が第二部となり、残りの 23 章が第三部を構成しています。特に注目すべきは、これら 4 つの章が「**福音書**」と呼ばれていることで、イエスの地上での生涯における言葉が含まれているため、その重要性が強調されています。

聖書の第一部は 39 の部分があります。

聖書の第二部は 4 つの福音書があります。

聖書の第三部は 23 の部分があります。

第一部と第三部では、他のグニャーニが神の知恵を伝えました。第一の神聖な聖典を伝えた者の化身であるイエスは、4 つの福音書で節を繰り返しました。したがって、これを理解するために、「**来るべき怒りを免れると、だれが教えたのか**」という質問が提起されています。そのため、この節が他のすべての節の上に置かれ、大きな重要性を持つと言えます。

2) マタイによる福音書 第 3 章 11 節

(3:11) 私はあなたがたをマナス（心）を変えるために水で洗礼を授けます。しかし、私の後に来る方は私よりも力のある方で、私はその方の履物を脱がせる値打ちもありません。その方は、聖霊と火であなたがたに洗礼をお授けになります。

この節には「マナスの変化」と「洗礼を授ける」という言葉、そして「水と火で」という表現が含まれています。この節の意味を完全に把握するためには、これら４つの言葉を理解することが不可欠です。これらの言葉のいずれかが不明確なままであれば、節の本質は捉えられません。そこで、これら４つの言葉の意味を掘り下げてみましょう。最初の言葉は「マナスの変化」です。私たちの体内のマナス（心）は、学んで蓄えられたものを保持し、思い出します。ここでの「マナスの変化」とは、マナスの変容を指します。マナスは私たちの人生の出来事を記憶する役割を担っています。最初のマナスが変化し、二番目のマナスがその場所を占めると、最初のマナスのすべての記憶が消去されます。二番目のマナスは最初のマナスの記憶を持っていません。最初のマナスは死とともに存在しなくなり、二番目のマナスは誕生とともに現れます。最初のマナスが二番目のマナスに置き換わるとき、それを「マナスの変化」と呼びます。この自然なマナスの移行は、誕生と死の各サイクルで起こります。「マナスの変化」のために洗礼は不要です。なぜなら、それは死と再生のプロセスとともに自然に起こるからです。

人が死んで生まれ変わるとき、彼らは古い体を脱ぎ捨て、新しい体を獲得します。この物理的な変容が起こることを誕生と呼びます。人間には２つの異なるタイプの体があることを認識することが重要です：目に見える（物理的な）体と目に見えない（微細な）体です。誕生のプロセスで古い目に見える体が新しい体に置き換わるのと同様に、目に見えない微細な体

が変化するとき、ヒンドゥー教徒（インド人）はそれを「ウパデーシャ」と呼び、キリスト教徒は「洗礼」と呼びます。この節で言及されているように、洗礼は目に見えないマナスの変容を意味します。死において記憶に満ちた古いマナスが消え去り、誕生で新しいマナスが現れるのと同様に、洗礼の間、マナスは深遠な変化を遂げます。それは世俗的で無知な記憶を思い出すことをやめ、知恵と神に関連する記憶を思い出し始めます。洗礼は、個人がグルの教えに導かれて、人生においてマナスの変化を達成するプロセスです。この変容において、無知なマナスは知恵に調和したものに置き換えられます。

マナスの変化＝無知から知恵への転換

洗礼＝グルからウパデーシャを得ること

洗礼者ヨハネは水で「ウパデーシャ」を提供し、「私は水であなたがたに洗礼を授けますが、私よりも力のある方が後から来て、聖霊と火であなたがたに洗礼をお授けになります」と宣言しました。私たちは以前に「マナスの変化」と「洗礼」の概念を詳しく探求しました。今度は「水」と「火（水の反対）」の意味を掘り下げてみましょう。私たちはグルから洗礼を受けますが、グルには２種類あります。知恵の力（グニャーナ・シャクティ）を持つ者と持たない者です。多くのグルは一般的に水を使って洗礼または「ウパデーシャ」を行います。ミルクを使う者もいますが、これらは目に見える液体です。また、聖灰や香の煙をプロセスの一部として使う者もいます。さらに、「ウパデーシャ」の間、グルはマントラ、言葉、またはイメージを伝授し、様々なグルによって提供される数多くのそのような「ウパデーシャ」が存在します。ヨハネはこれらのグルの一人でした。彼は自分の方法を率直に認め、「私は水であなたがたに洗礼を授けます」と述べました。しかし、彼はまた、聖霊と火で洗礼を授ける、より偉大な者の到来を予言しました。私たちは「洗礼」を無知から知恵へのマナスの変容への道と定義しました。この変容が洗礼を通じて起こるとき、それ

はその人のすべての罪を清める力を持ちます。グルは彼の洗礼を通じて罪を焼き尽くすのに適切な神聖な火を与えます。グルは火の神性を持っているべきです。バガヴァッド・ギーター（第一の神聖な聖典）の「アートマ・サムヤマ・ヨーガ」の章の最初の節では、この神聖な火の必要性が強調されています。「チャ・ヨーギー・チャ・ナ・ニラグニゥル・ナチャークリヤ」という言葉は、「この神聖な火（グニャーナ・シャクティ）を欠き、行動をやめる者はヨーギー（グル）ではない」という意味です。

真のヨーギー（グル）は行動を控える者ではなく、知恵の力を象徴する内なる火の存在によって特徴づけられます。これが「火による洗礼」として言及されたものです。ここでの「火」は、肉眼では見えない神聖な力（グニャーナ・シャクティ）を意味します。人がグルからこの神聖な火を受け取ると、それは彼らの内に変容の力を点火し、蓄積されたカルマを焼き尽くす能力を持ちます。洗礼を受けた個人に授けられた知恵の火（グニャーナ・シャクティ）は、彼のカルマを破壊し始めます。ヨハネのようなグルは「マナスの変化」のために洗礼を授けましたが、彼の洗礼にはカルマを焼き尽くすのに必要な知恵の力がありませんでした。そのため、彼は「私はただ水であなたがたに洗礼を授けることしかできません」と述べました。ヨハネは人々に、水で行う彼の洗礼がカルマを焼き尽くすことはできないと説明しました。代わりに、彼は彼の後に来る者がこれを成し遂げる洗礼を授けるだろうと予想しました。

水による洗礼＝カルマを焼き尽くさないウパデーシャ

火による洗礼＝カルマを焼き尽くすウパデーシャ

3) マタイによる福音書 第 3 章 12 節

(3:12) 彼の手には箕があって、脱穀場を隅々まできれいに掃除し、麦を倉に納め、殻を消えることのない火で焼き払われます。





問題の節を語ったのは、当時の有名なグルであるヨハネでした。その時代、彼は多くの人々に「ウパデーシャ」（洗礼）を授けました。ヨハネは偉大な「グニャーニ（知者）」であり、イエスの到来を予見していました。彼は神の子イエス・キリスト（バガヴァン）に洗礼を授けました。彼はまたイエスのグルでもありました。ヨハネはその時代に有名なグルで多くの人に洗礼を授けましたが、彼は謙虚でした。イエスに洗礼を授ける前、彼は「私の後に来る方は私よりも力があり、私はその方の履物を脱がせる値打ちもありません」と言って謙虚さを

示しました。イエスが洗礼を受けに来たとき、ヨハネはイエスのより大きな霊的力を認め、「あなたが私に洗礼を授けるべきです。あなたが私のところに洗礼を受けに来られるのですか」と言いました。これらの言葉は、ヨハネが主の到来を予見したときに語られました。この節には、箕、麦、そして消えることのない火への言及も含まれています。これらの要素が日常的に見えるため、その重要性に疑問を持つ人もいるかもしれません。麦を箕で拾い上げ、つぶして火で燃やせばパンになります。私たちは皆、箕、麦、オーブンの火を見ています。この文に何か偉大なものがあるのかと尋ねる人もいるかもしれません。この節は第二の神聖な聖典の一部であり、この聖典のすべての節は神聖な知恵を伝えています。知恵と霊的洞察力を持って見ると、この節は特別な意味を持ち、イエス・キリストの偉大さを強調しています。

古代では、新生児を箕（籠）の上に置く習慣がありました。赤ちゃんが生まれるとすぐに、箕に米を注ぎ、平らにし、習慣に従って赤ちゃんをその上に寝かせました。この慣行は、貧しい人から裕福な人まで、知識のある人から無知な人まで、社会のあらゆる層に広まっていました。信念では、創造神ブラフマーが、赤ちゃんが箕の上で過ごす２分間に、赤ちゃんの額に未来を刻むとされていました。これは「カルマの書き込み」または「ブラフマー・ヴラタ」とも呼ばれます。個人的な信念にかかわらず、ヨハネの言葉、特にイエスに関連する文脈では真実です。ヨハネは比喩を用いて、行為を麦に例えました。主食である麦は生命を維持しますが、私たちが消費すると減少します。同様に、ジーヴァートマ（個人の魂）は行為の形でカルマを経験します。私たちがカルマ的経験を経ると、私たちの行為の「カルマ」は減少します。カルマの書き込み、額の書き込み、または神の判断とも呼ばれるものは、私たちが経験するカルマが私たちの体に刻まれ、私たちの人生の経験がこの刻印を反映していることを意味します。ヨハネは、私たちのカルマに影響を受けた行為を麦に例え、これらの行為が蓄えられ

る「箕」を象徴的に頭に例えました。私たちが食事を準備するために箕から穀物を収穫するのと同様に、私たちの頭は私たちが経験するカルマを蓄えるため「箕」と表現されています。

カルマは人間の頭に、その人の気づきなしに刻まれます。その結果、誰も未来を予測することはできません。すべての人間はカルマに束縛され、その影響から逃れることはできません。すべての人間がカルマに操られる単なる人形のように見えますが、聖霊またはパラマートマはカルマの制御の外にあります。神が人間として受肉することを選ぶとき、彼は自身の頭に自らのカルマを書き込むことで自身のカルマを作り出し、そうして地上に来ます。彼には固有のカルマはありませんが、人類に知恵を伝えるために意図的に自身の運命を著します。自身のカルマを掌握する神について、ヨハネは「**彼の手には箕があります**」と表現しました。世界の他の誰も、自分のカルマをそのように制御することはできません。人間の限界とは対照的に、神は自身のカルマを形作り、地上に人間として降りて自身の知恵を共有します。イエスの生涯が誕生から死まで、自ら構築したカルマの結果であることを理解することが重要です。彼の質素な納屋での誕生、彼の苦しみ、そして彼の十字架刑は、すべて彼が自ら作り出した運命の産物でした。外部の力が彼の同意なしに彼の誕生をもたらしたり、彼を苦しめたりすることはできませんでした。彼は自身の地上での存在の過程を決定し、実際に自身の箕を持っていたのです。

すべての普通の人々は、彼らが行うすべての行為に対して新しいカルマを蓄積します。地上でのそれぞれの行動が新しいカルマを生成します。煙が火と密接に結びついているように、カルマは本質的に行為と関連しています。すべての行動がカルマの結果を伴うことは、プラクリティの基本的な原則です。神が受肉し、神の子（バガヴァン）として現れるとき、彼が行うすべての行為も新しいカルマを生成します。普通の個人は差し迫ったカルマから逃れることができません。しかし、バガヴァンであるイエスは完全な知恵の火（グニャーナ・シャク

ティ）を持ち、彼の行動から自然に生じるカルマを焼き尽くすことができます。完全なグニャーニであるキリストは、常に完全な知恵の力を持っています。すべてのカルマは消えることのない知恵の火の中で焼き尽くされます。行為は本質的にカルマと結びついており、穀物が殻と結びついているのと同様です。ヨハネはこれを「彼は消えることのない火で殻を焼き払う」と表現し、キリストが自身の知恵を通じて行為に関連するカルマを根絶することを意味しています。イエスは自身をグナの塵から浄化し、彼の行為に絡み合ったカルマを焼却します。ヨハネはイエスの体を脱穀場に例え、人が脱穀場を清めるように、彼がグナの影響を取り除くことを象徴しました。彼は行為を麦に、その行為から生じるカルマを殻に、そしてカルマを消費する火を消えることのない火に例えました。ヨハネは一つの文でイエスの偉大さを要約しましたが、残念ながら、私たちはその重要性を完全に把握していません。

　　この節は一見単純に見えるかもしれませんが、深遠で微妙な意味を含んでいます。4つの福音書には、同様の深さを持つ節が豊富にあります。私の限られた知恵のため、聖書の66章すべてについて説明を提供することはできませんでしたが、重要な4つの福音書の説明に焦点を当て、他の部分にはほとんど触れていません。

4) マタイによる福音書 第 3 章 16 節と 17 節

(3:16) イエスは洗礼を受けると、すぐに水から上がられた。そのとき、空が開け、神の霊が鳩のように降って、自分の上に来るのを見られた。

(3:17) すると、空から声があって言った。「これは私の愛する子、私はこの子を喜ぶ。」

ヨハネはイエスに水で洗礼を授けました。洗礼は「ウパデーシャ」とも呼ばれます。テルグ語で「ウパデーシャ」は自国に隣接する国を意味します。言い換えれば、隣国と同義です。隣人は隣国に住んでいます。あなたの体内には隣国があり、その体内の隣国には隣人が住んでいます。すべての人間には隣国と隣人がいますが、これらの存在は人間の中で目に見えません。グルは洗礼または「ウパデーシャ」の間に、目に見えない隣国を明らかにします。ヨハネはイエスに水で洗礼を授け、この「ウパデーシャ」には火は関与していません。したがって、それは名前に関するものであり、隣国と隣人を欠いています。それにもかかわらず、「ウパデーシャ」のプロセスはこのように行われなければなりません。これが、イエスが 3:15 節で「**今は許してください。このようにして、すべての義（知恵）を成し遂げるのは、私たちにふさわしいことです**」と言った理由です。

イエスは水でウパデーシャを受けましたが、彼は自分の体内の隣国を認識していました。彼は目に見える外の世界と目に見えない隣国の両方を常に見ることができました。したがって、ヨハネが与えたウパデーシャは名前にのみ関係していましたが、それは本物のウパデーシャと見なされました。イエスは普通のジーヴァートマ（個人の魂）として 30 年間生きた後に洗礼を受けました。その時点から、彼はジーヴァートマとしてではなく、アートマ（魂）として知恵の形で神聖なことについて語り始めました。イエスがアートマとしてパラマートマ

（至高の魂）の知恵を伝えたことを示すために、彼が洗礼の後に水から上がるとすぐに、アートマが鳩のように降りて彼の上に止まりました。さらに、パラマートマ（聖霊）は「これは私の愛する子、私はこの子を喜ぶ」と宣言しました。聖霊（神）はアートマが彼の愛する子であることを確認し、彼の愛する子イエスに喜びを表しました。これにより、聖霊が父であり、アートマがイエスとして知られる子であることが明らかになります。これらすべては、聖霊（パラマートマ）がアートマとして現れたのではなく、代わりに普通の人間として、ジーヴァートマとして現れてこの世界に生きたことを示しています。私はこれをキリスト教徒を賞賛したりキリスト教を宣伝したりするために言ったのではありません。私は神が地上でどのように現れたかについて、絶対的な真実だと信じていることを皆さんと共有しているのです。

5) マタイによる福音書 第 4 章 10 節

(4:10) イエスは彼に言われた。「サタン、退け。『あなたの神である主を拝み、ただ主にのみ仕えよ』と書いてある。」

この節では「**サタン**」という言葉が導入されています。前の節では、サタンは時々「誘惑者（テルグ語でショーダクドゥ）」として、また他の場合には「誹謗者（テルグ語でアパヴァディ）」として言及されています。「アパヴァディ」という用語は、誤って判断し嘘を告げる者を意味し、「ショーダクドゥ」はあなたの中の悪を探し出し、それが存在する場合にはそれを表面化させる者を意味します。この文では「アパヴァディ」または「ショーダクドゥ」がサタンと呼ばれています。「アパヴァディ」と「ショーダクドゥ」はどちらもテルグ語ですが、「サタン」という言葉はテルグ語ではありません。「サタン」という言葉はこの聖典でしばしば登場します。霊的教育の領域では、「サタン」は「**マーヤ**」と互換的に使用されま

す。サタンとマーヤは本質的に同じであるため、マーヤの説明はサタンにも適用できます。

第一の神聖な聖典では、マーヤは頭の中のグナ（性質）の本質を指します。マーヤに関して、第一の神聖な聖典は「**グナマイー・ママ・マーヤ**」と述べています。ここで「ママ・マーヤ」は「マーヤは私のものである」という意味で、神によって宣言されています。これによると、マーヤはグナの組み合わせであると言われています。神はマーヤを含むすべてのものの創造者であり、したがって、神はマーヤが自身のものであると宣言しました。マーヤは女性の性を持ち、一方で神と神から分離した２つの魂、アートマとジーヴァートマは男性です（合計３つ）。神によって創造された他のすべてのものは女性と言えます。したがって、マーヤは女性として言及されます。マーヤを外部のものとして考えるべきではありません。むしろ、イエスを誘惑したマーヤは彼自身の頭の中にありました。彼の頭の中に住むマーヤが、イエスを誘惑し、彼と議論を交わしました。同様に、すべての人の頭の中のグナが彼らのマーヤとして機能し、常に彼らを誘惑し、議論します。イエスの洗礼の後、マーヤは最初に彼を３回誘惑し、イエスはすべての３回の機会に彼の知恵で応答しました。

イエスは人間が見習うべき模範を自身の人生で示しました。マーヤがイエスを試すたびに、彼は知恵で応答しました。したがって、すべての人はそれと同じことを学ぶべきです。サタンがイエスに彼女に頭を下げるよう求めたとき、イエスはサタン（マーヤ）に適切な返答をしました。イエスはサタンに「**あなたの神である主を拝み、ただ主にのみ仕えよ**」と答えました。イエスがこれらの言葉を発したのですが、それが彼の体内のアートマが話した言葉であることを理解することが重要です。聖霊であるパラマートマは誰とも直接コミュニケーションを取りません。代わりに、彼はアートマを通じて自身の知恵を伝えます。したがって、体内のアートマによって表現されたとしても、その知恵はパラマートマ自身によって伝えられた

ものであることを認識すべきです。第三の最後の神聖な聖典の3:7 で、神は「神の知恵は神以外の誰にも知られていない」と述べています。これは、体内のアートマによって明らかにされた完全な知恵がパラマートマ（神）によって伝えられることを強調しています。

現在、世界には 12 の主要な宗教があり、ヒンドゥー教は他の宗教に存在しないすべてのデーヴァタ（神々）を包含しているという点で独特です。神はデーヴァタと人間の両方を創造しました。しかし、人間は神の知恵を完全に理解せずに神を捨て、デーヴァタの崇拝に向かいました。この選択は、人間が自分たちの聖典に見られる神の教えを優先しなかったことを強調しています。神を捨ててデーヴァタを崇拝する人々は、マーヤの影響下にあり、マーヤの言葉に耳を傾けていると見なすことができます。大きな図式では、本質的に神の側とマーヤの側の 2 つの側面があります。しかし、一部の宗教では、人々は他のデーヴァタに向かうことなく、専ら神を崇拝します。主にヒンドゥー教内で、神とは別に複数のデーヴァタを崇拝することがより一般的です。結果として、デーヴァタを崇拝する人々はマーヤの影響に同調していることが明らかになります。

6) マタイによる福音書 第 5 章 10 節

(5:10) 義（知恵）のために迫害される人々は幸いです。天の国は彼らのものだからです。

この節には「義」という言葉が含まれていますが、「義」の代わりに「知恵」であるべきです。ヘブライ語では、イエスはおそらく「知恵」という言葉を使用しました。しかし、英語に翻訳されたとき、ヘブライ語の用語に相当する言葉が正確に表現されず、「知恵」の代わりに「義」が使用されました。「義」と「知恵」を区別することが重要です。**義と正義は世俗的な事柄に関連する概念であり、一方で知恵とダルマは神聖な性質のものです。**義と正義はカルマに関連しています

が、知恵とダルマはカルマを燃やす力を持っています。この区別は、義が物質的な領域に属し、知恵が神聖な性質のものであることを強調しています。世界では、義、腐敗、正義、不正義に遭遇します。義はプンニャ（善いカルマ）につながり、一方で腐敗は罪をもたらします。同様に、正義はプンニャをもたらし、不正義は罪を生み出します。これらの違いを考慮すると、問題の節では「義」の代わりに「知恵」を使用すべきであることは明らかです。

知恵の追求のために迫害される人々や、知恵の道で苦難に耐える人々は幸いであると考えられます。これは、知恵のために苦しむことを通じて、彼らがカルマの束縛からの解放を意味するモクシャを達成できるからです。人がモクシャを達成すると、彼らはこの世俗的な存在を超越し、世界を超えた異なる状態に入ります。そのような個人はパラローカに入ったと言われ、これは世俗的な経験のない状態です。すべての人の知恵への道が迫害や暴力を伴うわけではないことに注意することが重要です。一部の個人は障害なしに知恵を獲得し、モクシャ（パラローカ）を達成するでしょう。

7) マタイによる福音書 第 5 章 17 節

(5:17) 私が律法（ダルマ・シャーストラ）や預言者を廃棄するために来たと思ってはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。

誰もダルマ・シャーストラを非難することはできません。それは非難できません。それは創造の夜明けから存在し、数多くの預言者や教師がその知恵を伝えてきました。パラマートマ（至高の存在）がバガヴァンとして地上に降りてくるとき、彼はダルマ・シャーストラを実践するだけでなく、その原則をすべての人に理解できるようにします。しかし、神の子としてのバガヴァンがダルマ・シャーストラに概説されているダルマを明らかにし実践するとき、それらは一部の個人にはダル

マとして現れないかもしれません。この不一致は、一部の人々がアダルマ（非ダルマ）をダルマだと誤って信じていることから生じます。結果として、バガヴァンが彼の教えを伝えるとき、真のダルマがアダルマのように見えるかもしれません。これが、イエスが上記の節で「**律法（ダルマ・シャーストラ）を廃棄するために来たのではなく、成就するために来た**」と述べた理由です。

世界の人々はマーヤ（サタン）の影響下に陥り、アダルマをダルマだと信じるようになりました。その結果、彼らは様々な形の崇拝に従事し、それを誠実な信心だと考えています。マーヤは人々の神に対する理解を自身に向け直し、彼らが神に向かって進歩していると信じさせています。このプロセスで、マーヤは人々をダルマではなくアダルマを実践するよう導き、効果的に彼らを神の反対方向に導いています。このような状態では、神が人間として受肉し真のダルマを実践しても、マーヤの影響を受けている人々にはそれらの行動が誤解を招くように見えるかもしれません。人々は自分たちがしていることが真のダルマであり、自分たちが真の信者であると誤って考えるかもしれません。彼らは人間として来た神がアダルマに従っていると非難し、さらには冒涜者とレッテルを貼るかもしれません。実際の神がイエスとして地上に来たとき、彼が言ったこと、実践したことは確かにダルマでした。しかし、これらのダルマは学者やスワーミー、グルの教えと矛盾するように見えました。この不一致が、大祭司や律法学者、カイアファがイエスに反対し、非難した理由です。したがって、イエスは節の中で「**私は廃棄するためではなく、それらを成就するために来た**」と強調しました。

8) マタイによる福音書 第 5 章 18 節

(5:18) まことに、あなたがたに告げます。空が消えうせるまで、律法（ダルマ・シャーストラ）の一点一画も消え去ることはありません。すべてが成就するまで。

この節では、「ダルマ・シャーストラ」という用語が独特で、その意味に疑問を持つ人もいるかもしれません。そのような疑問に答えるためには、シャーストラ（科学）の概念、様々な種類の科学、そして科学の分野におけるダルマ・シャーストラの独自性を理解することが不可欠です。まず、「シャーストラ」という言葉の意味を把握すれば、ある程度シャーストラを理解できるでしょう。「シャーストラ」という言葉はテルグ語の「シャサナム」に由来し、これは「強制されなければならない」という考えを伝えています。結果として、「シャーストラ」は「述べられたことは必ず実現する」ことを意味します。さらに、「シャパム」という用語は「シャーストラ」から派生し、「必ず実行されなければならない」ことを意味します。したがって、「シャサナム」（法令）、「シャパム」（呪い）、「シャーストラ」（科学）の３つの言葉はすべて同じ根本的な意味を共有しています。シャーストラは通常、6 つの異なる研究分野に分類されます。6 つの科学を２種類にグループ化できると主張する人もいれば、３つのカテゴリーを提案する人もいます。大まかに言えば、シャーストラは２種類と考えることができます。言い換えれば、シャーストラを３つに分類することもできます。２種類に分類する場合、1 つのセットは世俗的な事柄に関連し、もう１つはパラマートマ（至高の存在）に関連する事柄に関係します。3 つに分類する場合、4 つのシャーストラは世俗的な関心事に関連し、1 つはパラマートマのみに関連し、もう１つはパラマートマと世俗的な事柄の両方に部分的に関連するカテゴリーに分類されます。

６つのシャーストラは以下の通りです：1）数学、2）天文学、3）化学、4）物理学、5）占星術、6）ブラフマ・ヴィディヤ。これらのうち、最初の４つは世俗的な事柄に関係し、５番目の占星術は世俗的な関心事と神聖なものの両方に関連しています。あるいは、占星術も世俗的なシャーストラのカテゴリーに含めると、最初の５つのシャーストラは世俗的なものとして分類され、ブラフマ・ヴィディヤ・シャーストラのみが神聖なものに関連する唯一の科学として残ります。全部で６つの科学があり、ブラフマ・ヴィディヤが最も重要です。これが、ブラフマ・ヴィディヤ・シャーストラと呼ばれる理由で、「ブラフマ」は偉大さを意味します。「ブラフマ」は名前ではなく、神の最も偉大で至高の性質を示すために使用される用語です。**神の理解に専念する科学であるため、適切にブラフマ・ヴィディヤ・シャーストラと名付けられています。**ブラフマ・ヴィディヤは神の科学に関するものであるため、「ヴィディヤ」という名称を持っています。他の５つの世俗的な科学、つまり数学、天文学、化学、物理学、占星術には、その名前に**「ヴィディヤ」**という接尾辞がありません。「ヴィディヤ」という用語は神に関連する科学のために予約されています。この区別の理由について疑問に思う人もいるかもしれません。その答えは以下の通りです。

科学は世俗に関連するものとパラマートマに関連するものの２種類に分けることができます。５つの物質科学は誰でも完全に理解することができます。しかし、神のダルマを明らかにする最も偉大なブラフマ・ヴィディヤは、その名前に「ヴィディヤ」という用語を含む唯一のものであり、最も偉大なヴィディヤ・シャーストラという称号を得ています。「ヴィディヤ」（教育）という言葉は「知る」を意味する**「ヴィス」**という音に由来します。ヴィディヤは獲得されるべき知識を意味します。「ヴィディヤルティ」（学生）は知識を求める人であり、まだ持っていないものを求め、知識を持つ人から獲得する人です。学生は知識のある教師から不可欠な教育を受けます。

ヴィディヤは知ることはできても完全には理解できない知識を指します。同様に、神について完全に理解していると主張できる人はいません。神について完全な知識を持っていると主張できる人はいません。神について学ぶことは生涯の追求であり、人々は生涯を通じて理解を深めていきます。これが限界であり、すべてを知っていると言える人はいません。人間は常に神に関する事柄について学び続けますが、決して完全に知ることはありません。したがって、神の科学は常にヴィディヤ・シャーストラと呼ばれ、永遠にブラフマ・ヴィディヤ・シャーストラです。対照的に、他の５つの科学は完全に把握することができ、もはや知るべきことは残っていません。その結果、「ヴィディヤ」という用語はそれらの名前に追加されません。

神（ブラフマ）の完全な知識を持つ者は、この知恵を他者と共有することができます。個人が神の知恵の知識を欠いている場合、誰が自信を持ってそれを伝えることができるでしょうか？この質問に対する我々の回答は以下の通りです：神自身だけが自身の知恵を完全に知っています。したがって、神はpersonally 自身の知恵を伝えなければなりません。しかし、神は誰とも直接コミュニケーションを取りません。代わりに、神は神として現れることなく、人間の形を取ってその知恵を伝えます。神が人間のような形を取ることはあっても、人間ではないことに注意することが重要です。人間の姿をして、神はその知恵を全て明らかにし、それを規定された原則と命令を持つ科学として提示しました。したがって、神が明らかにしたものはブラフマ・ヴィディヤ・シャーストラと呼ばれます。神自身がブラフマ・ヴィディヤ・シャーストラを伝え、人類がそれを理解することが義務付けられています。ブラフマ・ヴィディヤを完全に理解した人は、カルマから解放され、神と一体化することができます。したがって、個人はモクシャ（解放）を達成するまで神の科学の知識を獲得し続けなければなりません。それゆえ、世界で最高の教育形態であることから、適切にブラフマ・ヴィディヤと名付けられています。

神のダルマはブラフマ・ヴィディヤ・シャーストラで述べられているため、神聖な聖典ではダルマ・シャーストラと呼ばれています。神は創造の夜明けに最初に命令を伴うシャーストラを明らかにしました。その後、３つの神聖な聖典が異なる時期と場所で現れました。これら３つの神聖な聖典は３つのダルマ・シャーストラと見なすことができ、すべてがダルマのみを含んでいます。結果として、３つのダルマ・シャーストラはすべて同じ原則を共有し、神のダルマに根ざしています。それらはブラフマ・ヴィディヤへの執着において統一されており、神のダルマを教えています。その結果、３つのダルマ・シャーストラは相互に裏付け合い、互いに矛盾しません。最初の神聖な聖典はバガヴァッド・ギーターとして知られ、2番目の神聖な聖典は聖書と呼ばれ、3番目の神聖な聖典（最後の神聖な聖典）はクルアーンと呼ばれています。これら３つの聖典は異なる名前を持っていますが、同じ神のダルマを伝えています。

ブラフマ・ヴィディヤ・シャーストラに続いて、３人の預言者が神の知恵を伝え、それがその後３つの異なる神聖な聖典となりました。これら３つの神聖な聖典は別個のものですが、すべて同じ神のダルマを３つの異なる視点から説明しています。これらの聖典内で提示されているダルマは科学に基づいているため、「天地が消えうせるまで」という節で確認されているように、述べられた通りに実現されます。外の世界の天と地は永遠であり、神がそのようにしたからです。しかし、人間の体内にある目に見えない地と空の対応物は完全に滅びるものです。したがって、「天地が消えうせるまで」という表現は「人間の体が死ぬ（消える）まで」と理解されなければなりません。個人が神の知恵を求めるとき、彼らは神のすべての戒め（ダルマ）に従わなければなりません。神のダルマを心から実践せずには、パラローカを達成することはできません。ダルマ・シャーストラに概説されているように、モクシャ（解放）はすべてのダルマが満たされたときにのみ達成できます。ダル

マ・シャーストラに概説されていることを少しでも実践しない人は、モクシャを達成しません。「**規定されたダルマから少しでも従わなければ**」と単に示唆する代わりに、「**最小の文字も、ペンの一画も**」と表現されています。したがって、ダルマ・シャーストラのあらゆる側面を見落とすことなく従うことが重要です。言及されている文字とペンの一画は、本の書き物に関連するものではないことを知ることが重要です。

9) マタイによる福音書 第 5 章 19 節

(5:19) だから、これらの戒めのうち最も小さいものの一つでも破り、そのように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれるでしょう。しかし、それらを実行し、教える者は、天の御国で偉大な者と呼ばれるでしょう。

ダルマ・シャーストラには基本的なダルマがいくつか概説されていますが、多くのものがそれらと相互に関連しています。神のダルマは戒めとも呼ばれます。神の戒めには主に 2 つの最も本質的なものがありますが、いくつかの他のものがそれらに関連しています。これらの関連する戒めの中で最も小さなものでも違反し、そのような教えを伝える者は、正義に反して行動しています。神が指示したように、ダルマが小さいものであれ大きいものであれ、人はどのダルマも違反すべきではありません。どんなに小さなダルマでも、例外なく勤勉に実践されるべきです。しかし、一部の個人は、最小のダルマさえ遵守する代わりに、ダルマの道から逸脱しています。彼らはアダルマを受け入れただけでなく、そのような教えを広めています。社会からグルとみなされているにもかかわらず、彼らは神の戒めを正しく理解していません。残念ながら、彼らは神のダルマをアダルマと誤解し、アダルマの提唱者となってしまいました。彼らは真の知恵と神の本物の戒めを伝えていると主張しながら、そのような教えを伝えることで人々を誤導しています。

世間の目には偉大なグルと見なされていても、神の目には最も小さな者と見なされています。

ダルマを正確に把握している人々は、有名なグルでなくても、興味を持つ人々にダルマとしてそれらを伝えます。一部の個人は神のダルマをアダルマと誤解し、そして今度はこれらのアダルマを教えています。その結果、アダルマを教える人々はパラローカの王国を達成することはできません。無知な人々は決してパラローカの王国を達成することはなく、それは彼らにとって永久に閉ざされたままであり、彼らを不適格と見なしています。聖典から神の戒めを理解している人がグルとみなされていなくても、知っているダルマを教えるとき、パラローカで重要な位置を獲得します。そのような個人は単にダルマの追随者として知られるだけでなく、神の目にも高く評価されます。真のダルマの追随者とは、神の最小のダルマさえも非常に詳細に伝える人です。

10) マタイによる福音書 第 5 章 20 節

(5:20) まことに、あなたがたに告げます。あなたがたの義がパリサイ人や律法学者たちの義にまさるものでなければ、決して天の御国に入ることはできません。

世界には多くのパリサイ人、信者、そして教師がいます。彼らよりも深い知恵を持つことが不可欠です。神は、パリサイ人、信者、教師たちよりも知恵が劣る人々はパラローカに入ることができないと述べています。この節が示唆するように、ヤジュナ（儀式的な犠牲）を行い、神が指示したことに反して行動するスワーミーやパリサイ人たちよりも多くの知恵を持つとき、あなたは容易にパラローカを達成するでしょう。

11) マタイによる福音書 第 5 章 28 節

(5:28) しかし、私はあなたがたに言います。情欲を抱いて女性を見る者はだれでも、すでに心の中で姦淫を犯したのです。

人間の行動は、観察可能な外部の行動と、人の思考や感情の中で起こる内部の行動という 2 つの異なるアプローチに分類できます。これらの 2 つの次元はすべての個人に存在します。一つのアプローチでは、人は内部の思考と感情を伴うグナ（性質）に関連する行動に従事します。もう一つのアプローチでは、同じ行動がグナと物理的な体の相互作用を通じて行われます。これらの行動の結果は、プンニャ（良いカルマ）または罪（悪いカルマ）をもたらします。物理的（可視的）と非物理的（不可視的）の 2 種類の行動があることに注意することが重要です。人の性格を評価する際、社会はしばしば彼らの観察可能な物理的行動に頼って、彼らが良いか悪いかを判断します。しかし、人の行動が思考や感情を含む内部的なものである場合、それらは容易に識別できないため、そのような判断を下すのはより困難になります。私たちが人の行動を知らない場合、その人が良いか悪いかを確認するのは難しいです。

人のアハム（自我または自己感）は、物理的行動であれ非物理的思考であれ、カルマの生成に重要な役割を果たします。個人は、体内にアハムが存在するために、罪またはプンニャのカルマを受け取ります。体の外部器官が物理的行動に関与している一方で、それらの行動のカルマ的結果に影響を与えるのはアハムの機能です。人が物理的に行動に従事していない場合でも、ブッディ（知性）の隣にあるアハムは、グナの影響下で熟考が行われるときにブッディの思考の中でアハムが感知することに基づいてカルマを付与します。アハムが活動していない場合、物理的または非物理的な仕事に関与していても、人はカルマを蓄積しません。この概念は、最初の神聖な聖典、具体的にはモクシャ・サンニャーサ・ヨーガの 17 節に反映されて

います。そこには「感情の中にアハムの存在がなければ、世界のすべての存在を殺害しても、殺害行為に対する罪を負うことはなく、殺人者とは見なされない」と述べられています。これは、人の行動の道徳的結果を決定する上でのアハムの重要性を強調しています。イエスも同様のメッセージを伝えました。「あなたは物理的に行動を実行していなくても、アハムのために思考を通じて罪を負うでしょう」と彼は言いました。これは、第一と第二の神聖な聖典の両方の教えの一致性、そして伝えられた知恵の一貫性を明らかにしています。アハムなしで行われた人の行動は、行われなかったかのように見なされ、アハムを伴う思考は行動が実行されたかのように扱われます。したがって、体内のアハムの存在が、ジーヴァートマ（個人の魂）によるプンニャと罪の蓄積に影響を与えます。結果として、創造の始まりから「アハムなしで行動を行うことがカルマ・ヨーガムである」と述べられ、この概念は第一と第二の神聖な聖典の両方で繰り返されています。

12) マタイによる福音書 第 5 章 29 節と 30 節

(5:29) もし、あなたの右目があなたをつまずかせる原因となるなら、それを抉り出して捨てなさい。あなたの体の一部を失うほうが、あなたの全身が地獄に投げ込まれるよりは良いのです。

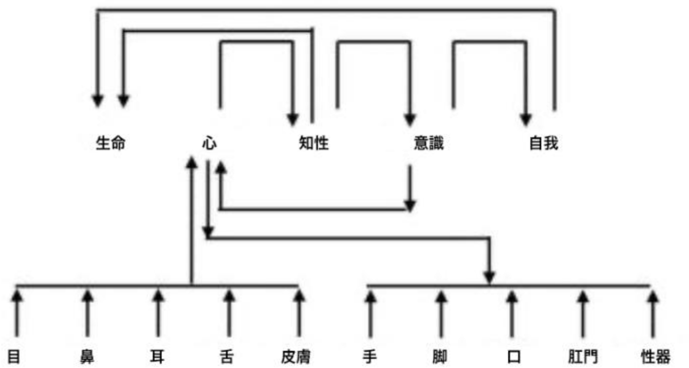
(5:30) もし、あなたの右手があなたをつまずかせる原因となるならなら、それを切り取って捨てなさい。あなたの体の一部を失うほうが、あなたの全身が地獄に行くよりは良いのです。

29 節では「目」が、30 節では「手」が言及されています。詳しく見ると、人間の体は物理的または可視的な部分と、非物理的または微細な部分の 2 種類の体の部分から構成されていることが明らかになります。物理的な体の部分は合計

10 個あり、微細な体の部分は 15 個あります。ジーヴァートマ（個人の魂）を含めると、合計で 25 個になります。各体の部分は、体内の異なる機能に対応しています。人間の体は 5 つのグニャーネンドリヤ（感覚器官）と 5 つのカルメンドリヤ（運動器官）を持っています。これら 2 組の器官が集合的に物理的な行動を可能にします。目、耳、鼻、舌、皮膚を含むグニャーネンドリヤは、外部の情報を内部の機能に伝達する受容器として機能します。同様に、5 つのカルメンドリヤ（手、足、口、肛門、性器）があります。マナス（心）はこの情報を感覚からブッディ（知性）に伝えます。グニャーネンドリヤが外部の情報を周囲から内部の機能に伝達する一方で、内部のブッディはマナスを通じてカルメンドリヤに指示を伝え、それに従ってカルメンドリヤが行動を実行します。

人間はグニャーネンドリヤ（感覚器官）とカルメンドリヤ（運動器官）の相互作用によって調整された行動を行います。特に、グニャーネンドリヤの中の目とカルメンドリヤの中の手が特に重要であり、それがこれらの節で両方が言及されている理由です。ブッディ（知性）がカルメンドリヤに課題を実行するよう指示しなくても、ブッディに密接に関連するアハム（自我）が活動している場合、ブッディの思考に基づいて罪が人に帰属される可能性があります。これは、罪の可能性における目の重要な役割を強調しています。例えば、人が欲望的な思考で女性を見つめるとき、他の人を物理的に傷つけていなくても、アハムの影響により罪を負う可能性があります。このように、目は物理的な領域では決して起こらないかもしれない行動に対して、個人に罪を付与する可能性を作り出します。したがって、この節は「目を抉り出して捨てなさい」と助言しています。しかし、これを文字通りに受け取るべきではなく、物理的に自分の目を取り除くことはこの節の意図する意味ではないことに注意することが重要です。この節は特に「右目」について言及していますが、左右両方の目が同様の結果をもたらす可能性があることを理解することが重要です。罪は両方の目から生

じる可能性があります。右目だけが言及されていることは、この区別の理由について考えさせられます。



人間の体は自然に右側と左側の違いを示し、しばしば強さと弱さに関連付けられます。言及された節では、右側の体の部分、つまり右目と右手が特定されています。この節で考慮すべきもう一つの重要なポイントは、**「あなたの体の一部を失うほうが、あなたの全身が地獄に投げ込まれるよりは良い」**という文です。外部の体の部分である目も手も、罪の直接の源ではないことを認識することが重要です。罪の主な原動力は、体内のアハム（自我）の存在です。この視点は、第一と第二の神聖な聖典の両方の教えと一致しています。したがって、外部の体の構成要素が罪の獲得や経験に直接関与していないことが明らかになります。**体内のアハムの感覚が罪をもたらします。体内に住むジーヴァ（個人の魂）が罪を経験します。**カルマの獲得の責任はアハムの感覚にあり、カルマの結果を経験するのはジーヴァの義務です。したがって、外部の目（グニャーネンドリヤ）と手（カルメンドリヤ）はカルマとは無関係に機能します。

カルマと関係のない目を抉り出し、手を切り取るようイエスが助言したのはなぜかと疑問に思う人もいるかもしれま

せん。我々の回答は次の通りです：目が外部の情報を伝達するとき、それはブッディ（知性）に到達します。その後、ブッディはグナ（性質）に従ってこの情報を処理します。しかし、アハム（自我）が抑制され、これらの感覚入力から切り離されている場合、ブッディが処理するグナや目が知覚する視覚に罪やプンニャ（善行）が現れるのを防ぎます。目が提供する情報から内部のアハムを切り離すことで、目に関連する罪を効果的に防ぐことができ、これは目自体を取り除くのと同様です。同様に、アハムが聞こえるものに接続されていないとき、それは耳が取り除かれたかのようです。罪とプンニャが目だけでなく、他の４つの感覚からも生じることを認識することが重要です。グニャーネンドリヤの中で目の重要な役割と、視覚認識における右目の自然な優位性を考慮して、イエスはこの節で「右目を抉り出しなさい」と強調しました。この節は一見単純に見えるかもしれませんが、その微妙な意味を理解すべきです。

同様に、カルメンドリヤの中で右手に言及することには意味があります。カルマは右手からだけでなく、他のカルメンドリヤによって行われる行動からも生じます。グニャーネンドリヤが物理的な作業に従事していない場合でも、カルメンドリヤの機能を通じてカルマが生成されます。５つのグニャーネンドリヤを指すとき、我々は両目を１つの実体としてグループ化し、両耳も１つとして数えます。２つの鼻孔がありますが、それらは集合的に１つの鼻として扱われます。残りの構成要素は皮膚と舌です。

同様に、カルメンドリヤでは、２つの手が１つとみなされ、２つの足にも同じことが適用されます。残りの３つは口、肛門、性器であり、対になっていません。これらの対になった器官の中で右目と右手が比較的優位であるため、この節は右目と右手を取り上げています。右目はより優れた視力を持ち、右手はタスクの実行においてより多用途です。この節のより微妙な解釈では、イエスは目の視覚と手の行動から生じる罪を防ぐためにアハムを抑制するよう私たちに告げています。し

かし、右目や右手を取り除いてもカルマの流入は止まらないことを理解することが重要です。なぜなら、他の体の器官もカルマを生じさせる可能性があるからです。この節は、アハムが罪の根本的な源であることを強調し、それを制御する必要性を強調しています。体の器官は罪を生成せず、体も罪の重荷を負いません。代わりに、アハムが体内で罪を蓄積します。さらに、体の構成要素であるジーヴァートマが悪いカルマと良いカルマを経験します。体は5つのグニャーネンドリヤ、5つのカルメンドリヤ、5つのヴァーユ（生命エネルギー）、5つのタンマートラ（微細要素）、5つのアンタフカラナ（内的機能）を含み、ジーヴァートマはアンタフカラナの一部です。これは体の枠組み内でジーヴァートマを含む合計25の構成要素になります。本質的に、体のメカニズムの深い理解はイエスの節のより深い理解につながります。真のグニャーニ（知者）は体のこの複雑な構成を認識します。ある霊性家が詩的に伝えたように、このような知識を欠く人をグニャーニとみなすべきではありません。

パンチャタトヴァムラヌ・パンチカリンチャカ

マンチ・ヤツゥラマンナ・マタゥランナ

クンチャマンドゥ・ガジャム・グウルドゥペッティナ・チャンダムブ

アキラ・ジィーヴァサンガ・アトマリンガ

意味：- サンキヤという用語は、空、風、火、水、地を含むパンチャ・ブータ（五大元素）の包括的な知識を指します。この知識は、これらの要素がどのように創造されたか、どのように5つの異なる構成要素に分割されたか、そしてこれらの25の部分がどのように集合的に体の様々な器官と構成要素を形成するか（可視的なものと不可視的なものの両方）についての理解を含みます。体のサンキヤについての深い理解を持たずに自分をグニャーニ（知者または啓発された個人）だと思い

込むことは、虚偽の主張をするようなものです。それは、象が籠の下に卵を産んだと主張するようなものです。実際には、象が鎖で固く縛られて籠の下に置かれたとしても、卵を産むことはありません。したがって、象が籠の下に卵を産んだという主張は全く根拠がありません。同様に、体の器官に関する複雑な詳細についての知識を欠いている個人が自分をグニャーニだと宣言することは誤りです。真の知恵には、可視的および不可視的な部分を含む体の構成についての深い理解が必要です。

13) マタイによる福音書 第 6 章 3 節と 4 節

(6:3) しかし、あなたがダルマを行うときは、右手のしていることを左手に知らせてはいけません。

(6:4) それは、あなたの与えることが隠れて行われるためです。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

多くの説教者がこの節を誤って解釈し、寄付に関するものだと示唆しています。一部の礼拝所では、神への奉仕のために与えられるお金は「右手のしていることを左手が知らないほど」慎重であるべきだとさえ示唆されています。その結果、寄付はしばしば隠されたり、手の中に包まれたりしてから寄付されます。しかし、この節は寄付についてではなく、ダルマについてであることを明確にすることが重要です。ダルマと寄付の間には大きな違いがあります。寄付は他者に与えることを含みますが、ダルマは人が実践する原則を指します。ダルマをどのように実践するかを真に理解するためには、これらのダルマが何を意味するかを理解することが不可欠です。この節では、寄付についての言及はなく、むしろダルマを強調しています。

神のダルマは主に２つあり、神聖な聖典に概説されています。３つ目は物理的なものです。これら３つの主要なものと相互に関連する他のダルマもあります。神に到達するために、人は主にこれら３つの本質的なダルマに焦点を当てる必要があり、他のダルマは神の側面を中心に展開します。これら３つの核心的なダルマは、神を達成するための鍵となる実践です。

ブラフマ、カルマ、バクティ・ヨーガという３つのダルマは、神に到達するために必要です。そのうち２つは感情や思考を伴う内部的な実践を含み、１つは外部的な実践を含みます。最初の２つのダルマの実践は他者には認識できません。しかし、３つ目のダルマに関しては、他者に気づかれる可能性があります。これが、イエスがこの節で「ダルマ」を複数形ではなく単数形で言及している理由です。彼は、他者に気づかれる可能性のあるダルマを注意深く、そして秘密裏に実践すべきだと強調しています。彼はこれを「右手**のしていることを**左手**に知らせてはいけません**」と表現しています。根底にあるメッセージは、他者があなたのダルマの実践を観察すると、それを誤解したり、否定的な影響を受けたりする可能性があるということです。したがって、イエスはダルマを実践する際には、慎重に、そして他者からの認識を求めずに行うよう助言しています。

14) マタイによる福音書 第６章６節

(6:6) あなたが祈るときは、自分の部屋に入り、戸を閉めて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

神に祈る際は、あなたの祈りがダルマで満たされていることを確認することが不可欠です。ダルマのない単なる言葉の表現は真の祈りを構成せず、あなたを神とつなげることはありません。したがって、他者に観察される可能性のある祈りに

従事するとき、イエスは個人の部屋に入り、扉を閉め、あなたの内なるアートマ、つまりあなたの中にある神聖な存在に祈りを捧げるよう言いました。体内にいるアートマは人間の父です。他者に知られる可能性のある祈りは、誰も気づかないような方法で行われるべきです。そうすることで、体内に秘密裏にいるアートマがあなたに報いてくれるでしょう。第一の神聖な聖典では、この実践は「**ブラフマ（偉大な）ヨーガム**」と呼ばれています。

15) マタイによる福音書 第 6 章 7 節と 8 節

(6:7) また、祈るとき、異邦人のように同じことばを繰り返して言ってはいけません。彼らは言葉数が多ければ聞かれると思っているのです。

(6:8) だから、彼らのようであってはいけません。あなたがたの父は、あなたがたがお願いする前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。

今日の社会の多くの人々は、神に到達するためのダルマに従う「**ヨーガム**」ではなく、無駄な言葉で祈っています。彼らは多くの言葉を使えば神が彼らの願いを叶えてくれると思い込んでいます。彼らの意図は神と一体化することではなく、むしろ世俗的な願いや利益を求めることです。しかし、あなたは彼らのように祈るべきではありません。あなたの父であるアートマは、あなたが尋ねる前からすべてを知っています。彼はあなたに何を与えるべきか、与えるべきでないかを知っています。したがって、物質的な利益について尋ねることは無意味です。あなたの父であるアートマは、あなたのカルマに従ってあなたを導きます。したがって、アートマはあなたが過去のカルマを通じて得たものをあなたに提供します。あなたが尋ねようと尋ねまいと、アートマはカルマに従ってすべてを与えます。

アートマはすべての人間の父であり、聖霊、アートマの父はすべてのものの証人です。

16) マタイによる福音書 第 7 章 13 節と 14 節

(7:13) 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。

(7:14) しかし、いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

この世界には 2 つの道があります：1 つはパラマートマ（聖霊）の道であり、もう 1 つはマーヤの道です。神を求める人はごくわずかですが、多くの人々が広大なマーヤの道に引き寄せられています。モクシャ（解脱）への門は狭く、通過するのが困難です。神の道も同様に狭く、それを発見できる人はほんの少数です。

この節では神の門（入り口）と道について言及しています。最初のものは入り口で、次のものは道です。すべての人間にとって道は 2 つしかありません。1 つは狭く、もう 1 つは広いです。狭い道への門は狭く、広い道への入り口は広いです。入り口と道は、入る人の数倍大きくなければなりません。そうでなければ、門と道に入ることはできません。狭い門のサイズと狭い道の幅は、入る人のサイズと等しいです。しかし、2 番目の選択肢では、広い門のサイズと広い道の幅は、入る人の 108 倍大きいです。このように、この世界には 2 つの道しかありません—1 つは 108 倍広い門と広い道、もう 1 つは正確なサイズの門と道です。主はこれら 2 種類の門と道を知恵と無知に例えました。知恵の道は非常に狭く、入り口のサイズは限られており、歩くのが困難です。無知の道は 108 倍大きく、障害がありません。知恵の道は狭く障害がありますが、その目的地

はパラマートマです。広い門と広い無知の道には障害はありませんが、それはサタンに導きます。パラマートマの道は誕生も死もなく、破壊もなく、常に変化のない状態にあります。サタンの道には誕生、死、破壊があり、常に変化の状態にあります。パラマートマの道がはるかに優れており、サタンの道が最悪であるにもかかわらず、ほとんどの人々はサタンの道を歩むことを選びます。人がサタンの道に入るとき、彼らのすべての仲間が彼らを支持し、何の問題も引き起こしません。財政的な困難はなく、生活は快適に感じられるでしょう。しかし、人が知恵の道を選ぶとき、彼らの親族や配偶者が敵となり、彼らの旅を妨げるかもしれません。生活は困難になるかもしれません。したがって、何百万人の中でもごくわずかな人々、もしいれば、知恵の道を選びます。

多くの人々は、障害も対立もない広大な無知の道を歩んでいます。驚くべきことに、彼らは解脱（モークシャ）と他界の父へと導く狭い通路の存在に気付いていません。バガヴァッド・ギーターの中でクリシュナは、千人に一人も狭い道を進もうとする者がいないと述べています。その道に入る者はまれで、マーヤ（幻想）による障害のために目的地に到達する者はさらに稀です。バガヴァッド・ギーターでクリシュナは、これらの障害を乗り越えて目的地に到達する人を「祝福された者」とし、そのような個人は永遠のパラマートマ（最高の魂）と一体となると強調しています。クリシュナとイエスは共にパラマートマを表しています。クリシュナはドヴァーパラ・ユガの終わりにバガヴァッド・ギーターの中で知恵と無知の道を説明し、一方イエスはカリ・ユガに入って三千年後に聖典の中で同様のメッセージを伝えました。シュリー・クリシュナとイエス・キリストによって説明された知恵と無知の道を理解する人々は、提示された知恵の道に乗り出し、あらゆる障害にもかかわらず、最終的に永遠の解脱であるパラマートマに到達するまで忍耐強く進むべきです。

17) マタイによる福音書 第 7 章 7 節と 8 節

(7:7) 求めよ、そうすれば与えられる。探せ、そうすれば見つかる。門をたたけ、そうすれば開かれる。

(7:8) 求める者は誰でも受け取り、探す者は見つけ出し、門をたたく者には開かれる。

この節には、「求める」「探す」「たたく」という三つの重要な動詞があります。イエスは私たちにこれら三つのことを霊的な文脈で行うよう指示しました。主の教えは、他の多くの人々とは異なり、世俗的な事柄を中心としていません。残念ながら、多くの人々がこの節を誤解し、物質的な祝福を求める呼びかけとして解釈しています。その結果、人々は主の本来のメッセージに反して、地上の恩恵を求め始めました。人々は聖書を読んでいても、サタンが彼らの心に入り込み、イエスの教えの理解を曇らせ、物質的な欲望を追求するように導いています。人の意図は神の言葉に違反することではありませんが、サタンは彼らの理解不足につけ込み、彼らが神の戒めに違反していないと思い込ませて欺きます。実際には、これによって彼らは神の言葉に違反することになります。サタンは神の創造物であり、神の存在が感じられるところならどこにでも存在します。神の言葉が宿るところには、サタンの影響も存在する可能性があります。したがって、聖書を解釈する際には、神の節を勤勉に理解し、サタンの影響から自らを守ることが重要です。

私たちは神に求め、神を探し、神の門をたたくべきです。これが神の道です。もし他のものを求めたり探したりするなら、それはサタン（マーヤ）の道となります。神の道を歩む者は神の知恵を求めます。あなたには多くの疑問があるかもしれません：神とはどのようなものか？どのように神に到達できるのか？神についての詳細をどのように理解できるのか？地上で誰もこれらの質問に答えられないと思い込まないでください。人類がサタンの影響により神の情報にアクセスできない

時、神は来臨して答えを与えてくれます。あなたは質問への答えを見つけることができますが、誰がその答えを与えているのかを認識できないかもしれません。神が地上に生まれて答えを提供する時でさえ、私たちは彼を神ではなく普通の人間として認識することが多いのです。もしあなたが求めるなら、完全な知恵を得るでしょう。もし探すなら、神が人間の姿で地上に来ていることを発見するでしょう。神が地上に化身する時、彼は自身が神であると主張せず、誰にも明かしません。これが彼の規則です。この規則によると、探さない者は見つけることができませんが、探求者は彼を認識するでしょう。主イエスが地上にいた時、知恵を求める者が少なかったため、彼はその少数の者たちと知恵を共有しました。探求者が少なかったため、彼は誰に対しても神として現れることはありませんでした。すべての人にとって、彼は普通の人のように見えました。彼の 12 人の弟子たちでさえ、彼を説教者として認識し、宇宙全体を包含するパラマートマがイエスとして化身していたことを知りませんでした。彼は意図的に、誰も彼を神として認識できないような方法で振る舞いました。

他界（パラローカ）の王であるパラマートマは、地上で人として過ごした時期に弟子たちの足を洗いました。この謙虚な行為により、弟子たちや他の人々が彼を神として認識することは困難でした。残念ながら、人々は彼を主として認識できず、普通の人として無礼に扱いました。彼は顔への唾吐き、頭に茨の冠をかぶせられること、殴打、そして十字架刑に耐えました。イエスが死んで三日目に同じ体で復活した時でさえ、彼の弟子たちの中には彼を悪魔と間違える者もいました。これは、彼の弟子たちが好奇心はあったものの、真に求めていなかったことを示しています。

「聞くことより見ることの方が偉大である」という言葉があるように、彼を直接目にした人々は、単に彼の教えを聞

いただけの人々よりも高い地位にありました。人々はイエスの姿をした全世界の神を見る機会を持っていましたが、それは彼らが本当には彼を見ていなかったかのようでした。このコンテキストで、主は物理的な視力があるにもかかわらず、弟子たちを盲目と表現しました。そのような盲目を避けるために、人は積極的に神を探求すべきです。節が示すように、求める者は皆受け取り、探す者は皆見つけ出します。したがって、求める者は神の言葉を受け取り、探す者は神の形を得ます。見る者は聞く者よりも偉大で、体験する者は見る者よりも偉大です。この原則に基づき、たたく者は解脱の領域への入場を得ます。ここでのたたくとは、隣人や見知らぬ人の戸をたたくことではなく、解脱の王国と他界の王国の門への入場を求めることを意味します。解脱を求める者はパラマートマと一体となり、その真の本質を体験します。求めることと探すことに慣れた者は、必ず神との一体化を試みるべきです。つまり、彼らは必ずたたく者となります。求め、探し、たたくというプロセスを通じて、誰でも神との一致に至ることができます。したがって、前述の節で概説されているように、これら三つの本質的な特質は全ての個人によって育まれるべきです。神の導きに従うことで、求める者は知恵を得、探す者は至高神（バガヴァーン）を見出し、たたく者は解脱の家への入場を得るのです。

18) マタイによる福音書 第 7 章 15 節

(7:15) にせ預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の皮を着て、あなたがたのところに来ますが、内側は貪欲な狼なのです。

人間は神への道を見出すために導きを必要とし、その導きはしばしば他者からもたらされます。神の道を歩むためには、人は他者を信頼しなければなりません。この霊的な道を歩む者は、導き手に道を示してもらうことに頼っています。従う者の旅は導き手に依存し、導き手が示す道に従わなければなり

ません。これにより従う者は導き手に依存することとなり、導き手が正しい方向を示せば、従う者は正しく進歩するでしょう。逆に、導き手が間違った方向を示せば、従う者は道を踏み外すかもしれません。一般の人の最終的な到達点は、選んだ導き手やグルに強く影響されます。ひとたびある人がグルとして認められると、人々は生涯を通じてその導きを信じ、信頼する傾向があります。したがって、自分のグルや導き手を選ぶ際には細心の注意を払うべきです。上記の節で、主は「**にせ預言者に気をつけよ**」と警告されました。主は、現代のグルの中には真の導き手でない者がいるかもしれないと注意を促しました。彼らは羊の皮を着て、真のグルのふりをしますが、実際には変装した貪欲な狼のようなものです。イエスの教えによれば、多くの人々がグルのような服装をし、振る舞い、神や知恵、アートマといった言葉を語りの中で使うかもしれません。しかし、彼らの本質は、あなたを神に近づけることはないでしょう。羊の皮を被った狼が羊でないように、これらの人々も、その外見にもかかわらず、真のグルではありません。したがって、主のアドバイスは、真の導きを提供しない人々に従って人生を無駄にすることを避けるため、にせ預言者に対して警戒し、注意深くあるべきだということです。

19) マタイによる福音書 第 7 章 21 節

(7:21) わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天国に入るのではなく、天におられるわたしの父の御心を行う者だけが入るのです。

主イエスはパラマートマから発せられました。イエスは人間の形をとった化身の主であり、一方パラローカの父であるパラマートマは、形のない状態の神であり、全宇宙に遍在しています。主が人間としてのイエスとして地上を歩まれた時、ある者たちは彼の神聖な magnificence を認識し、物質的な欲望のために彼を崇拝しました。彼らは個人的な利益を求めて

「主よ、主よ」と呼びかけました。しかし、主の目に見える形に近づき、神聖な知恵を得ることなく主を偉大だと呼ぶだけでは不十分です。目に見える形の方と目に見えない形の方は同じですが、目に見える形には本質的な制限があり、一方、目に見えないパラローカの父には制限がありません。無限のパラマートマは時折、人類に神聖な教えを伝えるために触知可能な形を取ります。イエスはパラマートマがこの目的のために選んだ形です。主がイエスとして私たちの前に現れた一方で、パラローカの父はイエスの言葉を通して語りかけました。神はイエスとして化身し、神の dharmas を宣言するためでした。

イエスを「主よ」と呼ぶだけで、神の知恵を実践せず、パラローカの父の意志に沿わなければ、真の利益はありません。神の知恵を積極的に実践する者は、ただ主の名を唱える者よりも高い立場にあります。神の言葉に従う者は、単に神に敬礼する者よりも重要です。神の戒めに従って生きる人は、真に神の意志に従っており、そのような人々はパラローカ（解脱）に向かう運命にあります。神は追従を求めず、それに屈することもありません。むしろ、神は神の知恵を受け入れ、実践する人々を喜ばれます。したがって、ただ賞賛を捧げるよりも、神の教えを実践する方が意味があります。神はすべての存在の思考と意図を理解しており、神の知恵を真に理解し、それに従って生きる者と、そうでない者を見分けることができます。神の知恵を理解し、それに従って生きる者は、神にとって特別な重要性を持ちます。知恵を誤解したり無視したりして、神に従って行動できない者は、解脱を得ることはできません。

20) マタイによる福音書 第 7 章 22-23 節

(7:22) その日には、多くの者がわたしに、『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか』と言うでしょう。

(7:23) しかし、その時、わたしは彼らにはっきり言います。『わたしはあなたがたを全く知りません。不法を行う者たち。わたしから離れなさい。』

主（イエス）の偉大さを認識する人々の中には、パラローカの支配者であるパラマートマを見過ごし、イエスを賞賛することにのみ焦点を当てる人々がいます。全世界の父であるパラマートマは、自身の一部をイエスとして送りました。イエスはパラマートマと同じだけの力を持っています。主イエスを賞賛することは、父であるパラマートマを賞賛することに等しいです。多くの人々が主を賞賛しますが、利己的な動機から賞賛する人々もいれば、神への献身において無私の人々もいます。パラローカの父は、彼が送ったイエスを通じて、数多くの機会にメッセージを伝えました。多くの人々が至高の父の言葉を知っていますが、その真の本質を理解していません。父の言葉を読み、聞き、賞賛を捧げる何百万人もの中で、父の実際の本質を真に理解している者は一人もいないと言えるかもしれません。主は神の戒め、知恵、節を宣言しました。目に見える主（イエス）は目に見えない神のシンボルであり、神のイメージと代表者です。節に含まれる知恵と戒めを理解できない人々は、主への賞賛から十分な恩恵を受けることができません。

人類は主を至高として賞賛することからある程度の利益を得ることができるだけです。人にとって究極の恩恵はパラローカを得ることであるということを認識することが重要で

す。人が達成できる最も重要な成果はパラローカです。誰にとっても、サタン（マーヤ）の世界から解放され、神の領域に入ることが究極の目標であることを理解することが重要です。人類にとって究極かつ最も重要な利益は、サタンが住むこの世界に二度と戻ることなく、神のパラローカと結合することです。人にとって、パラローカへの入場を得ることより価値のあるものはありません。そのような大きな利益を得て、サタンとの絡み合いを避けるためには、神の知恵を完全に理解しなければなりません。イエスの節と戒めに含まれる深遠な知恵を深く掘り下げない人々は、完全な信者ではなく、部分的な信者に過ぎないでしょう。主の教えすべてに従い、その戒めの境界を超えない者は祝福されています。パラマートマの知恵を完全には理解していない人々は、たとえ偉大な説教者で主を熱心に賞賛する者であっても、完全な信者ではありません。これはそのような人々を否定するものではなく、彼らが完全な信者ではないものの、神への信仰を持っていることを強調するものです。神の知恵を完全に理解するまで、今は明らかでないかもしれませんが、すべての人の中に疑いが存在します。主を心から信じる信者だと思っている偉大な説教者たちも、神の知恵を徹底的に理解するまでは、依然として疑いを抱いているかもしれません。したがって、主は「**マナスで私を信頼する者は、私に追従する者よりも優れている**」と宣言しました。完全な信仰には、神の完全な知恵が必要です。

イエスと神が一つであることを理解せず、イエスがイエスとして戻ってくると信じる人々は、神の広大さを理解していないと言えます。神が永遠であり、始まりも終わりもなく、神が何度も地上に降臨し、必要な時にはいつでも来られることを理解しない者は、完全な知恵を欠いています。完全な知恵を持つ者は神の到来を見分けることができますが、完全な知恵のない者は神の到来を認識できません。神が人間の形を取り、人の前に立っていても、その外見と行動だけを見る者は、神を認識できないかもしれません。主が変装して来られた時、キリス

ト教徒の中には主を認識できず、主の存在に気づかないどころか、主に洗礼を施そうとする者もいるかもしれません。

地上では、信者は非信者よりも優れており、絶対的な信者は一般的な信者を超越しています。絶対的な信者だけが来世（パラローカ）に入ることができます。彼らが絶対的な信者になるまで、神は彼らを受け入れません。来世に入る際、神は絶対的な智者（グナーニ）のみを認めます。誰かが絶対的な智者でない場合、神は「私は彼らを知らない」と言うでしょう。したがって、絶対的な知恵を得るよう努めなければなりません。多くの人が神に近づき、神の王国に入ることを望んでいます。しかし、彼らはサタンの支配下（マーヤ）にあるため、サタンは彼らが神に到達し、完全な智者になることを阻止しようと最大限の努力を払います。神に対するサタンの反対を認識している説教者でさえ、サタンの影響力の範囲を完全には理解していないかもしれません。サタンの活動を包括的に理解していない人々は、神の道を歩んでいると信じながら、知らず知らずのうちにサタンの道を歩んでいるかもしれません。これが、神に近いと思っている説教者でさえ、神の御前に入ることができない可能性があると神が述べた理由です。

イエスは次のように言いました。**「あなたがたが私の名によって悪魔を追い出し、奇跡を行い、病人を癒したとしても、あなたがたは悪を行う者です。私から離れなさい。」**

今日の社会では、神の名において奇跡を行う人々を真の信者とみなし、主に近い存在だと信じています。奇跡を行う人々自身も、主と親密な交わりにあると考えるかもしれません。この認識は、彼らの行動を通じて主の栄光が現れているのを見るために生じます。彼らが神の言葉を唱えながら患者に手を置き、患者が癒やされると、彼らはそれを主による奇跡が自分たちを通じて起こったのだと考えます。確かに奇跡は起こり得るものであり、主の存在をすべての人に知らしめることができますが、彼らは上記の節で主がそのような行為に不快感を示

した理由を見過ごしています。そうすることで、彼らは主の言葉を忘れています。疑問が生じます：彼らの行いが良いものに見え、主の奇跡の現れであるように思われるのに、なぜ主は彼らを叱責したのでしょうか？なぜイエスは彼らが邪悪な道を歩んでいると述べたのでしょうか？主がそう言われたのであれば、それは間違いなく真実です。

信じがたい真実は、主の教えにおける真理が何を意味するのかを熟考すると明らかになります。主の名において行われる奇跡が神のものかサタンのものかを見分けない人は重大な過ちを犯しています。人々の目には説教者やグルとして映る多くの人々が、神の道を歩んでいると信じていますが、実際にはマーヤの道を歩んでいます。この認識は非常に苦痛を伴うものかもしれません。多くの説教者が私の言葉に動揺するかもしれませんが、これらは私の言葉ではなく、神の言葉であることを覚えておいてください。マタイによる福音書 7 章 22 節に記されているように、主は「**これは悪です。私はあなたがたを知りませんでした**」と言われました。過去に主を誘惑した同じマーヤ（サタン）が、今日も私たちを欺こうとしていることを認識すべきです。マーヤ（サタン）を理解することも、神の知恵の重要な部分です。マーヤを認識せずには、神を装ったサタンに従ってしまい、神に従うことができなくなる可能性があります。今日、多くの講演者、グル、説教者が同じ過ちを犯しています。多くの形を取ることができるサタン（マーヤ）は、神の名において技と奇跡を行います。これが神の喜ばれないことだと知らない人々は進歩することができません。悲しい真実は、地上の多くの人々が盲目的にサタンに従い、それを神だと信じていることです。彼らはサタンの道を歩んでおり、神の道を歩んでいないという事実に気付いていません。サタンの影響から抜け出すことは、彼らにとってほとんど不可能に思えるかもしれません。神ご自身がこの真実を伝えたとしても、彼らは神を批判するかもしれませんが、変わることはないでしょう。彼ら

にとって、マーヤは神として現れ、神は単なる人間として現れます。

神の王国に入ることを望み、神を信じる人々は、前述の節を振り返り、なぜ神が奇跡を行う者たちを不認可とし、悪を行う者と呼んだのかを考えるべきです。誰が神に好まれ、誰がそうでないのかを考えてください。神の節、知恵、戒めに親しむことが重要です。神の戒めを違反することなく、それらをあなたの周りに設けられた境界として認識しながら、神の知恵を完全に受け入れるべきです。神の王国はこれらの境界の中にあり、サタンの支配は外にあることを心に留めておいてください。イエスが全人類のために聖書で示した境界を覚えながら、サタンの影響に対して警戒を怠らないでください。

21) マタイによる福音書 8 章 22 節

(8:22) イエスは彼に言われた。「私に従いなさい。死人に、自分たちの死人を葬らせなさい。」

上記の節は、ある弟子が「主よ、まず行って父を葬ることをお許しください」と言った時のイエスの返答でした。イエスの言葉は一部の人々にとって不明確に思えるかもしれず、その意味について疑問が生じるかもしれません。これを考える時、人類を二つのカテゴリーに分類することができます：知恵を持ち、それをヨーガムとして実践する人々は永遠の命（解脱）を得ます。そのような人々は非常に少数です。永遠の命を得る資格のある人々は、死者の中には数えられません。永遠の命を得た人々は決して真の死を経験することはなく、解脱を達成したと言えます。一方、無知な人々やヨーガムの実践に携わらない人々は、霊的に死んでいると考えることができます。そのような個人は永遠の命を持たず、最終的に死に直面します。彼らはいずれかの時点で死を経験する運命にあると言えます。

無知な者はしばしば他の無知な者によって埋葬されます。したがって、イエスの「死人に死人を葬らせよ」という言葉は、知恵を欠く者が霊的に死んでいると呼ばれることを伝えています。それは、知恵を持つ者は無知な者と交わるべきではないことを強調しています。そのため、イエスは弟子に「あなたは知恵を理解しているので、私に従いなさい。無知な者に無知な者を埋葬させなさい」と言われました。

22) マタイによる福音書 9 章 12 節と 13 節

(9:12）イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは、健康な人々ではなく、病人です。」

(9:13）私は正しい人々ではなく、罪人を呼ぶために来たのです。

以前に議論したように、神は時折、ダルマを確立するために地上に降臨します。同様に、イエスは無知な者を知恵の道に導くために来たと述べました。彼は正しい人々ではなく、罪人を呼ぶために来たと言及しました。ここでの「罪人」は知恵を欠き、無知な人々を表し、「正しい人々」は知恵を持つ人々を表します。神は霊的な医師として、しばしば説教者として知られる役割を担い、無知という病に苦しむ人々を癒します。知恵という薬によって、彼は霊的に病んでいる人々を治癒します。すでに知恵によって霊的に健康な人々は、そのような医師や説教者の導きを必要としません。無知という病が世界中に広がり、すべての人々に影響を及ぼす時、神は化身してダルマという神聖な薬を与え、無知な者を知者（グナーニ）に変えます。もし神がこの霊的な医師としての役割を担わなければ、全世界が無知に苦しむことになるでしょう。したがって、神は必要とする人々に知恵を啓示するために化身するのです。

23) マタイによる福音書 8 章 23 節、24 節、25 節、26 節

(8:23）そして彼が舟に乗り込むと、弟子たちは彼に従った。

(8:24）突然、湖上に激しい嵐が起こり、波が舟を覆うほどになった。しかし、イエスは眠っていた。

(8:25）弟子たちは近寄って彼を起こし、言った。「主よ、私たちを救ってください！沈んでしまいます！」

(8:26）彼は答えた。「なぜそんなに恐れるのですか、信仰の薄い者たちよ？」そして立ち上がって風と波とを叱りつけると、すっかり凪になった。

これはイエスの生涯における重要な出来事です。イエスはここで直接的な教訓を教えていないかもしれませんが、この出来事から多くを学ぶことができます。海も嵐もプラクリティ（自然界）に関連しています。嵐の中の空気と海の中の水は、プラクリティの不可欠な要素です。プラクリティは最高の神的存在であるパラマートマの単独の支配下にあります。プラクリティは五つの要素から成り立っています：空、風、火、水、そして地です。パラマートマに従う神性を持つアートマ（魂）でさえ、プラクリティに対する権威を持っていません。体内のアートマは、体の形で存在するチャラ（可変的な）プラクリティのみを支配します。それはアチャラ（不変の）プラクリティに対する権威を持ちません。プラクリティはアートマに従わず、パラマートマの命令にのみ従います。プラクリティは五つのブータ（生命力またはジーヴァとして理解できる）から構成されています。これら五つのジーヴァはプラクリティの五

要素を表し、そのため、彼らは神の神聖な言葉に従います。彼らはパラマートマの指示に従います。

イエスは普通の人間として現れた聖霊であったため、海の嵐は彼の命令で止みました。プラクリティを制御できるのは神だけなので、イエスは神の化身と考えることができます。最初の神聖な経典であるバガヴァッド・ギーターのグナーナ・ヨーガの７節、８節、９節に記されているように、神は人間の形で地上に降り、その知恵を伝えるために現れます。神が人間の形を取る時、外見は普通の人間のように見えますが、彼は普通の個人ではありません。彼が普通の人間のように見えるため、彼を識別することは困難です。しかし、彼を認識するための二つの重要な指標があります：**1) 神聖なダルマが教えられる場所における神の化身の存在。2) プラクリティを命令する能力は神の化身として認識できます。**イエスの命令による海の静穏化は、この神聖な力の現れであり、そのような行為は神のみが行えることを示しています。ダルマが教えられ、プラクリティが命じられる時、神の人間としての形が認識可能になります。イエスは神の知恵を教えただけでなく、それを実践し、プラクリティに命じました。したがって、イエスは人間の形をした神として識別できます。海の嵐の即座の停止は、イエスの神性の証明として役立ちました。

24) マタイによる福音書 9 章 6 節

(9:6) 人の子は地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知っていただきたい。そこで彼は中風の人に言った。「起き上がり、あなたの床を取って家に帰りなさい。」すると、その人は起き上がって家に帰った。

イエスご自身が、人の子は地上で罪を赦す権威を持っていると言われました。中風の人がイエスのもとに連れて来られた時、イエスは彼に「あなたの罪は赦された」と言われまし

た。律法学者たちの中には、イエスが冒涜していると心の中で思う者たちがいました。彼らの考えを知って、イエスは言われました。「なぜ、あなたがたは心の中で邪念を抱くのか？『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起き上がって歩け』と言うのと、どちらが易しいか？しかし、人の子が罪を赦す権威を持っていることを知っていただきたい。」そこで、中風の人に「起き上がり、あなたの床を取って家に帰りなさい」と言われると、その人は起き上がって家に帰りました。

これを見ると、イエスは律法学者たちが彼について悪く考えたために罪を赦されました。また、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを宣言されました。神の子として地上に来られたにもかかわらず、人の子として自らを同一視することで謙遜されました。彼だけが罪を赦す権威を持っていることを示し、証明されました。神（聖霊）だけが罪を赦すことができると理解している人々は、イエスが本当は誰であるかを認識するでしょう。人の子を名乗ることで、イエスは意図的に自身の神性を隠されましたが、それは聖霊から出たものでした。中風の人は、イエスが命じるとすぐに起き上がって家に帰りました。群衆はこの奇跡を目の当たりにして驚きました。しかし、このような驚くべき行いをされたにもかかわらず、イエスは普通の人として扱われ、罪人であるかのように法廷に連れて行かれました。これは、人間がしばしば受けた助けを忘れてしまうことを示しています。

25) マタイによる福音書 10 章 20 節

(10:20) 語るのはあなたがたではなく、あなたがたの父の霊が、あなたがたを通して語るのである。

この聖句は一見普通に見えますが、深い霊的な知恵を含んでいます。この聖句における「**あなたがたの父**」という言葉が、生物学的な父親ではなく、ジーヴァートマ（個我）の霊的な父を指していることを理解することが重要です。アートマ

（真我）は、ジーヴァートマの父として体内に住み、それを導きます。アートマの父がパラマートマ（最高我）であることを覚えておくことが重要です。すべての人間はジーヴァートマを表しています。その人のカルマに応じて、アートマは彼ら（ジーヴァートマ）に影響を与え、導き、カルマ（罪と功徳のカルマ）を経験させます。アートマはすべての身体機能を制御し、体内でジーヴァートマが経験する快楽と苦痛を決定します。

ジーヴァートマは実際には身体機能に積極的に関与していません。見かけ上は何もしていないように見えますが、ジーヴァは静かにその行為の結果である喜びと悲しみを経験しています。ジーヴァートマは体内の個人として自己を認識していますが、行動する能力はありません。代わりに、体内のすべての活動を調整しているのはアートマです。無知のために、ジーヴァートマは「アハム」（自我）の言葉を聞くことで、自分が行動を行っていると誤って信じています。実際には、アートマが体内での真の行為者ですが、ジーヴァートマはしばしばアートマの存在を忘れ、自分がすべての行為者であると信じています。この聖句の文脈で、イエスは無知な人々を啓発しようとしました。彼は「**あなたがたの父であるアートマがあなたがたの内に住み、あなたがたを通して語っているのです。語っているのはあなたがたではありません**」と伝えました。この聖句によれば、行われる行為だけでなく、語られる言葉もジーヴァートマによって発せられるのではないことは明らかです。イエスは、人々が自分が語っていると信じることは純粋な無知であり、実際に言葉を発しているのはアートマであると述べました。ジーヴァートマは十の身体部分（行為の器官）によって行われる行為を実行しているのではなく、これらの身体部分を通じてすべてを成し遂げているのはアートマです。この真理を認識することは、すべての知恵の中で最高の形態を表しています。

26) マタイによる福音書 10 章 30 節

(10:30) あなたがたの頭の毛さえも、すべて数えられている。

寺院で、人々はしばしば神が彼らの内なる感情を知らないと信じて、神に自分の考えを打ち明けます。寺院の中では敬意と畏怖の念を示しますが、外では異なる行動をとることがあります。例えば、寺院を出た後、他の乗客を座らせることなく電車の座席を二つ占有するなど、思いやりのない行動を示す人もいます。この行動は、神は寺院の中での行動は知っているが外での行動は知らないという誤解から生じています。しかし、**多くの人々が理解していないのは、神は全知全能であり、最も隠れた場所でのすべての行動さえも見通しているということです。**イエスによって語られたこの聖句は、神の栄光を強調し、神の認識がどこにでも及んでいることを思い起こさせるものです。

この聖句は、神が人間に対して持つ並外れた注意深さを強調しています。神は人間の存在のすべての側面に対して正確なシステムを確立しています。この神聖なシステムは、「カルマ・ヴィサルガ」（カルマの微細な部分への分割）のような最も細かい詳細にまで及びます。カルマ・ヴィサルガを通じて、神は人がまぶたを開閉する回数を決定し、正確な数を確保します。神はまた、カルマ・ヴィサルガを通じて、私たちの頭の毛の本数や、いつどの毛が抜け落ちるかも定めています。さらに、神は個人が直面する課題と苦しみの程度を調整します。バガヴァッド・ギーターでは、主は地上で起こったこと、起こっていること、そして起こるであろうすべてのことについての知識を神が持っていることを確認しています。これは、神の認識を超えるものは何もないという考えを強化します。

27) マタイによる福音書 10 章 34 節、35 節、36 節

(10:34) わたしが地上に平和をもたらすために来たと思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのである。

(10:35) わたしは次のように分け隔てるために来たのである。『人をその父に対して、娘をその母に対して、嫁をそのしゅうとめに対して。』

(10:36) そして、家族の者がその人の敵となるのである。

イエスが意図的に人々の間に対立を生み出そうとしたと言うのは公平ではないかもしれませんが、そのような対立が生じたことは明らかです。イエスは不和を蒔くためではなく、人々を無知から知恵へと導く意図を持って来られました。彼は良い意図を持って知恵を分かち合いましたが、その教えを十分に理解していない人々の間でしばしば争いが生じました。冷水が砂に撒かれると冷却されますが、石灰岩は暖かくなり、その外観が変化して石灰になるように、イエスの知恵の受け取り方は様々です。知恵を深く理解している人々はイエスの教えに幸せを見出しますが、無知な人々の間では対立が生じます。時には、一方の配偶者が知恵を求めるとき、他方が同意しないことがあり、家族内での不一致につながります。この予期せぬ結果は、家庭内での分裂につながり、父が息子に対して、母が娘に対して、そして姑が嫁に対して対立することがあります。イエスの意図は高潔ですが、それは意図せずして人々が親族関係を忘れ、敵意を育てることにつながります。そのため、イエスが花を与えても棘になり、柔らかい木を与えても堅い剣になります。これはイエスの過失ではなく、人間の性質と異なるグナ（性質）の影響の結果であることに注意することが重要です。

28) マタイによる福音書 10 章 37 節

(10:37) わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。

両親が子どもを愛し、子どもが両親を愛することは人間の本質的な性質です。親と子の絆は、世界の他のどんな愛着をも超える深い愛によってしばしば特徴づけられます。しかし、人間の心もまた、グナとして知られる固有の性質によって大きく影響を受けます。人が知恵と神への強い愛を持つとき、彼らは自然に物質的あるいは世俗的なものよりも知恵の追求に引き寄せられます。他のところに愛情が主に向けられているとき、知恵を優先することは困難になります。人間の心は、それぞれ金と鉄で作られた枷のような、六つの善と悪のグナの影響下で働きます。両方のタイプのグナは個人を束縛する目的を果たします。しかし、極端な愛（善いグナ）も嫉妬（悪いグナ）も、人を知恵へと導かないことに注意することが重要です。真に重要なのは、個人の知恵への純粋な関心です。六つの悪いグナには、欲望（カーマ）、怒り（クローダ）、貪欲（ローバ）、情熱（モーハ）、傲慢（マダム）、嫉妬（マツサラ）が含まれます。対照的に、六つの善いグナには、慈善（ダーナ）、慈悲（ダヤー）、寛容（アウダーリャ）、離欲（ヴァイラーギャ）、謙遜（ヴィナヤ）、愛（プレーマ）が含まれます。

29) マタイによる福音書 10 章 38 節

(10:38) 自分の十字架を背負って私について来ない者は、私にふさわしくない。

クリスチャンはしばしば十字架について語り、深い畏敬の念を持っています。クリスチャンが首に十字架を掛けているのをよく見かけ、この象徴は彼らの信仰において大きな重要

性を持っています。イエスが十字架につけられ、その上で亡くなったことは広く知られています。ここで生じる疑問は、なぜクリスチャンはイエスの処刑の道具として使用された象徴をそれほど高く評価するのかということです。答えは、自分たちより偉大な存在に従い、その行動を模倣することの深い本質にあります。しかし、主の死に関連する象徴である十字架がなぜそれほど高く評価されるべきなのか、誰も考えていません。実際、意図的であれ無意図的であれ、十字架の詳細の理解にギャップがあるように見えます。十字架について考え、より深い詳細に掘り下げてみましょう。

この詩句で、イエスは**十字架を背負うことは神の道を歩むことにつながり、十字架があなたを背負う場合は悪魔の道を歩むことを意味する**と警告しました。同様のメッセージは、イエスが「自分の十字架を背負って私に従わない者は、私にふさわしくない」と述べた時にも伝えられています。これは、十字架を背負わない者は神にふさわしくないことを意味します。この観点からすると、十字架は悪魔を象徴していることを理解することが重要です。この概念についてより詳しく知りたい方は、私の著書「十字架は神か？」をお読みください。

十字架は霊的象徴において蛇を表しています。蛇を悪魔と、鳩をアートマ（魂）と結びつけることは一般的です。悪魔、またはマーヤ（幻影）は人体内に宿り、しばしば人々を無知の道へと導きます。悪魔が人を持ち上げるとき、それはその人の弱さと悪魔の支配を示します。一方、人が十字架を担ぐとき、それはその個人の力が悪魔のそれを超えていることを示します。これが、イエスが人生の特定の時点で十字架を担いだ理由であり、人類が悪魔に打ち勝てることを示すためでした。同様に、イエスが十字架にかけられたとき、それは十字架が彼を担ぐことを象徴し、悪魔が誰でもその道に誘い込めることを示しています。知恵の道を歩むために、人間は自分の十字架を進んで担がなければなりません。イエスが「自分の十字架を背負

って私に従わない者は、私にふさわしくない」と強調したように。

私たちは悪魔を十字架の形で象徴し、それは巨大な蛇や蛇を表し、マーヤの概念に似ています。マーヤには、個人を神への道から逸らし、無知へと導く力があります。このような影響を克服するには、まずマーヤを理解する必要があります。分析すると、マーヤは人の頭の中にあるグナ（性質）の集まりとして識別できます。これらのグナに従って行動する人は、無意識のうちに無知の道を歩み、本質的にマーヤに自分の進路を支配されることになります。マーヤを征服するには、グナを習得し、その影響に左右されることを拒否しなければなりません。人がこれを達成したとき、その人は内なる力を使ってマーヤ、つまり悪魔を打ち負かしたと言えます。そのような人はマーヤを拾い上げ、知恵の道を歩むことができます。したがって、この詩句でのイエスのメッセージは、「十字架」—マーヤの代表—を征服することによって、その人は神の恩寵にふさわしい者となることを強調しています。「十字架」は単なる木製の象徴ではなく、むしろ悪魔の象徴であるニシキヘビの表現であることに注意することが重要です。長老たちによると、十字架はマーヤを象徴し、鳥はアートマの象徴として立っています。ヨハネによるイエスの洗礼の際、霊（アートマ）が鳩のように降りてイエスの体に入ったと言われています。この文脈では、「十字架」はアートマに対立する力を表しています。したがって、イエスの教えは、人が自分の知恵と内なる力を使って「十字架」を担ぎ、知恵の道を歩むとき、その人は神とパラローカ（来世）にふさわしい者となることを強調しています。

30) マタイによる福音書第 10 章 40 節

(10:40) あなたがたを受け入れる者は私を受け入れ、私を受け入れる者は私を遣わした方を受け入れる。

人間はジーヴァートマ（個人の魂）ですが、アートマによって創造されています。パラマートマ（至高の魂）、つまり聖霊は、アートマとプラクリティ（物質的自然）の両方を創造しました。しかし、パラマートマが人として化身するとき、彼をアートマと呼ぶべきかジーヴァートマと呼ぶべきかという疑問が生じます。神が人の形を取る場合、その外見に基づいてジーヴァートマと見なすことができます。人間（ジーヴァートマ）が亡くなると、アートマは彼らを自身に組み込みます。アートマが人間を包含するように、神が人として化身し、ジーヴァートマとして現れる場合も同様です。この概念は「**あなたがたを受け入れる者は私をも受け入れる**」という詩句に反映されています。人間（ジーヴァートマ）として化身した者は、実際には神です。しかし、イエスのような人を遣わしたのは神です。アートマがジーヴァートマに似た人を包含するとき、それは人を遣わした神もまたアートマの中に含まれているかのようです。したがって、この詩句でイエスは「**私を受け入れる者は私を遣わした方を受け入れる**」と伝えました。

31) マタイによる福音書第 11 章 9 節

(11:9) あなたがたは何を見に出て行ったのか。預言者か。そうだ、あなたがたに言うが、私は預言者以上の者である。

預言者（プラヴァクタ）とは、誰も語っていない知識を教える者と言えます。テルグ語で、「**プラ**」は重要性を表し、「**ヴァクタ**」は語る者を意味します。したがって、預言者

は重要な知恵を伝える者です。しかし、イエスは自分が預言者以上の者であると宣言しました。預言者を超える者は一人だけであり、預言者の能力を超えた知恵を明らかにします。聖典は次のように述べています。

「**神はその知恵をいかなる人間にも授けなかった。神の知恵は神以外のすべての者に知られていない。**」最後の聖典の 3:7 節では、神は自分の知恵を伝えなければならないと述べられています。これに基づいて、神は知恵を共有するために預言者として来るが、預言者以上の存在であることが理解されます。最後の聖典の 42:51 節では、「**神は人間と直接コミュニケーションを取らない**」と宣言されています。しかし、神は変装した人として現れ、そのメッセージを伝えることができます。神が人の形を取るとき、たとえ預言者と呼ばれても、預言者以上の存在です。この詩句でのイエスの発言に照らすと、イエスは預言者を超え、神の化身を表していることが明らかになります。イエスは何度も自分のアイデンティティを公然と宣言したにもかかわらず、多くの人々は彼を認識できませんでした。

32) マタイによる福音書第 11 章 28 節

(11:28) すべて、疲れた人、重荷を負う人は、私のところに来なさい。私があなたがたを休ませてあげましょう。

物理的な重さを運ぶときに人々が疲れるのは一般的な理解です。しかし、人間は目に見える重荷を背負っていなくても疲労を感じます。この場合、目に見えない重荷は罪（カルマ）であり、カルマ的な経験をする人は誰でも疲れを感じる傾向があります。人間は、一時的にカルマから解放される睡眠時を除いて、常にカルマに直面しています。夢の中でもカルマの影響は持続し、継続的な労働状態を示しています。この重荷の永続的な性質を考慮して、イエスはすべての人に「私のところ

に来なさい。私があなたがたを休ませてあげましょう」と呼びかけています。

私たちが常にカルマを経験している中で、イエスに向かうことでどのように休息を見出せるのかという疑問が生じます。答えは以下の通りです：イエスが彼を求める人々に神の知恵を伝えるとき、この知恵を知るすべての人のカルマは知恵の力の中で消費されます。カルマの破壊を通じて、個人はその継続的な影響から解放され、苦しみの労苦が減少し、休息が与えられます。この招きは、イエスが「みな私のところに来なさい」と言ったように、すべてのカーストと宗教の人々に向けられています。イエスをキリスト教のグルや預言者と呼ぶ人もいるかもしれません。しかし、彼を単にキリスト教徒として分類することは不適切です。なぜなら、彼の呼びかけは包括的で、すべての背景を持つ人々を招いているからです。彼の教えを受け入れ、彼を求めた人々をキリスト教徒というラベルに限定すべきではありません。神と神の知恵は普遍的に必要であるため、イエスは「みな私のところに来なさい」と宣言したように、すべての人に招きを広げています。

33) マタイによる福音書第 12 章 17 節、18 節、19 節、20 節、21 節

(12:17) これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためでした。

(12:18) 見よ、私が選んだ私のしもべ、私の愛する者、私の心に適う者。私は彼の上に私の霊を置く。

(12:19) 彼は諸国に正義（知恵）を宣べ伝えるだろう。彼は争わず、叫ばない。通りで彼の声を聞く者はいない。

(12:20) 彼は傷ついた葦を折ることなく、くすぶっている灯心を消すことなく、正義（知恵）を勝利に導くまで。

(12:21) 諸国の民は彼の名に望みを置くだろう。

約 350 年前、ヴィーラブラフマムという偉大な人物が、起こりつつあった出来事と自然災害を予言しました。同様に、イザヤという偉大な人物がイエスの到来を予言しました。イザヤの言葉を詳しく調べると、その言葉の偉大さがすべての人に知られるでしょう。イザヤが誰について話していたのかが明らかになりました。イザヤはイエスが生まれる何年も前に生きていました。第 13 章で、イザヤはさらにいくつかのことを伝えました。これらの詩句を見ると、神である聖霊がイエスについて語ったことが明らかになります。聖典でイエスが自身について語った詩句と、聖霊がイエスについて語った詩句を調べると、イエスについて語った者（聖霊）とイエスが同じであることが明らかになります。

最初の詩句では、「見よ、私のしもべ」と述べられています。物質的な奉仕にはさまざまな形態がありますが、この詩句は物質的な奉仕について言及しているのではありません。代わりに、パラマートマへの奉仕について語っています。パラマートマへの奉仕には一つの形態しかなく、真のパラマートマへの奉仕は、神の知恵を他者に説き、広めることを含みます。イエスは積極的に神の知恵を広めていたため、聖霊は「見よ、私のしもべ」と宣言しました。神の知恵を広める人は誰でも、神から最も好まれる者となります。したがって、パラマートマはイエスへの愛を表現し、「私は彼を愛し、彼を喜ぶ」と述べました。この感情は最後の聖典の 15:28、29、30 節で述べられており、そこでは聖霊が粘土から人間を創造し、その魂（聖霊の魂）を吹き込むことが描かれています。その後、天使たちはその人間を神として認識し、その前にひれ伏します。したがって、イザヤの言葉に従って、「聖霊は彼の上に自らの霊を置く」ということから、人間として化身したイエスがパラマートマの魂であることが明らかになります。

19 節には「彼は国々に正義を宣べ伝える」と書かれています。しかし、聖書を英語に翻訳した際に、翻訳者が不正確な用語を使用した可能性があります。本来は「正義（justice）」ではなく「知恵（wisdom）」と書かれるべきです。

「正義」は物質的な世界とより密接に結びついているため、最適な用語ではないかもしれません。義や正義はこの世の事柄に関係しますが、知恵とダルマ（dharma）はパラマートマ（至高の存在）に関連しています。「義（righteousness）」や「正義（justice）」の代わりに「知恵（wisdom）」が使われるべきであったことは、翻訳上の誤りのようです。このような翻訳の誤りが数多く発見され、修正・訂正されました。

19 節には「彼は国々に正義を宣言するだろう」と述べられています。ここでの「宣言する」とは説教または教えるこ

とを意味します。この節は「彼は国々に知恵を広めるだろう」とより良く理解できます。この修正は、イエスが 30 年間生きた後、この節が示すように約 2 年 3 ヶ月の間、その知恵を教えたという事実と一致します。この期間中、イエスは様々な場所で無私に知恵を説き、様々な種類の病気を持つ多くの人々を癒しました。彼は盲人の視力を回復させ、足の不自由な人を歩けるようにし、らい病患者を癒し、さらには死者をも蘇らせました。その奇跡的な行為にもかかわらず、ある人々はイエスを魔術師と非難し、神に反する行為をしていると非難しました。それにもかかわらず、イエスは「彼は口論したり叫んだりしない」という言葉で確認されているように、口論や叫び声に関わることはありませんでした。

イエスは彼に近づいてきた人々に知恵を伝えましたが、「誰も通りで彼の声を聞くことはないだろう」という節が示すように、通りで叫ぶことは控えました。また、この節は傷ついた葦を折らないことを強調し、彼の行動が知恵を広めることのみに焦点を当てていたことを強調しています。さらに、この節はイエスの役割として、一度人の中に点火された知恵の力が、その個人に関連するすべてのカルマを燃やし尽くすまで消えることがないことを保証することを強調しています。カルマは様々な形で現れるため、それは多くの撚り糸で構成された芯に例えられ、「彼はくすぶる芯を消すことはない」という句を説明しています。さらに、この節はイエスの知恵に対する一部の人々の期待を表現し、「彼の名において、国々は希望を置くだろう」と述べています。

34) マタイによる福音書 12 章 31 節

(12:31) だから、あなたがたに言います。あらゆる種類の罪と誹謗は赦されますが、霊（アートマ）に対する冒涜は赦されないでしょう。

この節は聖書の中で特別な重要性を持っています。人間が神の知恵を把握すると、その知恵は火（知恵の力）に変わります。この火は様々な罪（カルマ）を焼き尽くす能力を持っています。神聖な知恵を知ることで、人間はアートマに関係のない罪を避けることができます。しかし、知恵の力は冒涜やアートマに対する行為から生じる罪を赦すことはできず、そのような罪は赦されないままかもしれないことに注意することが重要です。

35) マタイによる福音書 12 章 32 節

(12:32) 人の子に対して言葉を語る者は赦されますが、聖霊に対して語る者は、この時代（ユガ）でも、来るべき時代（ユガ）でも赦されないでしょう。

すべての人間は一般的に人の子と呼ばれています。普通の人々は、自分たちの両親が人間であることを認識しています。しかし、イエスは普通の人間として外見上現れているにもかかわらず、人の子として分類されるべきではありません。イエスが父について語るとき、彼の父は地上の人間としてではなく、パラローカに存在すると特定しました。その結果、イエスは適切に神の子として識別されます。対照的に、一般的な用語「人の子」はすべての人々に適用することができます。イエスが普通の人の名前と経験を持って自分自身を提示したにもかかわらず、彼の真の呼称は神の子です。

普通の人の種子提供者は人間ではありません。子供を持っていると主張する男性は真の父親ではありません。体の頭として機能し、その中ですべての機能を実行するアートマは、人間とすべての生き物の種子提供者です。残念ながら、多くの人間がこの事実を知りません。その結果、体内でいかなる機能も実行できないにもかかわらず、男性は他の人間の父親であると主張します。アートマがすべての物事の唯一の行為者であることは、第一と第二の神聖な聖書で何度も強調されています。実際には、人は行為を実行できないため罪を犯すことはできませんが、自分が行為者であるという誤解が、その人の（ジーヴァートマ）アカウントに罪が蓄積される原因となります。そのため、人は実際には犯していない罪の責任を負うことになります。同様に、アートマが人の真の父であるにもかかわらず、その人が自分の父親は人間であると主張するとき、その人は人間の子として考えられます。

イエスは、彼の父がパラローカの父であることを知っています。他の誰とも違って、彼はアートマから生まれたのではありません。イエスは、彼が神、聖霊の子であることを認めています。聖書全体を通じて、イエスは神の子として言及されています。なぜなら、彼は多くの機会に彼の父が聖霊であると明確に述べたからです。神の知恵は普通の個人に対して犯された罪を赦す力を持っています。しかし、神の子に対する冒涜の罪は決して赦されないでしょう。この冒涜の罪は、現在のユガ（時代）と次のユガの二つの時代にわたって経験されるよう運命づけられています。

36) マタイによる福音書 12 章 36 節と 37 節

(12:36) しかし、あなたがたに言います。裁きの日には、人々が語った空しい言葉一つ一つについて説明しなければならないでしょう。

(12:37) あなたの言葉によってあなたは無罪となり、あなたの言葉によってあなたは有罪となるでしょう。

誕生の瞬間から、人間は数多くの行動を取り、多くの言葉を発します。彼らは、すべての小さな行為と言葉に個人的に責任があると信じています。実際には、彼らは何もしていません。体内のアートマがすべての行動を実行しています。しかし、無知な個人は誤ってすべての行動と言葉を自分自身に帰属させ、その結果、彼らの行為と言葉のカルマの結果が彼らに蓄積します。アートマはすべての蓄積されたカルマをカルマチャクラに保存し、死の日にそれを評価します。この裁きの日に、アートマは個人のすべての行為と言葉を評価し、それぞれに関連する罪とプンヤを量ります。人生で知恵を獲得した人はグナーニ（賢者）と見なされ、逆に、無知で行為を行う人は無知な者と見なされます。さらに、アートマは、その人が知恵（グナーニ）を獲得したか、無知のままであるかを考慮します。判断は、その個人がグナーニか無知な者かのステータスに基づいて行われ、それに応じて次の人生が決定されます。聖霊はカルマに基づいて人を裁くことはしません。体内のすべての機能を担当するアートマが、死の日に個人を裁き、ジーヴァを次の人生へと導きます。この日は「裁きの日」または「最終日」として知られており、また次の人生の最初の日（誕生日）としても機能します。アートマが人生の最後と最初の日の最終的な裁定者であることを認識し、聖霊がこれらのプロセスに参加しないことを理解すべきです。最後の日はカルマを数える日と呼ぶことができます。アートマは体のすべての機能を実行する者です。

これを理解し、もし人が自分は個人的に何もしていないと信じるなら、彼らは罪人とも徳のある人とも見なされません。アートマが人の行為のカルマを決定し、次の誕生へと導くことを認識することが重要です。その人の考えに応じて、彼らはグナーニ、無知な者、正義の人、または罪人として裁かれるでしょう。

37) マタイによる福音書 12 章 40 節

(12:40) ヨナが巨大な魚の腹の中に三日三晩いたように、人の子も地の中心に三日三晩いるでしょう。

この節はイエスの時代に先立つ出来事と予言された出来事との間に類似点を引いています。それは、ヨナが巨大な魚に飲み込まれた後、その腹の中に三日三晩滞在したことを記しています。この節はまた、「イエスは地の中心に三日三晩いるだろう」と予言しています。ヨナが魚の中で三日三晩過ごしたことは正確ですが、人の子イエスが地の中心で同じ期間生きていたと述べることは正確ではありません。歴史的に、イエスは金曜日の夕方に十字架にかけられ、日曜日の夜明け前に死者の中から蘇りました。歴史的記録によると、イエスは金曜日の午後 3 時 30 分から 4 時の間に十字架にかけられ、その遺体は金曜日の夕方に墓に安置されました。その結果、イエスは金曜日の日中は墓の中にはおらず、金曜日の夜と土曜日の全日にわたって墓の中にいました。復活は日曜日の夜明け前に起こったと言われています。したがって、イエスは金曜日の夜と土曜日の全日を墓で過ごし、日曜日の朝前に死者の中から蘇りました。

この節は、イエスが二晩と一日だけ埋葬されていたことを示しているように見えます。その結果、聖書のこの節は不正確に見え、その正確さについて疑問が生じるかもしれません。しかし、神聖な聖書のこの節は間違いなく正確であると考えられています。他の人々がこの特定の節の信憑性を疑問視したとき、私も疑いを感じました。この文章には真実以外の虚偽

の余地はないと言いましたが、他の人々が私に尋ねたことに答えなければなりませんでした。しかし、マタイによる福音書10章20節の「**語るのはあなたがたではなく、あなたがたの父の霊があなたがたを通して語るのです**」という導きを思い出すと、答えを提供することへの恐れは消え去ります。理解すべきことは、霊、つまりアートマが質問をし、応答を提供しているということです。ジーヴァとして、私たちの役割はアートマが伝えていることを聞き、理解することです。

一般に人の子と呼ばれる者は、実際には神の子です。私たちは一般的にイエスを神の子と呼びますが、彼が人間の子ではなく神自身の子であることを認識することが重要です。この主張は、彼が神の化身であるという理解に基づいて確信を持ってなされています。神が宿った体は死を経験しましたが、神自身は不死です。実際、死には4つの種類があります：自然死、不自然死、一時的な死、そして究極の死です。大多数の人々は最初の種類に慣れ親しんでいますが、霊的な知恵を持つ者、つまり「グナーニ（智者）」は4つすべてを知っています。最後の死は、神が人間の形をとるとき、または人が解脱（モークシャ）を達成して神と一体となるときに起こります。イエスが十字架上で死んだという広く信じられている説がありますが、彼がどの種類の死を経験したのかを確実に言える人はいません。

この節では、イエスが地の中心で3日3晩過ごしたと述べられていますが、彼の死については明確に言及されていません。十字架刑の際、彼は十字架上で死んだと考えられていました。しかし、日曜の朝に墓から現れた際、イエスは死を経験していないと主張しました。弟子たちの疑念に対応するため、彼は手首と足の釘跡、そして槍の傷を見せ、死んでいなかったことを明らかにしました。しかしながら、歴史的記録は、金曜の夕方に彼の遺体が十字架から下ろされ、墓に安置されたことを確認しています。金曜に死んだにもかかわらず、日曜に死んでいなかったかのように現れたというこの明らかな矛盾は、地

の中心で3日3晩過ごすという、一見すると真実ではない声明について疑問を投げかけます。12:40によれば、彼は3晩3日ではなく、2晩1日しかそこにいませんでした。この見かけの矛盾の背後にある理由を探ることで、見かけの虚偽の中に隠された深い真実が明らかになります。この明らかな矛盾の中に真実がどのように隠されているのか、さらに検討してみましょう。

イエスが十字架上で死んだのは事実ですが、それが一時的な死であることを誰も知りませんでした。イエスは4種類の死のうちの一時的な死を経験し、日曜の朝早くに一時的な死から復活しました。彼は弟子たちに死んでいなかったことを伝えました。自然死を経験していたなら、彼は復活することはなかったでしょう。しかし、彼は「一時的な死」を得たため、3日目に起き上がりました。したがって、イエスが十字架上で死んだという考えは誤解であり、真実ではありません。同様に、イエスが墓の中に3日間いたという聖書の記述は正確ですが、より深い理解が必要です。

イエスは個我（ジーヴァートマ）として体内に存在し、一方ですべての父である真我（アートマ）も内に住んでいます。個我は各人の体内でカルマの結果を経験し、真我はカルマに従って必要な行動を行います。真我は体全体に浸透していますが、個我は頭部に位置しています。真我は10の部分と器官を通じて体をコントロールします。人の生命力は多くの場合、体の動きと関連付けられ、体が動いているとき、その人は生きていると考えられます。逆に、10の部分と器官が機能を停止し、呼吸が止まると、その人は死んだとみなされます。自然死の場合、真我と個我の両方が体を離れ、真我の不在により体は動かなくなります。

一時的な死の場合、真我も個我も体を離れません。真我は収縮し、外縁部から極小サイズに縮小して、個我と同様に頭部に入ります。この間、体のどの器官も機能せず、呼吸も停

止し、死んだように見えます。体の外部および内部の機能が停止するため、その人は一般的に死んだとみなされます。真我が通常の機能を再開し、再び活動を始めると復活が起こります。これはイエスの場合に例示されています。十字架刑の際、真我は彼の体内で収縮し、金曜の夜と土曜日全体を通じてこの状態を維持しました。日曜の朝早く、真我は通常の機能を再開し、これによってイエスは生きたまま墓から現れました。真我は２晩と１日だけ一時的な死を経験しました。イエスの体内の真我は２晩と１日墓の中にいましたが、イエス（個我）が墓の中に３晩３日いたと言うことも正確です。これは私たちが完全には理解していないプロセスを描写しています。それが何だったのか見てみましょう。

イエスの復活は、彼の体内での真我の行動によるものだと言えます。しかし、真我が十字架上で死ぬ前に、個我はすでに体内に埋められていました。イエスの体内での個我と知性（ブッディ）の結びつきは、木曜日に彼が逮捕されることを知った後に断ち切られました。イエスは未知の状態に入り、自身の逮捕、裁判、鞭打ち、十字架刑について完全に無自覚となり、本質的に彼の体という墓に埋められました。彼は３日間、まるで墓の中にいるかのように意識を失っていました。にもかかわらず、真我は必要なすべての身体機能を実行しましたが、イエスはこれらの行動を認識していませんでした。鞭打ちや十字架刑に伴う痛みや苦しみをイエスに経験させないため、真我は彼を眠りに似た未知の状態に送りました。個我は、真我が日曜の朝に彼を目覚めさせるまで、体内に埋められたままでした。そのため、この節は「イエスは３日３晩墓の中にいた」と述べています。人々はイエスの体が墓に安置されたことを知っていましたが、彼の体内の個我はそれ以前に未知の状態に入っていました。その後、イエスの真我は金曜の夕方に一時的な死を経験しました。しかし、目に見えることしか観察できない人々は、イエスの体内での真我と個我の働きを認識していませ

んでした。イエスが３日３晩墓の中にいたことは真実であり、彼の真我が２晩１日墓の中にいたことも真実です。

38) マタイによる福音書 13 章 13 節、14 節、15 節

(13:13）彼らは見ても見ず、聞いても聞かず、理解もしない。

(13:14）イザヤの預言が彼らの上に成就している：「あなたがたは常に聞くが決して理解せず、常に見るが決して認識しない。」

(13:15）この民の心は鈍くなり、耳で聞くことはほとんどなく、目を閉ざしている。そうでなければ、彼らは目で見、耳で聞き、心で理解し、立ち返って、私は彼らをいやすことができただろう。

　　預言者イザヤは、これについて昔から預言していました。当時も今も、無知な人々がいます。彼らは目で見、耳で聞き、知性で理解した後でさえ、心（マナス、ブッディ）をそらせています。見たこと、聞いたこと、知ったことに関心がないため、イエスを通してカルマを破壊することを避けるように、彼らの知性は鈍くなります。彼らの耳は神の知恵に対して聾となります。彼らはすべての言葉を聞きますが、聞いたことを理解せず、物質的なものに絡め取られています。彼らにはお金しか見えません。彼らにとって、知恵を持つ者は愚か者に見えます。

39) マタイによる福音書 15 章 7 節、8 節、9 節

(15:7）偽善者たち！イザヤはあなたがたについて正しく預言した。

(15:8）この民は唇で私を敬うが、彼らの心は私から遠く離れている。

(15:9）彼らはむなしく私を礼拝する。彼らの教えは単なる人間の規則にすぎない。

私たちはしばしば「神のことは神が知っている。人間は知らない」と言ってきました。神は自身について語ることができ、神が礼拝の方法を明らかにするとき、人間はそれを知ることになります。神は自身がどのように礼拝されるべきかを予め告げていますが、多くの人々は神が言ったこととは異なる様々な方法を説きます。多くのスワーミーやグルたちは、ウパデーシャ（教え）やその他の礼拝方法など、人間が作り出した規則を人々に教えています。神自身が「そのようなウパデーシャや礼拝は無益である」と明らかにし、人間を神に近づけることはできないと述べています。多くのスワーミーやグルは、スピーチで神について語りますが、反神的で神が語っていない礼拝やウパデーシャを説きます。これらのグルやスワーミーは神や知恵について語りますが、神の知恵を理解せずに無益な礼拝を行い、他者も同じようにするよう導きます。例えば、断食は神を礼拝することとは何の関係もありません。彼らは断食で苦しんでいるだけでなく、内なる神も煩わせています。それが彼らが内なる神を傷つけている方法です。同様に、バガヴァッド・ギーターで 5000 年前に「**あなたはヴェーダの学習、寄付、供犠（ヤジュナ）や苦行（タパス）を通して私を知り、到達することはできない**」と言われました。バガヴァッド・ギーターで、神は多くの人々が神を大いに敬うが、非ダルマ的な方

法で無益に礼拝していると述べました。主は今、聖典で同じことを述べています。

言葉は口から出るが、感情は心から生まれる。多くの人々は神について高く語るが、彼らの心は真に神の原理に沿っていない。彼らは賞賛するものの、心には神のダルマを持っていない。マーヤのダルマが彼らの心に宿っている。彼らは神について語るが、マーヤの影響下で行うことは反神崇拝である。多くのグルは自分たちの言葉を神の知恵と名付けるが、彼らが行っている崇拝は、神が言うように、彼らを神と結びつけることはない。ギーターでも、それらの崇拝は間違った道にあると警告されている。しかし、有名なピータディパティたちは無意味なヤジュナ（供犠）、寄付、断食、ヴェーダの詠唱、苦行を行う。聖書とバガヴァッド・ギーターは、これらの実践に従事する者たちは神から遠ざかっていると述べている。したがって、今後は言葉で神を讃えるだけでなく、無意味で反神的な崇拝を捨て、神の言葉に従おう。

40) マタイによる福音書 15 章 11 節

(15:11) 人の口に入るものは人を汚さない。しかし、口から出てくるもの、それが人を汚すのである。

人は口から食べ物を摂取し、食べ物の種類は一つに限らず多様である。人々は菜食主義者か非菜食主義者かに分類される。スワーミーやグルなどの一部の霊的指導者は、神の知恵を理解する道として菜食主義を提唱し、肉を避けることが不可欠だと主張する。ここで主は「**口に入るものは人を汚さないが、口から出てくるものが人を汚す**」と言われた。神の知恵の道を歩む者の食事習慣について、様々な意見が存在する。非菜食を控えることを勧める者もいれば、生の未調理の食物のみを摂取することを提案する者もいる。一日一食の菜食を提案する者もいる。これらの様々な食事制限があるにもかかわらず、個

人の神聖さや不浄さは摂取する食物によって決定されないことが強調されている。食べる物は身体の健康に影響を与えるかもしれないが、霊的な純粋さには影響しない。特定の食物を食べることは、神の知恵を追求する妨げとはならない。人は口で食べ物を摂取し、同じ器官で言葉を発する。注目すべきは、口から食べ物を摂取することには問題がないが、口から発せられる言葉が人を汚す可能性があるということである。人は行動し言葉を発するが、その真の性質は言葉を通して明らかになる。**長老たちは、神の知恵を持つ者は聖なる者とみなされ、知恵を欠く者は不浄とみなされると主張する。**知恵を持つ人は、その話し方によって純粋とみなされる。逆に、知恵を欠く者の言葉からは無知が露呈する。個人の汚れはその話し方を通して明らかになる。そのため、イエスは前述の節を伝えた。聖書とバガヴァッド・ギーターの教えによれば、人は食べる食物によって汚されない。むしろ、その人のカルマが糧を提供する。知恵の道を歩む者は、食事の制限に縛られない。神にとって重要なのは、特定の食物を摂取することではなく、知恵の道に従うことである。したがって、各自の習慣に従って摂取される食物は、神にとって重要ではない。

41) マタイによる福音書 15 章 12 節と 13 節

(15:12) そのとき、弟子たちが彼のもとに来て尋ねた。「パリサイ人がこれを聞いて憤慨したことをご存知ですか？」

(15:13) 彼は答えた。「天の父が植えなかった植物は、すべて根こそぎにされるであろう。」

主が、人は食物によって汚されず、神の道に従いながらどんな食物でも摂取できると宣言したとき、パリサイ人たちは異議を唱えた。彼らは主の言葉に神の知恵が欠けていると争い、完全に拒絶した。イエスを無知を広めているとして非難

し、そのような原理を教える権威の源を問いただした。パリサイ人たちは自分たちを偉大な教師とみなし、神について知恵を伝える正当な権威は自分たちだけにあると主張した。パリサイ人たちの異議を知った弟子たちは、イエスにその状況を伝えた。それに対してイエスは「天の父が植えなかった木は、すべて根こそぎにされるであろう」と宣言した。

パラローカの父であるパラマートマは、その教えを確立する。それらの教えは地上では衰えることはあっても、決して消滅することはない。そのような衰退が起こるとき、パラマートマはバガヴァンとして化身し、これらの教えを強化する。教えが弱まると、非教えが増殖する。教えは神聖で神に属するものであり、非教えはサタンに属する。パラマートマは教えの種を蒔き、サタンは非教えの種を蒔く。パラマートマが教えを伝えるために地上に化身すると、サタンは学者、パリサイ人、教師、スワーミーなどの様々な形を取る。この姿で、サタンは独自の知恵を伝え、その教えが神の教えと同義であると人々を説得する。マーヤ（サタン）の教えは時々パラマートマの教えを弱める。なぜマーヤの教えが神の強力な教えを弱めることができるのか疑問に思う人もいるかもしれない。パラマートマは、パラローカの父として、特定の場所と時間にバガヴァンとして化身し、その教えを広める。これらの教えはその期間中は強まるかもしれないが、数千年後には衰える。これは、神がバガヴァンとして戻ってくるのは必要と判断されたときだけだからである。対照的に、マーヤは絶えずグルやスワーミーを生み出し、その知恵が神の知恵と同義であると彼らを説得する。彼らを通じて、マーヤは継続的にその教えを広め、地上での持続的な影響力を確保する。

人々は、千年に一度現れる正体不明のバガヴァンよりも、マーヤの影響下で一貫して活動するスワーミー、グル、ババたちに惹かれがちである。神は一度に一つの場所に顕現するが、サタンは様々な形で多くの場所に生まれ、スワーミー、グル、ババなどの役割を担い、積極的に神の教えを弱める。農夫

が植えた木の成長に影響を与える雑草が畑に繁茂するのと同様に、サタンの影響力は神が植えた教えの周りで増殖する。これに対抗するため、神は勤勉な農夫のように介入し、雑草を根こと抜き取り、自身が蒔いた木を強化する。しかし、時間とともに、意図的な蒔種なしに多くの雑草が再び現れることがある。農夫に例えられるパラマートマは、最初に自身の教えを植えた。サタンは、神の植物（教え）の周りに雑草（非教え）を育てる。神の植物は自然にマーヤの雑草の影響下で弱まる。これに対処するため、神は介入し、自身の教えを侵食したマーヤの多くの教えを取り除く。これはイエスの言葉の本質に一致する—神は自身の教えを弱めるサタンの教えを解体し、それによって神聖な原理を強化し固める。

42) マタイによる福音書 15 章 14 節

(15:14) 彼らを放っておきなさい。彼らは盲目の案内人である。盲人が盲人を導けば、二人とも穴に落ちるであろう。

マーヤの影響下にある個人、パンディットやパリサイ人を含め、自身もマーヤの一部である者たちは、神の知恵を理解せずにバガヴァン・イエスを批判した。彼らは神の知恵を知らず、神聖な知恵への洞察を欠いている。彼らは知恵の視力なしに盲目のままである。神の知恵を持たない者たちがどうしてそれを宣言し、他者を導くことができようか？彼らは知恵の視力があるふりをし、自分たちが神の知恵だと考えるものを広める。人々は、これらの見える者と思われる者たちを信頼し、彼らが神の知恵について完全な知識を持っていると考えて導きを求める。彼らは知らないが、これらの指導者たち自身が盲目である。盲人が他の盲人たちを導き、視力があると主張して道案内をする状況を想像してみよう。必然的に、盲目の指導者は穴に躓き、他の者たちも同じ苦境に導く。同様に、神の知恵を知らない者たちは、真の知恵を持つ者たちを嘲り、自分たちを偉

大なグルと宣言する。知恵を持つ者たちは、彼らと議論する必要はない。知恵の視力を欠く者たちはモークシャ（解脱）の頂点に到達することはできない。多くの人々が知恵の視力を欠くグルに従うかもしれないが、誰もモークシャを得ることはできず、代わりにグナ（性質）の穴に落ちる。

43) マタイによる福音書 **16** 章 **21** 節**と 22** 節、**17** 章 **22** 節**と 23** 節、**20** 章 **17** 節、**18** 節、**19** 節

(16:21) その時からイエスは、自分がエルサレムに行き、長老たち、祭司長たち、律法の教師たちの手によって多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに説き始めた。（1 回目）

(16:22) ペテロは彼をわきに呼んで、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです！そのようなことが、あなたに起こるはずがありません！」

(17:22) 彼らがガリラヤに集まったとき、イエスは彼らに言った。「人の子は人々の手に引き渡されるであろう。」

(17:23) 彼らは彼を殺すであろう。しかし三日目に、彼はよみがえるであろう。」そして弟子たちは深い悲しみに満たされた。（2 回目）

(20:17) そのとき、イエスはエルサレムに向かっていた。途中で十二使徒を脇に連れて行き、彼らに言った。

(20:18) 「私たちはエルサレムに向かっている。人の子は祭司長たちと律法の教師たちに引き渡されるだろう。彼らは死刑を宣告するだろう。

(20:19) 彼らは異邦人たちに引き渡し、嘲笑され、鞭打たれ、十字架につけられるだろう。しかし三日目によみがえるだろう！」（3 回目）

イエスは、マタイによる福音書の 16 章、17 章、20 章において、自身の未来を予言した。通常、人間は将来の不確実性と未知の性質により、自分の死期を予言することは珍しい。しかし、イエスは自身の死の状況を 1 度だけでなく 3 度も明かし、彼の内にある特別なものを示した。この行為は、気づいていない人々に彼が単なる人間以上の存在であることを証明する役割を果たした。そのような詳細に自分の死について語る能力は稀有なことだが、イエスはそれができたのは、自身の死を予め定めていたからである。アートマは体内におけるカルマの唯一の決定者である。

イエスは 3 度にわたって、自身の切迫した死について明確に語った。彼の運命を予言する能力は、予め定められたカルマに由来していた。イエスによれば、カルマを判断するアートマはパラマートマの子である。イエスは一貫して、彼の父は聖霊であると主張し、自身をカルマを決定する責任を持つアートマとして認識していた。自身の人生のカルマを決定したイエスは、長老たちと祭司長たちに引き渡され、彼らによって殺され、三日目によみがえることを予言した。驚くべきことに、これらの出来事は彼が予言した通りに起こった。イエスは恐れることなく自身の死について語った。これは、イエスが普通の人間ではなく、彼には何か特別なものがあったことを示す証であり、それは分別のある人なら誰でも認識できることである。

44) マタイによる福音書 19 章 23 節と 24 節

(19:23) そこでイエスは弟子たちに言った。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちがパラローカの王国に入るのは難しいのです。

(19:24) 重ねて言いますが、金持ちが神の王国に入るよりも、らくだが針の穴を通り抜ける方が易しいのです。」

イエスは例え話を語り、「らくだが針の穴を通り抜けるよりも、金持ちが神の王国に入る方が難しい」と述べた。らくだが針の穴を通ることが不可能なように、同様に、裕福な人が神の王国に入ることは困難である。一部の長老たちは、富は多くの場合傲慢さを生むと考えており、これは六つの否定的な性質（グナ）の一つとされている。傲慢さは、欲望（カーマ）、怒り（クローダ）、強欲（ローバ）、情熱（モーハ）、嫉妬（マツァラ）に次ぐ 5 番目の性質である。傲慢さはすべての個人に様々な程度で存在する。90%、80%、70%、60%、50%、40%、あるいは 30%であれ、誰もが何らかのレベルの傲慢さを持っている。ある人は 90%の傲慢さを示し、別の人は 80%、そして 30%程度の傲慢さを示す人もいる。

傲慢さは体内のジーヴァートマの思考を形作るだけでなく、他の 5 つの関連するグナも重要な役割を果たす。傲慢さのレベルは変化することがあり、一般的に貧しい人々は裕福な人々よりも傲慢さが少ないことが観察されている。人が裕福であるほど、傲慢さのレベルは高くなる傾向がある。何百万ドルもの財産を持つ人は、さらに高度の傲慢さを示し、他のグナの影響をより強く受ける可能性がある。富は人に重大な変化をもたらす力を持っており、しばしば知恵から遠ざける。**モークシャム**が針の穴に例えられる文脈において、この類推は富める者がらくだに比較される。らくだが針の穴を通り抜けることがで

きないように、らくだのような強力なグナの影響下にある裕福な人は、解脱を達成する上で課題に直面する。この類推は、らくだが針の穴を通り抜けることができないように、強力なグナの影響下にある裕福な人は、パラローカ（モークシャム）に入る際に障害に遭遇することを強調している。

45) マタイによる福音書 22 章 36 節、37 節、38 節、39 節、40 節

(22:36)「先生、律法（ダルマ・シャーストラ）の中で最も重要な戒めは何ですか？」

(22:37) イエスは答えた。「心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」

(22:38) これが第一の、そして最も重要な戒めです。

(22:39) 第二の戒めも、それと同様です。『あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。』

(22:40) すべての律法と預言者たちの教えは、この二つの戒めにかかっています。」

ある人々がイエスのもとを訪れ、もし彼が躓けば嘲笑うことができるよう試すつもりで、律法（ダルマ・シャーストラ）の中で最も重要な戒めは何かと尋ねた。イエスは即座に答えた。「心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」彼はこの指示が第一の、そして最も重要な戒めであり、それに次ぐ第二の戒めがあると強調した。この節で「戒め」という言葉が使用されていることは、そ

の重要性を強調しており、イエスはこれら二つの戒めがすべての律法と預言者たちの教えの基礎となっていると主張した。この節は以下のように説明される。

戒めとは本質的に、行動を指示するために与えられる命令である。より広い文脈では、誰が命令を下す権威を持っているのかという疑問が生じる。答えは、通常、長老が若い者に命令を与えるという理解にある。この考えを発展させると、世界の創造者である神が最高の権威を持ち、神が命令的に伝えることが戒めまたは律法とみなされる。この律法は変更不可能な行為から成り、一般的にダルマと呼ばれる。「ダルマ」という用語が使用されるのは、この律法が本質的に変更不可能だからである。例えば、唐辛子の辛さは、唐辛子の変更不可能な特徴、つまりダルマである。この辛さはすべての唐辛子に一貫して存在する。したがって、唐辛子のダルマはその辛さであると言える。同様に、酸っぱさはタマリンドのダルマであり、苦さはニームのダルマである。

ダルマは規則と規制の集合体を包含する。もし誰がダルマを持っているかと尋ねるなら、創造されたものすべてが、創造されたタマリンド、唐辛子、ニームがダルマを持っているように、ダルマを持っている。神は創造の創造者であるため、いかなるダルマも持っていない。創造者である神はダルマの制約を超越している。アートマとジーヴァートマは、神を除いて、ダルマの対象となる。さらに、創造されたプラクリティも独自のダルマを持っている。ブラフマ・ヴィディヤまたは霊的教育を理解するためには、アートマとジーヴァートマのダルマを理解することが重要となる。ブラフマ・ヴィディヤを理解することを意図されているジーヴァートマは、**アートマのダルマだけを知る必要がある。**

この節では、アートマを理解する方法が重要なものとして強調されている。ダルマ・シャーストラはアートマの性質を深く掘り下げており、最も重要なダルマは**「あなたの神であ**

る主を愛することが第一の、そして最も重要な戒めである」と述べられている。ここで言及される主は、主に生まれた者のことである。イエスは、生まれた神を愛することが最も重要な戒めであると強調した。しかし、疑問が生じる：神が創造者であり、創造されておらず、ダルマを持たないとき、どのように生まれた者（主）もまた神とみなされるのか？このジレンマは、自存する者が神なのか、それとも生まれた者が神なのかという点に集中している。この疑問への答えは以下のように説明される。

神、すなわち生まれざる創造者は、誕生を経験していない。最初に、神はプラクリティを創造した。プラクリティの創造の後、神（パラマートマ）は生きる存在を生み出すことを意図した。プラクリティが形成された後、神は直接的な行動に関与しないことを選んだ。空、風、火、水、地という五元素を創造した後、神は不活動の状態を望んだ。神が形態で現れることを望んだとき、アートマ（主）が生きる存在を創造し、統治し、最終的に終わらせるために存在するようになった。アートマはすべての生きものの生死の循環のための規則を定め、監督する。アートマはすべての生きる存在の創造者であるため、アートマを神と呼ぶことは適切である。**結果として、プラクリティの創造者である神は第一の存在として認識され、一方プラクリティ内の生きる有機体の創造者である神は第二の存在として認識される。**

パラマートマとして認識される最初の神はアートマを創造し、アートマにとっての神であり、アートマとは区別される。アートマとして知られる第二の神は、生きる存在の創造者である。パラマートマとアートマの両方が創造者として、そして神として機能するが、**最初の神（パラマートマ）はダルマを超越しており、一方第二の神（アートマ）はダルマに従う。ダルマを持たない神は第一の創造者であり、一方ダルマを持つ神は第二の創造者である。**世界に二人の神が存在することを知る者はいない。二人の神が存在するにもかかわらず、最初の神が

最も偉大であるが、アートマは人間の創造者として人間にとって特別な重要性を持つ。人間はアートマのみを崇拝することが本質的である。個人はアートマに関連するダルマを理解することが奨励される。重要なことに、聖典で明らかにされているすべてのダルマはアートマを中心としている。

もし人が崇拝し祈りを捧げることを望むなら、それは第二の神、アートマに向けられる。誰も最初の神を崇拝することはできない。この神に祈りを捧げたり崇拝したりすることは不可能である。最初の神への崇拝と祈りは不要とされる。なぜなら、**この神は生まれることも生むこともない**からであり、これは最終的な聖典で強調されている。スーラ 112 はさらに、**最初の神が祈りに無関心であること**を強調している。注目すべきことに、キリスト教徒もムスリムも二人の神（二人のアッラー）の存在を認識していない可能性がある。なぜなら、彼らは崇拝する唯一の神という信念を守っているからである。しかし、**崇拝される神と最初の創造者である神**との区別はしばしば見過ごされている。ヒンドゥー教徒は神を知らないが、多くの神々を崇拝し、完全に間違った道（無知の道）を歩んでいる。

最初の神は法（ダルマ）の領域を超越しており、それゆえに知ることも崇拝することもできません。アートマ（魂）という、法によって統治される神を崇拝するためには、人体の特定の要素が不可欠となります。ダルマ・シャーストラによれば、ジーヴァ（個人の魂）がアートマという神を、マナス（心）とブッディ（知性）の両方を用いて崇拝することが重要です。これが重要なダルマとなります。経典では「**あなたの心と魂と知性のすべてを尽くして、アートマという神を愛しなさい**」と強調されており、ここでの愛は崇拝として解釈されます。これが最も重要な戒めあるいはダルマです。**この戒めをダルマとして解釈すると、「あなたの心のすべて」はあなたのすべてのブッディを、「あなたの魂のすべて」はあなた自身、つまりジーヴァを指します。ここでの愛は崇拝を意味します。ダ**

ルマ・シャーストラでは、あなたはアートマという神を、あなたの心とブッディで崇拝すべきだと述べられています。

第二の戒めについて、その内容を掘り下げてみましょう。第二の戒めは「あなた自身を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」と教えています。これら二つの戒めは、経典で述べられているように、ダルマ・シャーストラと預言者たちの教えの礎となっています。本質的に、これらはブラフマ・ヴィドヤ（神の知識）の領域内のダルマと、預言者たちがこれらのダルマを伝えるための指針の基礎となっています。経典は、自己愛と個人の幸福の優先が普遍的な傾向であることを暗示しています。脅威に直面したとき、人々は自分の命を守るという本能的な衝動を示し、しばしば持ち物を犠牲にしてまでも、並外れた努力をします。人々が自分の命に対して抱く深い希望は、様々な神々への祈りや、自分の幸福を確保するためにあらゆる手段を講じようとする意志に表れています。この観察は、人々が自己愛を優先する生来の傾向を浮き彫りにしています。経典は「あなた自身を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」と指示し、自分自身の幸福を求め、自分の命を大切にするのと同じ程度の配慮を隣人にも向けることの重要性を強調しています。

「隣人」という言葉は一般的に隣に住む人を指しますが、「あなた自身を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」という経典は、隣に住む人ではなく、私たちに最も近い存在への愛を広げるよう促しています。より深く考察すると、経典は私たちの真の隣人が誰であるかについて考えるよう促します。経典によれば、あなたのアートマ以外に、あなたの体の中には他の存在はいません。もしあなたが魂（ジーヴァートマ）として自己を認識するなら、あなたに似た別の魂がいます—それは第二の神、アートマです。全部で三つの魂があり、あなた以外に二つの魂がいることを示しており、そのうちの一つがパラマートマです。しかし、パラマートマはあらゆる場所に遍在し、すべてを包含しているため、あなたの隣人として呼ぶこと

は現実的ではありません。パラマートマを除くと、残りのアートマがあなたの隣人です。この概念は、アートマとパラマートマを除くすべての創造物が女性的なプラクリティとされ、アートマとパラマートマが男性的な側面を表すという理解と一致します。

アートマは、あなたに似た唯一の男性的存在として、適切にあなたの隣人とみなされます。第一の神であるパラマートマは、崇拝、関係性、ダルマの領域を超越しており、アートマが正当な崇拝の対象となります。聖典は一貫してアートマを崇拝する価値を主張し、アートマを「**あなたのアッラー**」と呼んでいます。これはクルアーン第6章102節、第3章18節、第16章51節で繰り返し述べられています。「あなた自身を愛するように、あなたの隣人アートマを愛しなさい」という二つの戒めの重要性は、ダルマ・シャーストラで強調されています。**アートマを崇拝することは、グル（師）、説教者、預言者の主要な義務として浮かび上がります**。これは、ファリサイ派の人が法の中で最も基本的なダルマについて質問したときのイエスの応答に表れています。この経典について考察すると、あなたが崇拝を向けている存在についてより深く考えることを促されます。

46) マタイによる福音書 23 章 8 節、9 節、10 節

(23:8) 「しかし、あなたがたは『ラビ』と呼ばれてはいけません。あなたがたには一人の教師がおり、あなたがたはみな兄弟だからです。

(23:9) また、地上のだれをも『父』と呼んではいけません。あなたがたの父は一人、パラローカにいるからです。

(23:10) また、『教師』と呼ばれてもいけません。あなたがたの教師は一人、メシアだけだからです。

説教者を父として呼んだり、説教をするグルを父と同等とみなしたりする人もいるかもしれません。しかし、経典は誰も説教者と呼ばれるべきではないと述べています。経典では、一人の主人がいるだけで、他の全ての人は兄弟であるため、誰もラビと呼んではいけないと言っています。説教者は教える人ですが、経典は特に神聖な知恵を教える人を指しています。経典によれば、神聖な知恵を知っているのは一人だけで、他の誰も知りません。なぜ他の人々は知らないのでしょうか？知っている一人とは誰でしょうか？それらの質問への答えは以下の通りです。

神の知恵は神以外の誰にも知られていません。これは聖典に述べられている通りです。また、聖典には、神が自身の知恵を人間に伝えなかったとも記されています。これは、誰も神の知恵を知らないということを意味します。したがって、誰も神の知恵を教えることはできません。それゆえ、経典が述べているように、あなたはラビと呼ばれるべきではありません。神の知恵を教えることができるのは神だけです。そのため、経典では、あなたの主人は一人だけであり、それは神であると述

べられています。人間は主人（教師）ではなく、すべての人間は兄弟であると経典で述べられています。

誰にも生物学的な両親がいます。誰もが幼いころから目に見える両親が本当の両親だと信じています。多くの長老たちは、両親を敬うべきだと助言します。誰もが自分の生物学的な両親を敬います。目に見える両親以外に父母はいないと言われるかもしれません。これらはすべて世俗に関することです。しかし、神聖な知恵によれば、すべての人間には目に見えない、知られざる両親がいます。目に見える両親が本当の両親なのか、それとも目に見えない両親が本当の両親なのかと問われれば、目に見えない両親が本当の両親であることは明らかです。私たちがこのように言う理由は、父とはすべての人間の種子の提供者だからです。したがって、目に見えない父である神（アートマ）は、すべての生命体の種子の提供者です。それゆえ、目に見えない父が本当の父となります。私たちが知っているかどうかに関わらず、私たちの誕生の父はアートマです。そのため、経典で述べられているように、地上の誰をも父と呼んではいけません。あなたがたの父は一人、パラローカにいる方だけだからです。

経典は、目に見える説教者は真の説教者ではなく、生物学的な父は実際の父ではなく、目に見えるグルは正しいグルではないと述べています。多くの人が何かを教え、グルと呼ばれています。もしあなたがグルと呼ばれるなら、あなたはあなたに相応しくない役割を演じていることになります。神だけが、いつでも地上にグルとして来ることができます。神が人間として化身するとき、神はグルとなり、知恵を教えます。したがって、地上での人間としての神の化身が真のグルであることを理解すべきです。

47) マタイによる福音書 23 章 15 節

(23:15) 「律法の教師たちとファリサイ派の人々、偽善者たちよ。あなたがたは不幸です！あなたがたは一人の改宗者を得るために海と陸を巡り歩き、改宗者ができると、その人をあなたがた以上に二倍も地獄の子としてしまいます。

宗教はカリ・ユガから三千年が経過するまで存在しませんでした。二千年前にキリスト教が誕生したとき、キリスト教徒は最初は集団として現れ、後にキリスト教共同体を形成しました。しばらくして、キリスト教共同体は自らをキリスト教という宗教だと主張しました。こうして最初の宗教が生まれました。キリスト教という宗教を名乗った後、彼らは自分たちの信仰を広めようとしました。その後、他の人々も自分たちの教えに基づいて自らを宗教として特定しました。このように、宗教は次々と作られました。すぐに、地上には十二の宗教が形成されました。宗教の創造後、一部の人々は自分たちの信仰を広めることに関わるようになりました。彼らは他者を自分たちの宗教に改宗させるために、海と陸を旅しました。宗教は神の知恵ではなく、人々の意志によって作られました。人々が作り出したこれらの宗教には、神聖な知恵が存在するように見えますが、その中の知恵は神が啓示した知恵とは相反するものです。したがって、宗教に関係なく、神聖な知恵と聖典に頼る人は、神の教えと知恵を理解するでしょう。もし人が宗教に縛られ、特定の宗教集団に属すると主張するなら、その人はマーヤ（幻想）の知恵を理解するでしょう。もし人が宗教を受け入れれば、その人は罪に絡め取られることになります。一方、宗教的な所属のない人は、パラローカの王国に入る資格を得るでしょう。

48) マタイによる福音書 24 章 35 節

(24:35) 空は滅びるでしょうが、わたしのことばは決して滅びることはありません。

パラマートマ（神）は話しません。体内に宿るアートマは話すことができます。アートマは第二の創造者であり、第二の神です。体内に存在するアートマは、言葉を通じて意思疎通を図ります。第二の神（アートマ）は人類に多くの知恵を伝えます。このように教えられた知恵は、言葉を通じて伝えられます。経典で述べられているように、天地が滅びても、体からのアートマの教え、つまり言葉の形での教えは決して滅びることはありません。ここで重要なのは、言及されている**天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない**ということです。しかし、天地は決して滅びないとも言えます。しかし、経典は天地が滅びると伝えているように見えます。したがって、経典で言及されている天地は、私たちが見る天地ではないことを理解すべきです。経典で描写されている天地は滅びるものです。決して滅びない天地は一つの種類であり、滅びる天地は別の種類です。人体の形をしたプラクリティの中には、天（空）、風、火、水、地があります。体の形をした最初の天、最後の地、そして残りの風、火、水のすべては滅びるものです。**人体は滅びますが、人から伝えられた知恵は決して滅びることはありません。**

49) マタイによる福音書 24 章 42 節

(24:42) したがって、目を覚ましていなさい。あなたがたは、自分の主が何日に来られるか、知らないからである。

地上で神の法（ダルマ）が脅かされ、サタンの法が広く広まるとき、神は自身の一部を地上に送り、神の戒め（ダルマ）を守るためにやってくる。必要なとき、神は人間として来なければならない。ドヴァーパラ・ユガのクリシュナとカリ・

ユガの主イエスは、そのようにして来られた。興味深いことに、彼らが来て去った後に私たちは彼らを識別できたが、彼らが地上にいたとき、私たちは彼らが誰であるか識別できなかった。神自身が主として来られたとき、誰も認識しなかった。彼の栄光を見た人々でさえ、彼が神であることを知ることができず、ただ偉大な存在だと考えただけだった。ドヴァーパラ・ユガで、クリシュナは「**法が汚されたとき、私は来るだろう**」と言った。彼は主イエスとして再び来て、彼の法を繰り返した。彼が与えた戒めには、ドヴァーパラ・ユガであれカリ・ユガであれ、違いはない。しかし、彼らの名前、人生、生活様式には類似点がない。そのため、サタンは彼らの外見的な違いを強調し、両者が同一であることを人々が認識できないように騙した。誰が来たのか、誰が来るのか、いつ来たのか、いつ来られるのかを知るには、人間には知恵が必要である。人が無知である限り、神の来臨を知ることができず、神が来て去った後でさえも気付かないままである。したがって、人々が神の到来を知り、神を認識したいのなら、神に関する知恵を持たなければならない。今日、神の知恵は知られておらず、サタンの知恵が広まっている。そのため、「**あなたの主がいつ来られるかを知らない**」と聖句は述べている。「**彼を知るために目を覚ましていなさい**」とも聖句に書かれている。ここでの「**目を覚ましている**」とは、**知恵を持つこと**を意味する。

50) マタイによる福音書 26 章 26 節、27 節、28 節

(26:26) 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」

(26:27) また、杯を取り、感謝の祈りをささげて彼らに与えて言われた。「みな、この杯から飲みなさい。

(26:28) これは、わたしの契約の血（無知の束縛のない神の知恵）である。罪の赦しのために多くの人のために注がれる。」

イエスと 12 人の弟子たちが食事をしているとき、イエスはパンを取り、それを祝福し、裂いて弟子たちに与えて言われた。「**取って食べなさい。これはわたしの体である。**」また、杯にぶどう酒を入れて言われた。「**みな、この杯から飲みなさい。これはわたしの血である。**」彼はぶどう酒を自分の血に例え、さらに説明して「**これは多くの人の罪の赦しのために注がれる契約の血である**」と述べた。

これらのイエスの一見何気ない言葉は、彼の教えの中で最も重要なものの一つとして考えられるべきである。残念ながら、一部のキリスト教徒は、食事の時に語られたこれらの言葉の本質を理解せず、その意義を把握できていない。**ある人々は、これが現在についての言葉であったにもかかわらず、イエスが過去または未来について語ったと解釈している。**

イエスは杯にぶどう酒を入れて「**これはわたしの血である**」と言ったが、十字架で流された自分の体の血であるとは特定しなかった。それにもかかわらず、多くのキリスト教の説教者たちは、この聖句で言及された血をイエスが十字架で流し

た体の血に結びつけ、イエスが罪人のために血を流したために人の罪が赦されると主張している。しかし、人が言うことと、イエスが言ったことの間には食い違いがある。イエスはこの聖句で自分の体の血については言及していない。このような場合、イエスが罪人のために血を流したと言うのは不公平であろう。その日、イエスを十字架につけ、彼の血を流させ、死に至らしめた者たちは、恐ろしい許されざる罪を犯した。しかし、イエスの死によって人々の罪が赦され、これからも赦されると主張するのは正しくない。

イエスが弟子たちにぶどう酒を与えて「**これは多くの人の罪の赦しのために注がれる契約の血である**」と言ったとき、彼は現在形を使用し、それがその瞬間に起こっていることを示し、未来の出来事については言及しなかった。彼は十字架での将来の血の流出については言及しなかった。したがって、十字架で流された血が罪の赦しのためであったと主張するのは正しくない。**イエスに十字架で血を流させた責任者たちは、罪の赦しではなく、罪を受けた。**イエスが言及したのは契約の血であり、これは無知に束縛されない神の知恵を意味している。彼は毎日この神聖な知恵を教え、それを契約の血が口から注がれることに例えた。彼は毎日、知恵の火を与えて人間の罪を焼き尽くし、彼の教えを口から流れる契約の血に例えた。この聖句の真の意味は、慎重な分析を通じてのみ理解できる。

この言葉の意味が正しく理解されていない理由は、「契約の血」という表現から「契約」という言葉が省かれ、「血」という言葉だけが考慮されているからである。「契約」が「法を伴う知恵」を意味することが理解されていない。聖句で「血」が言及されるもう一つの理由は、それが肉体的な血ではないからである。肉体は血に満ちており、体に血がある限り、体は生きている。体が血を流せば、体は死ぬ。これによると、体の本質は血であることがわかる。食事中、イエスははじめにパンを取り、弟子たちに与えて「**取って食べなさい。これはわたしの体である**」と言った。ここで彼はパンを自分の体に

例えた。その後、杯にぶどう酒を入れて彼らに与えて「**これはわたしの契約の血である**」と言った。パンについて、彼は「これはわたしの体である。これを食べなさい」と言った。イエスはパンを自分の体に例え、それを食べるように指示した。パンを食べるなら、イエスの体を食べていることになる。体の基礎と本質は血である。

神の知恵を契約の血に例えるとき、パンの体は聖書と神の知恵に例えることができる。このように、**体には血が含まれ、聖書には知恵が含まれている。体を食べることは聖書を読むことを意味し、それを読むことでその知恵の本質が明らかになる。血を飲むことは知恵を理解することを意味する。**残念ながら、人々はしばしば、パンが神聖な聖書を、ぶどう酒がその知恵を表していることを理解せず、イエスが与えたパンとぶどう酒にのみ注目している。**イエスは聖書を自分の体（パン）に、その中の知恵を血（ぶどう酒）に例えた。契約の血を注ぐことは、その時に教えられている法を伴う知恵を指している。**

多くの人々は、イエスが聖書を自分の体に、その知恵を血に例えたことを認識できず、十字架で流された血が罪の赦しのためであったという誤った信念を持つに至っている。

51) マタイによる福音書 28 章 18 節

(28:18) そこでイエスは彼らのところに来て言われた。「わたしには、パラローカ（天界）と地上のすべての権威が与えられている。」

テルグ語で「ローカ」は経験を持つことを意味する。ローカでは、私たちは苦難と喜びの両方に遭遇する。喜びの経験はスヴァルガ・ローカ（天国）と呼ばれ、苦難の経験はナラカ・ローカ（地獄）と呼ばれる。ローカは別の国や特別な場所ではなく、むしろすべての経験の総和である。喜びと悲しみの経験に応じて、ローカは天国と地獄に分けられる。天国と地獄

のすべての経験は地上で起こり、別々の物理的な場所ではない。したがって、経験に応じて私たちはそれらを天国や地獄と呼ぶかもしれないが、実際には天国も地獄も地上に存在する。

地上には２種類のローカ（世界）があります - イハローカとパラローカです。**イハローカには経験が含まれますが、パゥラローカには経験がありません。**イハローカとパゥラローカの両方が地上に存在します。「パゥラ」は異なるまたは別個を意味します。パゥラローカは経験とは異なるものを意味します。つまり、パゥラローカには経験がなく、ローカとは区別されます。テルグ語では、「マニシ」は心（マナス）を通じて経験を得る者を意味します。したがって、地上のすべての人々はイハローカに属します。パゥラローカを見た人はいません。肉体を持つ人間は経験なしには存在しません。したがって、すべての人がローカに属し、イハローカに住んでいると言えます。経験のない者はパゥラローカにいると言えるでしょう。**「パゥラローカと地上のすべての権威は私に与えられた」と**上記の節は述べています。

もしイエスが普通の人間であれば、彼はイハローカにいてパラローカを知らないはずです。普通の人間のように見えたにもかかわらず、彼の体にはアートマ（魂）があり、ジーヴァートマ（個我）はありませんでした。アートマはイエスの体に住み、ジーヴァートマのふりをしました。すべての人間にはアートマとジーヴァートマの両方が存在し、アートマはすべての身体機能を実行し、ジーヴァートマは仕事での喜びと悲しみを経験します。このように、人の体内のジーヴァートマは時には天国に、時には地獄にいると言えます。しかし、神が人間として来られるとき、その体にはジーヴァートマはありません。神の子の体内でアートマが働いていても、何も経験しません。そのため、彼はパラローカにいると言われます。イエスは普通の人間ではなかったため、地上（イハローカ）とパラローカでの権威を持っています。聖霊であるパラマートマは、アートマ（イエス）に完全な権威を与えました。アートマであるイエス

は、また神聖な知恵の長でもあります。神の知恵は神以外の誰にも知られていません。そのため、魂の主題は人々には知られていません。イエスは三つの魂の知恵を教え、魂の知恵を知っていた弟子たちに、アートマの知恵をすべての人々に教えるよう指示しました。

52) マタイによる福音書 28 章 19 節と 20 節

(28:19) それゆえ、あなたがたは行って、すべての民を弟子とし、父と子と聖霊の名によって彼らに洗礼を授けなさい。

(28:20) わたしがあなたがたに命じたすべてのことを守るように教えなさい。見よ、わたしは世の終わり（ユガ）まで、いつもあなたがたと共にいます。

マタイによる福音書は 28 章あります。28 章の最後の 19 節と 20 節には、すべての霊的教育の秘密が含まれています。19 節に記された三つの魂に関する情報は、聖書の中で最も重要な知恵です。この節では、「父」という言葉が「子」という言葉の前に使われており、これを理解するには注意深い考察が必要です。これについて考える人は、順序が子、父、聖霊であることを知るでしょう。さらに説明すると、子**はジーヴァートマ、**父**はアートマ、**聖霊**はパラマートマであることを**理解**しなければなりません。**世界にはこれら三つの魂以外にはありません。トライタによると、これら三つの魂はジーヴァートマ、アートマ、パラマートマです。

洗礼とはウパデーサ（教え）を意味します。テルグ語で「ウパ」（サブ）は隣接を意味します。ウパデーサは隣接する国または近隣の国を意味します。より詳しく言えば、「あなたが今いるこの国を離れ、隣接するまたは近隣の国に行く許可を得ること」を意味します。隣国に行くには、まず役人から許

可を得なければなりません。その役人をグルと呼ぶことができます。グルとは隣国またはパラローカの長である者を意味します。地上にどれだけ多くのグルがいても、パラローカの長である神が真のグルです。パラローカの支配者である神は、人間として地上に来られたとき、私たちに真の洗礼を与える真のグルです。地上には多くのグルがいますが、彼らはすべて名ばかりのグルです。彼らが与える洗礼も名ばかりです。

真のグルである神が人間として地上にいないとき、知恵の伝統に従って、説教者は弟子を作り、彼らにウパデーサを与えなければなりません。ウパデーサは隣国への許可のようなものです。ウパデーサの過程で、グルは水、マントラ、言葉、またはヴィブーティ（聖灰）で弟子に指示します。ウパデーサはパラローカへの許可であり、言葉や水はパラローカへの入場を認める切符のようなものです。ほとんどのグルはウパデーサの過程でマントラや言葉を使用します。同様に、イエスは弟子たちに「行って、すべての国の人々を弟子としなさい」と言いました。また、彼らが弟子になったときに洗礼を授けるように弟子たちに言いました。ウパデーサの過程で弟子たちに許可の切符を与えるとき、彼は「父と子と聖霊という三つの魂の名によって彼らに洗礼を授けなさい」と言いました。知恵の伝統によれば、洗礼はこのように行われるべきです。そのため、グルであるヨハネが洗礼を授けたとき、彼は水で洗礼を授けました。その方法に従って、イエスもヨハネからウパデーサを受けました。そのとき、ヨハネはイエスを見て話しました。

これはマタイによる福音書 3 章 14 節と 15 節に書かれています。**イエスが彼のところに来られたとき、ヨハネは彼を止めようとして言いました。「私こそあなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが私のところに来られるのですか？」イエスは答えて言われました。「今はそうさせてください。すべての義（知恵）を成就するために、このようにすることが私たちにふさわしいのです。」**イエスでさえ、知恵の伝統に従ってグ

ルから洗礼を受けなければならないと言いました。私も洗礼についても同じことを言いました。

イエスは弟子たちに洗礼を授ける権限を与え、「一つの階級や集団だけでなく、すべての人々が洗礼を受ける必要がある」と言いました。また、父と子と聖霊の入場文書を与えるように言いました。イエスは、神が常に人間としてウパデーサを与えるために地上にいることができないため、弟子たちにこの仕事をするように言いました。洗礼に加えて、イエスは弟子たちに、彼が弟子たちに語ったすべてのことを守るように教えることも言いました。

イエスはまた、弟子たちが自分たちはグルではないという疑いを抱かないように、「私は常にあなたがたと共にいる」と言いました。特に、**「私はユガの終わりまで、常にあなたがたと共にいる」**と言いました。ユガについて知っている人々は、イエスの言葉を聞いたとき、疑問を投げかけるかもしれません。ユガ（時代）は終わることなく、現在のユガが終わると別のユガが始まります。その場合、ユガには終わりがないのに、なぜイエスはユガには終わりがあると言ったのでしょうか？答えは次の通りです。時間は神（パラマートマ）のように永遠で、永遠に続きます。時間は神のニックネームであるため、同様に永遠です。時間はパラマートマであるため、三つの魂は時間にちなんで名付けられています。パラマートマは三つの魂 - ジーヴァートマ、アートマ、パラマートマに分かれています。過去、未来、現在という名前が時間に与えられ、時間にはこれら三つの名前が現れます。神に到達するために必要な「ヨーガムズ」という名前が時間に与えられています。このように、時間には四つの名前が与えられ、神に到達するためにヨーガムズが必要であることを示すために、すべての四つの名前の最後に「ヨーガムズ」という言葉が付けられています。

時間は四つの部分に分かれ、それぞれクルータ、トライタ、ドヴァーパラ、カリと名付けられています。各名前の最

後に「ヨーガム」という言葉が加えられ、クルータ・ユガ、トライタ・ユガ、ドヴァーパラ・ユガ、カリ・ユガという名前が作られました。クルータとは行う者（アートマ）を意味します。トライタとは三を意味します。ドヴァーパラとは二つから離れた者（パラマートマ）を意味します。カリとは破壊される者（ジーヴァートマ）を意味します。最初の神聖な聖典では、これら三つの魂はクシャラ、アクシャラ、プルショッタマと呼ばれています。テルグ語で、クシャラは破壊可能なジーヴァートマ、アクシャラは不滅のアートマ、プルショッタマはジーヴァートマとアートマの両方に優る者であるパラマートマを意味します。最後の神聖な聖典の 50 章 21 節では、これら三つは旅客、運転手、証人と呼ばれ、第二の神聖な聖典では、子、父、聖霊と呼ばれています。これら三つの男性（プルシャ）を理解するにはヨーガムが必要であり、そのため四つのユガ名の最後に「ヨーガム」という言葉が加えられています。ヨーガムを通じて、ジーヴァートマは自己を知ることができます。そのため、カリ・ヨーガムと呼ばれます。ヨーガムによってアートマが知られるため、クルータ・ヨーガムと呼ばれます。ヨーガムによって、パラマートマに到達できるため、トライタ・ヨーガムとドヴァーパラ・ヨーガムと呼ばれます。神聖な知恵に富んだ人々がこれらの名前を付けました。時間とともに、トライタはトレータとなり、ヨーガムという言葉はユガとなりました。これが、節で「ヨーガムの終わり」の代わりに「ユガの終わり」が使われている理由です。正しい言葉が使われると、イエスの言葉「私はヨーガムの終わりまで、常にあなたがたと共にいる」は「私はヨーガムの完了まで、常にあなたがたと共にいる」と解釈することができます。ジーヴァートマがヨーガムの終わりに達すると、神と一つになります。神とジーヴァが分離しているとき、神との結合にはヨーガムが必要で、神はジーヴァートマと共にいます。ヨーガムが完了すると、ジーヴァートマは神と融合し、もはや神がジーヴァートマと共にいる必要はなくなります。これが「ユガの終わりまで」という言葉の背後にある意味です。

マルコによる福音書

1) マルコによる福音書 2 章 19 節と 20 節

(2:19) 花婿が共にいる間、婚礼の客は断食できるでしょうか？花婿が共にいる間は、できません。

(2:20) しかし、花婿が取り去られる時が来ます。その日には、彼らは断食するでしょう。

イエスのもとに何人かが来て尋ねました。「なぜヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食をしているのに、あなたの弟子たちはしていないのですか？」イエスは以下の節で答えました。この文脈での断食とは、一般的な世俗的意味での食事を控えることを指します。テルグ語で花婿を意味する「Pellikoduku」は「結婚の息子」と訳されます。テルグ語では「結婚の息子」という言葉は特別な意味を持ちます。なぜなら「結婚」（テルグ語では「Pelli」）は霊的な意味で神を象徴するからです。したがって、「結婚の息子」は神の子を指します。神の子であるイエスが信者たちと共にいる時、彼らは喜びを経験し、断食はしません。しかし、花婿（神の子）が彼らから取り去られる時、彼と共にいた者たちは彼が去ることを悲しんで断食するでしょう。同様に、イエスの弟子たちは彼が共にいる限り断食しません。イエスが不在の時、彼らは悲しみのうちに断食するでしょう。「花婿」（結婚の息子）という言葉は、神の子を指すものとして理解されるべきです。

2) マルコによる福音書 4 章 38 節と 39 節

(4:38) イエスは船尾で枕を当てて眠っていました。弟子たちは彼を起こして言いました。「先生、私たちが溺れても気にならないのですか？」

(4:39) イエスは起き上がり、風をしかりつけ、海に「静まれ！黙れ！」と言いました。すると風はやみ、全く凪になりました。

イエスと弟子たちが小舟で海を渡っているとき、嵐に遭遇し、波のために船は水を被り始めました。弟子たちは恐れおののき、溺れることを恐れました。彼らはイエスを起こし、危険な状況を知らせました。イエスは起き上がり、風をしかりつけ、波に静まるように命じました。風はやみ、海は凪になりました。弟子たちは驚き、互いに「これは大きな不思議だ、どうしてこんなことが起こったのか？」と尋ねました。彼らはイエスの力を認識しましたが、その理由を完全には理解していませんでした。この出来事には注目すべき知恵があります。

イエスは普通の人間ではありません。彼は普通の人間のように見え、振る舞う神であることを強調しなければなりません。神である聖霊が人間の形で来られる時、誰も彼を認識することはできません。神の誕生は、彼が人間である時には秘密であり、世俗的な知識では決して彼を知ることはできません。知恵を通じてのみ、彼を知ることが可能かもしれません。知恵に基づいて神の化身を認識する方法は２つあります：1) 誰も説明していない神のダルマが科学的に明らかにされるところには、神の化身があることがわかります。2) プラクリティが支配されているところには、パラマートマが人間の形で存在すると言えます。これら２つの方法以外では、誰も神の化身を認識することはできません。

　　トレーター・ユガでは、デーヴァタたちはラーヴァナ・ブラフマに敬意を表しました。彼が９つの惑星に命令した時、彼が普通の人間ではないことがわかりました。ラーヴァナ・ブラフマは誰も知らなかった神のダルマを教え、人々にそれを実践させました。そのため、ラーヴァナ・ブラフマが神の化身であることがわかりました。同様に、ドヴァーパラ・ユガのクリシュナが太陽に命令し、バガヴァッド・ギーターでダルマを教えた時、彼が神の化身であることがわかりました。2000年前に人間として来られたイエスは、海に命令し、神のダルマを教えるという２つの方法で神として認識されました。海での航海中の嵐は、イエスが誰であるかを人々に知らせる目的に役立ったように思われます。神の化身は秘密であっても、神はこれを知る機会を与えられました。

3) マルコによる福音書 5 章 38 節、39 節、40 節、41 節、42 節、43 節

(5:38) 会堂指導者の家に着くと、イエスは騒ぎを目にし、人々が大声で泣き叫んでいました。

(5:39) イエスは中に入って言いました。「なぜこんなに騒ぎ、泣いているのですか？子供は死んでいるのではなく、眠っているのです。」

(5:40) しかし人々は彼を笑いものにしました。イエスは皆を外に出した後、子供の父と母、および共にいた弟子たちを連れて、子供のいる部屋に入りました。

(5:41) イエスは少女の手を取って「タリタ・クム！」と言いました（これは「少女よ、私はあなたに言う、起きなさい！」という意味です）。

(5:42) すると少女はすぐに立ち上がり、歩き回り始めました（彼女は 12 歳でした）。人々は完全に驚きました。

(5:43) イエスは、このことを誰にも知らせないようにと厳しく命じ、少女に何か食べ物を与えるように言いました。

死んだと宣告された人が生き返るのは大きな驚きです。イエスは生涯の間に何人もの人を死から復活させました。彼は他人を復活させただけでなく、自身も死から復活しました。この出来事について考えると、いくつかの未知の神秘が明らかになります。死には 4 種類あります：時期による死（自然

死）、不時の死、一時的な死、最後の死です。人が最後の死を経験すると、その人は再び生まれることはなく、代わりに解脱またはモークシャを達成します。自然死は最も一般的な死の形態で、人は現在の体を離れ、次の生まれ変わりに向かいます。自然死では、次の生まれ変わりに向かう以外の選択肢はありません。

　　　不時の死の場合、人は完全には死なず、代わりに体の半分を失い、残りの半分で生き続けます。信じがたいかもしれませんが、これが実際に起こることです。人間の体は 2 つの部分で構成されています。人間の体と全ての生き物の体は、物理的（可視的）な部分と非物理的（微細な）部分の両方で構成されています。人間の体の場合、物理的な体は 10 の部分で構成され、微細な体は 15 の部分で構成されています。不時の死の場合、人は 10 の部分からなる物理的な体を残し、15 の部分からなる微細な体で存在し続けます。その結果、不時の死を経験した人は「半死」と考えることができます。残りの微細な体が最終的に死ぬと、それは自然死につながり、その人は次の生まれ変わりに向かいます。不時の死の間、その人は目に見えませんが、自然死を経験するまで微細な体で存在し続けます。

　　　現在、一時的な死の間に何が起こるのかを知る人はいません。一時的な死では、全ての身体機能が停止し、ジーヴァートマは体内に留まりますが、眠りの状態にあります。一時的な死では、その人は死んだように見えますが、ジーヴァートマは体内に留まっています。これにより、一時的な死を経験した人々が誤って死亡宣告され、まだ生きているにもかかわらず埋葬されるという事件が起きています。一時的な死を経験した人が実際には死んでいないことを誰も検出することはできません。その結果、生きたまま埋葬される事例が数多く発生しています。

ジャンムー・カシミールのアブドゥル・アジズの物語

2009年12月7日、午後1時30分にTV9チャンネルで一つの物語が放送されました。60歳のアブドゥル・アジズは、その1週間前の2009年11月30日に、ジャンムー・カシミールのラジョーリという村で亡くなりました。イスラム教徒だったため、イスラムの伝統に従って埋葬されました。

埋葬から3日後、警察はアブドゥル・アジズが自然死ではなく、不正行為が関与している可能性があるという苦情を受けました。警察は直ちに事件を記録し、墓地に向かい、親族立ち会いの下でアブドゥル・アジズの遺体を掘り出しました。彼の遺体は検死のため政府病院に送られました。

検死の際、医師はまず頭蓋骨を調べるためにナイフで頭を叩き、頭部に傷を負わせました。その場にいた全員が驚いたことに、それまで死んでいると思われていたアブドゥル・アジズが目を覚まし、状況について尋ねました。予期せぬ展開に戸惑っていた医師は座り込み、「検死を行っています」と答えました。アブドゥル・アジズは落ち着いて「私は生きています」と返答しました。医師は直ちにこの奇跡的な出来事をアブドゥル・アジズの親族に知らせ、彼らは彼を家に連れ帰りに来ました。

3日前、同じ医師が15分間アブドゥル・アジズを診察し、死亡を確認していました。医師はこの異常な出来事の特別な性質を認識し、これを奇跡と表現しました。ラジョーリ村の人々は、自分たちの手で埋葬したアブドゥル・アジズが3日後に生き返ったことに同様に驚きました。

現在、この出来事から6年7ヶ月が経過しています。全てのテレビチャンネルがその日のうちにこのニュースを放送しました。この出来事は医師の立ち会いの下で起こったため、単なる迷信を超えた否定できない事実として残っています。

ヴィシャーカパトナム地区での出来事

スルンガヴァラプ・コータはアラク渓谷への途中に位置しています。スルンガヴァラプ・コータから12km離れたところにサーレープラムという村があります。この村に、10年間高血圧と糖尿病を患っていた67歳のサムドラマという女性が住んでいました。彼女はスルンガヴァラプ・コータのベテラン医師であるダルマリンガチャリー博士から治療を受けていました。ダルマリンガチャリー博士は、M.B.B.S.の学位を持つ60歳の著名な医師でした。

6年前のある日の午後6時、政府病院の医師たちによって死亡宣告されたサムドラッマがダルマリンガチャリー博士のもとに運ばれてきました。医師が診察したところ、脈拍を感じることができませんでした。彼女には呼吸も脈もないため医療処置は必要ないと述べ、死亡を宣告しました。すでに夜だったため、遺体は翌日埋葬するために12km離れた村に運ばれ帰りました。しかし、2日間続いた大雨のため、サムドラッマの遺体は3日間玄関ポーチに安置されました。驚いたことに、4日目の朝、彼女は起き上がり、親族を呼びました。彼らは直ちにダルマリンガチャリー博士に連絡し、15日後に彼女を連れて行きました。医師は彼女に、3日間死亡していたため、ヤマの使者やヤマローカを見たかどうか尋ねました。彼女は何も見なかったと答えました。

この出来事は6年前に医師の立ち会いのもとで起きたため、迷信として否定や退けることはできません。

火葬台からの生還者（テルグ語の新聞からの翻訳）

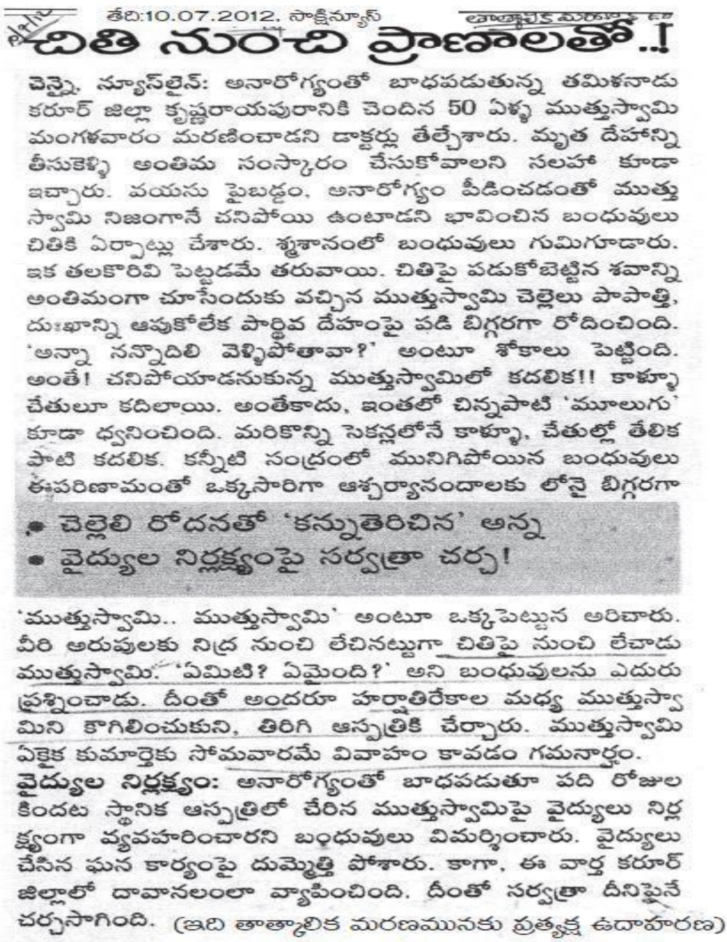
2012年7月10日、サクシ・ニュース

チェンナイ：火曜日、医師たちはタミル・ナードゥ州カルール地区のクリシュラヤプラムに住む50歳のムットゥスワミーの死亡を確認しました。医師たちは親族に葬儀を進めるよう助言しました。ムットゥスワミーが老衰と病気で亡くなっ

たと信じた親族たちは、火葬を執り行うため火葬場に集まりました。

火を付けようとした時、ムットゥスワミーの妹パーパッティが遺体に近づきました。悲しみに暮れて遺体の上に倒れ込み、「お兄さん、私を置いていくの？」と叫びました。その感動的な瞬間、ムットゥスワミーの手足が動き、かすかなうめき声が聞こえました。涙を流す親族たちは衝撃を受け、「ムットゥスワミー...ムットゥスワミー！」と叫びました。ムットゥスワミーは、まるで眠りから覚めたかのように火葬台から目覚め、何が起こったのかと親族に尋ねました。皆は喜んでムットゥスワミーを抱きしめ、病院に連れ戻しました。特筆すべきは、ムットゥスワミーの娘が前日に結婚式を挙げたばかりだったことです。

医師の過失：親族たちは、10 日前に病気で入院したムットゥスワミーの治療における医師の過失を批判しました。彼らはこの出来事について医師を非難し、このニュースはカルール地区全体に急速に広がりました。この事件は広範な議論を引き起こし、一時的な死の別の例として見られました。



తేది:10.07.2012, సాక్షిన్యూస్

చితి నుంచి ప్రాణాలతో..!

చెన్నై, న్యూస్‌లైన్: అనారోగ్యంతో బాధపడుతున్న తమిళనాడు కరూర్ జిల్లా కృష్ణరాయపురానికి చెందిన 50 ఏళ్ళ ముత్తుస్వామి మంగళవారం మరణించాడని డాక్టర్లు తేల్చేశారు. మృత దేహాన్ని తీసుకెళ్ళి అంతిమ సంస్కారం చేసుకోవాలని సలహా కూడా ఇచ్చారు. వయసు పైబడ్డం, అనారోగ్యం పీడించడంతో ముత్తు స్వామి నిజంగానే చనిపోయి ఉంటాడని భావించిన బంధువులు చితికి ఏర్పాట్లు చేశారు. శ్మశానంలో బంధువులు గుమిగూడారు. ఇక తలకొరివి పెట్టడమే తరువాయి. చితిపై పడుకోబెట్టిన శవాన్ని అంతిమంగా చూసేందుకు వచ్చిన ముత్తుస్వామి చెల్లెలు పాపాత్తి, దుఃఖాన్ని ఆపుకోలేక పార్థివ దేహంపై పడి బిగ్గరగా రోదించింది. 'అన్నా నన్నొదిలి వెళ్ళిపోతావా?' అంటూ శోకాలు పెట్టింది. అంతే! చనిపోయాడనుకున్న ముత్తుస్వామిలో కదలిక!! కాళ్ళూ చేతులూ కదిలాయి. అంతేకాదు, ఇంతలో చిన్నపాటి 'మూలుగు' కూడా ధ్వనించింది. మరికొన్ని సెకన్లలోనే కాళ్ళూ, చేతుల్లో తేలిక పాటి కదలిక. కన్నీటి సంద్రంలో మునిగిపోయిన బంధువులు ఈ పరిణామంతో ఒక్కసారిగా ఆశ్చర్యానందాలకు లోనై బిగ్గరగా

- చెల్లెలి రోదనతో 'కన్నుతెరిచిన' అన్న
- వైద్యుల నిర్లక్ష్యంపై సర్వత్రా చర్చ!

'ముత్తుస్వామి.. ముత్తుస్వామి' అంటూ ఒక్కపెట్టున అరిచారు. వీరి అరుపులకు నిద్ర నుంచి లేచినట్టుగా చితిపై నుంచి లేచాడు ముత్తుస్వామి. 'ఏమిటి? ఏమైంది?' అని బంధువులను ఎదురు ప్రశ్నించాడు. దీంతో అందరూ హర్షాతిరేకాల మధ్య ముత్తుస్వామిని కౌగిలించుకుని, తిరిగి ఆస్పత్రికి చేర్చారు. ముత్తుస్వామి ఏకైక కుమార్తెకు సోమవారమే వివాహం కావడం గమనార్హం.

వైద్యుల నిర్లక్ష్యం: అనారోగ్యంతో బాధపడుతూ పది రోజుల కిందట స్థానిక ఆస్పత్రిలో చేరిన ముత్తుస్వామిపై వైద్యులు నిర్లక్ష్యంగా వ్యవహరించారని బంధువులు విమర్శించారు. వైద్యులు చేసిన ఘన కార్యంపై దుమ్మెత్తి పోశారు. కాగా, ఈ వార్త కరూర్ జిల్లాలో దావానలంలా వ్యాపించింది. దీంతో సర్వత్రా దీనిపైనే చర్చసాగింది. (ఇది తాత్కాలిక మరణమునకు ప్రత్యక్ష ఉదాహరణ)

一時的な死を経験した人は、その状態で１年以上生存する可能性があります。蘇生は自然に、あるいは誰かが叩いたり起こしたりする助けによって起こることがあります。多くの場合、朝に一時的な死を経験した個人は夕方に目覚め、他の人々は１週間以上経って意識を取り戻します。最近、タミル・ナードゥのムットゥスワミーという男性が火葬台の上で生き返りました。同様に、イエスは一時的な死を経験した少女を蘇らせ、彼女は実際には死んでいなかったと宣言しました。イエス

自身が蘇生した歴史的な記録もあります。これらの出来事はすべて一時的な死によるものとされていることに注意することが重要です。

私たちの聖典「**死の神秘**」は、4種類の死とその現実について掘り下げています。この聖典を読むことで、さまざまな種類の死について包括的な理解が得られるでしょう。

4) マルコによる福音書第 7 章 15 節、16 節、17 節、18 節、19 節、20 節、21 節、22 節、23 節

(7:15) 人の外から入って来るもので、その人を汚すことができるものは何もありません。

(7:16) むしろ、人から出て来るものが、その人を汚すのです。

(7:17) イエスが群衆を離れて家に入ると、弟子たちはこのたとえについて尋ねました。

(7:18) イエスは言われました。「あなたがたまでそんなに分からないのですか。外から人に入って来るものは何も、その人を汚すことができないということが分からないのですか。

(7:19) それは心に入るのではなく、腹に入り、その後、体外へ排出されます。こうして、すべての食物は清められるのです。」

(7:20) さらに言われました。「人から出て来るもの、それが人を汚すのです。

(7:21) 内側から、人の心から、悪い考えが出て来るからです—性的不道徳、盗み、殺人、

(7:22) 姦淫、貪欲、悪意、欺き、好色、ねたみ、中傷、傲慢、愚かさ。

(7:23) これらの悪はすべて内側から出て来て、人を汚すのです。

人は６つの悪いグナ（性質）と６つの良いグナを持って生まれます。グナは個人の成長とともに発達し、頭部にある仏智（ブッディ）に影響を与え、その命令のもとで外部の行動を促します。仏智はカルメンドリヤ（行動器官）に体外での行動を実行するよう指示し、グナに従って働きます。仏智がグナと調和して働くため、負のグナが仏智に影響を与え、それがグナの行動を指示し、外部の感覚が仏智の命令に応じて反応します。これらのグナは、貪欲（カーマ）、怒り（クローダ）、強欲アバリス（ローバ）、情熱（モーハ）、傲慢（マダム）、嫉妬（マツサラ）といった望ましくない性質として現れます。グナはまず仏智に影響を与え、そこから体を支配します。人間が犯すすべての過ちは、体内のグナの影響に根ざしています。

外部から摂取される食物は体の健康に寄与しますが、仏智には影響を与えません。そのような食物は栄養に変換され、身体的な健康を促進します。人間が食べる食物は仏智に直接的な影響を与えません。それは体内に入り、全体的な健康を支えます。食物が体に有益な場合、それは体を強化し、良好な健康を維持します。したがって、外部から体に入る食物は人間の望ましくない行動につながることはありません。それは体内から生じるグナの効果が、否定的な行為をもたらす可能性があるのです。結果として、食事の規則から逸脱することは許容されるかもしれませんが、グナを制御することが重要です。

5) マルコによる福音書第 3 章 35 節

(3:35) 神のみこころを行う者こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。

神のみこころとは何かと問うとき、それは神の戒め（ダルマ）が神のみこころを表していることが理解できます。

神の戒めに従うことで、私たちは神のみこころに沿うことができます。逆に、神の命令に従わず自分の欲望に従って行動する場合、私たちは神の導きに反し、サタンの意志に従うことになります。神がバガヴァンとして地上に化身するとき、その知恵を理解し、それに従って行動し、その教えを広め、その戒めを広める人々は神に近づきます。逆に、サタンの道を選ぶ者たちは神の敵となります。神の言葉を積極的に広め、その戒めに従う者たちは、神の姉妹、兄弟、最も近い信奉者とみなされます。神が物理的に地上にいるかどうかにかかわらず、神の境界内で神の命令に従う智者（グナーニ）たちが神に近い存在とみなされることを認識することが重要です。

6) マルコによる福音書第 4 章 17 節

4:17) しかし、根がないので、しばらくの間しか続きません。御言葉のために困難や迫害が起こると、すぐに離れ去ってしまいます。

ギーターにおいて、主クリシュナは 4 種類の信者について語っています：1) 困難な時に礼拝する者、2) 富を求めて祈る者、3) 神について知ることに関心がある者、4) 智慧（グニャーニ）を持つ者。主はギーターの中で、グニャーニを好むと述べています。同様に、イエス様も聖書の中で 4 種類の信者について語っていますが、ここで言及されている節はそのうちの１つのタイプにのみ関係しています。ある人々は神の智慧に興味を持ち、それに従おうとします。サタンは彼らを誘惑し始めます。彼らはその過程で多くの困難に直面します。智慧のために困難に遭遇すると、サタンは彼らの頭の中で説教を始めます。サタンは彼らに言います、「あなたは智慧を知っているために困難に直面している。愚かになってはいけない。智慧の道を装うことで、来たる問題から逃れることができる」と。智慧の真の本質を理解していない人々は、それに従って行動し始めるかもしれません。しばらくして、その人が智慧やグルのため

に問題に直面し、これらの問題が他者との衝突や迫害の恐れにつながると、マーヤはその状況を利用します。マーヤはその人の頭の中にこのような考えを作り出し、人々は考え始めるかもしれません、「最初からもっと賢明であるべきだった。親しい親族が警告したのに、グルに従って智慧を求めたために、この状況に陥ってしまった。なぜ私はこの智慧のために苦しまなければならないのか？智慧とグルを捨てる方が良い。智慧に盲目的に従うことは、私の家族と私自身を破滅に導くだけだ。私たちは世の中に生きているのだから、その方法に従わなければならない。森にいる人々は何をしても問題に直面しないが、村にいる私たちが規範に反することは愚かだろう」と。このような考えは、人々が智慧の道を歩んでいても、智慧から距離を置くことにつながる可能性があります。そのため、イエスは智慧のために苦労や苦痛がある時、智慧の道を長く歩んできた人でさえ反対するだろうと言いました。

神の智慧を真に価値あるものとし、その重要性を理解している人々は、サタンの誘惑に屈することはありません。智慧とグルを、妻や親しい友人、さらには自分の命よりも大切に思い、智慧の道で迫害や死に直面するかもしれないことを知りながらも、そうでなければサタンの手から逃れることはできません。イエス様の弟子たちでさえ、主が逮捕された日に衛兵たちを恐れ、自分の命を救うためにグルを見捨てました。彼らは困難と迫害のために恐れて逃げました。もしその日、イエス様と共に死を覚悟していたなら、彼らの人生は祝福されていたでしょう。マーヤはその日、弟子たちを部分的に妨げました。彼らとは異なり、私たちは智慧の道におけるどんな困難や迫害に直面しても、しっかりと立ち向かうべきです。無知の道で恐れて生きるよりも、神聖な道のために死ぬことを厭わない者は幸いです。バガヴァッド・ギーターで主は言いました、「**あなたの法（ダルマ）であるパラマートマの法の中で死ぬことは、あなたの法でないサタンの道で恐れて生きるよりも良い**」と。

7) マルコによる福音書 4 章 21-22 節

(4:21) イエスは彼らに言われた、「ともし火を持って来るのは、それを枡の下や寝台の下に置くためであろうか。燭台の上に置くためではないか。

(4:22) 隠されているものは、現されるためのものであり、秘められているものは、明るみに出されるためのものである。」

現代において、多くのグルたちは弟子たちに智慧を他人と共有してはいけないと言っています。彼らは自分たちの智慧は機密であり、ウパデーシャ（教え）を受けた者とのみ共有されるべきだと言います。誰かが質問をすると、彼らは答えることを避けます。しかし、智慧は隠されるべきではありません。神自身が人の形で来られ、智慧を伝えるための苦労をされます。私たちは真の智慧を知らないかもしれませんが、知っている少しの智慧を共有することを避けるべきではありません。智慧は他者の無知を取り除くランプのようなものです。暗闇の中の物体がランプの光で見えるように、無知の中の未知のものは智慧によって理解することができます。暗闇を払うためにランプが必要なように、無知を払うために智慧が必要です。ランプを灯してから枡の下に置くのは愚かです。同様に、あなたが持っている智慧を共有しないのは賢明ではありません。秘密でさえも、明かされることを意図されています。バガヴァンは世界で最高の神聖な智慧を明かしました。そうであれば、智慧よりも価値の低いものは隠されることはできません。世界のどんな謎も隠し通すことはできません。それは必ず明らかになります。神の智慧は全ての人に必要であり、秘密にされるべきではありません。それを隠そうとする人々はそうすることはできません。

8) マルコによる福音書 6 章 4 節

(6:4) イエスは彼らに言われた、「預言者は、自分の郷里、親族、家族の間以外では、敬われないことはない。」

テルグ語では、預言者は重要なことを教える人として定義されています。パラマートマの智慧は、すべての人間にとって最も重要なことです。この智慧を伝える人を預言者と呼びます。パラマートマから来た者を除いて、普通の人間はパラマートマの智慧を知りません。パラマートマから来て人として生まれた者を、バガヴァンまたは預言者と呼びます。預言者は普通の人のように見えるため、自分の家庭、親族、郷里では敬われません。どんなに偉大な人でも、家庭や親族の間では過小評価されるのは自然なことです。預言者を幼い頃から見てきた家族や親族は、彼には何の偉大さもないと言って嘲笑い、愚か者だけが彼の言うことを聞くと主張するかもしれません。また、彼らが知っていること以上のことは何も知らないと主張するかもしれません。神でさえ、自分の家族に対して預言者になることはできません。他の人々が彼の偉大さを認め、それについて語っても、彼の親族や家族は彼にどんな優れた点があるのかと疑問を投げかけます。彼らは彼の重要性を認識せず、幼少期にベッドを濡らし、下着を汚したことなどを指摘して嘲笑います。それゆえ、彼は他の人々にとっては預言者であっても、自分の家庭や郷里では敬われません。この原則によると、イエス様も家族や親族によって預言者として認められませんでした。

9) マルコによる福音書 8 章 38 節

(8:38) わたしとわたしの言葉とを恥じる者については、人の子もまた、父が栄光を受けるときに恥じるであろう。

ある人々は社会で智慧を学びますが、それを秘密にすることを選びます。彼らは智慧を知ることは間違いだと感じ、そのため秘密にします。また、グルのもとに行って智慧を学ぶことを恥じ、そのため秘密にする人もいます。ある人々はグルの弟子になろうとグルを探していますが、地位と富のために裕福なグルを好みます。彼らは貧しいグルが多くの智慧を持っていても、そのグルに近づくことを恥じます。結果として、彼らは多くの智慧を持っていない裕福なグルを選びます。グルから智慧を学んだ人々の中には、そのグルの弟子として言及されることを望まない人々もいます。このように、多くの人々は恥ずかしさを感じ、露見を避けるために細心の注意を払います。

物質的なことで恥ずかしく思うことはあっても、パラマートマの知恵を恥ずかしく思ってはいけない。例を考えてみましょう。2 人が道を歩いています。1 人は容姿が良いが貧しく知的ではなく、もう 1 人は容姿は良くないが裕福で賢明です。2 人は近しい親戚同士です。道で 2 人を見かける人々は、知性ではなく外見で判断します。しばらくすると、ある旅人が彼らを見かけ、容姿の良い方に 2 人目の人物について尋ねました。容姿の良い人は、容姿の悪い人が近しい親戚であることを恥ずかしく思い、単なる知り合いだと答えます。容姿の悪い人は、自分の外見のために知り合いとして紹介されたのだと考えます。その後、別の旅人が彼らを見かけ、今度は容姿の悪い方に相手のことを尋ねました。賢明な容姿の悪い人も同様に、ただの知り合いだと答えます。容姿の良い人は知り合いとして紹介されて喜びます。容姿の悪い人は「私もこの愚かな人を近しい親戚として紹介するのが恥ずかしい」と考えます。容姿の悪い人は容姿の良い人の行動に倣ったのです。

　2人目の旅人には長年の決まりがありました。近しい親戚に会った場合は 10,000 コインを与えるというものでした。しかし、彼らは近しい親戚であったにもかかわらず、そのように名乗らなかったため 10,000 コインを受け取ることはありませんでした。結果として、最初の貧しい人は何のお金も受け取れませんでした。2番目の人は裕福なので、お金を受け取れなくても気にしません。最初の人は恥ずかしさから嘘をついたためにお金を失いました。他人が好まないからという理由で知恵を恥ずかしく思うなら、知恵もまたあなたを恥ずかしく思うでしょう。最初の人は恥ずかしさから嘘をついたために損失を被りました。そのため、彼らは将来の解放という利益を受けることができないでしょう。これに基づいて、主は「**私と私の言葉を恥じる者を、私もまた恥じる**」と述べられました。したがって、物質的な事柄で恥ずかしく思うことはあっても、パラマートマの知恵を恥ずかしく思ってはいけないということを理解すべきです。

10) マルコによる福音書 9 章 7 節

(9:7) そのとき雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これは私の愛する子である。彼に聞け！」

　ほとんどの人は空の雲について認識していません。雨季には、雲は雷を起こし大きな音を立てます。雲は生きており、多くの仕事を行っていますが、その具体的な役割は知られていません。歴史によると、太陽は創造の始めに雲が最初に明らかにした神聖な知恵を聞いたとされています。地上には雲の知らない秘密はありません。雲の後ろにいる神はイエスについて、「**これは私の愛する子である。彼に聞け**」と言われました。したがって、人々がイエスから神の知恵を聞くことは神の意志なのです。神が人として語ることは神の知恵ですが、人々が聞かないとき、神は雲から語られます。人々は他者の言葉を

常に尊重するとは限りませんが、雲の言葉は重視します。そのため神は空の雲から語られたのです。

11) マルコによる福音書 10 章 17-18 節

(10:17) イエスが道を出発しようとしたとき、ひとりの人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「良い先生。永遠の命を受け継ぐには、私は何をすべきでしょうか。」

(10:18) イエスは答えた。「なぜ私を良いと呼ぶのか。神おひとりのほかに、良い者はいない。」

一部のキリスト教徒は、聖書は元々ヘブライ語で書かれ、その後多くの言語に翻訳されたと主張しています。そのため、一部の言葉は正しく翻訳されていません。例えば、最初の節では「良い先生」という言葉が使われ、2 番目の節では「神は良い」とされています。しかし、イエスの**「神のほかに良い者はいない」**という言葉に基づけば、「良い先生」も「良い神」も適切な表現ではありません。知恵を雄弁に教える人を良い先生と呼び、善行を行う人を良い人と呼ぶことはできます。

地上には良い先生も良い人もいます。したがって、それらを比較して**「神のほかに良い者はいない」**というのは、神を軽んじることになります。さらに、最初の文の「良い先生」と 2 番目の文の「良い人」という言葉の間には一致がありません。第二の聖典である聖書は、他の 2 つの聖典よりも多くの言語に翻訳されています。聖書は 1,400 の言語に翻訳されており、最も多くの言語に翻訳された唯一の聖典となっています。

第一の聖典は、第二の聖典である聖書と最後の聖典であるクルアーンの基礎となっています。クルアーンは 5:44、5:46、5:48、5:68 において、**第一の聖典であるタウラート（バガヴァッド・ギーター）の知恵が他の 2 つの聖典にも存在する**

ことを証言しています。したがって、マルコによる福音書10:17 と 10:18 で使用されている言葉を考えると、世界には多くの良い先生や良い人がいるかもしれませんが、人間の中にウッタマ・プルシャ（最高存在）はいないことが分かります。それゆえ、バガヴァッド・ギーターで述べられているように、「神のみがプルショッタマである」と言えます。上記の節では無関係な言葉が使用され、「プルショッタマ」という言葉が使われるべきでした。これは、バガヴァッド・ギーターの第 15 章 16 節、17 節、18 節のプルショッタマ・プラプティ・ヨーガを見れば良く理解できます。

第一の聖典によれば、プルシャは 1 つだけです。プルシャは 1 つだけですが、神はジーヴァートマ、アートマ、パラマートマの 3 つに分かれています。これら 3 つの男性の中で、ジーヴァートマとアートマよりも優れている男性がパラマートマであり、バガヴァッド・ギーターで言及されているプルショッタマとして知られています。3 つの男性以外はすべてプラクリティ（女性的なもの）であると言えます。世界の男性と女性はすべて女性的な性質に関連しています。したがって、この節でイエスは「私をプルショッタマ（ウッタマ・プルシャ）と呼ばないでください。神だけがウッタマ・プルシャです」と言われました。地上には 3 つの主要な宗教があります。各宗教の人々は神聖な聖典を取り、これが私たちの聖典だと言いました。しかし、実際には、これら 3 つの聖典は特定の宗教に関連するものではありません。それらはすべての人類に知恵を提供するものであり、したがって、すべての人類のための聖典として考えられるべきです。

12) マルコによる福音書 16 章 15-16 節

(16:15) イエスは彼らに言われた。「全世界に出て行き、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」

(16:16) 信じて洗礼を受ける者は救われますが、信じない者は罪に定められます。」

イエスは十字架にかけられ墓に納められた後、日曜日の夜明けに墓から復活されました。最初にマグダラのマリアに現れ、その後他の弟子たちにも現れました。イエスは墓から出た後、33 回にわたって弟子たちの前に現れました。上記の 2 つの節は、11 人の弟子たちが共に食事をしているときに語られたものです。世界のすべての人々が無知に浸っているため、イエスは弟子たちに、**神の知恵である福音を人々に宣べ伝える**ように指示されました。第 15 節の「**全世界に出て行き、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい**」という言葉も同じメッセージを伝えています。ここでの「全世界」は異なる世界を意味するのではなく、地上で生計を立て、様々な形で苦しんでいる人々を指しています。

イエスはまた、「すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」と言われました。これは、あらゆる年齢の人々に神の知恵である福音を説くことを意味します。イエスは彼らに神の知恵を説き、パラローカ（来世）に行く許可である「洗礼」を与えるように言われました。洗礼は解放またはパラローカへの許可証のようなものです。パラローカへの許可を与えられた者は、私の知恵によって救われ、罪の経験から逃れることができます。洗礼を受けていない者は罪からの保護がないため、罪の苦しみによって罰せられると言われました。

ルカによる福音書

1) ルカによる福音書 2 章 49 節

(2:49) イエスは彼らに言われた。「なぜ私を捜したのですか。私が父の仕事に携わっていなければならないことを、ご存じなかったのですか。」

イエスの両親は彼を探していて、見つけたときは驚きました。母は彼に「なぜこのようなことをしたのですか。あなたの父と私は心配して探していました」と言いました。それに対してイエスは「**なぜ私を捜したのですか。私が父の仕事に携わっていなければならないことを、ご存知なかったのですか**」と答えました。イエスの目に見える（肉体的な）父も一緒にいたにもかかわらず、彼は目に見えない（非物質的な）父のことを指していました。イエスがどの父のことを指していたのかを明確にすることは、父の仕事を理解し、それによってイエスが行う仕事と母親と父親のもとを離れた理由を理解するために重要です。

イエスは自身の言葉で、人の子であると宣言しました。時には神の子であるとも主張しました。したがって、彼は人の子であり、神の子でもあります。これらの人々は誰の子なのかと問われれば、すべての人間は人の子であると言えます。しかし、ここには秘密が含まれています。人が生まれるためには、種（精子）の提供者が必要です。父親が人の誕生のための種の提供者であると自然に考えられますが、人は外見は男性であっても、男性のモデルとして創造されているため男性としては数えられないことに注意が必要です。男性とその妻は両方とも女性的なプラクリティに数えられます。

人間の体内にいるジーヴァートマは、アートマに関連する男性ですが、誰かを生むことはできません。体内にいるアートマが、すべての人間を生まれさせました。私たちはすでに、アートマが体内のすべての作業を行い、すべての存在の種の提供者であると述べました。イエスは、普通の人間ではなかったにもかかわらず、自分を「人の子」と呼びました。これは、彼の父が目に見えるヨセフではなく、むしろすべての人間の体内に宿るアートマであることを示すためでした。最初の神聖な聖書は、母の胎内から生まれたすべての生命体は、アートマを父とし、プラクリティを母として持つと教えています。しかし、イエスは、アートマとは異なる聖霊（パラマートマ）の子であったため、物理的な父なしに直接生まれました。これが、彼が神の子と呼ばれる理由です。イエスは両親に会った時、自分は父の仕事をしなければならないと言いましたが、どの父（アートマか聖霊か）を指しているのかは特定しませんでした。彼自身の意見では、自分を神の子と考えていました。イエスは体内にいるアートマの仕事は行いませんでした。彼は神の知恵を広めることに専念していました。遍在するパラマートマが神聖な知恵を広める任務を遂行します。したがって、イエスは父（聖霊）の仕事をすることを意図していました。パラマートマ自身が体を作り、自身の魂をそこに満たしました。イエスは神であったにもかかわらず、人々が彼を認識するのを防ぐために、時には人の子として、また時には神の子として自分に言及しました。

2) ルカによる福音書、第 11 章、37 節、38 節、39 節、40 節、41 節

(11:37）イエスが話していると、あるパリサイ人が食事に招待しました。そこで、彼は中に入って食卓につきました。

(11:38）彼の主人は、イエスがユダヤの習慣で要求される手洗いの儀式を行わずに食事を始めたのを見て驚きました。

(11:39）すると主は彼に言われました。「あなたがたパリサイ人は、杯と皿の外側を清めることには注意深いが、内側は貪欲と邪悪で満ちているのです！

(11:40）愚か者たち！神は外側も内側も作られたのではありませんか？

(11:41）だから、貧しい人々に贈り物（ダルマ）を与えることによって内側を清めなさい。そうすれば、あなたがたは全体的に清くなるでしょう。」

最後の節には、「**貧しい人々に贈り物（ダルマ）を与えることによって内側を清めなさい。そうすれば、あなたがたは全体的に清くなるでしょう**」と述べられています。残念ながら、人々はこの節を正しく理解しておらず、様々な解釈をしています。イエスが「贈り物を与える」と言及した時、人々はそれを貧しい人々にお金や衣服、食べ物を寄付することと解釈しています。しかし、イエスは外的な慈善行為が人を内面から清めると主張したわけではありません。彼の意図は、ダルマの実践が内面化されるべきであり、そうしてはじめて内なる悪が浄化されるということでした。イエスは外面的な清さを重視せ

ず、代わりに内なる性質（グナ）の浄化を強調しました。したがって、彼はグナに対抗するダルマの道を歩むよう他者を励ましました。イエス自身が内なる浄化を経験し、ダルマの道に従いました。だからこそ、他者も同じ道を歩むよう促したのです。

3) ルカによる福音書、第 12 章、4 節と 5 節

(12:4）私の友である皆さんに言います。体を殺しても、その後何もできない者たちを恐れてはいけません。

(12:5）しかし、私はあなたがたが恐れるべき者を示しましょう。体を殺した後、地獄に投げ込む権威を持つ者を恐れなさい。そうです、私は言います。その方を恐れなさい。

人間は体を傷つけることはできますが、内なるジーヴァートマを傷つけることはできません。ジーヴァートマは外からは見えないため、影響を受けません。体は目に見えるため、他者は体だけを傷つけることができ、ジーヴァートマは傷つけられません。したがって、そのような個人を恐れる必要はありません。恐れるべき唯一の存在は神です。死においてさえ、神は私たちの罪を評価し、罰を与え、苦しみを引き起こします。個人間の絆は死後に断ち切られます。亡くなった人が殺人者の家庭に生まれ変わったとしても、殺人者を敵として認識することはないでしょう。しかし、神は死後もジーヴァートマを認識し、その後の生まれ変わりを知っています。したがって、死後も私たちのカルマに対して責任を問う神を恐れることが重要です。ジーヴァートマを傷つけることができず、死後に私たちを認識しない他の人間を恐れる必要はありません。

4) ルカによる福音書、第 12 章、25 節

(12:25）あなたがたのうち、誰が思い悩んで自分の身長を一キュビト伸ばすことができるでしょうか？

　　個人が自分の知性によってすべてを成し遂げていると信じているにもかかわらず、彼らと彼らの知性の間には本質的なつながりはありません。人々は独立しておらず、自分自身で行動する能力がありません。彼らはカルマによって操られる人形のようなものです。自分の思い通りに行動できると信じている人々は、自分自身について無知な状態にあります。神が作り出した構造によれば、カルマは神のコントロール下にあり、個人はカルマのコントロール下にあります。カルマが彼らを支配しているため、彼らは独立して決定を下すことができません。どれだけ計画を立て、知性を活用しても、自分の身長を変えることはできません。もし各個人が自分自身を理解し、自分の力の及ぶ範囲を熟考するなら、彼らは自分の取るに足らなさを認識し、神が彼らよりも無限に偉大であることを理解するでしょう。

5) ルカによる福音書、第 12 章、33 節と 34 節

(12:33）あなたがたの持ち物を売って、貧しい人々に与えなさい。擦り切れることのない財布を用意しなさい。それは、泥棒が近づくことができず、虫も破壊することのできない、パラローカ（来世）での尽きることのない宝です。

(12:34）あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。

　　二種類の富があります。一つは世界のあらゆるものを買うことができる富であり、もう一つは世界を超えた神を買う

ことができる富です。前者は人間によって作られ、肉眼で見える物質的な富であり、これで物質的な所有物を買います。後者は神によって作られ、容易には見えない知恵の富です。知恵の富と物質的な富の間には多くの違いがあります。泥棒は物質的な富を盗むことはできますが、知恵の富は物理的な商品ではないため盗むことができません。虫は物質的な富を破壊することはできますが、知恵の富を損なうことはできません。物質的な富は最も小さなカルマさえも取り除くことができませんが、知恵の富は大きなカルマでさえも取り除くことができます。物質的な富は仕事を通じて獲得できますが、知恵の富は神との親密さを通じて得られます。物質的な富は評価することができますが、知恵の富は測ることができません。人が死ぬとき、物質的な富とのつながりは断ち切られます。一銭もジーヴァートマと共に行くことはありません。対照的に、知恵の富は死後もジーヴァートマと共にあります。人生で得たすべての知恵は将来の生まれ変わりにも引き継がれるからです。世界で裕福な人々は社会では尊敬されるかもしれませんが、神の前では尊敬されません。神は他の人間が尊敬しなくても、知恵の富を持つ人々を認識します。要するに、物質的な富と知恵の富の間には多くの違いがあります。

6) ルカによる福音書、第 12 章、49 節

(12:49) 私は地上に火をもたらすために来ました。その火が既に燃えていればと、どんなに願っていることでしょう。

この文脈において、「火」という言葉は私たちが日常的に目にする普通の火を指すものではありません。火には二種類あります：普通の火と特別な火（知恵の火）です。普通の火は薪やその他の物を燃やすことができますが、**グナーナッグニ（知恵の火）はカルマの薪を燃やします**。人間が罪に囚われ、困難に苦しんでいるため、神は知恵の火をもたらして彼らのカ

ルマを燃やし、生死の輪廻から解放し、神に到達できるよう助けるために降臨します。神が知恵を授けるとき、それを火に例えるのは、知恵を得ることが解放につながるからです。神は過去にこの火を地上にもたらし、しばらくの間燃えていましたが、消えてしまいました。イエスはその火を再び点火し、燃え続けさせるために来ました。彼は火が続いて燃えることを望んでいたので、火のないところに火をつけるために来たと宣言し、以前に点火した火が持続することを願っていました。

7) ルカによる福音書、第 12 章、51 節、52 節、53 節

(12:51）私が地上に平和をもたらすために来たと思いますか？いいえ、私はあなたがたに告げます。分裂をもたらすために来たのです。

(12:52）今後、一つの家に五人いれば、三人が二人に、二人が三人に対して分かれ、互いに対立するでしょう。

(12:53）彼らは分かれるでしょう。父は子に対して、子は父に対して、母は娘に対して、娘は母に対して、姑は嫁に対して、嫁は姑に対して対立するでしょう。

パラマートマ(最高の魂)が地上にバガヴァン(神)の姿で化身する時、その英知を顕します。バガヴァンの英知は、サタンの道を歩む者たちの中で相反する感情を生み出します。このような場合、英知を理解する者とそうでない者との間で意見の相違が生じます。英知を持つ者は、それを欠く者と意見が合わないでしょう。このような状況が同じ家庭内で起きた場合、家族は互いに敵対的になることがあります。家庭で誰かが英知を

得ようとすると、サタンは警戒します。サタンは分裂を促し、父と息子、息子と父、母と娘、娘と母、姑と嫁、嫁と姑を対立させます。バガヴァン(グル)でさえ、その英知のために夫婦が争っていることを知りながら、英知に関する事柄であなたに反対する者と意見を異にするよう助言することがあります。その結果、彼らの争いは収まるどころか激化するかもしれません。**そのため、主は「私は和解ではなく分裂をもたらすために来た」と言われました。**地上で英知を教えに来たバガヴァンが、その英知を無視して家庭に従うよう助言すると思いますか？神の英知を妨げる手があれば切り落とせと教えた主が、妻や親族との和解を提案すると信じますか？決してそうではありません。主は、たとえ命を犠牲にしても彼らと妥協してはならないと強く勧めました。そのため、神の英知のために多くの家庭で争いが起こります。特に、真の英知が宣べられる所では、家庭内に不和が生じるでしょう。サタンの英知が神の英知を装って提示される時には、不和は生じません。誰もがそのような英知を支持する傾向があります。神の英知により家族全員が敵対者となる場合、そのような英知が真に神の英知であると見分けることができます。

8) ルカによる福音書 13 章 3 節

(13:3) あなたがたも心を改めなければ、皆同じように滅びるでしょう。

マナス(心)は記憶を保持するため、そう名付けられた体の最も重要な部分です。それは常にマーヤ(サタン)の影響下で働き、世俗的な関心を強化します。人の誕生以来、心はサタンと結びつき、決して神と調和して機能したことがありません。そのような心がサタンの影響から神との調和へと変化することを「心の変化」と呼びます。心の変化なしには、誰も神の側に移行することはできません。心が変化すると、グニャーナグニ(英知の火)が現れ始めます。グニャーナグニによって全て

のカルマ(業)が破壊されることで、人は誕生と死を経験することなく神と一体となります。もし心が変化せず、思考を支配し続けるなら、個人は誕生と死の輪廻を繰り返し、地獄の苦しみに耐えなければなりません。したがって、全ての人が心の変化を遂げることが不可欠です。

9) ルカによる福音書 14 章 26 節

(14:26) もし誰かが私のもとに来て、父母、妻子、兄弟姉妹、さらに自分の命さえも憎まないなら、その人は私の弟子となることはできません。

これを聞いた人は驚いて、「これはどんな英知なのか？どんなグルなのか？どんな弟子なのか？」と尋ねるでしょう。グルのもとに来て、「家族を非難しなければ弟子ではないと言うグルがいるのか？」と質問するかもしれません。ここで考える必要があります。ある人が家族全員を非難したとしても、グルはその人を喜んで弟子として受け入れる狂人ではありません。むやみに全ての人を憎むよう助言されているのではありません。グルは、弟子がグルの感情に沿ってサタンの道を歩む無知な者たちを非難する時に喜びます。弟子が無知な者たちに反対する時、グルは弟子が自分の教えに沿っていると認識し、彼らを受け入れます。もし弟子が無知な者たちに反対せずに支持するなら、グルは彼らを弟子として認めないでしょう。憎しみは二つのグループ - グニャーニ(賢者)と無知な者たち - の間で一般的です。もし父母、妻子、兄弟姉妹が無知なリストに含まれているなら、弟子は彼らに反対すべきです。主は、無知な者たちに反対せず、親族を支持する者は自分の弟子ではないと述べました。無知に関して妥協してはならないことが強調されています。イエスは、英知への道を妨げる母、父、兄弟姉妹、妻、子供たちを弟子は見捨てるべきだと言いました。

10) ルカによる福音書 14 章 27 節

(14:27) 自分の十字架を負って私に従わない者は、私の弟子となることはできません。

薪を束ねると、持ち上げて長距離を運ぶのが容易になります。そうでなければ運ぶことは不可能でしょう。同様に、人の心にある 108 のグナ(性質)が機能不全の状態で束ねられると、それらは人の手の中で束となります。人の体には二種類のグナがあります - 善と悪です。

6 つの悪いグナは、貪欲(カーマ)、怒り(クローダ)、強欲アバリス(ローバ)、情熱(モーハ)、傲慢(マダム)、嫉妬(マツサラ)です。同様に、6 つの善いグナは、慈善(ダーナ)、慈悲(ダヤ)、寛容(アウダールヤ)、無執着(ヴァイラーギャ)、謙遜(ヴィナヤ)、愛(プレーマ)です。6 つの悪いグナと善いグナのそれぞれが 9 つの部分に分かれています。したがって、6 つの悪いグナは 54 の部分に分かれ、6 つの善いグナも 54 の部分に分かれています。合わせて、善悪のグナは 108 となります。

108 のグナの部分は、最初の神聖な経典では**マーヤ**と呼ばれています。第二の神聖な経典では、それらは**サタン**と呼ばれます。最後の神聖な経典では、これらのグナは**イブリース**と名付けられています。神自身が最初の神聖な経典で「グナ・マイ・ママ・マーヤ」としてマーヤについて語りました。これは、神が創造したマーヤが人の体の中でグナの形で存在することを意味します。神は主に人々が神の道に従うことを妨げるためにマーヤを創造しました。マーヤは人を神の道に従わせる代わりに、自分の側に留まらせることができます。マーヤはグナであり、グナはマーヤであると言えます。テルグ語では、マーヤは「目に見えない」という意味です。MAYAMU=GUNAMU=SILUVA。マーヤは頭の中に見えない形で存在します。私たちの体の中に存在するマーヤは、十字架と

も呼ばれます。霊的な意味で、マーヤは大蛇に、アートマは鳩に例えられます。

十字架（スィルワ）とは蛇を意味し、大きな十字架（コンダ· スィルワ）とは大蛇（パイソン）を意味します。つまり、マーヤは大蛇として語られています。大蛇は強大な蛇です。それに捕まった者は自由になることができません。つまり、マーヤは強力です。イエスは、そのような強力なマーヤを制御し、束ね、手に持つ者が私の弟子であると言いました。イエスは、マーヤの征服者が真に私の弟子であると言いました。**マーヤ(十字架)を捕らえ、それを担いで神の道に従う者が、神の真の弟子です。**今日私たちが語る十字架を担ってイエスに従う者が、この節で述べられているように彼の弟子です。

11) ルカによる福音書 18 章 29 節

(18:29) イエスは彼らに言われました。「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、姉妹、両親、子供たちを捨てた者で、この世でその何倍もの物を受けない者はなく、来るべき世で永遠の命を受けない者はありません。」

神の国とは、輪廻からの解放であるモークシャを指します。人がモークシャ(解放)を得ると、地上に生まれ変わることはなく、サタンに苦しめられることもありません。モークシャとは、サタンから解放され、神と一体となることを意味します。言い換えれば、人は神と一つになります。小さく特定の形を持つジーヴァ(個我)が、無限に広大で、限りなく、遍在する神との結合は、卓越した達成です。この境地を得るために、人は英知の道に従い、もしこれらの執着が精神的な旅を妨げるなら、配偶者、子供、両親、兄弟姉妹、家への執着を手放す意志

がなければなりません。このような人は、この世界で完全なグニャーニとなり、パラローカ(来世)で神を得ます。配偶者、子供、兄弟姉妹、両親を手放すことは重大な決断です。なぜなら、マーヤが人を取り囲み、近しい人々に縛り付けているからです。プラフラーダは父を重んじず、ミーラーバーイーは夫と親族を去り、ブッダは若い妻、一歳の息子、両親、家、王国を英知のために捨てました。しかし、愛する人々から距離を置く者は、神により近づくことができます。永遠なる方を得るために、しばらくの間あなたと共にいる者を後にすることは賢明な決断です。しかし、そのような決断は世間には愚かに見えるかもしれません。サタンの王国で神のために全てを捨てる覚悟のある人を見つけることは稀です。誰かの心に神の考えが浮かぶと、サタンは特にその人に注目し、英知の思考と道から逸らそうとするからです。バガヴァッド・ギーターのヴィグニャーナ・ヨーガム第 14 節で述べられているように、サタンの力に打ち勝ち、征服することは人には不可能です。サタンの力が非常に強大な時に、どのようにして神のもとへ行くことができるのか疑問に思うかもしれません。なぜ試みて失敗するのか？しかし、もし人が完全に神を信頼し、サタンに立ち向かう能力がないにもかかわらず努力を続けるなら、神自身が彼らをサタンから引き離し、神の側に引き寄せるでしょう。したがって、最も小さな人間がサタンに打ち勝つ唯一の方法は、完全に神に降伏することです。バガヴァッド・ギーターは、「**マーヤ・メータム・タランティテ**」と述べています。これは、神を完全に信頼する者について「**私が彼をマーヤから救い出す**」という意味です。このように、もし人が完全な信頼と重荷を神に委ねるなら、神は彼らをサタンから救うことができます。

12) ルカによる福音書 21 章 15 節

(21:15) 私はあなたがたに、どんな敵対者も抵抗したり反論したりできないような言葉と知恵を与えよう。

知恵をある程度持っている幼い子供たちが、有名な説教者やグルの教えに疑問を投げかけると、彼らの教えの中に答えを見つけることができません。そのため、説教者たちは誰も彼らの教えに疑問を投げかけてはならないというルールを作りました。彼らの教えに答えがない主な理由は、それらが科学に基づいていないからです。非科学的な教えは、合理的な質問に答えることができません。説教者たちは教え続けますが、質問されても答えません。パラマートマが神として化身するとき、彼はパラマートマの真の知恵を教えます。したがって、神によって教えられた知恵を知る者は、どんな質問にも答えて教えることができます。パラマートマの知恵を知る神の信者たちを見た敵対者たちは、自分たちがグルや知者であるという自我を持って近づき、矛盾した発言をします。そのような時、敵対者たちが反論できない知恵は、すでに信者たちに告げられています。神の言葉は、真の知恵を知る者に対して、多くの人々が妬みを持ち、敵対心を増していくと述べています。神が降臨したときでさえ、敵対者たちは神に向かって「あなたはまだ知恵を知らず、本物の知恵を学ぶために特定の場所に行く必要がある」と言って対抗しました。私のところにも「あなたは知恵を知らない」と言う人々が来ました。そのような人々はあなたがたのところにも来るでしょう。神は上記の節で、彼らに答えるための知恵を与えると言われました。

13) ルカによる福音書 21 章 17 節

(21:17) あなたがたは、私のゆえにすべての人々から憎まれるでしょう。

神の子である神が明らかにした知恵は、サタンに取り憑かれた者たちに対抗するものです。この知恵は、ある程度の知恵を持つ説教者やグルに完全に反するものに見えるため、一般の人々が誤解する可能性があります。パンディット、説教者、グルたちは、しばしば神の道を説く者たちの言葉を好みません。彼らと彼らに従う人々は、神の言葉が彼らの教えと矛盾するため、神の道を説く者たちを憎むようになります。そのため、神は上記の節で「**あなたがたは私のゆえにすべての人々から憎まれるでしょう**」と言われました。

ヨハネによる福音書

ヨハネによる福音書は 21 章から成っています。この聖典では、人間が理解できなかったり、誤解したり、誤って解釈する可能性のある節のいくつかについて説明を提供します。私は神の奉仕の一環として、神が私をペンとして使用してこの仕事をするように感じ、これらの節を選びました。以前、私は最初の神聖な聖典であるバガヴァッド・ギーターと第三の神聖な聖典であるクルアーンからいくつかの節を説明しました。三つの神聖な聖典すべてを説明したいという深い願望があるため、今度は第二の神聖な聖典であるインジール（聖書）からいくつかの節を説明します。この聖典で提供される知恵は科学的で真正なものです。さて、ヨハネによる福音書の第 1 章第 1 節から、完全に理解するために説明が必要な三つの短い文からなる最初の節を見てみましょう。

1) ヨハネによる福音書 1 章 1 節

(1:1) 初めに言があった。言は神とともにあった。言は神であった。

第二の神聖な聖典であるヨハネによる福音書の最初の三つの言葉について議論しましょう。

言は初めにあった。

言は神とともにあった。

言は神であった。

聖書の教えにおいて、これらの三つの節を聖書の冒頭の節と呼びましょう。創世記の節を聖書の最初の言葉と呼ぶべきだと主張する人もいるでしょう。しかし、私たちはすでに私たちの方法を説明しました。私たちは人間が必要とする教えを聖典と考え、そこから最初の節を議論します。この原則に従って、神イエスは四つの福音書を教えました。ヨハネによる福音書は最後のものでしたが、それは教えから始まりました。同様に、私たちはバガヴァッド・ギーターの第 2 章 11 節を始まりとしました。なぜなら、そこから神の知恵が始まったからです。また、サーンキヤ・ヨーガから第 11 節、第 12 節、第 13 節を最初の三つの文として取り上げました。同様に、インジール (聖書) の第 43 章から最初の節を取り上げ、タウラート (バガヴァッド・ギーター) から三つの節を最初の三つの文として取り上げました。しかし、ここでは三つの連続する節ではなく、ヨハネによる福音書の一つの節から三つの意味を持つ文として三つの文を取り上げました。文の順序は重要ではありません。私たちは三つの意味を伝える文を取り上げました。これらは三つの短い文ですが、それぞれに深い意味があります。

これらの三つの文は微妙な意味を伝えています。バガヴァッド・ギーターの最初の三つの文は、ジーヴァートマとアートマの概念を掘り下げています。しかし、ヨハネによる福音

書の冒頭の言葉は特別な意味を教えています。バガヴァッド・ギーターの開始部分は、ジーヴァートマ、アートマ、身体という三つの要素について議論しています。対照的に、ヨハネによる福音書の最初の三つの文は、知恵、アートマ、パラマートマという三つの側面を探求しています。しかし、これらの文は、アートマとパラマートマの位置を明確に説明していません。「神」という言葉が二つの文に現れていますが、知恵とアートマは曖昧に識別可能なままです。では、三つ組の最初の文を詳しく見てみましょう。

最初の文は「言は初めにあった」です。言葉は口から発する音によって生み出される発話の中で表現されます。音を知覚することができ、聴覚的な手がかりに基づいて文が長いか短いかを判断することができます。文の言語は必ずしも馴染みのあるものである必要はなく、長さも様々です。その言葉（文）が静かに話されたのか大きな声で話されたのかは判断できません。「言は初めにあった」という文を分析してみましょう。私たちは言葉が初めに話されたことを理解していますが、人間はその初期の段階では言語能力を持っていませんでした。したがって、その言葉がどの言語で話されたのかという適切な質問が生じます。この質問に答えるために、初めに起こった出来事を考えてみましょう。

初めに聞こえた音の起源について尋ねるならば、人間の耳に聞こえた音をプラクリティに帰属させることができます。プラクリティは、地、水、風、火、空という五大要素から成り、それぞれが生命を持っています。生命を授かった空が、初めに音を生成しました。これは、一見空虚に見える空がどのように音を生み出すのかという疑問を提起します。この疑問は合理的であり、答えを理解することでそれは科学的な探求に変わります。ブラフマ・ヴィディヤ・シャーストラによると、空自体が音を作り出したのでしょうか？空はジーヴァであるため、ジーヴァートマには能力がなく、科学的原理に従って行動することはできません。これがジーヴァートマのダルマです。

パラマートマにも一つのダルマがあります。パラマートマ（神）は名前、形、働きを持ちません。これが神の主要なダルマです。神は行為の主体ではなく、働きに携わりません。ジーヴァートマのダルマによると、ジーヴァートマには能力がなく、いかなる働きも行うことができません。神には能力がありますが、いかなる行為にも携わりません。したがって、ジーヴァートマと神は対立するダルマを持っています。初めに、言葉は空を通して発せられました。空もジーヴァであるため、その音を生み出すことはできませんでした。空から発せられた音は事実の出来事ですが、空のジーヴァには能力がなく、いかなる音も生成することはできません。このため、空の背後に誰かが音の源であった可能性があります。神は働きに携わらないため、音を作り出すことはありませんでした。空からの音は真実ですが、空のジーヴァも神も音の原因ではありません。両者とは別に誰かがいたのかという疑問が生じるかもしれません。

この疑問を晴らすために、宇宙に存在する実体を理解することが不可欠です。最初に、神は宇宙を創造しました。神は、神でありながら、自身からプラクリティを創造しました。彼は最初にプラクリティを五つの部分として創造し、その後、生命のないプラクリティに活力を注入するためにアートマとジーヴァートマを創造しました。自身と同様に、神は男性的な（プルシャ）アートマとジーヴァートマを創造しました。彼はジーヴァートマを乗客として、アートマを運転手として指定し、すべての任務の遂行をアートマに委ねました。すべての個人において、アートマはジーヴァートマと共存しながら、体内のすべての機能を遂行します。神は聖典の中で、偉大な学者でさえアートマを完全に理解できない可能性があると主張しました。バガヴァッド・ギーターのプルショッタマ・プラプティ・ヨーガ第 11 節で言及されているように、献身的なヨーギーだけがアートマを真に理解することができ、アートマが知られることなく体内に隠れていることを強調しています。

神が働かないなら、どのようにしてプラクリティ、アートマ、ジーヴァートマを作ったのかと尋ねる人もいるでしょう。私の答えは、神が働かないというのは事実だということです。この原則は、プラクリティ、アートマ、ジーヴァートマの創造後に神によって表明されました。創造の前には、神が唯一の存在であり、その期間中、神は働きに携わっていました。創造前には神以外の存在はありませんでした。結果として、神は創造の前に働きました。神はプラクリティを創造し、その後アートマとジーヴァートマを創造しました。その後、神は自身のダルマを確立しました。神は創造後は働くことを控えましたが、創造前は活動的でした。神はすべての責任をアートマに委任し、アートマがすべての任務を遂行することを決定しました。結果として、パラマートマはアートマの創造後、以前行っていた行為に携わることを止めました。アートマが責任を引き受けたため、パラマートマは受動的な観察者（証人）となりました。

神は仕事に関与せず、ジーヴァ（個人の魂）は行動する能力がなく、アートマ（宇宙の魂）がすべての任務を遂行します。したがって、最初に天空から音を生み出したのはアートマでした。アートマは天空の中に隠れて音を生成しました。アートマが作り出した音は神の知恵となり、それゆえに「言葉」と呼ばれ、意味を持つ音を表しています。創造の出来事を描写する際、**「初めに言葉があった」**という表現は、意味のある音が天空から発生したことを表現しています。私たちは「言葉」が何であり、誰がそれを発したのかを学びました。「言葉」は神の知恵とともにアートマによって音の形で語られました。アートマが天空から発した言葉は、世界にとって最初の知恵となりました。天空からの音は知恵を含んでいましたが、それは人間の言語では理解できない雷のような大きな音として現れました。太陽は天空の雷鳴のような音を理解し、それが人間には理解できないことを認識して、地上のマヌという名の人物に人間が理解できる言語でメッセージを伝えました。

神の知恵は創造の始まりに理解不能な音として現れました。これはヨハネの福音書の第一章の最初の文で、「初めに言葉があった」と述べられています。その日、人々はその音が神の知恵を帯びていることを知りませんでした。彼らは太陽がメッセージを伝えた時にようやく幾分かを理解しました。クリシュナは同じ知恵をバガヴァッド・ギーターの形で伝え、それが創造の始まりに語られた同じ知恵であると述べました。しかし、人々の注意は最初、始まりの雷鳴に向けられず、今日に至るまで、雷鳴の音にバガヴァッド・ギーターの知恵が込められていることを誰も理解していません。太陽はクリシュナが語った同じ知恵をマヌに伝え、天空からの雷鳴の形で生まれた知恵を翻訳しました。天空の音からの知恵は天空のアートマから生まれました。アートマの知恵はアートマ自身から生まれました。アートマ自身が知恵となり、同じ知恵がアートマから出てきました。このアートマの知恵は、綿が糸に変わり、糸が綿から生まれるのと同じです。綿と糸は異なりますが、綿は糸になります。同様に、アートマと知恵は異なりますが、アートマの知恵はアートマから発せられます。糸を分解すると綿繊維で構成されているように、アートマの知恵を分解すると、アートマの本質が含まれています。

始めに、神は天空の音を通じて神の知恵を伝えました。これはクルアーン 42:51 に記されており、神が知恵を啓示する方法の一つとして天空からの啓示が挙げられています。神は創造の開始時に天空のアートマを通じて知恵を伝えました。雷鳴の形で提示された知恵は、人間が理解できる言語を持っていなかったため、人間には理解できませんでした。その結果、雷鳴の中の知恵を理解した太陽が、地上の人間に人間の言語で伝えました。やがて、この知恵は地上全体に広がりました。しかし、時が経つにつれて、アダルマ（非法）がダルマ（法）に取って代わり、最初に伝えられた知恵は人々の記憶から薄れていきました。ドヴァーパラ・ユガにおいて、バガヴァーンはクリシュナの形を取り、アルジュナに太陽が伝えたのと同じ知恵

を共有していると告げました。バガヴァッド・ギーターの形で同じ知恵が提示されているにもかかわらず、最初の神聖な経典である人々はその起源を忘れてしまいました。

ヨハネの福音書の最初の三つの文章は、人々が神から授けられた知恵を忘れた後、バガヴァッド・ギーターが語られてから 3000 年後に書かれました。「初めに言葉があった」という文は現在理解されています。第二の文が示すように、雷鳴の形での知恵が天空のアートマから発生したことが認識されています。したがって、「言葉は神とともにあった」と主張されます。さらなる探求により、言葉の音がアートマから生まれたことが明らかになります。綿繊維から撚った糸が生まれるように、アートマの動きはエネルギーに変換され、エネルギーの中の知恵は音の形で現れました。糸が綿繊維を含むように、知恵の音はアートマの力を包含しています。アートマの知恵はアートマの力とアートマ自身の両方の形を取ります。アートマの知恵とアートマは同一であり、それゆえに「言葉は神であった」と言われています。

これまで、神がジーヴァートマとアートマを創造し、創造以前は神が積極的に働いていたことを議論してきました。しかし、創造の行為の後、神はアートマに任務を遂行する力を与え、姿を消したかのように、その存在を知られないものとしました。神はいかなる任務も行うことを控え、この状態で、存在しない者のようになりました。その結果、アートマが神の仕事を行う責任を引き受けました。アートマはジーヴァートマとパラマートマの両方の機能を実行しますが、その行為は他者からは隠されたままです。前述の声明はアートマの全運用プロセスを概説しています。最初にパラマートマが宇宙を創造した時には三つの魂がありましたが、創造後は、ジーヴァートマとアートマの二つの魂のみが認識されています。パラマートマの存在がない中で、アートマはパラマートマの役割を引き受けました。そのため、アートマは神と呼ぶことができます。神（パラ

マートマ）ではないにもかかわらず、アートマは神の任務を遂行し、神の位置を占めています。

アートマの知恵はアートマ自身から生まれます。アートマが神であると主張することで、**言葉（知恵）は神とともにあった**と確認されます。この声明は、アートマを神として考える時に正確です。アートマは神ではありませんが、神がアートマに神として行動する権限を与えたため、神として認められなければなりません。したがって、言葉（知恵）がアートマとして識別される時、同じ知恵（アートマ）が神であると宣言できます。この説明は、ヨハネの福音書の**「言葉は神であった」**という声明と一致します。「言葉とは何か」「言葉はどのようにアートマと結びついているのか」「なぜアートマは神とみなされるのか」といった質問に答えたことで、ヨハネの福音書 1:1 の最初の三つの文の意味が理解できるようになったと思います。このような詳細な説明の後でも理解できない場合、アートマの知恵は把握できないかもしれません。神のシステムを理解するためには、アートマの知恵を理解することが重要です。神の方法を見分けるためには、言葉の知恵の理解から始めなければなりません。この知恵を知れば、知恵がアートマであり、アートマが神であることが明らかになります。

創造時	神（パラマートマ）	プラクリティ	アートマ	ジーヴァートマ
創造後	パラマートマ	プラクリティ	アートマ	ジーヴァートマ
創造後	アートマ（神）	プラクリティ	アートマ	ジーヴァートマ

創造の行為において、神は女性的なプラクリティと男性的なアートマとジーヴァートマの両方を創造するために働きました。最初に、神はプルシャ（男性）として、自身に似た二

つの魂、アートマとジーヴァートマを創造しました。プラクリティ、アートマ、ジーヴァートマの創造後、神は積極的な関与なしに見守る役割へと移行しました。仕事に従事しないという神の本来の性質を考えると、神は存在するにもかかわらず、存在しないかのように見えるかもしれません。ダルマのバランスが崩れ、アダルマが地上で優勢になると、神はダルマを回復するために神の魂をバガヴァーンとして送ります。ダルマを再確立する際、神の代表が送られ、神が直接仕事に関与する必要性がなくなります。一方、アートマは他のすべての任務の責任を引き受けます。その結果、創造後、神は不活性となり、一見無関係になります。この状態の神は、存在しないかのように見えると言えるかもしれません。アートマは神の知覚された空白を埋めるために介入し、効果的に神となり、私たちは神の不在に気付かなくなります。したがって、「**言葉は神であった**」という表現が第二の神聖な経典で提示され、神と言葉の区別を示しています。言葉は本来神ではありませんが、神に変化しました。「**言葉は神であった**」という表現は、言葉（知恵）が神へと変化したことを強調しています。言葉（知恵）がアートマと同一視され、アートマが神とみなされているため、アートマは言葉として神であると主張されます。誰もが神が誰であり、アートマが誰であるかを知ることにおいて間違っています。

実際には、創造の行為の後、神は存在しなくなります。世界に神がいないことを誰も知らないまま、アートマが神の役割を引き継ぎ、ジーヴァートマとプラクリティの両方の義務を遂行します。同時に、アートマは神に似た立場を取ります。創造後、神は形のない、名前のない、割り当てられた任務のない存在へと変化しました。そのような神を存在すると主張するよりも、存在しないと表現する方が正確かもしれません。神の場所に存在する実体がないため、アートマが神の役割を引き受け、これは第三の文の「**言葉は神であった**」という表現で説明されています。多くの人々がこれらの文を聞き、研究しているにもかかわらず、根底にある秘密は知られていません。

アートマ（魂）が神の役割を体現する真実を明らかにするために、「言葉は神であった」と述べられています。アートマは神を体現して何らかの行動を取る時、その行為を「ジーヴァートマ（個人の魂）が行った」または「神が行った」と帰属させ、すべての人に神の存在を確信させます。もし神が存在しないのなら、誰が宇宙を支配する権威を持っているのか、またこの見方が神の知恵または無神論と一致するのかという疑問が生じるかもしれません。これらの問いに対する回答は以下の通りです：私たちは神が神の場所にいないと言っているのであって、神がまったく存在しないとは言っていません。神の行為は未知のままであり、神には名前も、仕事も、形もないため、人間との直接的な関係はないと強調されていますが、私たちは決して神が存在しないとは言っていません。ダルマ（道徳）が脅かされる時、神は秩序を回復するために代表者を送ります。しかし、この場合でも代表者は自身が神であることを明確に主張せず、「バガヴァン（至高者）」という呼び名を採用します。神のアイデンティティと性質を巡る謎は続きます。神は存在しますが、神がどのようなものかを知る人はいません。創造以来、誰も神を見たり直接コミュニケーションを取ったりしていません。世界のあらゆることについて何かを言うことはできますが、神について確定的なことを言える人は誰もいません。クリタ・ユガ（最初の時代）における「アッラー」のような用語は神の無限の性質を表し、「パラブラマ」という呼称は様々な役割を果たすアートマに対する神の優越性を強調します。さらに、「パラマートマ」という用語は神がアートマとは異なることを強調し、「プルショッタマ」はジーヴァートマとアートマに比べて神が最高であることを示しています。神について私もあなたも何も知らないと認めるのが最善です。

2) ヨハネによる福音書第 1 章 9 節

(1:9) すべての人を照らす真の光が世に来ようとしていた。

外界に光があるのは、火が燃えているからです。しかし、この文脈では真の光について言及されています。真の光は火なしに点灯され、すべての人間の中に入り、頭から足まで全身を照らします。火なしの光はただ一つ、それは神（創造主）から来て神によって指定されたアートマです。アートマは全身に意識の光を与えます。アートマが体内に入ると、人体の 25 兆個の細胞すべてがその光で満たされます。各細胞は火なしの燃えるランプとなります。ランプの光には特定の温度があります。人体の温度が 98.4°F であるのは、アートマの光のためです。アートマが体を去ると、体は熱を失って冷たくなります。アートマの光のない体は死体と呼ばれます。24:35 節では、「**アートマは光であり、体は壁龕である**」と述べられています。体を照らすアートマは真の光と呼ぶことができます。

3) ヨハネによる福音書第 1 章 10 節

(1:10) この方は世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を認めなかった。

テルグ語で「ローカ（世界）」という用語は、経験を重ねるものを指します。アートマは経験を重ねる人間の中に存在し、すべての人間の創造者です。しかし、アートマと神を区別することが重要です。神はアートマを創造し、アートマは人間を創造しました。神が直接人間を創造したのではなく、最初は生命のない全プラパンチャ（顕現世界）を形成したことを理解することが重要です。神はまず、プラクリティ（物質的自然）を生み出し、その後アートマに人間の生命を生成し、統治し、終結させる力を与えました。それ以来、アートマは継続的に人間を創造し、人間の生命を支える光として機能し、死と再

生のプロセスを調整しています。にもかかわらず、人間は多くの場合、近くにあり内部に存在し、本質的に神であるアートマの存在に気づいていません。アートマは人間に生を与えるため、アートマは人間の父です。神はアートマを創造したため、神はアートマの父です。アートマは時々神と呼ばれることがありますが、真の神は聖霊であり、アートマは人間の父です。

4) ヨハネによる福音書第 1 章 11 節

(1:11) この方は自分のところに来られたのに、自分の民は受け入れなかった。

「自分のもの」という用語は、彼が創造したすべての者を含みます。アートマは聖霊の命令に従って人間を存在させ、神の知恵という形で彼らに現れ、それは言葉と呼ばれました。アートマが知恵の形で人間に来たにもかかわらず、人間は自分自身の知識を重要視し、しばしば提供された知恵を見過ごしたり無視したりする傾向があります。

5) ヨハネによる福音書第 1 章 12 節

(1:12) しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子となる権利を与えられた。

アートマが提供する知恵を理解する者はアートマを受け入れます。アートマの知恵を知り、アートマを信じる者には、アートマの後継者となる見込みがあります。その結果、「神の子となる権利を与えられた」と述べられています。「神の子」という用語は、アートマの知恵を知っている者を指します。

6) ヨハネによる福音書第 1 章 13 節

(1:13) この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

すべての人間はアートマから生まれます。彼らは女性の血からでも、男性や女性の意志からでもなく生まれたのではありません。

7) ヨハネによる福音書第 1 章 14 節

(1:14) 言葉は肉となって、私たちの間に宿られた。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理に満ちていた。

神アートマ（知恵）は人間のような物理的形態を取り、人間の間に住み、恵みと知恵を放射しました。

8) ヨハネによる福音書第 1 章 18 節

(1:18) いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられる独り子なる神が、神を示されたのである。

「神」という言葉はアートマとパラマートマの両方に使用されます。最後の神聖な聖典では、「アッラー」という用語が両方の神（アートマとパラマートマ）に使用されています。そのため、イスラム教徒は二つの神を認識することができませんでした。この誤りを避けるため、聖書はアートマを父、パラマートマを聖霊と述べています。この文の中で「アドヴィティーヤ・クマールドゥ」という言葉が使われています。この言葉を詳しく考えてみると、「ドヴィティーヤム」は「二番目のもの」を意味します。この「ドヴィティーヤム」という言葉

の前に「ア」という文字があるため、それは「二番目ではなく、最初のものである」という意味になります。「独り子」という用語は、神によって創造された唯一の子を指します。パラマートマ（聖霊）は永遠です。最初にプラクリティを創造した後、パラマートマはすべての生命を存在させるためにアートマと呼ばれる子を創造しました。その唯一の子はアートマです。アートマは聖霊の命令に従ってすべての生命を創造しました。したがって、すべての生命には一人の父（創造された神）しかいません。創造されたアートマの父は聖霊です。節で述べられているように、「神（聖霊またはパラマートマ）を見た者はいない」のです。神（聖霊）には形も、名前も、仕事もないため、誰もパラマートマを見たことがありません。アートマ、独り子は、その知恵を通して見えない神を明らかにします。アートマは偉大な神、パラマートマの心から分離された唯一の独り子です。誰も聖霊を見たことがないため、アートマだけが父である聖霊について語ることができます。

9) ヨハネによる福音書第 1 章 51 節

(1:51) さらに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。空が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見るでしょう。」

これはイエス自身がナタナエルに語った言葉です。ナタナエルがイエスを神の子と呼んだにもかかわらず、イエスは自身を人の子と主張しました。イエスは神の子であることを否定しませんでしたが、代わりに自身を人の子に引き下げました。イエスはナタナエルと他の人々に、彼らが並外れた出来事を目撃することを保証しました。以前強調したように、神のしもべである天使たちは人間世界の支配者として仕えています。これらの天使たち（しばしばブータとグラハ（惑星）と呼ばれる）は空に数十億もの数で存在します。イエスとの出会いの

際、神のしもべたちは彼のアイデンティティを認識し、空から降りて彼の前にひれ伏しました。しかし、多くの人間はイエスが本当は誰なのかを知らず、彼の前にひれ伏しません。同様の言及は最後の神聖な聖典であるクルアーンの 15:28、15:29、15:30 節にも見られます。言及された節では、ナタナエルが天への扉が開いたかのように人の子の周りにブータとグラハが存在するのを目撃するだろうと予言されています。「上り下り」という表現は来ることと去ることを表し、「人の子の上を下る」は天使たちがイエスのもとに到着することを意味します。ナタナエルがイエスを神の子として認めた時、イエスはナタナエルの知恵の視力を認識し、50 節で彼がさらに大きな現象を目撃するだろうと保証しました。51 節が続き、知恵の視力を持つナタナエルは他の人々の通常の視力を超えたものを認識できたことを表現しています。51 節で描写された出来事は神聖な知恵を持つ者だけに見え、イエスの真のアイデンティティについての洞察を提供します。

10) ヨハネによる福音書第 3 章 3 節

(3:3) イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

この聖句は文字通りに解釈すべきではなく、より深い象徴的な意味を持っています。神とその国は誰にとっても物理的な視覚を超えたものです。イエスは明確に、神の国を理解し認識するためには霊的な再生が必要だと伝えました。これは物理的な死と再生を意味するものではありません。文字通りに解釈すれば、神を知ろうとする人は誰もが物理的な死を経験しなければならないことになりますが、これは誤解です。ニコデモは文字通りの解釈を持っていたため、この誤解に基づいて質問をしました。

11) ヨハネによる福音書第 3 章 4 節、5 節、6 節、7 節、8 節

(3:4) ニコデモは言った。「人は年をとってから、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度母の胎に入って生まれることができましょうか。」

(3:5) イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は水と霊（アートマ）によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。

(3:6) 肉から生まれる者は肉です。しかし霊（アートマ）から生まれる者は霊です。

(3:7) あなたがたは、新しく生まれなければならないと私が言ったことを不思議に思ってはいけません。

(3:8) 風は思いのままに吹きます。あなたはその音を聞いても、それがどこから来てどこへ行くのかを知りません。霊（アートマ）によって生まれる者もみな、そのようです。」

人が死んで再び生まれることを再生と呼びます。もし再生が物理的に起こるならば、人のすべての器官は変化するでしょう。そうなれば、神と神の国を見たいという願望も消えてしまいます。器官と願望を保つためには、体は死んではいけません。体には知恵と無知の両方が含まれていますが、体の中の無知は完全に死ぬべきです。人が無知な考えと欲望を取り除くとき、その人は無知において死に、知恵において生まれたと考えられます。無知を取り除き、知恵を得た者はアートマから生

まれたと言えます。人の務めは体の中のアートマを知ることです。アートマを知るためには、アートマの知恵を知らなければなりません。人がアートマの知恵を知るとき、その人はアートマから生まれたと考えられます。体が死ぬとき、人は新しい体を得ますが、新しい体を得ることなく同じ体の中で意志を変えることは、新しい誕生のようなものです。風は思いのままに吹き、それが吹く場所に応じて私たちはその音を聞きます。風が方向を変えるように、人が目的を変えれば、それは彼にとって新しい誕生となるでしょう。アートマを求める者は、同じ体、同じ人生の中でアートマを知ります。アートマを知るために別の人生に行く必要はありません。

12) ヨハネによる福音書第 3 章 13 節

(3:13) パラローカからやって来た人の子のほかは、誰もパラローカに上ったことがありません。

イハローカ、天国（スワルガ・ローカ）、地獄（ナラカ・ローカ）、そしてパラローカは四つの世界の名前です。私たち全員が住んでいる世界（ローカ）はイハローカと呼ばれます。天国と地獄は別々の世界ではなく、どちらも地上にあります。ローカは王国でも領土でもありません。経験の場所と時間を合わせてローカと呼びます。苦難を経験する場所はヤマローカ、ナラカ・ローカ、または地獄と呼ばれます。同様に、幸福を経験する場所はスワルガ・ローカまたは天国と呼ばれます。これらの経験は両方とも地上で起こるため、この世界（イハローカ）は天国でも地獄でもあると言えます。しかし、パラローカは地獄や天国とは異なります。地獄と天国は両方とも経験を伴いますが、パラローカには経験がありません。経験のない状態をパラローカと呼びます。人がカルマを超越するとき、その人は幸福も悲しみも経験せず、パラローカに入ります。これは神と一つになった状態、ムクティ、またはモークシャムと呼ばれます。イハローカにいる人は常に罪とプンヤカルマに縛られ

ています。パラローカにいる者にはカルマがありません。イハローカで死んだ人はパラローカに行くことはできず、イハローカに戻ります。一方、パラローカにいる人は、何らかの必要性でこの世界に来ても、パラローカに戻ります。したがって、パラローカから来たパラローカの住人は、自分の意志に従ってしばらくこの世界に滞在しても、後にパラローカに入ります。そのため、「**人の子以外は誰もパラローカに上ったことがない**」という聖句は、パラローカにいる者が神であることを意味します。神となった者が人間として生まれても、その人はパラローカに戻ります。これがヨハネ 3:13 で表現されていることです。

13) ヨハネによる福音書第 3 章 15 節

(3:15) 人の子は上げられなければなりません。それは、信じる者がすべて、彼を通して滅びることなく、永遠のいのちを持つためです。

神を信じる者は皆、死を経験することなく永遠のいのちを得ます。しかし、「永遠のいのちは彼を通してのみ」と書かれています。パラマートマは体の内外に存在します。**ジーヴァートマがパラマートマと合一するとき、ジーヴァートマはパラローカ、すなわち神の国に達したと言われます。**また、ジーヴァートマが永遠のいのち（モークシャム）を得たとも言えます。この聖句は「神を信じる者は最終的にカルマから解放され、永遠のいのちを受ける」と宣言しています。永遠のいのちを表すパラローカは、人の物理的な場所に関係なく、あらゆる場所に遍在しています。その結果、モークシャムを達成した者は、自分の体の中で聖霊（パラマートマ）と合一します。

14) ヨハネによる福音書第 3 章 17 節

(3:17) 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためです。

神は人々を裁くためではなく、救うために御子を人として世に遣わされました。神から来た人の責任は、神の知恵を人々に教え、彼らを罪から救うことです。彼は人々の罪とプンヤを裁くために来たのではありません。神は裁きのために地上に代表者を遣わしたのではなく、人々を救うために来られました。この聖句は聖書の中で重要です。アートマは人が死ぬときにその人を裁きます。神から来た者は人々にカルマから逃れる方法を教える一方で、アートマは彼らを裁く任務を果たします。

15) ヨハネによる福音書第 3 章 18 節

(3:18) 信じる者は裁かれません。しかし、信じない者はすでに裁かれています。唯一無二の子の名を信じなかったからです。

この聖句で「彼を信じる者」とは、目に見えない神か、神から来た目に見える神の代表者のいずれかを指します。また「神の御子の名を信じなかった」という部分は、神から来た神の代表者を指していると理解すべきです。神自身が人間の姿をとって地上に来られ、人々に知恵を教えました。イエスは認識されないように「**私は神の子、または人の子、または神のひとり子である**」と言いました。ヒンドゥー教では、神が人として地上に来られる時、バガヴァーンと呼ばれます。クリシュナはそのように来られた方であり、それゆえバガヴァッド・ギーターではバガヴァーンと呼ばれています。神の子であるイエスは人として現れましたが、バガヴァーンとも呼ばれるべきです。神が地上で人として化身するとき、ヒンドゥー教徒はその方をバガヴァーンと呼び、キリスト教徒は人の子と呼びます。

最後の神聖な聖典（15:28、29、30）では、神が自分の魂を吹き込んで代表者を遣わすと述べられていますが、イスラム教徒は神が人として来られることはないと信じています。神の代表者である神の子を信じない者は、すでに裁かれています。

16) ヨハネによる福音書第 3 章 19 節、20 節、21 節

(3:19) そのさばきというのは、光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した、という事実です。その行いが悪かったからです。

(3:20) 悪を行う者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のところに来ません。

(3:21) しかし、真理を行う者は、光のところに来ます。その行いが神にあってなされたということが明らかにされるためです。

誰にも知られずに留まるパラマートマは、闇を象徴します。パラマートマによって存在させられたアートマは、真の光を体現します。パラマートマは二人の子を創造しました：体内で光として働く目に見えないアートマと、人間の中で人として化身する別のアートマです。体を照らす目に見えないアートマは子と呼ばれ、人として現れる神のもう一人の子は、特に独り子と呼ばれます。独り子であるイエスは地上に降りてきました。しかし、人々は自分たちの悪行のために、自分たちの闇を愛し、知恵の光であるイエスに近づくことを避けました。

無知な個人は皆、世界に知恵の光をもたらす神の代表者に対して嫌悪感を抱いています。彼らは、神の代表者の前で自分たちの邪悪な行為が暴かれることを恐れ、光を避け、自分たちの行為を隠そうとします。地上で人間の形をとった神の光が自分たちの暗い行いを暴くと予期する者たちは、神の子が現

れた時にその元に来ることを避けます。神の知恵に従う者たちは、アートマ（魂）が体内での全ての行為に責任を持つことを理解しています。彼らは神の子のもとに近づきます。なぜなら、彼らの全ての行為は**神の光の中にあり、知恵に導かれている**からです。しかし、地上で神であるアートマが全ての行為に責任を持つことを認識している人々はごくわずかです。その結果、神の子が現れた時に近づく人々は限られています。地球には自分たちの行為に対して自分だけが責任を持つと信じる個人で溢れているため、彼らは神の子を求めることを控えます。彼らは神の子を避けるだけでなく、地上にまれにしか現れない神の代表者に対して敵意を持ち、苦難を与えます。彼らは神の子を嘲り、数々の試練を与えます。

17) ヨハネによる福音書、第 5 章 19 節

(5:19) イエスは彼らにこう答えた：「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は自分からは何もできません。ただ、父のなさることを見て、同じことをするだけです。父がなさることは何でも、子もそのとおりにするからです。」

この節では、「父と子」について触れられ、「子は父のすることをする」と述べられています。聖霊（神）は唯一であることから、父と子の正体を見分けることが重要です。神には一人の永遠の子がいますが、時折地上に化身する別の子もいます。この節がどちらの子について語っているのかを確認することが重要です。ヨハネ 3:17 は「**神が御子を世に遣わしたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである**」と強調しており、これは地上に現れる神の子のことを指しています。この節（5:19）は、人間の体内で光として存在する子、アートマのことを指しています。アートマは地上で永遠であり、すべての人の体に「**動きの光**」を与えています。これに基づいて、特にこの節を読む際には、聖霊である神が二人の

子のうちどちらについて語っているのかを判断すべきです。ヨハネ 5:19 は、アートマを神の永遠の子として特徴づけ、アートマは聖霊の行為を映し出し、父から継承された任務のみを行い、独自には何も行わないと述べています。

18) ヨハネによる福音書、第 5 章 20 節

(5:20) 父は子を愛し、ご自分のなさることをすべて子にお示しになります。そうです。あなたがたが驚くほどの、もっと大きな働きを、父は子にお示しになるでしょう。

「パラマートマ（聖霊）は子を愛し、自分のすることをすべて子に示す」と誰が言ったのかを尋ねると、これは神の第二の子イエスが地上にいた時に弟子たちに語った言葉であることがわかります。人間として人々の間を歩いていた時、神の子を完全に認識できた者はいませんでした。彼の教えと奇跡にもかかわらず、ある者たちは彼に大きな苦しみと屈辱を与え、最終的に死に至らしめました。しかし、イエスという名の神の独り子が彼らの中におり、「父は彼（アートマ）にこれらよりもさらに大きな働きを示すので、あなたがたは驚くでしょう」と言いました。神はアートマにジーヴァ（個人の魂）を支配し、さらに大きなことを示すように命じました。では、それらの大きなことが何であるかを探ってみましょう。

19) ヨハネによる福音書、第 5 章 21 節、22 節、23 節

(5:21) 父が死者を復活させ、いのちを与えるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。

(5:22) また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。

(5:23) それは、すべての者が父を敬うように子を敬うためです。子を敬わない者は、子を遣わされた父をも敬いません。

ここで注目すべきことがあります。コーランには「二人のアッラー」についての言及がありますが、ムスリムはそれを見つけることができませんでした。同様に、聖書には「二人の子」についての言及がありますが、キリスト教徒はそれを理解できず、一人の子についてのみ語っています。これら三つの節すべてに「子」という言葉が出てきます。これらの節でどちらの子について言及されているのかを判断する必要があります。一度に一人の子についてのみ言及されているため、二番目の子がいることを理解できない人が多くいます。神は、ヨハネ 3:17 で「神が御子を世に遣わしたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである」と言い、ヨハネ 5:22 では「父はすべてのさばきを子にゆだねられた」と述べています。これに基づいて、神には二人の子がいることを理解すべきです。

神はアートマについて、「父である聖霊が死者を復活させ、いのちを与えるように、子もまた死者を復活させ、いのちを与える」と言いました。父が死者を復活させ、いのちを与えるように、アートマは人の死後、前世の罪と功徳に基づいて

次の人生での経験を決定します。したがって、「父のように、子も与えたいと思う者にいのちを与える」と節で述べられています。**「与えたいと思う者」**とは、アートマの観点からは**「カルマによって決定された者」**を意味します。アートマは体内の隠された光として人の次の人生のカルマを決定するため、「さばいた者を復活させる」と節で述べられています。「復活させる」とは「再び生まれる」ことを意味します。

神はアートマに死者を裁き、生命を与える力を与えました。それは、すべての人が聖霊を偉大な神として讃えるように、その子アートマを讃えるためです。人の死の瞬間に、体内の光であるアートマは、前世の罪と功徳に基づいて二度目の人生のカルマを決定し、即座に二度目の人生へと導きます。アートマは人のカルマに基づいて二度目の人生を決定し、再び生命を与えます。アートマがそのような大きなことを行うことを知らない者は、アートマを大きな敬意を持って見ません。アートマを敬わない者は、アートマを遣わした神をも敬いません。そのような無知は、体内にあるアートマも、体の内外にあるパラマートマも敬いません。

20) ヨハネによる福音書、第 5 章 24 節

(5:24) まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきを受けることがなく、死から生へと移っているのです。

先の 5:21、5:22、5:23 節では、体内の動きである魂（アートマ）について論じられました。5:24 節は、イエスという名で人間の形をとった魂について述べています。イエス、すなわち独り子を遣わした聖霊を信じる者は、解脱（モークシャ）を得ます。そのような人は死後すぐに裁きを受けることなく解脱を得ます。

21) ヨハネによる福音書、第 5 章 26 節

(5:26) 父が御自身のうちにいのちを持っているように、子にも自分自身のうちにいのちを持つことを許されたからです。

神である聖霊は永遠に存在します。パラマートマが永遠であるように、その子アートマにも永遠に存在する権威が与えられています。アートマの父である聖霊が、彼にその権威を授けました。最初の神聖な経典では、ジーヴァートマ（個人の魂）をアートマと比較する際、ジーヴァートマはクシャラ（滅びゆく魂）として、アートマはアクシャラ（不滅の魂）として指定されています。

22) ヨハネによる福音書、第 5 章 37 節

(5:37) あなたがたは、一度もその声を聞いたことがなく、その姿を見たこともありません。

ここでの「その」はパラマートマ（聖霊）を指します。パラマートマまたは聖霊として知られる神は、名前、形、特定の任務を持ちません。そのような神は識別可能な形を持たないため、誰も目にしたことがありません。結果として、人間は誰も神を見たことがありません。神は不活性であるため、誰とも交信しません。したがって、生きている人で神を真に見た者はいないと断言できます。神を見たという主張は偽りとみなすことができます。神は目に見えることも、声を発することもありません。

23) ヨハネによる福音書、第 5 章 38 節

(5:38) また、あなたがたのうちには、その御言葉がとどまっていません。その遣わされた者を、あなたがたは信じないからです。

最初の創造者である聖霊は積極的に働きかけることはありませんが、彼の領域に属する特定の責任があります。それにもかかわらず、彼は直接的な行動を控えています。代わりに、神（パラマートマ）は彼の仕事を遂行するために僕たちを任命しています。これら何百万もの僕たちが彼の支配下を構成し、彼のために指定されたすべての任務を実行します。神自身は不活性のままですが、彼の僕たちが彼が行うべき役割を果たしています。しかし、パラマートマには重要な任務があります - 神聖な知恵を伝えることです。この任務には神自身が必要です。なぜなら、彼の僕たちはそれを行うことができないからです。最後の聖典には、**「神は神の知恵を教えるべきである。なぜなら、神以外に神の知恵を知る者はいないからである」**と述べられています。神は変装して神の知恵を教えるために来ます。変装して語るにもかかわらず、その正体は知られることはありません。なぜなら、変装した者を見分けることができる者はいないからです。神が知恵を伝えているにもかかわらず、それが神の言葉であると認識されることはめったにありません。神は賢明であるため、**「バガヴァン」**（神性を持つ者）の姿をとって知恵を伝えます。

神が人間の姿をとって直接地上に来て知恵を教えるときでさえ、その真の正体が明かされることのない特別な人物を送ると予言しています。「神から来る者が神の知恵を教えるだろう」と神自身が神聖な経典で宣言しました。そのため、誰もが神から遣わされた者が神の知恵を伝えることを期待しています。このように、神の受肉は全ての人々に隠されています。トレータ・ユガの時代に神が人間として地上に来たときも、誰も神だと認識しませんでした。ドヴァーパラ・ユガの時代には、

神は人間として来て、バガヴァッド・ギーターの教えを伝え、その中で「私は神である」と宣言しましたが、それでも誰も神だと認識しませんでした。同様に、カリ・ユガの時代にイエスとして受肉した時も、誰も神だと認識せず、多くの困難に直面しました。誰も彼が真の神であることを理解しませんでした。神を信じると公言する人々の中には、イエスを人の子と主張し、神として認めることができない人々もいました。また、イエスを神の子として認識しながらも、その神性を完全に認識することができない人々もいました。

イエスは神の受肉でありながら、この節では自身の真の正体を明かすことなく「あなたがたは神が遣わした者を信じなかった」と述べています。神が遣わした人間を信じる信仰がないことを指摘し、「神の言葉があなたがたの内に住んでいない」と述べています。神が遣わした人間を信じる信仰がないのなら、なぜ神の言葉が人間の心に響かないのでしょうか？その理由は、神自身であり知恵の担い手である神の使者を信じないことにあります。その結果、神を信じない人々の中には神の言葉が根付かないのです。

24) ヨハネによる福音書 第 6 章 25 節、26 節、27 節

(6:25) 群衆は湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつここにお着きになったのですか」と尋ねました。

(6:26) イエスは答えて言われました。「まことに、まことにあなたがたに告げます。あなたがたが私を捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。

(6:27) 朽ちる食物のためではなく、永遠のいのちに至る朽ちない食物のために働きなさい。それは人の子が与えるものです。この方には父である神が認証の印を押されたからです。」

この節では、二種類の食物について強調しています：朽ちる食物と朽ちない食物です。多くの人々は朽ちる食物を求めています。群衆がイエスに近づいて「いつここに来られたのですか」と尋ねた時のように。イエスは「**あなたがたは神の知恵を求めているのではなく、パンを期待して私を探しているのです**」と答えました。さらに「朽ちる食物のために労してはいけません」と諭しました。毎日の食物は、摂取され、消化され、3 時間以内に破壊される朽ちる食物の範疇に入ります。消化とは本質的に破壊の過程であり、摂取された全ての食物は消化管で分解され、木材が灰になるように廃棄物に変換されます。

対照的に、人が耳を通じて受け取り、言葉の形で心に入る知恵は、朽ちない食物とみなされます。**神の知恵は唯一破壊されない食物です。神の知恵を読んだり聞いたりすることは、心のための朽ちない食物を摂取するようなものです。**人の子がこの不滅の食物を与えると示されています。「**この方には**

父である神が認証の印を押されたからです。」「印」とは承認または決定を意味します。神は決定し、その知恵を分かち合うために独り子を遣わしました。節の中の「認証の印」は神の決定または同意を表しています。コーランには、神は自身の知恵を人間に明かさなかったと述べられており、神の知恵を伝える者が普通の人間ではないことを強調しています。神は自身の知恵は神にのみ知られていると主張し、神の知恵を明かすために来る独り子が神自身であることを暗示しています。「神の子」という言葉は人々を誤解させるかもしれませんが、「子」は「神の顕現」として理解することができます。神は直接神として人々に語りかけることを選ばず、子の姿をとります。この解釈は次の節で支持されています。

25) ヨハネによる福音書 第 6 章 32 節

(6:32) イエスは彼らに言われました。「まことに、まことにあなたがたに告げます。天からのパンを与えたのはモーセではありません。天からの真のパンを与えるのは私の父なのです。」

この節でイエスは「**モーセはパラローカからの知恵のパンをあなたがたに与えなかった**」と宣言しました。これは疑問を投げかけます：モーセが教えたダルマ・シャーストラは偽りなのでしょうか？モーセのダルマ・シャーストラにはダルマを伴う知恵が欠けているのでしょうか？もしモーセが教えたことが神の真のパンでないなら、なぜそれはモーセのダルマ・シャーストラと呼ばれているのでしょうか？これらの疑問は様々な考察を促します。一方では、モーセが教えたことがダルマ・シャーストラではないと主張することは誤りです。他方、神の言葉に従えば、モーセが教えたことはダルマ・シャーストラではないと主張することもできます。また、モーセがパラローカからの不滅のパンを与えなかったことも事実です。このような

疑問や疑念が生じ、真の神の知恵を理解するために適切な答えが必要となります。

預言者モーセはキリスト教徒の間でよく知られていますが、多くのイスラム教徒は聖書の「モーセ」という名が1400年以上前に「ムーサ」に変わったことを知らないかもしれません。モーセとムーサが実際に同じ名前であることに注意することが重要です。モーセがダルマ・シャーストラを伝えなかったという言明は真実でもあり偽りでもあり、強力な未知の理由を伴う興味深い曖昧さを呈しています。この啓示は一部の人々を驚かせ、他の人々からは反対を受けるかもしれませんが、その真実は意見とは無関係です。預言者モーセが数千年前に存在したことは事実です。約5000年前、預言者モーセは自身が持っていた知恵を分かち合いました。預言者とは定義上、神の知恵を伝える者であり、モーセは若くして神聖な思想を通じてこの称号を得ました。20歳の時、地上に降臨していたバガヴァン（神）が、「タウラート」として知られる最初の神聖な経典をモーセに与えました。モーセはその経典に含まれる知恵を分かち合い続けました。

それはダルマに基づいていたため、モーセのダルマ・シャーストラとして知られるようになりました。モーセは54歳で亡くなりました。モーセの死後、バガヴァンは彼の体に入り、モーセが一度も語ったことのないダルマを9年間にわたって伝えました。バガヴァンが63歳でモーセの体を去ったにもかかわらず、この事実は知られることなく、人々は預言者モーセが63年間生きてダルマを自ら教えたと信じ続けました。神はモーセに神聖な経典を与えましたが、直接知恵を授けることはありませんでした。そのため、「モーセはパラローカからのパンを与えられなかった」という言明は真実です。神がモーセの体を通じて伝えた知恵は、モーセのダルマ・シャーストラとして知られています。そのため、この節では「パラローカの父である聖霊が真のパンを与えた」と述べています。モーセの実際の寿命は54年でしたが、神がモーセの生命を63年まで延長

したことを誰も知りませんでした。これらの全ての神秘は、私の経典「**クリシュナ・ムーサ**」で解明されています。

26) ヨハネによる福音書 第 6 章 46 節

(6:46) 神から来た者のほかには、だれも父を見た者はありません。その者だけが父を見たのです。

この節を理解することは困難な課題ではありません。バガヴァッド・ギーター、聖書、コーランを完全に読むと、これらの最終的な神聖な経典の節々が微妙な意味を持っていることが明らかになります。特にコーランの節は他の神聖な経典を超える深さを持ち、多くの人々にその意味を把握することが難しくなっています。聖書の節は一見単純に見えるかもしれませんが、その真の現実は多くの場合理解を超えています。その結果、神は私たちを通じて全ての節の包括的な理解を提供しています。

聖霊として表される神は、創造の前も後も存在します。神は第一の神です。神の真の姿や本質は人間には知られていません。最後の神聖な経典であるコーランでは、第一の神はアッラーと名付けられ、第二の神であるアートマもまたアッラーと呼ばれています。したがって、パラマートマは第一のアッラーであり、アートマは第二のアッラーです。第二の神聖な経典である聖書では、パラマートマは神として指定され、アートマは父として呼びかけられています。聖霊がアートマの父であり、アートマが人間の父であることを認識することが重要です。コーランはパラマートマとアートマの両方が神であることを確認していますが、聖書は一方を神、もう一方を父として区別しています。人類の父がアートマであり、アートマの父が聖霊であることを理解することが重要です。この節は、人間は誰も父（アートマ）を見たことがなく、アートマの本質を知らないことを強調しています。**しかし、アートマは神から生まれた唯一の存在であるため、その父である聖霊を目撃しています。**

対照的に、ジーヴァートマ（個人の魂）は自身の父であるアートマを一度も目撃したことがありません。

27) ヨハネによる福音書 第 7 章 37 節、38 節

(7:37) 祭りの最後の大いなる日に、イエスは立って、大声で言われました。「だれでも渇いているなら、私のところに来て飲みなさい。」

(7:38) 私を信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川々が流れ出るようになります。」

この節は微妙な意味を持っています。渇いた人が自然に水を求めるように、知恵を求める人々の追求は渇きに例えられています。節では「知恵に渇く者は私のところに来て渇きを癒しなさい」と述べています。誰かがイエスのもとに来て神聖な知恵を受け取ることは、イエスから知恵の渇きを満たすようなものです。イエスを信じる者は完全な神聖な知恵を得て、知恵の貯蔵庫となり、それを他者と分かち合います。イエスは彼らの内から生ける水の川々が流れ出ると宣言しました。ここでの生ける水は神聖な知恵を象徴し、それは人間に解脱（モークシャム）を授け、永続的な状態に保ちます。そのため、知恵は生ける水と呼ばれています。人間が口を通じて水を飲むことで肉体的な渇きを満たすように、同様に耳を通じて神聖な知恵を聞くことで知性（ブッディ）を養うべきです。

28) ヨハネによる福音書 8 章 12 節

(8:12) イエスは再び人々に語りかけて言われた。「私は世の光である。私に従う者は決して闇の中を歩むことがなく、命の光を持つであろう。」

神（聖霊として知られる）は、その支配と働きを他者を通して実行するためにアートマを創造した。神はアートマを自身の息子と宣言し、その任務を遂行する力を与えた。アートマは人間の生命を取り扱う権限を受け、前世のカルマに基づいて判断を下し、その再生を促進する。裁判官としての役割において、アートマは各個人のカルマに従って行動する。人間のカルマへの絡み合いは彼らの思考に影響を与え、アートマはこのカルマに応じて、個人が求める無知を与える。その結果、時間とともに、地上では非ダルマ（アダルマ）が増加する。

聖霊、すなわち神は、人間の関心とアートマがもたらす無知によって非ダルマが発生した時、ダルマを促進し非ダルマを抑制するために、バガヴァンとして人間の姿で地上に受肉しなければならない。神が人間の姿をとる時、その者はバガヴァンと呼ばれる。この受肉は、自身の神性を明かすことなく神聖な知恵を教え、しばしば神の子として言及され、神が父として位置づけられる。この観点によれば、創造主である唯一の神がおり、二人の息子を持つ––一人は人間の内なる永続的なアートマとして、もう一人は人間の姿をした一時的な息子として。最初の息子（アートマ）が人間の内で非ダルマを発展させる時、二番目の一時的な息子が人間として受肉し、ダルマを伝える。このように、二人の息子を持つ唯一の神が存在する。イエスの姿をとった息子は「**私は世の光である**」と宣言した。知恵は知恵の火（グニャーナ・シャクティ）に変容し、人間のカルマを焼き尽くす。知恵の火を体現するイエスは、知恵の光である。彼は人類に知恵を教えるために来訪し、彼の知恵に従い理解する者は無知ではなく知恵の中に住むであろう。それゆえイエスは「私に従う者は決して闇の中を歩むことがなく、命の光

を持つであろう」と宣言した。人間の姿で受肉する神のみが、知恵の光を授け、ダルマを確立することができる。

29) ヨハネによる福音書 8 章 14 節

(8:14) イエスは答えた。「たとえ私が自分自身について証しをしても、私の証しは真実である。なぜなら、私は自分がどこから来て、どこへ行くのかを知っているからである。しかしあなたがたは、私がどこから来て、どこへ行くのかを知らない。」

イエスは、その外見において、特別な特徴のない普通の人間のように見えた。プラクリティでできた身体に宿る個人として、すべての存在の外見は同じように見える。イエスもまた、自身を普通の人間として示した。長老たちの間には、シロアリ塚にどんな蛇が住んでいるかは誰にもわからないという諺があり、これは身体内のジーヴァの神秘的な性質に例えられる。生まれたすべてのジーヴァは、アートマによるカルマに基づく判断に導かれ、どこかから身体に入ってくる。カルマを完了し死を迎えると、ジーヴァはアートマの判断の下で新しい身体に入る。身体に宿っているにもかかわらず、ジーヴァは各新生における自身の起源を認識していない。マナス（心）は記憶を担当する器官だが、それも各生命とともに死に、前世の記憶は失われる。その結果、例えば 40 歳の個人は、現在の生の最後の 40 年間しか覚えておらず、数多くの前世については覚えていない。

このプロセスは人間だけでなく、すべての生き物に当てはまる。イエスは普通の人のように見えるかもしれないが、同じ循環的プロセスが彼に当てはまるかどうかを考慮することが重要である。イエスはイスラエルで生まれ、これは彼が他の場所から来たことを示している。しかし彼は自身の起源を意識しており、「**私は自分がどこから来たのかを知っている**」と述べた。死後の未来の生を意識していない普通の個人とは異な

り、イエスは死後の目的地を鋭く意識していた。イエスと普通の人との間のこの明確な違いは、イエスの特異性について問いかけることを促す。この問いへの答えは最高の知恵を含んでおり、イエスが普通の人間ではなく、特定の目的を持って生まれたことを明らかにする。

誕生前に定められた目的を持って生まれた個人は、「目的のために生まれた者」と呼ばれる。いかなる人間もそのような誕生前の目的を持っていない。対照的に、神は地上にダルマを確立するという特定の意図を持って生まれる。神のみが、人間ではなく、ダルマを確立する能力を持っている。神は永遠で不変であり、生死に影響されず、一貫した記憶を保持する。神が地上に変装した人間として受肉し、ダルマについての教えを伝え、去る時、普通の人間に共通する運命である死後の再生を経験しない。死において、人間のマナス（心）は破壊されるが、神は死ぬことも他の場所で生まれることもない。神は人間として独特の変装を取り、その目的を果たし、その後起源に戻る。したがって、この節でイエスは「**私は自分がどこへ行くのかを知っている**」と宣言し、神の存在と目的の独特な性質を強調した。

人間は神の所在や性質についての知識を欠いている。神が人間として受肉する時、その起源は不明のままである。通常の人間の誕生とは異なり、神の誕生は独特である。神は他の場所で死んだ後、別の場所で再生することはない。遍在する神は、子宮の中にも存在し、その形を変容させ、赤ちゃんとして生まれるように見える。神が生まれる場所に神自身が存在するため、その起源を特定することは困難となる。神が遍在することを知らない者は、イエスがどこから来たのかを知らないままである。さらに、神が異なる形を取った後の目的地も不明のままである。したがって、この節でイエスは「**あなたがたは私がどこから来て、どこへ行くのかを知らない**」と述べ、神の存在と動きの神秘的な性質を強調した。

30) ヨハネによる福音書 8 章 19 節

(8:19) そこで彼らは尋ねた。「あなたの父はどこにいるのか。」イエスは答えた。「あなたがたは私のことも、私の父のことも知らない。もしあなたがたが私を知っていたなら、私の父をも知っていたはずである。」

神は存在するのか。もし存在するなら、神はどのようなものか。神はどこにいるのか。これらの質問への答えを知れば、父と子が誰であるかを理解できるだろう。神は一人だけだが、子がどこから来たのかを知るべきである。「父」と「子」という言葉は聖書で頻繁に使用される。「父」は神を意味することを理解すべきである。この用語は聖書で神を指すために使用された。コーランでは神は「アッラー」と呼ばれ、バガヴァッド・ギーターでは神は「パラマートマ」と呼ばれる。これらの言葉は異なるが、すべて神を意味する。神の本質は「父」という用語の中に見出されるべきである。イエスが地上にいた時、パリサイ人は彼の父について尋ねた。イエスは「あなたがたは私も私の父も見ていない」と答えた。パリサイ人は、イエスが目の前にいたにもかかわらず、彼について尋ねなかった。彼らはイエスの肉体の父について知りたがり、イエスの父が神であることを理解していなかった。イエスが自身と父について直接語った時、彼らは驚いたかもしれない。彼らはイエスを直接見ていると考え、知られていない父について調べるよう彼に求めた。そこでイエスは「あなたがたは私も私の父も見ていない」と言った。私たちはその言葉の意味を理解する必要がある。

イエスの父は聖霊である。聖霊の子であるアートマは、すべての身体に存在し、その働きを統治している。父として言及される聖霊と、子として知られるアートマは、常に存在している。パラマートマとして言及される聖霊は永遠であり、

創造以前から存在していた。聖霊の子であるアートマは、創造以後、すべての身体に存在している。

永続的な子であるアートマの他に、神（聖霊）には時折地上に来る「独り子」と呼ばれる別の子がいる。永続的な子（アートマ）と一時的な子（独り子）の間には重要な違いがある。例えば、アートマが通常の人間の身体を持つ時、その身体には別のジーヴァートマがある。身体全体がアートマに属し、アートマが身体の頭であるにもかかわらず、ジーヴァートマもアートマと共に身体に宿り、身体は自分のものだと考える。一時的な子、独り子が身体を持って地上に来る時、その身体にはジーヴァートマが存在しない。普通の人の身体では、神とアートマは異なる。アートマがその身体でのすべての任務を遂行し、神は働かない。しかし独り子の身体では、パラマートマ（神）がアートマとして宿り、アートマの形で任務を遂行する。独り子の身体にはジーヴァートマが存在しないため、アートマとして行動する者もジーヴァートマとして行動する。独り子の身体にいる者は神であるが、ジーヴァートマのふりをする。**変装して独り子として来た者は聖霊（神）である。その神がジーヴァートマとして行動している。**神の永続的な子と一時的な子の間には多くの違いがある。

ほとんどの人々は、神に永続的な子と時折来訪する独り子がいることを知らないと言える。知恵を得ることで、アートマの存在とアートマの知恵を理解できるが、独り子を認識することは困難である。多くの人間の中から独り子を識別することは難しい。それゆえ、トレータ・ユガ、ドヴァーパラ・ユガ、カリ・ユガに来た独り子を誰も識別できなかった。イエスはカリ・ユガにおける神の独り子であったにもかかわらず、人々は彼を神の第二の子として認識できなかった。彼が神の子であると宣言したにもかかわらず、人々は彼を認識できず、多くの侮辱と拷問を加えた。ドヴァーパラ・ユガとカリ・ユガに来た者たちが「私は神の子である」と宣言したにもかかわらず、人々は彼らを神の子として認識できなかった。トレータ・

ユガに来た者が神の子であったと断言することを躊躇する。その日、神自身が子として変装して来て、地上で知恵を伝えた。彼は偉大なグニャーニ（知者）として知られ、知恵を教えたにもかかわらず、人々の間で邪悪な人物として描かれたため、私も彼がバガヴァンであったと言うことを躊躇する。しかし、「**ラーヴァナ・ブラフマは独り子である**」と言うことは恐れない。

ドヴァーパラ・ユガにおいて、クリシュナは神(バガヴァーン)として現れました。バガヴァーンと神の一人子は同じです。しかし、クリシュナは狡猾だと描かれたため、今日でも多くの人々は彼の偉大さを理解していません。神が人間の姿に身を隠して現れ、神聖な教えを説いたにもかかわらず、人々はその教えの知恵に注目せず、その時期の彼の行動を詮索することに終始しました。何百万人もの中でほんの一部の人々だけがその知恵を認識し、クリシュナが神であると宣言しましたが、大多数は彼を悪く言いました。ドヴァーパラ・ユガでのクリシュナの化身を認識できなかった人々は、カリ・ユガで神の子としてのイエスを認識することも困難でした。クリシュナとイエスは、人々が彼らの教えを認識できないかもしれないと予期していたため、両者とも「**我々は神である**」と述べ、それによって人々が彼らの知恵を認識できると信じていました。同様に、イエスは「あなたがたは私も私の父も知らない」と述べ、神とイエスが同一であることを人々に悟らせようとしました。

神への献身を主張する人々は、しばしば自分たち以上の知恵を持つ他者に出会うと皮肉を込めて話します。パリサイ人たちもイエスに対して同じような態度で話しかけました。父なしにマリアから生まれたイエスを知っていた彼らは、「あなたの父はどこにいるのか」と尋ねました。イエスは彼らが献身的に尋ねているのではなく、彼を嘲笑っているのだと理解していました。彼は「**あなたがたは私も私の父も知らない**」という意味深い答えを返しました。彼の言葉を正しく理解する人は、目に見えるイエスと目に見えない神が一つであることを理解す

るでしょう。イエスはまた「**もしあなたがたが私を知っているなら、私の父も知っているはずだ**」とも述べました。しかし、彼の言葉を聞いた人々は、彼が何を言っているのか理解していなかったと言えます。もし彼らが彼のメッセージを理解していれば、その日にイエスが誰であるかを認識していたはずです。彼らは彼が普通の人間ではないことを理解していたはずです。イエスの言葉にもかかわらず、彼らは彼を普通の人間のように扱いました。彼らはイエスについて何も特別なことを知らなかったようです。

31) ヨハネによる福音書 8 章 21 節

(8:21) イエスは再び彼らに言った。「私は去って行きます。あなたがたは私を探すでしょう。そして、あなたがたは自分の罪の中で死ぬでしょう。私の行く所に、あなたがたは来ることができません。」

　　　イエスは人々に自分自身について知らせるために多くの言葉を語り、上記の言葉はその一例です。「**私は去って行き、あなたがたは私を探すでしょう。私の行く所に、あなたがたは来ることができません**」とイエスは人々に言いました。表面的には、この節は特に深い意味を持っているようには見えないかもしれません。誰かが他人に知らせずにどこかへ行ってしまうと、私たちはその人がどこへ行ったのか分からず、探しても見つけられないかもしれません。情報がないということは、その人が行った場所に私たちは行けないということです。この一般的な出来事にどんな知恵があるのか、不思議に思うかもしれません。別の角度から見てみましょう。若い頃、私たちは「泥棒と警察」というゲームをよくしました。このゲームでは、泥棒が隠れ、数分後に警察が探し始めて捕まえようとします。泥棒を捕まえるためには、警察は泥棒が隠れている場所に行かなければなりません。警察が隠れ場所にたどり着けない場

合、他の場所を探しても泥棒を見つけることはできません。ある日、私が 10 歳の時、私たちはこのゲームをしました。私が泥棒役で、他の人たちが警察役でした。隠れる前に、私は「私は行きます。そしてあなたがたは私を見つけられないでしょう」と言いました。彼らは自信を持って「10 分で見つけてみせる」と答えました。そこで私は「私の行く所に、あなたがたは来ることができません」と付け加えて、隠れに行きました。

2 分後、警察役が追跡を始めましたが、30 分経っても私を見つけることができませんでした。あらゆる場所を探しましたが、私が隠れている場所にたどり着くことができませんでした。その日、私は家のプージャ・ルーム（祈りの部屋）に座っていて、ドアを閉めていました。警察役の人たちは私が隠れていた家を含めてあらゆる場所を探しましたが、プージャ・ルームには来ませんでした。ドアが閉まっていて、中を探さなかったからです。最初、私はこの節が「泥棒と警察」のゲームに似ているだけで、特別なものは何もないと思っていました。しかし、後になって、節の中の「**あなたがたは自分の罪の中で死ぬでしょう**」という言葉に重要な意味があることに気づきました。ゲームに似ていたとはいえ、そこには深い知恵が含まれていることを発見しました。そこで私はこの言葉の意味を包括的に理解しようと掘り下げました。以下がその意味です。

イエスはある期間、地上で誰の目にも見える存在でしたが、残念ながら誰も彼を信じませんでした。彼が普通の人間ではないことを証明するために多くの奇跡を行いました—目の見えない人に視力を与え、足の不自由な人を歩けるようにし、らい病を治し、さらには死者を生き返らせて罪を赦す能力を示しました—しかし、人々は彼の真の偉大さを認識できませんでした。イエスの生前に彼を認識しなかった人々でさえ、後に苦しみからの救いを求めて彼を探すでしょう。しかし、いったん彼が去ってしまえば、もはや誰の目にも見えなくなるため、彼を探しても意味がありません。自分の罪の中で死ぬ人々は、イエスが何処へ行ったのか分からないため、彼によって罪を赦さ

れることはできません。生前にイエスを否定した人々が後に彼を神として認めたとしても、その罪は赦されないでしょう。イエスはこれらすべてのことを前もって人々に告げていました。イエスが「私は去って行きます」と言った時、誰も彼にもう少し留まるよう頼みませんでした。代わりに、人々は彼を十字架につけろと叫び、それが彼の十字架上での死につながりました。

32) ヨハネによる福音書 8 章 23 節と 24 節

（8:23）しかし彼は続けて言った。「あなたがたは下から来た者、私は上から来た者です。あなたがたはこの世の者、私はこの世の者ではありません。

(8:24）私はあなたがたに、あなたがたは自分の罪の中で死ぬと言いました。もしあなたがたが、私がその者であることを信じないなら、確かにあなたがたは自分の罪の中で死ぬでしょう。」

これら二つの節のうち、24 節は 21 節に似ていますが、23 節は独特です。イエスは人々に彼が普通の人間ではないことを認識する二度目のチャンスを与え、「あなたがたは下から来た者、私は上から来た者です。あなたがたはこの世の者、私はこの世の者ではありません」と言いました。この節は二つの部分に分かれています：最初の部分は「あなたがたは下から来た者、私は上から来た者です」で、二番目の部分は「あなたがたはこの世の者、私はこの世の者ではありません」です。最初の部分「あなたがたは下から来た者、私は上から来た者です」に基づくと、クリタ以来、下の人々と上の人々という二種類の人々が存在してきました。これら二つの名前―下と上―が存在するようになった理由があります。人々が下と上のカテゴリーに分けられる方法は次の通りです。

クルータ・ユガは 1,728,000 年続きます。クルータ・ユガの最初の千年の間に、人々の間に二つの部族が現れました - グナーニ（知恵を持つ者）と無知な者です。その時期、地上にはごくわずかなグナーニしかおらず、無知な者は数え切れないほどいました。その時代、世界の人口はわずか約 3,000 万人で、インドの人口は 30 万人を超えませんでした。太陽が地上に降り立ち、マヌという名の人物に神聖な知恵を伝えました。マヌから直接知恵を学んだのはわずか 2、3 人だけで、他のすべての人々はこれらのグナーニたちを深く尊敬し、彼らから神聖な知恵を学びました。当時、人々はグナーニたちを非常に尊敬し、彼らを上座に座らせ、自分たちは床に座って知恵を聞きました。グルに上座を与え、床に座るのが習わしでした。これに基づいて、イエスは「あなたがたは下から来た者、私は上から来た者です」と言いました。これは「私はあなたがた全員の教師（グル）である」という意味です。

教師が上座に座り、知恵を求める人々が床に座るのが一般的でした。教師たちは、人々に対して彼らが教師たちの下にいて、教師たちが上にいることを伝えていました。神聖な知恵を伝える教師たちは、ブラフマ・ヴィッディヤの教師として知られていました。「ブラフマ」は偉大なという意味で、「ブラフマ・ヴィッディヤ」は偉大な教えという意味です。ブラフマ・ヴィッディヤの知識を持つ教師たちはバラモンと呼ばれました。当時、バラモンは教師を意味していました。インド全土でバラモンと呼ばれる教師はわずか 2、3 人でした。これらのバラモンたちは残りの人々を「下の人々」として分類していました。知恵のない者はすべて「下の人々」と呼ばれました。このように、国全体に「下の人々」がいました。しばらくしてこの区分に基づいてカースト制度が始まりました。カースト制度が形作られる中で、ブラフマ・ヴィッディヤを知る者たちは「我々はバラモンである」と言い始めました。同様に、無知な者たちは「あなたがたは我々の下にいる（テルグ語でマー・ディグヴァヴァル）」と呼ばれました。こうして、上（テルグ語

でエグヴァヴァル）と下（テルグ語でディグヴァヴァル）という二つの部族が形成されました。「下（マーディグヴァ・ヴァール）」という言葉は今日でも存在しますが、人々はその歴史的な意味を完全には理解していないかもしれません。時が経つにつれて、「マーディグウヴァ・ヴァール」という用語はマーディガ・カースト（指定カースト）に変化し、現在では下位カーストとして数えられています。

カースト制度が起源を持った時、2つのカーストがありました—バラモンとマディガ（指定カースト）です。「マディガ」という用語は、当初、無知で知恵が欠けているとみなされた人々を指すために使用されていました。しかし、時間とともに、知恵が欠けている人々の中でも数多くのカーストが生まれ、分類されなかった人々は依然としてマディガと呼ばれ続けました。歴史を振り返ると、マディガは元々カーストではなく、2、3人の教師によって無知な人々に与えられた名前でした。これに基づくと、知恵が欠けている全てのカーストの人々をマディガと呼ぶことができます。人々は不明な歴史によってカーストに分けられています。残りの人々をマディガと呼ぶのは不当で無知です。2,000年以上前、イエスも「上」（エグウヴァヴァル）と「下」（ディグウヴァヴァル）という言葉を使いました。彼は「あなたがたは下からの者、わたしは上からの者である」と言い、無知な人々を指していました。「上」と「下」という言葉は、「私は知者であり、あなたがたは無知である」ということを示すために使われていると理解すべきです。

イエスの二つ目の言葉は、「あなたがたはこの世のものである。わたしはこの世のものではない」というものです。テルグ語で「ローカ」（世界）は「経験を持つ」という意味です。経験に基づいて2種類の人々がいます。経験を持つ人々はこの世界に属し、経験を持たない人々はこの世界に属しません。一般の人々は世界のあらゆる経験を楽しむので、彼らはこの世界の住人です。経験を持たないイエスは、自分がこの世界

のものではないと言いました。彼は人間のように見えますが、人間のような経験は持っていません。イエスは人間の体を持っていても、他の人々のようなジーヴァートマ（個人の魂）ではありません。彼がジーヴァートマでない時、カルマはありません。そのため、彼はカルマに基づく経験を持ちません。パラマートマ（最高の魂）は特別にイエスを送りました。言い換えれば、聖霊がイエスの姿で来たのです。霊的な法則によれば、そのように言うべきではありません。パラマートマは特別にイエスを創造して送りました。したがって、イエスは聖霊の子と呼ばれるべきです。イエスはジーヴァートマではないため、彼には経験がないと言えます。イエスがジーヴァートマであれば、彼を聖霊の子と呼ぶべきではありません。ジーヴァートマはアートマ（魂）の子です。アートマの父は聖霊です。したがって、ジーヴァートマは聖霊の孫となります。イエスは神から神によって送られたため、神の子と呼ばれます。イエスはまた明確に独り子と呼ばれました。アートマは聖霊の子です。独り子は必要に応じて地上に降りる一時的な子です。したがって、一時的な子はアートマのように聖霊の子となり、ジーヴァートマのように孫とはなりません。ジーヴァートマは経験を得ます。したがって、経験を持つジーヴァートマはこの世界のものです。アートマとしてのイエスは経験を持たないため、この世界のものではありません。彼はパラローカからのものです。

イエスは人々に彼を並外れた人物として認識する二度目の機会を与え、これらの節（ヨハネによる福音書 8:23, 24）を引用しました。しかし、人々はイエスの偉大さを理解できず、彼を普通の人間とみなしました。したがって、彼らはイエスや彼の教えによって罪を赦されることはできません。聖霊の子であるイエスは人々の中に来て、自分を知らしめるために多くの言葉を語りました。彼は、以前にヨハネによる福音書 8:21 で述べたように、彼を見出して信じることができない人々は罪の中で死ぬであろうと二度目に繰り返しました。彼は最後の言葉を語ることで三度目の機会を提供しました。イエスは人々が

彼を識別できるように３つの節を繰り返しました。彼を認識しない人々は罪の赦しを得られないと警告しました。彼が何を言ったのか、三番目の節を見てみましょう。

33）ヨハネによる福音書 8 章 24 節

(8:24) 「それゆえ、わたしはあなたがたに、あなたがたは自分の罪の中で死ぬであろうと言ったのである。もしわたしがそれであることをあなたがたが信じないならば、あなたがたは自分の罪の中で死ぬであろう。」

この節がイエスが誰であるかを知る三度目の機会を与えたことが分かります。この節で、イエスは直接的に公衆に自分が誰であるかを告げました。彼は「**わたしが聖なる精神であり、創造主であることを信じない者は、その罪の中で死ぬであろう**」と言いました。イエスは自ら自分が誰であるかを宣言しました。最初に、彼は「**わたしは去って行く。あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない**」と言って、彼らに彼を理解する機会を与えました。二番目の節で、彼は「**あなたがたはこの世のものである。わたしはこの世のものではない**」と言って、彼が誰であるかを理解するためのより多くの詳細を提供しました。二番目の節からイエスが聖なる精神であることが理解できます。三番目の節で、彼は「**わたしがそれであることを信じない者は罪から逃れることができない**」と言って、さらなる明確さを提供しました。三番目の節で、イエスは「**わたしは神である**」と宣言しました。それにもかかわらず、人々はイエスを普通の人間として認識し、彼が神であることを理解できませんでした。しかし、イエスの言葉に驚く者もいました。彼らは信じなかったものの、彼が誰であるかを尋ねました。イエスは、彼が普通の人間ではないことを理解させるために、これら 3 つの節（ヨハネによる福音書 8:21, 22, 23）を用いて答えました。それでも、彼らはこれを理解せず、「あなたは誰です

か？」と尋ねました。イエスは「**わたしは初めからあなたがたに言っていることそのものである**」と答えました。

　　さらに、彼は「わたしを遣わした方は真実であり、わたしは彼から聞いたことを世に語るのである」と言いました。しかし、人々は彼が父（聖霊）について話していることを理解しませんでした。彼はそれほど多くを語ったにもかかわらず、人々はイエスを認識しませんでした。ある者は彼を普通の人間として扱い、他の者は普通の人間よりも劣るものとして扱いました。イエスはそれらの人々について他のことも言いました。

34）ヨハネによる福音書 8 章 28 節

（8:28）そこでイエスは言われた。「あなたがたは人の子を上げてから、わたしがそれであることを知るであろう。また、わたしは自分からは何もせず、ただ父が教えられたままを語っているということも分かるであろう。」

　　この節には「**人の子を上げる**」という句について混乱があります。この句を理解できない人もいるかもしれません。この句を正しく解釈するためには、「あなたがたがイエスを上げる時」ではなく、「人々がイエスを頭上に上げる時」として読むべきです。「なぜ人々がイエスを頭上に上げるのか？」と尋ねる人もいるかもしれません。答えは、**イエスは**私たちの体の上に**ある頭で理解されるべきだということです。知性（ブッディ）**でイエスを理解する者は、イエスが聖霊であることを知るでしょう。さらに、この節は、イエスが教えている神聖な知恵は彼自身のものではなく、聖霊の指示に従って教えているということを明らかにしています。

　　頭の中のブッディでイエスを理解すべきだと述べる代わりに、この節は人々がイエスを上げたと言っています。体の中の**ブッディ**でイエスを理解すれば、イエスがパラマートマ

（聖霊）であることが分かります。人々がイエスが神であることを理解していない限り、前の３つの節で述べられているように、「人々の罪は赦されず、彼らは自分の罪の中で死ぬ」のです。イエスの言う通りに理解すれば、イエスが神であることが分かります。聖霊が自らの知恵を教えるために人として受肉するという秘密が明らかになります。イエスが神であることを学ぶと、イエスが語る全ての知恵をイエス自身が語っていると考える人もいるかもしれません。しかし、人々が考えるようにそう言うことはできません。なぜなら、「わたしがそれである」と言った後で、彼は別の言葉を語ったからです。

イエスは「わたしは自分からは何もせず、ただ父が教えられたままを語っている」と言いました。これは父とイエスが異なるという印象を与えるかもしれません。

二つの方法で表現する理由は、イエスが人間であったという事実に根ざしています。神は本来の形では目に見えず、力を体現しています。神が人間の形を取る時、個人が知性（ブッディ）でこの真理を認識すれば、聖霊とイエスが同一であることを理解するでしょう。しかし、神が人として受肉する時、その受肉が「わたしは神である」と公に宣言することは霊的な法則に反します。目に見える人を神として認識できたとしても、この真理は霊的な法則によって公に明かされるべきではありません。この霊的な規則に従って、イエスは「わたしは自分からは何もせず、ただ父が教えられたままを語っている」と述べ、霊的な法則の原則に従いました。

イエスは「わたしは父が言ったことを言っている」と言いました。「わたしは自分からは何もしない」と「神がすべてを行う」という両方の句は、同じことを意味します。人々がイエスが聖霊であることを認識する時、彼らの罪は赦されるでしょう。イエスが聖霊であることを理解するのは賢明ですが、聖霊がイエスであると言うのは霊的に正しくありません。したがって、イエス自身が「わたしが神であることを知るまで、あ

なたがたの罪は赦されない」と言い、「わたしがそれである」と言って、人々がイエスが誰であるかを理解できるようにしました。霊的な法則に従って、彼は最終的に「わたしは父が私に告げたことをすべて行っている」と言いました。したがって、この節でイエスが二つの方法で語ったと考えるべきではありません。節には「わたしは神である」と「わたしは神が言うことを行っている」と書かれていますが、両方とも同じ意味を伝えています。これが理解されなければ、イエスが矛盾したことを語ったと考えるかもしれません。知恵を理解する者は、神が人として来ることを認識できますが、特定の人が神であると宣言すべきではありません。したがって、イエスも一つの言葉で「わたしは神である」と言い、別の言葉で「わたしの父は神である」と言いました。両方とも真実です。さらに、イエスは人々に次のように言いました。

35）ヨハネによる福音書 8 章 29 節

(8:29) 「わたしを遣わした方はわたしと共におられる。父はわたしをひとり残されなかった。わたしは、いつも父のみこころにかなうことを行うからである。」

このみことばは、イエスと聖霊が同一であることを示していると言われています。これを裏付けるように、イエスは「私を遣わした方は私と共にいる」と言いました。これは、イエスを遣わした神が彼の内におられ、聖霊とイエスが同じであることを意味します。人間の体には「意志」と呼ばれるものがあります。イエスは、常に神の意志に従って行動すると言いました。別の言い方をすれば、神の意志が彼の内で働いているということです。これは神がイエスの内におられることの証です。イエスはまた、聖霊が彼を一人にしていないとも言いました。これは、神が彼と共におられ、神が彼自身であるということを言ったようなものです。イエス自身が、彼を神として認識

するためにこれらの言葉を語りました。カリ・ユガにおいて神が「イエス」として来られたにもかかわらず、人々は彼を認識しませんでした。そのため、イエスは自身の偉大さを認識させるためにこれらの言葉を語る必要がありました。そうでなければ、人々はイエスの知恵を理解できなかったでしょう。イエスがこれらの節を語ったとき、ある人々は彼を信じました。

36) ヨハネによる福音書 8 章 53-54 節

(8:53) あなたは私たちの父アブラハムよりも偉大なのですか？彼は死に、預言者たちも同様です。あなたは自分を何者だと思っているのですか？

(8:54) イエスは答えられました。「もし私が自分自身を栄光あるものとするなら、私の栄光は何の意味もありません。私の父、あなたがたが自分たちの神だと主張する方が、私に栄光を与えてくださるのです。」

イエスは人々に自分を理解させるために詳細な説明を提供しましたが、彼らは彼の正体を把握することに苦労し、「あなたは誰なのか？」と尋ねました。それに対してイエスは、「もし私が自分自身を栄光あるものとするなら、私の栄光は何の意味もありません」と述べました。すでに5回も自分について語っていたため、さらに繰り返したり詳しく説明したりすれば、自分の言葉が偽りと受け取られる可能性があることを認識していました。そのため、イエスは「もしこれまで言われてきたことと異なることをもう一度言うなら、あなたがたが神だと主張する私の父が、私に栄光を与えてくださる」と説明しました。この発言は、イエスと人々が神だと主張する彼の父との根本的な一致を強調しています。しかし、霊的な規則に従えば、直接的に自分が神だと主張すべきではありません。そのため、イエスは最初に人々の理解を助けるために「私は神であ

る」と宣言しました。後に、神は彼の父であると説明しました。「二つのことを異なる方法で話したからといって、混乱してはいけません。真理をもって私を理解すべきです」とイエスは述べ、表面的な表現を超えて彼の正体を理解することの重要性を強調しました。

37) ヨハネによる福音書 8 章 55 節

(8:55) あなたがたは彼を知りませんが、私は彼を知っています。もし私が彼を知らないと言えば、あなたがたのように偽り者になるでしょう。しかし、私は彼を知っており、彼の言葉に従います。

イエスは「あなたがたは神を知りませんが、私は神を知っています」と宣言し、多くの人々が彼を普通の人間とみなしていることに対して語りました。このような発言が必要となったのは、イエスと神との特別な関係を明確にするためでした。ある人々は、イエスも他の人々と同じ人間であるのに、どうして他の人々が知らない神を知っていると主張できるのかと疑問を投げかけました。この疑問に答えるため、私たちはイエスが３つの異なる節で「私がそれです」と繰り返し宣言したことを考慮することができます。この発言によれば、イエスは人間の形をしているにもかかわらず、彼の体にジーヴァトマ（個人の魂）を持っていません。代わりに、聖霊が彼の体における唯一のアトマ（魂）として、すべての行動に積極的に関与しています。誤解が生じるのは、人々がアトマをジーヴァトマだと思い込み、イエスが神を知らないかもしれないと考えるときです。しかし、真実は、パラマトマ（聖霊）自身がイエスの体に宿っており、それによって神を知っているのです。聖霊がイエスの意識であるため、別個の知識は必要ありません。イエスは本質的に神を自身の意識として持っているのです。対照的に、普通の人間は体の中に意識として心（マナス）を持っていますが、アトマやパラマトマのいずれの意識も欠いています。パラ

マトマの意識が欠けているために人間は神を知りませんが、イエスは神を意識として持っているため、本質的に神を知っているのです。

もしイエスが「私は神を知らない」と主張したら、それは普通の人間のように彼の中に神の意識が欠けていることを示唆することになります。そのような発言は虚偽に等しいでしょう。そのため、イエスは「もし私が神を知らないと言えば、あなたがたのように偽り者になるでしょう」と宣言しました。独特な点は、聖霊がイエスの体における唯一の住人であり、行動を担当するアトマと経験を担当するジーヴァトマという二重の魂の存在を排除していることです。聖霊のみが存在するイエスの体では、すべての言葉は聖霊から発せられます。したがって、イエスが「私は彼を意識しています。私は彼を知っており、彼の言葉に従います」と表現したとき、これらの言葉は他の人々と同じような方法で話していたにもかかわらず、聖霊から発せられたものでした。外見は普通の人のようでしたが、彼には知られていないことは何もありませんでした。この深い知識の例証は、イエスが長い間死んでいたアブラハムについて語ったとき、周りの人々を驚かせ、質問を引き起こした出来事の中で展開されました。

38) ヨハネによる福音書 8 章 57-58 節

(8:57) 彼らはイエスに言いました。「あなたはまだ 50 歳にもなっていないのに、アブラハムを見たというのですか？」

(8:58) イエスは答えられました。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、私はいるのです！」

イエスがこれらの言葉を語ったとき、彼は約 32 歳で、33 歳になろうとしていました。アブラハムは歴史上の人物で、イエスの時代の人々にとって大祖父のような存在として、イエスより何世紀も前に生きていました。イエスがアブラハムに言及したとき、その場にいたユダヤ人たちは、異なる時代に生まれ死んだ人物について、どのように語ることができるのかと疑問を投げかけました。それに対してイエスは、「アブラハムが生まれる前から、私はいるのです」という謎めいた発言をしました。この主張は、イエスとアブラハムの間にある明確な世代の違いを考えると、周りの人々には欺瞞的に思えました。しかし、イエスが表現したことは、同時代の人々には逆説的に思えたとしても、絶対的な真実でした。

この発言の背後にある真実を探ってみましょう。イエスの物理的な体は約 32 年前に生まれました。しかし、彼の体にはジーヴァトマではなく、聖霊のみが宿っています。もしジーヴァトマが存在していれば、ジーヴァトマは前世の記憶を保持しないため、イエスは前世の記憶を持っていないはずです。対照的に、パラマトマ（至高の魂）はイエスの体に存在し、永遠です。宇宙の創造以前から存在し、アブラハムを含むすべての生命体の創造者です。アブラハムは他の人間と同様に、生まれ、生き、死にましたが、聖霊はその証人でした。アトマがアブラハムに生命を与える一方で、神（パラマトマ）は全行程を

目撃しました。神は究極の証人であり、アトマは行為者であり、ジーヴァトマは人生を経験します。アブラハムはアトマを通じて生まれましたが、究極の証人である神は、アブラハムについてすべてを知っています。パラマトマは、アブラハムが過去に何度生まれ変わり、将来何度生まれ変わるかを知っています。したがって、イエスが「アブラハムが生まれる前から、私はいるのです」と言ったとき、それは彼がアブラハムの誕生前から存在し、彼の死後も存在し続ける永遠のパラマトマとしてのアイデンティティを指していたのです。この発言は、イエスの存在が物理的な生死の制限を超えた永遠のものであることを強調しています。

39) ヨハネによる福音書 9 章 39 節

(9:39) イエスは言われました。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。見えない人が見えるようになり、見える人が盲目となるためです。」

ある人々がイエスを罪人だと非難したとき、イエスによってカルマを取り除かれた人がその言葉を耳にし、以下の情報で応答しました。

(ヨハネ 9:25-38) 彼は答えました。「彼が罪人かどうか、私には分かりません。ただ一つ知っていることは、私は盲目でしたが、今は見えるということです。」そこで彼らは尋ねました。「彼はあなたに何をしたのですか？どのようにしてあなたの目を開いたのですか？」彼は答えました。「私はすでにあなたがたに話しましたが、あなたがたは聞きませんでした。なぜもう一度聞きたいのですか？あなたがたも彼の弟子になりたいのですか？」すると彼らは彼を侮辱して言いました。「あなたは彼の弟子だ！私たちはモーセの弟子だ！私たちは、神がモーセに語られたことを知っています。しかし、この者については、どこから来たのかさえ分かりません。」その人は答えました。「それは驚くべきことです！あなたがたは彼がどこから

来たのか知らないのに、彼は私の目を開いてくれました。私たちは、神が罪人の言うことは聞かないことを知っています。神は、神を敬い、その御心を行う者の言うことを聞かれます。生まれつきの盲人の目を開いたということは、これまで聞いたことがありません。もしこの人が神からでなければ、何もできなかったはずです。」彼らは答えて言いました。「あなたは生まれながらの罪人です。私たちに説教するとは何事か！」そして彼らは彼を追い出しました。イエスは彼らが彼を追い出したことを聞き、彼を見つけて言われました。「あなたは人の子を信じますか？」彼は答えました。「主よ、それはどなたですか？私が信じられるように教えてください。」イエスは言われました。「あなたは彼を見ています。実際、あなたと話している者がそれです。」すると彼は「主よ、私は信じます」と言って、イエスを礼拝しました。これらの出来事の後、イエスは「私はさばきのためにこの世に来ました。見えない人が見えるようになり、見える人が盲目となるためです」と言われました。この発言は、先の出来事に照らして理解することができます。

イエスの発言の目的は、神を信じる者たちは、たとえ神が誰であるかを知らなくても、私を見ることができるということを伝えることでした。神を信じない者たちは、日々イエスと接し、その肉体を見ているかもしれませんが、彼を認識することはできません。そのため、イエスは、不信者たちに自分が神であることを気付かせないために、この世に来たと言ったのです。神が人間の姿を取り、不信者たちの隣に立っていても、彼らは無知な盲目さゆえに、神の子を認識することができません。この盲目さは、神が人間の姿で現れても、神を知ることを妨げる種類の無知です。イエスが、神の化身（神の子）を見る信者は、外見ではなく直感によって認識すると言った時、周りの人々の中には、自分たちも盲目なのかと尋ねる者がいました。イエスは以下のように答えました。

40）ヨハネによる福音書 第 9 章 41 節

(9:41）イエスは言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、罪はないでしょう。しかし、今あなたがたは『見える』と言っているので、あなたがたの罪は残ります。」

39 節で、イエスは信仰を持つ者と持たない者との違いを説明しました。神への信仰を持つ盲目の人は彼を見ることができるが、不信者は物理的に彼を見ることはできても、その真の姿を認識できないと述べました。41 節で、イエスは世俗的な視点で行動する人々についてさらに深く掘り下げています。世俗的な考え方を持つ人々は「私は見ている」と宣言し、自分の行為を自分自身に帰属させ、その結果として行為に対するカルマを積み重ねていきます。神は人間に、神の知恵を理解するために視力を与えましたが、すべての人がその視力を神を認識するために使うわけではありません。肉体的な目を持っていても、霊的には盲目のままの人もいます。世俗的な事柄に関しては、すべての個人は本質的に盲目です。真実は、誰も自主的に世俗的な活動に従事しているわけではないということです。誰も視覚や聴覚を持っているわけではありません。しかし、その固有の欠如にもかかわらず、人々は「私は見ている」と主張し、誤って視力を持っていると思い込み、その結果として罪を負うことになります。人間は霊的に盲目であっても、視力を持っていると誤って信じる時に罪を積み重ねます。イエスは、自分の霊的な盲目さを認識し、何も見ていないという真実を認めることが、罪から解放されることを強調しました。本質的に、自分の霊的な盲目さを認めることは、世俗的な事柄における罪の蓄積を防ぐのです。

神の知恵を欠く者たちは、世俗的な事柄において自分たちが視力を欠いていることに気付いていません。イエスの言葉を理解できないのは、神が視力を与えたのは神に関することを理解するためだけだということを知らないからです。この節

の本質を理解するためには、各個人のジーヴァ（魂）がまず、体の中で盲目なのか洞察力があるのかを認識しなければなりません。真実には、すべての人の体の中のジーヴァは、あらゆる面で完全に盲目です。各ジーヴァは、体は自分のものであり、体におけるすべての行為の行為者は自分であると誤って信じています。しかし、ジーヴァトマには体における独立した主体性がありません。アートマが真の所有者であり、制御者です。アートマは絶え間なく体の中で働いており、実際にはジーヴァは体の中でいかなる任務も遂行していません。視覚、聴覚、完全な機能性を欠いたジーヴァは、あらゆる意味で盲目であり、耳が聞こえず、障害を持っています。体の中の知性（ブッディ）の隣に位置し、知性に到達する情報を認識しますが、ジーヴァは独立して何かを知ることはできません。直接的な知識を欠いているにもかかわらず、ジーヴァは自分がすべてを個人的に目撃したと誤って信じています。アートマが体における活動的な力であるにもかかわらず、ジーヴァは誤ってすべての行為を自分に帰属させます。ジーヴァが誤って行為の責任を主張する時、その行為に関連するカルマの結果に耐えなければなりません。

41）ヨハネによる福音書 第 10 章 18 節

（10:18）誰も私から命を奪うことはできません。私は自分の意志でそれを捨てるのです。私には、それを捨てる権威があり、それを再び取り上げる権威もあります。この命令は私の父から受けたものです。

通常の人がいつこの人生を去るかは誰にもわかりません。一度死んでしまえば、戻ってくることはありません。これはすべての死において明らかです。ジーヴァもまた死において体から離れます。しかし、ほとんどの人は、**ジーヴァが人の生命力とは別のものである**ことを理解していません。多くの人は、ジーヴァと生命力は同じものだと考えています。しかし、

この節で「誰も私から命を奪うことはできない」と言われているように、イエスは異なり、彼の力も異なります。誰もが体の中に自分の生命力を持っていますが、イエスのようにそれを脇に置いたり、再び取り上げたりすることはできません。体の中には多くの内臓器官、生命、ブッディ（知性）、マナス（心）があります。体の中のものはすべて、人間の制御下ではなく、アートマの制御下にあります。したがって、アートマは、人の命を脇に置くか、アートマが望む場所に送るかを決定します。それはアートマの任務だからです。ジーヴァは体の生命力との関係を持っていませんが、アートマは体の生命力との関係を持っています。

イエスは通常のジーヴァではなく、アートマです。そのため、彼は自分の命を脇に置く権威を持っており、誰もそれを奪うことはできません。これは、イエスが他人の手によって死ぬのではなく、もし死ぬとすれば、自分の意志で命を脇に置くことを選ぶということを意味します。命を脇に置き、望む時にそれを取り戻す力を持っているのはアートマだけです。聖霊がイエスにこの権威を与えたことを、イエス自身が宣言しました。「誰も私から命を奪うことはできません。私は自分の意志でそれを捨てるのです。私には、それを捨てる権威があり、それを再び取り上げる権威もあります。この命令は私の父から受けたものです。」予言されたように、イエスは十字架にかけられた時、自分の命（プラーナまたは呼吸）を体の中に隠し、周りの人々には死んだように見えました。しかし、日曜日の朝早く、彼は命を取り戻して生きて現れました。これは、イエスがアートマとして、自分の命を捨て、同じ体で生き返る力を持っていることを示しています。そしてこの権威は、彼の父である聖霊から与えられたものです。さらに、アートマは他者の命を取り、輪廻のために送る権威も持っています。

42）ヨハネによる福音書 第 10 章 30 節

（10:30）私と父とは一つです。

アートマはジーヴァの父であり、それに応じて、パラマートマはアートマの創造に責任を負っています。したがって、アートマもまた人間の父であり、パラマートマはアートマの父です。イエスはアートマであるため、彼は神の子です。息子が父に細心の注意を払うとき、それは息子と父の間の結合状態を意味します。これが、イエスが聖霊である父に焦点を向けた時に「私と父とは一つです」と言った言葉の本質です。

43）ヨハネによる福音書 第 11 章 25 節

（11:25）イエスは彼女に言われた。「私は復活であり、命です。私を信じる者は、たとえ死んでも生きるでしょう。」

この文脈で、「復活」は誕生を示し、「命」は解脱（モークシャム）を意味し、輪廻からの解放を意味します。誕生とモークシャムの両方がアートマに関連しているため、イエスは「私を信じる者は死後に再び生まれることなく、モークシャムを得るでしょう」と宣言しました。

44）ヨハネによる福音書 第 11 章 26 節

（11:26）私を信じて生きる者は決して死ぬことがありません。

モークシャムを得た者は永遠の命を経験し、二度と死を迎えることはありません。したがって、イエスは「神を信じるすべての人はモークシャムを得て、二度と死ぬことはないでしょう」と宣言しました。

45）ヨハネによる福音書 第 12 章 25 節

（12:25）自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを永遠の命に保つでしょう。

イエスの「自分の命を愛する者はそれを失う」という言葉は、以下のように説明できます：人間（ジーヴァ）は地上で存在するために命を必要とし、地上の命に執着する者は永遠に生きることができないため、必然的にそれを失います。人の命は体内のプラーナ（生命力）の流れに依存しており、死ぬと呼吸は永久に止まります。最後の息が体から出て外気と混ざると、それは二度と戻ってきません。誰かが最初の誕生から二番目の誕生に移行する時、新しい息（命）を受け取りますが、古い息は決して取り戻せません。したがって、地上の命を優先し、それに執着する者は、最終的にそれを失います。この確実性にもかかわらず、人々は自然と他の何よりも自分の命を愛し、地上での時間を延ばそうとします。

モークシャムを望み、この世で生きることを望まない人は自分の命を憎み、世俗的な事柄に興味がないことを示します。そのような人は輪廻の輪から抜け出し、永遠の命を得ます。この命は死から解放されており、それを得た人はそれを守ります。モークシャムを得た人々は通常の人の命と似た特別な命を持っているわけではありませんが、「永遠の命」という言葉は概念を理解するのに役立つために使用されています。モークシャムを得た人は誰でも、誕生も死もない永遠の状態に永久に留まることが重要です。

46) ヨハネによる福音書 12 章 40 節

(12:40) 神は彼らの目を見えなくし、心を頑なにされた。それは彼らが目で見ることも、心で理解することも、立ち返ることもできず—そして私が彼らを癒すこともできないためである。

神が人としてこの世に来て人々に必要な知恵を語ったとき、体内のアートマ（神）は彼らの目を見えなくし、心を頑なにしたので、彼らは見ることも心で理解することもできず、カルマから解放されることもできなかった。カルマは彼らの苦しみの原因である。この節で重要なのは、聖霊によって創造されたアートマが、すべての人の体内にあり、すべての人を動かしているということである。アートマは聖霊の子であるが、創造主である聖霊は、知恵を伝えるために人として生まれた。生まれた者は聖霊であるにもかかわらず、神ではなく神の子と呼ばれる。これによると、体内にあるアートマは聖霊の子となる。聖霊が人として受肉したものも聖霊の子と呼ばれる。体内のアートマは、無知な人の目を見えなくし、心を頑なにして、神の子の言葉を理解できず、カルマから解放されないようにする。

聖霊である創造主は、アートマという子を創造し、それを人体に置いた。さらに、聖霊は無知な者たちに知恵を伝えるために、人の形をした別の子を創造した。人体内のアートマは常に存在するが、アートマの人としての受肉は、知恵を教えるために地上に周期的にのみ現れる。**アートマ**の人としての受肉が、聖霊に無関心で嫉妬心を持つ個人に知恵を伝えても、体内のアートマはその知性（ブッディ）が理解できないようにする。しかし、個人が聖霊への**献身と関心**を持っている場合、体内のアートマは彼らがアートマの人としての受肉の言葉を理解できるようにする。**聖霊の知恵を真に理解するためには**、体内のアートマと人の形をした第二の子の両方を認識しなければならない。

47) ヨハネによる福音書 12 章 47 節、48 節

(12:47) もし誰かが私の言葉を聞いても守らないなら、私はその人を裁かない。私は世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。

(12:48) 私を拒み、私の言葉を受け入れない者には裁く者がいる。私が語った言葉そのものが、終わりの日に彼らを裁くであろう。

　　　これらの言葉を語ったのは、人の形をしたアートマであると言える。人の形をした神が伝えた知恵を聞いても理解しない者がいた場合、人の形をしたアートマは死後の罪とプンヤに基づいて彼らの次の人生を裁くことはしない。知恵を教えるために人として来たアートマは、人間の次の人生を裁くために来たのではない。神（アートマ）は人として来て、その知恵を人々に明かし、彼らを救うために来た。人の形をしたアートマの言葉を聞かず、彼を偉大な存在として認めない人の次の人生を裁くのは別の者である。そのような裁判官は、常に体内に存在するアートマであることを知るべきである。体内のアートマは、人の形をしたアートマが伝えた知恵に基づいて、死の日に次の誕生を決定する。**体内のアートマと人の形で来るアートマ（バガヴァン）の働きを理解しない限り、聖霊を知ることはできない。**

48) ヨハネによる福音書 12 章 49 節、50 節

(12:49) 私は自分の考えで語ったのではなく、私を遣わした父が、私に何を言い、何を語るべきかを命じられた。

(12:50) 私は、父の命令が永遠の命につながることを知っている。だから、私が語ることは、父が私に語るように言われたことそのままである。

人として来たアートマ（バガヴァン）がこれらの言葉を語ったと理解すべきである。イエス、人の形をした神がこの声明を発した。神が人として受肉するときはいつでも、そのすべての知恵は聖霊から来る。人の形で来た者は、聖霊が自分にこの知恵を伝えるよう促したと述べた。人の形をしたアートマ（バガヴァン）が伝える知恵は永遠の命（モークシャム）につながる。人の形で来た者が明確に神として特定されていなくても、「**私が言うことは、父が私に語るように言われたことそのままである**」と述べ、語り手が聖霊であることを明らかにした。これによって、語っている者が聖霊であることが明らかになる。しかし、霊的教義に従えば、聖霊は父であり、人の形で来たアートマは子であることを強調すべきである。

49) ヨハネによる福音書 14 章 7 節

(14:7) あなたがたが本当に私を知っているなら、私の父をも知ることになる。今からは、あなたがたは父を知っており、父を見ている。

この節は先に述べた節（ヨハネ 12:49、12:50）と類似している。前に述べたように、父と子は同じであるが、霊的教義によれば、父と子は別個であると言うべきである。イエスは「**あなたがたが本当に私を知っているなら、私の父をも知るこ**

となる」と言った。神が人として来たときは神の子と呼ばれるが、実際には父自身が子の形をしているのである。それゆえ、「子を知れば、父を知る」と述べられている。

50) ヨハネによる福音書 14 章 8 節、9 節

(14:8) ピリポは言った。「主よ、私たちに父を示してください。それで十分です。」

(14:9) イエスは答えた。「ピリポよ、私はこんなに長い間あなたがたと一緒にいるのに、私を知らないのですか。私を見た者は父を見たのです。どうして『私たちに父を示してください』と言うのですか。」

この節は、目に見える形をしている者が聖霊であることを明らかにしている。それゆえ、イエスは「私を見た者は父を見たのです」と言った。

51) ヨハネによる福音書 14 章 10 節

(14:10) 私が父におり、父が私におられることを信じないのですか。私があなたがたに言う言葉は、自分の権威で語っているのではありません。むしろ、私のうちに住んでおられる父が、ご自身のわざをなさっているのです。

人が変装しているとき、その人と変装は切り離せない。したがって、金持ちが乞食に変装するとき、裕福な個人と乞食の両方が共存する。金持ちは変装中に乞食の外見を取る。乞食が市場で物乞いをしているように見えても、実際にはその行為を行っているのは金持ちである。目に見えない金持ちが乞食の役を演じているのである。金持ちが乞食の中に住んでお

り、乞食の言葉は金持ちから発せられているので、金持ちは乞食の中にあり、逆に乞食は金持ちの中にある—彼らは共に存在する。内なる人格が外見の仮面よりも重要であるため、変装中のすべての行為は内なる自己によって実行される。内なる人物が外見よりも重要であるため、外見上見える人物によって行われるすべての任務は内なる個人のものであると言える。乞食の外見にもかかわらず、彼は内なる金持ちを体現している。ある意味で、乞食は実際に金持ちであると確認できる。人の形に隠された聖霊が重要である。変装は一時的であり、内なる魂は永遠であることを認識することが不可欠である。**イエスの内にいるのは聖霊である**と主張できる。それゆえ、イエスは「父は私におり、私は父にいる」と宣言した。

52) ヨハネによる福音書 14 章 6 節

(14:6) イエスは答えた。「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、誰も父のもとに行くことはできない。」

先の例を基に、金持ちを理解する道は乞食を通してである。乞食が理解されれば、金持ちの正体が明らかになる。金持ちが認識されれば、その人が持つ富にアクセスできる。同様に、神を理解する道は人としての受肉を通してである。人の形を取った者を理解する人は、その中に住む神も理解するだろう。神を知ることは、神に内在する永遠の命を得ることにつながる。それゆえ、イエスはある時**「私は道であり、真理であり、命である」**と宣言した。イエスが「私は道である」と言ったとき、それは**私を通して神を理解する道**を意味する。また「私は真理である」と述べ、それは彼が神の真の現れであることを意味する。さらに**「私は永遠の命である」**と宣言した。この主張は、イエスの形をした真の神が、彼を知る者は誰でもパラローカ（モークシャム）を得て、パラローカで死を経験する

ことなく永遠の命を経験すると宣言したという事実に基づいている。

53) ヨハネによる福音書 14 章 16 節

(14:16) 私は父に祈ります。父はあなたがたに、もう一人の弁護者 （アダラナカルタ）、すなわち真理の霊（サティヤスワルピヤグ アートマ）を与え、あなたがたと常に共にいてくださるでしょう。

聖霊は人間の形で永久に人々の間に留まることはありません。時折、聖霊は姿を変え、必要な時に人々の生活の中に入ります。聖霊がイエスの姿をとった時、人々の間で 33 年間だけ生活しました。この 33 年のうち、wisdom（知恵） を伝えたのはわずか 3 年間でした。3 年を完了する前に、2 年 3 ヶ月後に人々の元を去りました。イエスは「私は父に別の弁護者（アダラナカルタ） を二度目に送るよう懇願します。その方は私より長く生き、知恵を教えます」と言いました。来る者は、来る者を懇願すると言う者と同一人物です。来るのは同じ一人です。来る者に頼むと言ったのも同じ一人です。別の弁護者（慰め主） を送ると言ったのも同じ一人です。**ただ一人だけです。**言う者、頼む者、来る者は同じ一人なのです。全ての役割を演じているのが一人だけだと理解しないと、言う者、頼む者、来る者が異なって見えるかもしれません。**これらの役割を演じているのが一人だけ**だと認識しないと、人間の姿で目の前にいる神、懇願する神、到来する神を理解することができません。

イエスとして父に懇願している者が、来たるべき慰め主であることを理解することが重要です。到来する弁護者は聖霊です。

54) ヨハネによる福音書 14 章 17 節

(14:17) 世はこの方を見ることも知ることもできないので、受け入れることができません。しかしあなたがたはこの方を知っています。この方があなたがたとともに住み、あなたがたのうちにいるからです。

「世（ロカ）」という言葉は、地上でカルマの結果を経験する人々を含むと理解できます。神が人間の姿をとる時、カルマに縛られた人々は神を認識したり認めたりできないかもしれません。神を認識できない人々は、神の教えや神聖な知恵を受け取ることができません。イエスを通して幾分かの知恵を得た人々だけが、イエスの後に人間の姿で来る慰め主を認識できるでしょう。慰め主はそれらの個人の内に住み、神を知る人々は、アートマとして自分たちの内にある神の存在を認識しながら、神と共存するでしょう。

55) ヨハネによる福音書 14 章 20 節

(14:20) その日には、私が父のうちにおり、あなたがたが私のうちにおり、私があなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。

この節を深く理解する前に、神の真の姿を把握する必要があります。神は三つの側面に分かれ、世界全体に浸透しています。神は一つですが、ジーヴァートマ、アートマ、パラマートマという三つの魂に分かれています。**ジーヴァートマはすべての生き物の体内の特定の場所に存在し、アートマはすべての生き物の体全体に広がっています。パラマートマは体の内外に存在し、すべての分子の中に存在します。**この概念を理解する個人は完全なグナーニ（知者）とみなされます。創造主であるパラマートマは、人々に知恵を伝えるために人間の姿をとり

ます。この顕現の間、パラマートマは自身を御子と主張し、父はパラマートマです。この用語は区別の目的で使われますが、御子と父は本質的に同じであると断言できます。神は「御子」の姿をとり、全生涯を通じて地上に住み、知恵を伝えます。これは知恵の普及のための方法として機能します。

あるいは、神は自身からアートマを送り出して、ジーヴァ（生命体）を創造し、維持し、滅ぼします。生き物の体を支配するアートマも、神の御子とみなされます。アートマはパラマートマの中に存在し、ジーヴァートマはアートマの領域内に存在します。結果として、「私（アートマ）は父の中にいる」という表現が、「私（アートマ）は父であるパラマートマの中にいる」と述べる代わりに使用されます。ジーヴァはアートマによって支配される体内に存在するため、節は「あなたがた（ジーヴァートマ）は私（アートマ）の中にいる」と強調します。体全体に広がるアートマは、特定の場所にいるあなたがた（ジーヴァートマ）の中にも広がっています。したがって、節は「あなたがたが魂の知恵を知る日に、私があなたがたの中にいることを知るでしょう」と述べています。三つの魂の概念に馴染みのない人々は、誰が誰の中に住んでいるかを見分けることができません。したがって、神が三つの魂の形で存在する方法を説明するトライタ定理を理解することが重要です。

56) ヨハネによる福音書 14 章 25 節と 26 節

(14:25) 私はまだあなたがたと一緒にいる間に、これらのことを話してきました。

(14:26) しかし、弁護者、すなわち、父が私の名によって送る聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、私が話したことをすべて思い起こさせてくれます。

ある時、イエスは弟子たちに「私がまだあなたがたと一緒にいる間に、これらの言葉を話します」と語りかけました。さらに、「私が去った後、別の弁護者（アダラナカルタ）があなたがたのもとに来るでしょう」と伝えました。また、「私のように来る弁護者は、私が話したすべてのことを思い起こさせ、私が話さなかったすべてのことを教えるでしょう」と説明しました。ここで重要な点は、イエスが「弁護者」という名前を使用したことです。弁護者の意味を明確にして、「弁護者は父が私の名によって送る聖霊です」と述べました。節を詳しく見ると、「父」で始まり「聖霊」で終わっていることがわかります。この順序は、イエスの父が聖霊であることを示唆しています。御子は変装した者であり、父は変装していない者であると考えることができます。実際には、両者は同一です。

知恵を伝え、カルマを取り除く者は弁護者（慰め主）と呼ばれます。イエスが神は弁護者の名のもとに神を送る者であると主張した時、「父は私の名によって送られる聖霊です」と述べました。これは、神が形をとり、弁護者の姿をとり、神聖な知恵を伝えることを説明しています。イエスがこれらの言葉を伝えたのは、この事柄を知らない人々でも理解できるようにするためであることは注目に値します。

57) ヨハネによる福音書 15 章 23 節

(15:23) 私を憎む者は、私の父をも憎んでいます。

私は最初から、神がイエスの姿で隠されており、神の変装に与えられた名前がイエスであると主張してきました。実際、イエスの名のもとに来たのは聖霊以外の何者でもありません。したがって、イエスを冒涜する者は、パラマートマをも冒涜していることになります。慰め主（弁護者）はイエスの後に来る者ではありません。イエスもまた弁護者でした。神が人間の姿をとる時はいつでも、一貫して弁護者と呼ばれるべきです。**弁護者はカルマの治療法として機能する知恵を伝え**、カルマを消滅させる教えを提供するのは神だけです。したがって、弁護者は聖霊と同義であると断言できます。しかし、神が地上で人間の姿をとる時、神を認識することは困難です。この困難さは、キリスト教においてグナーニを主張し、イエスを兄弟と呼ぶ個人によって強調されます。イエスは誰の兄弟でもないことが強調されています。イエスとして現れようと、別の名前で現れようと、神は聖霊として識別され、兄弟ではなく父となります。

58) ヨハネによる福音書 15 章 24 節と 25 節

(15:24) もし私が、ほかの誰もしなかったわざを彼らの間で行わなかったなら、彼らは罪を犯していなかったでしょう。しかし今、彼らは見ておりながら、私をも私の父をも憎んでいます。

(15:25) しかしこれは、彼らの律法に書かれている『彼らは理由なく私を憎んだ』という言葉が実現するためです。

地上で誰も成し遂げることができない任務は、人の罪を赦し、取り除くことです。イエスは、他人のカルマを赦す働きを行わなかったなら、罪は発生しなかっただろうと述べました。特定の個人の罪を公に赦した時、イエスの偉大さを知らず、妬みを持っていた人々は、イエスに対して憎しみを抱きました。イエスを憎むことは聖霊を憎むことと同じです。正当な理由なくイエスに憎しみを抱いた人々は罪を犯しました。

59) ヨハネによる福音書 15 章 26 節と 27 節

(15:26) 私が父のもとから遣わす弁護者、すなわち父から出る真理の霊が来る時、その方は私について証言します。

(15:27) あなたがたも、初めから私と一緒にいたのですから、証言しなければなりません。

イエスは弁護者（バガヴァン）として来て、父から人々に別の弁護者を送ると述べました。霊的な法則に従って、イエスは言うべきことを伝えました。しかし、父のもとに他の弁護者はおらず、時折弁護者の姿をとって現れる一人の神だけがいます。他の誰も神を送りません。イエスと聖霊が同一とみ

なされる時、送る者と来る者は同一です。イエスは「**真理の霊が弁護者として来て、私について証言するでしょう**」と述べました。来る者と去る者が同じである時、来る者が去る者について語ることは驚くべきことではありません。来る弁護者がイエスについて語るにつれて、弟子たちは間違いなくイエスを思い出すでしょう。結果として、弟子たちはイエスが来て知恵を伝えたことを確認するでしょう。

60) ヨハネによる福音書 第 16 章 7 節

（16:7）しかし、わたしは真実を告げます。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって良いことなのです。もしわたしが去って行かなければ、擁護者はあなたがたのところに来ないからです。しかし、もしわたしが行けば、その方をあなたがたのところに送ります。

一人の人が劇中で二つの役を演じる例えで考えると、二番目の役は最初の役が退場した後に登場します。同じ人物が両方の役を演じているため、最初の役を演じる人が二番目の役を演じるためには、最初の役は舞台裏に下がらなければなりません。最初の役が舞台裏に行かない限り、二番目の役は現れることができません。この移行は同じ人物が両方の役を演じているために起こります。同様に、イエスの役割で来た者は、二番目の役割で地上に戻ってくることが期待されています。したがって、イエスが人々のもとを去るとき、イエスの役を演じた者は二番目の役割で戻ってくることになります。聖霊がイエスの役割を担いました。もし再び人々と共にいるために来るのであれば、イエスとしての役割を手放し、新しい役割、新しい名前、新しい姿で再び現れなければなりません。そのため、イエスは「**わたしが去って行くことは、あなたがたにとって良いことです。わたしが去らなければ、擁護者はあなたがたのところに来ない**」と述べました。擁護者として戻ってくることを明確

に述べてはいませんが、「わたしが去るときに、その方をあなたがたのところに送ります」と伝えました。これらの言葉から、知性のある人なら誰でも、去る者と戻ってくる者が同一であることを容易に見分けることができます。

61) ヨハネによる福音書 第 16 章 8 節

（16:8）その方が来れば、罪と義と裁きについて、世を責め、悟らせるでしょう。

イエスの役割が舞台裏に消えた後、擁護者（バガヴァン）が第二の役割、第二の受肉として来ます。「擁護者」という言葉は神の受肉を表していますが、それは神の名前ではありません。擁護者として来る者は、世界のどんな名前でもあり得ます。したがって、この人物が神の受肉であるかどうかを誰も判断することはできません。擁護者の形や名前は誰も知りませんが、その行動を通じて認識できる可能性はあります。擁護者が地上に来たとき、その方は罪について議論し、人がどのように罪を得るのか、死ぬまでそれがどこに蓄えられているのか、そして罪の結果について明らかにします。**その方は、罪から逃れるには神聖な知恵が必要であることを説明します。**罪は薪のようなもので、知恵は火のようなものだからです。知恵によってのみ、人は罪を経験することから逃れ、神聖な知恵を得ることができます。生きている間に神聖な知恵を得られなかった人の罪は、死まで続きます。そのような人は死後、同じ日、分、瞬間に生まれ変わらなければなりません。死の日は最後の日として知られています。人生の最後の日が次の人生の最初の日となります。人は死後 1 秒以内に生まれ変わらなければなりません。死と再生の時間差は 0.1 秒程度と言えます。その短い時間の中で、アートマは故人の罪とプンニャ（善行）に基づいて裁きを行います。そしてアートマは、その人が二度目の誕生で何を食べ、飲み、経験しなければならないかを一瞬一瞬決定します。生まれた者の人生は、死における裁きによって決定されま

す。次の人生をどのように生きるかは、最後の日の裁きに基づいて決定されます。故人と共にいるアートマは、幼少期からの行いに基づいて正しく裁きを行います。次の人生で取るべき行動は、既存のカルマに従って決定されます。この決定を覆すことはできず、誰もがその裁きを受け入れなければなりません。

62) ヨハネによる福音書 第 16 章 12 節

（16:12）わたしには、あなたがたに言うべきことがまだたくさんありますが、今のあなたがたには耐えられません。

神が人として受肉するとき、人々の心情を考慮しながら慎重に知恵を伝えることが重要です。その教えは時と文脈に基づいて調整されなければなりません。神聖な知恵は、聴衆が真実を受け入れる準備ができているかどうかに配慮して伝えられる必要があります。比較として、もしあなたが婚約している女性に、彼女が既にあなたの妻であると告げたら、結婚前には受け入れられず、対立を招く可能性があります。しかし、同じ情報を結婚後に共有すれば、対立なく幸せをもたらすでしょう。同様に、真実に耐えられない可能性のある人々に神聖な知恵を提示する際には、誤解や反対のリスクがあります。したがって、神が人の形を取る場合でも、真実は慎重に共有されなければなりません。例えば、ラーヴァナ・ブラフマが神の受肉であると主張した場合、現代の聴衆はその概念をある程度理解できるかもしれません。しかし、同じ主張を 50 年前にしていたら、人々はラーヴァナを邪悪で怪物的な存在として見なし、意見の相違があったかもしれません。したがって、より早く共有されるべき知恵を延期しなければならない場合があります。この文脈で、イエスは弟子たちに「**わたしには、あなたがたに言うべきことがまだたくさんありますが、今のあなたがたには耐えられません**」と述べ、この原則を認めました。人類から離れる時が来たことを認識し、イエスは弟子たちに、来たるべき擁

護者が、イエスが語らなかったことを伝えるだろうと告げました。

63) ヨハネによる福音書 第 16 章 13 節

（16:13）しかし、その方、すなわち真理の霊が来れば、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。その方は自分から語るのではなく、聞いたことを話し、これから起こることをあなたがたに告げるからです。

イエスは来たるべき擁護者について予言しました。「真理の霊」という言葉は「**知恵の神**」を意味します。イエスは、彼の後に来る神が、すべての人を真理へと導き、真理のみを伝えるだろうと伝えました。神が人の形を取り、人としての振る舞いをするにもかかわらず、イエスは「人として、その方は自分からは何も教えません。聞いたことだけを話します」と述べました。擁護者に誰が告げたのかと疑問に思う人がいるかもしれませんが、情報源は一つしかありません。来る者は一人だけなので、その方が知恵を伝える同じ一人なのです。したがって、目に見える人も神が語ったことを明確に述べることができます。神の知恵を伝えることができるのは神だけです。人間は神の知恵を伝えることができないと述べる代わりに、擁護者は聞いたことだけを話すと表現されています。

64) ヨハネによる福音書 第 16 章 14 節、15 節

（16:14）その方はわたしの栄光を現します。わたしのものを受けて、それをあなたがたに告げるからです。

（16:15）父が持っておられるものはすべてわたしのものです。だから、その霊がわたしのものを受けて、あなたがたに告げると言ったのです。

この節を見ると、一部は理解できますが、他の部分は理解できません。この節は人々との隠れんぼのようなものです。以前、イエスは新しく来る真理の霊が聞いたことを教えると述べました。その後の節で、擁護者はイエスから受けたものを人々に伝えると述べました。さらに、イエスは擁護者がイエスが言わなかったことを表現するだろうと主張しました。しかし、現在の声明では、イエスは擁護者がイエスから受けたことを人々に伝えると述べています。イエスの声明の明らかな矛盾は混乱を招く可能性があります。しかし、この曖昧さには意図的な理由があります。イエスは、**彼の知恵に真摯な関心を持つ人々は理解し、関心のない人々は理解しない**ような方法で自分を表現することを選びました。さらに、来たる擁護者がイエスを栄光あるものとするために、イエスが言ったことを共有するだろうと述べました。イエスはその後、父（聖霊または神を指す）が持っているものはすべて自分のものだと確認しました。神の知恵は自分のものであり、擁護者はイエスから受けたものを伝えるだろうと強調することで、イエスと聖霊が同義であることが明らかになります。「**わたしは神です**」と明確に述べる代わりに、イエスは「**神のすべての言葉はわたしのものです**」と表現しました。

65) ヨハネによる福音書 第 16 章 16 節

（16:16）イエスは続けて言われた。「しばらくするとあなたがたはわたしを見なくなり、またしばらくするとわたしを見るでしょう。」

イエスは弟子たちに、しばらくするとイエスを見なくなると伝えました。これは人々の間からの離別と、彼らへの出現の終わりを示しています。また、しばらくしてから再び彼らがイエスを見ることになるとも述べました。これは、イエスが肉体の形を離れ、同じ身体的な現れでは再び現れないことを意味しています。この声明は弟子たちを困惑させ、なぜイエスがしばらくしてから再び会うと話したのかと疑問を抱かせました。イエスが「しばらくするとあなたがたはわたしを見なくなり、またしばらくするとわたしを見るでしょう」と述べたとき、一部の人々は彼が一時的に隠れて再び現れるのではないかと考えたかもしれません。しかし、以前の例で、イエスは「わたしは去ります。わたしが去らなければ、擁護者はあなたがたのところに来ません。わたしは去って、その方を送ります」と説明していました。したがって、イエスは去るという約束を果たし、しばらくしてから、イエスでもある来たるべき擁護者を通して再び彼らに会うことを示唆していたのです。この文脈では、去る者（イエス）と戻ってくる者（擁護者）が同一であることを理解すれば、この節は一貫性を持ちます。イエスは、彼らのどちらかを見ることは一人を見ることと同じであることを強調しました。なぜなら、イエスと擁護者は一つであり、同じだからです。

66) ヨハネによる福音書 第 16 章 17 節、18 節、19 節、20 節、21 節、22 節

(16:17) これを聞いて、弟子たちの何人かは互いに言った。「『しばらくすると、わたしを見なくなり、またしばらくすると、わたしを見るようになる』、そして『わたしは父のもとに行くから』と言われるのは、どういう意味なのだろうか。」

(16:18) 彼らは繰り返し尋ねた。「『しばらく』とはどういう意味なのか。私たちには何を言っているのか分からない。」

(16:19) イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って、彼らに言われた。「『しばらくすると、わたしを見なくなり、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と言ったことについて、互いに議論しているのか。」

(16:20) まことに、まことに、あなたがたに告げる。あなたがたは泣き、悲しむが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。

(16:21) 女が子を産むときには、産みの苦しみがある。それは時が来たからである。しかし、子どもが生まれると、一人の人が世に生まれた喜びのために、その苦しみを忘れてしまう。

(16:22) そのように、あなたがたも今は悲しみの時だが、わたしはまたあなたがたに会う。そのとき、あなたがたは喜び、その喜びをだれも奪うことはできない。

イエスが「しばらくすると、わたしを見なくなり、またしばらくすると、わたしを見るようになる」という言葉を語ったとき、人々はその意味を理解するのが難しかった。イエスは、その概念を説明するために出産する女性のたとえを用いた。女性が出産時に痛みを経験するように、弟子たちも主の離別によって苦しみを経験するだろうと伝えた。しかし、子どもが生まれると母親が痛みを忘れるように、主の再会の際には喜びを経験するだろうと安心させた。イエスは、その場にいた人々に、自分が去ることで悲しみの時期が来るが、再会の際にはその悲しみが喜びに変わると強調した。

67) ヨハネによる福音書 16 章 25 節

(16:25) わたしはこれまで比喩を用いて話してきたが、もはやそのような言い方をせず、父について明確に告げる時が来る。

前述のイエスの言葉は、理解が難しく、人々を混乱させるものだと認識されていた。イエス自身も、即座の理解を避けるために比喩的に話していたことを認めた。また、「将来は比喩的に話すことはせず、すべてを明確に伝える」と断言した。しかし、この発言自体もやや曖昧に見える。イエスは間もなく去り、擁護者である聖霊が来てすべてを明らかにすると説明した。擁護者は主が去った場合にのみ来ること、弟子たちは主の離別を悲しむが、再会時には喜ぶだろうと明確にした。そして今、**「これまでは曖昧に話したが、戻ってきたときにはすべてを明確に伝える」**と付け加えた。この発言は、来るのが異なる擁護者なのか、イエス自身が戻ってくるのかについて不確実性をもたらす。

ヨハネの黙示録

1) ヨハネの黙示録 9 章 4 節、5 節、6 節

(9:4) 彼らは地の草や、あらゆる植物や木々を害することを命じられず、ただ額に神の封印を持たない人々だけを害するように言い渡された。

(9:5) 彼らには人々を殺す権限は与えられず、ただ五か月の間苦しめる権限だけが与えられた。その苦痛は、さそりが人を刺したときの苦しみのようであった。

(9:6) その期間中、人々は死を求めるが、見つけることができない。死を願うが、死は彼らから逃げ去る。

これらの節の前の第 3 節、黙示録 9:3 には、「**煙の中からいなごが地上に出て来て、地のさそりと同じような力を与えられた**」と書かれている。この節は、いなごが煙から現れたことを示している。しかし、ここで言う煙は、木材やその他の物を燃やして出る煙ではない。代わりに、冬の夜明けに太陽がまだ昇っていないときに現れる濃い雲のことである。この雲は日光を減少させ、暗闇を作り出す。いなごの群れはこの暗い雲から来る。彼らは軍隊のように大群で地上に到着するため、「いなごの群れ」として知られている。いなごがどこから来るのか正確には誰も知らないが、空の曇った霧から生まれると考えられている。彼らの誕生と成長は謎のままであり、明確な起源もなく虚空の煙から現れる。いなごの群れは数百、数千、さらには数百万にも及ぶことがある。

いなごは人々を苦しめる多くの病気を運ぶ。彼らは普通のいなごのように見えるかもしれないが、神の僕として仕える天使の軍隊を構成し、神の命令によって派遣される。神はいなごに人類を苦しめるよう命じ、その命令を通じて、このいなごの軍隊は人類に影響を与える。目に見えない領域から現れ、人々を隠れて噛み、病気という形で体内に入り込み、苦しみを与える。神は彼らに地上のさそりと同じほどの毒を与えた。人類は目に見えない世界からやってくるいなごによってかなりの苦しみを受ける。いなごは人間の罪のための苦しみの代理人として仕える。彼らは人間以外の地上の草、植物、木々を害さないよう指示された。一般的には、いなごは草、植物、木々を害すると考えられているが、この節ではこれらのいなごは植物を害さず、人間を標的にすることを明確にしている。いなごの起源、彼らの生活の糧、そして彼らの使命は人類にとって未知のままである。

ここで言及されている４つの詩節から、蝗の形をした天使の軍団が人間を苦しめるために来ることは明らかです。蝗の形を取った神の僕たちの軍団は、最大５ヶ月間人間を苦しめる力を持っていますが、死をもたらす権限は持っていません。蝗が目に見えない形で人間を噛むとき、サソリの刺し傷のような痛みを伴う病気を引き起こします。苦痛の強さは個人のカルマによって異なり、軽い不快感からサソリの刺し傷のレベルまで様々です。誰もこの痛みを逃れることができないため、人間はそれに耐えなければなりません。詩節は、激しい苦痛の間、人々は死を逃げ道として望むかもしれませんが、自らの命を絶つことは許されないことを示しています。したがって、人間は痛みに耐えなければなりません。さらに詩節は、死さえも彼らから逃げることを示しており、人間は蝗がもたらす苦痛から逃れられないことを意味しています。

目に見えない煙のような雲から発生する蝗は、100 回来ても１回しか目に見えないかもしれません。目に見えない状態で、病気やその他の手段を通じて人間に様々な影響を及ぼす

ことができます。詩節は、彼らの害は人間のみに向けられており、あらゆる形で現れる可能性があることを示しています。蝗は害を与えるように命じられているため、人間はこの害に耐えることが述べられています。人間が耐えがたい苦痛のために死を求めても、死は彼らから逃げ去るため、手の届かないものとなります。神が送った「目に見えない蝗（僕たち）」から様々な方法で苦しめられても、人間は苦痛の原因について考えることをしません。彼らは神の言葉を通じて苦痛から逃れることができません。

世界中で新しい病気が出現していますが、人間はしばしばその起源について考えることをしません。新しい病気を特定するには時間がかかり、治療法を見つけるにはさらに長い時間がかかることがあります。ある病気の治療法が発見されると同時に、別の捉えどころのない病気が現れるかもしれません。病気と並んで、診断不可能な病気や苦痛があります。目に見えない力が苦痛に寄与していることを認める人もいますが、それらに効果的に対処する方法を知っている人はいません。**目に見えない天使がもたらす苦痛を避ける唯一の方法は、神の力の象徴である神の印を身につけることです。神は、神の印を持たない者だけを迫害するよう僕たちに命じました。**目に見える蝗が植物や木々に害を与えることができると信じる人もいますが、**神は目に見えない蝗に対して、額に神の印を持たない者のみに害を与えるよう指示しました。**最後の神聖な聖典では、5:22と22:32の詩節で神の印について言及しています。最初の神聖な聖典であるバガヴァッド・ギーターのアクシャラ・パラブラフマ・ヨーガは、神の印を示唆しています。私の聖典「**神の印**」では、神の印がどのように見えるかを詳しく説明しています。他人に質問するのではなく、神を信じて神の印を身につけてください。それは特定の宗教に縛られているものではありません。神の印は3つの神聖な聖典で言及されています。聖書の黙示録は、神の印を身につけないことによって引き起こされる災害を説明しています。クリスチャンは神の印を身につけること

を躊躇うべきではありません。それは信仰の問題です。あなたの宗教に関係なく、苦痛から身を守ってください。私の言葉を聞いて、以前は知られていなかった「神の印」を身につけてください。苦痛から身を守ってください。

終わり

三本の指

イエスの肖像画はめったに人々の前に現れません。よく見ると、イエスは右手で三本の指を示しているのが分かります。イエスは約３年間神聖な知恵を伝え、死後も彼の肖像画は人々に教えを伝えるために現れます。解釈は様々かもしれませんが、私が写真を見て理解したことは、それがイエスの教えからの重要なメッセージを含んでいるということです。最初の神聖な聖典では、神はクシャラ、アクシャラ、プルショッタマという３つの部分で描かれています。同様に、最後の神聖な聖典では、神は乗客、運転手、証人という３つの側面を持つと描写されています。第二の神聖な聖典では、神は御子、父、聖霊という３つの部分があるとされています。神の３つの側面は、バガヴァッド・ギーター、聖書、コーランにおいて同じ知恵として説明されています。これら３つの聖典における基本的な知恵は、神の３つの側面を理解することにあります。神の３つの側面を理解すれば、神の知恵の完全な理解が可能になります。

しかし、バガヴァッド・ギーターを読むヒンドゥー教徒は、ジーヴァートマ（クシャラ）とアートマ（アクシャラ）が誰であるかを知りません。同様に、クリスチャンは御子と父が誰であるかを知りません。イスラム教徒は乗客と運転手が誰であるかを知りません。私が書いたバガヴァッド・ギーターで

は、ヒンドゥー教徒は滅びゆくジーヴァと、体内に存在する永遠の神について知らないと述べました。聖書でも、クリスチャンは２人の御子 - 御子と父 - の詳細を理解していないと指摘しました。同様に、「最後の神聖な聖典のダイヤモンドの詩節」という聖典では、イスラム教徒は 2 つのアッラーについて知らないと述べました。これら３つの宗教の人々は、それぞれの聖典の主要な本質である神の他の２つの部分について何の考えもないかもしれません。誰もが認識している唯一の用語は「神」です。知らないうちに、彼らは全員、バガヴァッド・ギーターではプルショッタマ、聖書では聖霊、コーランでは証人として知られる第三の部分を崇拝しています。神自身が、あらゆる崇拝とあらゆるダルマを超越している神の第三の部分（聖霊）を崇拝することは正しくないと述べています。しかし、誰もが「何も必要としない神」を崇拝しています。神が私たちの崇拝を必要としないことを知らないことが、人間の無知であると言えます。

クリスチャンに関して言えば、彼らは聖典に記されている「2 人の御子」について知りません。聖書には２人の御子について述べられていますが、クリスチャンは１人の御子しかいないと信じており、２人の御子の知恵に馴染みがありません。永遠の御子と一時的な御子という２人の御子がいることを知らないかもしれません。聖書では彼らを御子と独り子として言及していますが、クリスチャンはこの２人の御子が誰であるかを知りません。同様に、どの宗教でも、父である神と祖父である神という２人の神がいることを知る人はいないかもしれません。この真実が聖典で科学的に提示されているにもかかわらず、ある人々はそれを信じないかもしれず、他の人々は２人の神の存在を完全に否定します。聖典では崇拝すべき神は１人だけだと述べていますが、この神が父なのか祖父なのかは不明確です。

神聖な知恵を持つ人々と聖典を読む人々は、彼らの理解に基づいて１人の神だけを崇拝します。彼らは、崇拝される

べき父なる神の代わりに、崇拝されるべきではない祖父なる神を崇拝しているかもしれません。父なる神と祖父なる神という用語は新しく思えるかもしれませんが、この事項は実際に彼らの聖典に存在します。人々はしばしば真実の知恵を理解することができません。誰かが真実を共有すると、怒って拒絶するかもしれません。私の聖書では、人の子と神の子という２人の御子がいること、そして祖父の立場にある聖霊は崇拝されるべきではないことを読みました。聖霊を神と考え、神として崇拝してきた人々は今、混乱状態にあるかもしれません。イエスは２人の御子と聖霊について重要な教えを説きました。彼は指を使って「**2人の御子と彼らの父である聖霊**」を表現しました。イエスは右手で２本の指 - 人差し指と中指 - と親指を示しました。私は肖像画の中で親指が聖霊を示していると理解しました。神は知性（ブッディ）に知覚力を与える者であるため、真実の知恵によれば、イエスは２本の指（人差し指と中指）で父（アートマ）と御子（バガヴァン）の両方を示しました。それらが永遠の御子と一時的な御子を表していると理解されています。聖典は、**2人の御子が知られるまで聖霊は知られないだろう**と要約しています。全人類社会が知るべき霊的な秘密は、**2人の御子の問題**であることを皆が知るべきです。次のページのイエスの３本の指を見ると、それらは聖霊と２人の御子 - アートマと独り子 - を思い起こさせます。



聖金曜日それとも悪金曜日？

人生には幸せをもたらす出来事もあれば、悲しみをもたらす出来事もあります。喜びの瞬間には、人は陽気で美味しい食事や衣服を楽しみます。反対に、悲しみに直面すると、食欲を失い、人生の様々な側面への興味を失います。例えば、インドのディワリ祭は、その日に邪悪な悪魔ナラカスラが打ち負かされたことを記念して、花火で祝われます。古代では、イエスを法廷に連れて行き、その処刑を画策した書記官、パリサイ人、学者たちは、イエスの死を喜びました。彼らは毎年、イエスの命日を喜びの日として「聖金曜日」として祝っていまし

た。それ以来、この祭りは「聖金曜日」として知られるようになりました。

初期の頃は、イエスの偉大さを知らなかった人々が、書記官や学者たちと共にこの祭りを祝っていました。これは、イエスの価値と知恵が知られていなかった時のことでした。現代では、イエスの知恵を知っている人々でさえ、イエスの死んだ日を聖金曜日として祝っています。良い日には喜んで祝うのが習わしですが、イエスが亡くなった日は、その信者たちにとって苦痛の日であるはずです。キリスト教徒たちが、イエスを自分たちの神として信仰しながら、その日にイエスの死を悼むことなく、新しい服を着て美味しい食事を楽しむ姿を目にするのは驚くべきことです。

確かに、イエスが殺された日は「悪い日」とされるべきです。イエスの信者たちは、その日は悲しみを表し、食事を控えるべきです。その日を祭りとして祝い、まるで良い日であるかのように「聖金曜日」と名付けることは困惑させられます。イエスを家族の神として考える人々でさえ、お祝いに参加することは、イエスの価値を理解していないことを示しています。イエスを深く敬う人々は、その日を「悪金曜日」とみなすべきです。説教者たちには、悪金曜日の意義について人々を教育し、それを祝うことを思いとどまらせる責任があります。命日と誕生日の区別がつかない人々は、神の知恵の偉大さを理解していません。家族の長が亡くなった時、家族全員が悲しみに暮れるように、家族以上に尊重されるべきイエスが亡くなった時も同じ敬意を払うべきです。イエスの死を悲しむことなく祭りとして祝うことは、それを吉日と考えることは間違いです。イエスは「**私よりも父や母を愛する者は、私にふさわしくありません。私よりも息子や娘を愛する者も、私にふさわしくありません**」と言いました。家族の死を悼みながら、イエスの死を悼まず、代わりに祭りとして祝う人々が、どうしてイエスの慈悲にふさわしいでしょうか？したがって、イエスを敬うために聖金曜日を「悪金曜日」と呼びましょう。その日を邪悪な日と

みなし、祝うことなく悲しむことが、イエスへの敬意となります。そうでなければ、私たちはイエスへの賞賛を言葉だけで表現し、心では表現していないことになります。もしあなたがイエスを敬い、愛し、崇拝し、祈るのであれば、聖金曜日を悪金曜日として広め、全ての人がそれを理解できるよう助けてください。そうすればあなたは真のイエスの信者となります。聖金曜日を放棄しても、あなたに悪いことは起こりません。良いことだけが起こります。

著：三宗教の唯一の導師

シュリー・シュリー・シュリー・アーチャリヤ・プラボーダーナンダ・ヨギースワルル

千人が支持しても - 嘘は真実にはなりません。

千人が否定しても - 真実は嘘にはなりません。

ヒンドゥー教徒からの手紙

まず、スワミへの敬意を表します....

ジャイ・シュリーラーマ！私の名前はピッタラ・ティルマレシャ、36歳、テランガーナ州ナルゴンダ村在住です。職業：会社員、カースト：ムディラジュ（ボヤカースト）、宗教：ヒンドゥー教、父の職業：最初は農民、後にリキシャ引き、母の職業：果物売り、学歴：理学修士、教育学士（数学）。

先生、この手紙を書くのは、私の精神的な自己紹介が社会のために何か良いことをするだろうという意図からです。あなたの著作「第二の神聖な聖典の宝石」を読んだ後、この手紙を書きたいと思いました。聖書について著作を書くことは、ヒンドゥー教（インドゥ）のスワミジにとって最も大胆な行為のように思えます。多くの人は、スワミジはバガヴァッド・ギーターは書けても聖書は書けないと考えています。私は既にあなたの著作、バガヴァッド・ギーター、そしてクルアーンを読んでいます。今や、あなたの著作を通じて聖書の知恵も学びました。あなたを通じて三つの宗教の三つの聖典に含まれる神聖な知恵を理解しました。現代社会の状態を知り、この手紙を通じて良い意図を持って私の見解のいくつかを表現しています。

最初に読んだ著作は「バミューダトライアングルの秘密」です。この著作を通じて、なぜ飛行機や船がバミューダトライアングルで消えるのかという秘密を学びました。ハリウッド映画のようなこの奇妙な事実を理解できたことを嬉しく思います。次に「幽霊 - ブータ（実際の出来事）」を読み、「見えない（微細な）世界」についての科学的な情報を知りました。さらに、神の政府と神の法則がどのように働いているかを知った時は非常に驚き、この最大の神秘を知ることができた神に感謝します。その後、「真理の探求者の物語」と「シュリ・クリシュナは神か、それともバガヴァンか？」という著作を読みました。「シュリ・クリシュナは神か、それともバガヴァンか？」から偉大な秘密を学べたことをとても嬉しく思います。

今や人生の目的地を見つけ、チンナ・ポダマラのプラボーダシュラマムにあるクリシュナ寺院を訪れ、クリシュナ神を礼拝できたことを嬉しく思います。2012 年 7 月にプラボーダシュラマムを訪れて以来、あなたの 93 の著作と 150 の講演から知恵を吸収できることを毎日喜びに感じています。

「**寺院の伝統（隠された真実）**」を通じて、寺院の意義について学びました。「**インドゥの伝統**」から抑圧された伝統の真の意味を理解しました。「**私たちの祭り**」という著作から、「祭り」の中の「果実」の意味だけでなく、祭りの本質的な目的と私たちの長老たちの事前に計画された思考の意図も理解しました。この著作であなたが述べたように、まず精神的な発展があり、次に個人の発展、そして社会の発展が起こるということは百パーセント真実です。あなたから出る全ての著作は知恵の鉱脈です。全ての説教は法（ダルマ）の宝です。あなたの言葉は人間だけでなく、全ての生き物にとって有益です。これは過去 6 年間の経験を経て語る真実です。

あなたの宗教であるヒンドゥー教徒があなた、偉大な皇帝に対して侮蔑的な言葉を投げかけた時、私は落胆しました。しかし、全ての人に事実を認識してもらうため、この手紙を通じていくつかの情報を共有しています。

トライタ定理バガヴァッド・ギーターはクリシュナ神の真のメッセージを伝えました。スワミの著作「**最後の神聖な聖典の知恵の言葉（704 ページ）**」と「**最後の神聖な聖典のダイヤモンド**」は、ガブリエル（太陽）が預言者ムハンマドに送った神聖な知恵を世界に理解させました。ヨギースワルルの著作「**第二の神聖な聖典の宝石（352 ページ）**」は、イエスの福音書の真のメッセージを伝えました。

ここで、宗教的憎悪によって矮小化された知識人、慈悲のない宗教的悪魔、宗教に狂った不完全な知識人、アシュラムの価値を知らない政治的怪物、カーストの疥癬と宗教的狂気で社会を誤導する偽預言者、理由を知らない合理主義者、真実

を知らない真理探求コミュニティ、神、魂、礼拝、知恵という言葉を使って社会を迷信に追いやる長老たちへ私の訴えがあります。「トライタ定理」の偉大さを知るために、スワミの著作を少なくとも１冊でも徹底的に読み、そこに書かれていることに注意を払ってください。スワミの言葉の一つを見てみましょう。

「宗教は禁止されています。カーストは非合理的です。バガヴァッド・ギーター、聖書、クルアーンの三つは、同じ神聖な聖典の一部です。あなたの感情がカーストを超えるなら、すぐにプラボーダ・セヴァ・サミティに参加してください。神はあなたが知識人になることを望んでいます - シュリー・シュリー・シュリー・アーチャリヤ・プラボーダーナンダ・ヨギースワルル」

スワミジは上記の言葉を語っただけでなく、異なるカーストや異なる宗教間の結婚も執り行いました。彼自身も異なるカーストの女性と結婚しました。このような偉大なスワミについて、宗教的憎悪や有害な文章を書くことがあるでしょうか？皆さん、一度よく考えてみてください。

スワミの聖典は、ヴェーマナの詩の真の知恵を伝えています。それらはヴィーラブラーマムの哲学的な詩の本当の意味を伝えています。アートマリンガ・シャタカムは霊的な情報を伝えました。彼は世界に知られていない多くの偉大な秘密と、人類の霊的繁栄に貢献する神聖な情報を提供しました。彼の聖典から知恵を得た多くの無神論者が真の信者となりました。愚か者でさえ合理主義者になりました。盲目的な信者は科学的アプローチを持つ霊的科学者となりました。テロリストでさえ変化して、グナーニ（知者）となりました。

彼の知恵を知るヒンドゥー教徒は真のインドゥ（真の知者）です。彼の知恵を知るキリスト教徒は真のキリスト教徒（神の真の信者）です。

彼の知恵を知るイスラム教徒は真のムスリム（神に真に従順な者）です。

彼の聖典はカルマを根絶し、罪を赦します。痛みのある体の部分に信念と献身を持って彼の聖典を置くと、それを引き起こしたカルマを破壊し、安堵をもたらすまで、何の支えもなく付着します。これは驚くべきことかもしれませんが、私の経験に基づいて語られた明白な真実です。

彼の著作を通じて、世界はトレーター・ユガにおける神の化身である「バガヴァーン・ラーヴァナ・ブラフマー」についての真実を知ることができました。被害者とされる人々が主張するシーター女神でさえ、ラーヴァナ・ブラフマーを非難しませんでした。なぜアーリア人たちがラーマーヤナを書いた際に、シーターの誘拐時のラーヴァナ・ブラフマーの年齢を語ることができなかったのでしょうか？もしこの質問に答えられれば、ラーマーヤナの隠された本来の物語が明らかになるでしょう。ラーヴァナ・ブラフマーは妻のマンドーダリーとメーグナードと共にアショーカの森でシーター女神を訪れましたが、なぜ彼は邪悪な人物として描かれたのでしょうか？高齢のラーヴァナ・ブラフマーはシーターのスワヤムヴァラに参加しなかったにもかかわらず、シーターのスワヤムヴァラでシヴァの弓を持ち上げることができなかったと書くのは恥ずかしくないでしょうか？彼が娘のシーターに触れることなく自分の王国スリランカに連れて行った時、彼を欲望に満ちた男だと偽りを書くでしょうか？一部の利己的な人々は、彼が欲望を持ってシーターを連れ去ったと陰謀を企てましたが、シーターに触れた者は死に至ると言われていることに基づけば、これはどうして可能なのでしょうか？少なくとも今、この共同体はラーマーヤナの真実を知るべきです。シーターの苦しみと、バガヴァーン・ラーヴァナ・ブラフマーの化身がまもなく終わることを知っていたマンドーダリー女神は、ラーヴァナ・ブラフマーがシーターの幸福のためにランカに連れてきたと王国の人々に語っていました。私たちは偉大なシュリー・バガヴァーン・ラーヴァナ・

ブラフマーとシュリーマティー・マンドーダリー女神の肖像画を見たいと願っています。

あなたは本当の自分が誰なのかを知りません。フェイスブックやユーチューブに不必要なジャンクメッセージを投稿しないでください。誹謗中傷をすると、何年もの間カルマが蓄積されます。聞く必要がなければ聞かないでください。ダルマの定義や、ダルマが何種類あるかを知らないのに、公共のテレビでグナーニたちを討論に呼び出さないでください。

トレーター定理が真の基準です。この基準は宗教的憎悪のレベルを測るために使用されます。トレーター定理の知恵を通じて、世界は宗教にどれだけの知恵があり、どれだけの憎悪があるかを知ることになるでしょう。プラボーダ・セーヴァ・サミティとその５つの関連組織は、すべてのことは神の許可のもとで起こると固く信じています。

プラボーダーシュラマムは霊的発展をもたらす唯一の組織です。他のすべての組織は人格の発展とより良い社会のために働いています。しかし、霊的発展がなければ、人格と社会の発展は起こらないということを、すべての人が認識すべきです。

ヨギースワルルルの知恵はカーストと宗教から自由です。そのため、すべての宗教の人々 - ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒 - が調和を持って彼のもとを訪れ、真の神聖な知恵を知ることを喜んでいます。ヴィーラブラーマムが言ったように、彼の知恵は三つの宗教すべてを結びつけています。ブラーマムはカラグナーナム（予言）で「**すべての偉大な半神（デーヴァター）がアーナンダーシュラマムにいる**」と言いました。デーヴァターたちは父の知恵を学ぶ喜びを語りに来ました。彼はまた、「**プラボーダーシュラマムは最高レベルの知恵を持っています。プラボーダーシュラマムにいる人々は全能者の属性を持っています。その全能者はアーナンダ・グルだけでした。アーナンダ・グルはあなたと私のグルでもありま**

す」と言いました。ブラーマム自身が語ったそのような言葉のメッセージがスワミの聖典に見られます。神の知恵を分別と勤勉さを持って把握すべきです。

バガヴァッド・ギーターを読まない人々がヒンドゥーのダルマの救い主でしょうか？歴史における不正を知らない愚か者たちが、ヒンドゥー教を支えることができるでしょうか？「始まりの秘密」と「創造の秘密」を知らずに平等な社会を築くことができますか？忍耐を持って、宗教的憎悪なしに聖典を読んで、その善さを認識してください。気分が悪くなれば、それを置いておきましょう。すべての人がそれを信じなければならないという規則はありません。ジーヴァートマ、アートマ、パラマートマを伴う**ブラフマ、カルマ、バクティ・ヨーガム**の秘密を詳細に明らかにする、合理的で科学的かつ霊的な意識を持つ**トレーター・シッダーンタの聖典と教えは**、現代社会に不可欠です。

国連、世界平和評議会、警察法、IPC、CrPC、刑務所法、CBI、CBCID、インテリジェンス・レポート、ACB、人権監視、女性の権利、SC ST atrocities 法、インド信託法、イスラム法、キリスト教法、労働法、中央政府の GO、州政府の GO、選挙委員会、インド憲法、インド裁判所、RTI 法、情報技術法 2000 など、これらの組織は実際、人類の福祉のために存在しています。霊的機関は、人々の福祉にどのような知恵が適しているかを伝える責任があります。プラボーダーシュラマムとその関連機関は、そのような責任ある機関の中で第一位を占めています。何よりも、**「神の法と神の行政」**も存在することを忘れてはいけません。

三つの神聖な聖典の本質は、三つの魂について説明することです。神聖な知恵のない人生は無駄です。神は人間に神の知恵を知るためだけに命を与えました。神の知恵はカーストと宗教を超えています。ヨギースワルルルは「最初の神聖な聖典バガヴァッド・ギーター」を通じて、クリシュナ主の知恵の

真の意味を提供しました。彼は聖典「最後の神聖な聖典における知恵の言葉」と「最後の神聖な聖典における宝石」で、ガブリエルを通じて預言者ムハンマドにもたらされたクルアーンの知恵を与えてくれました。彼は「第二の神聖な聖典における宝石」でイエスの福音の知恵を私たちに伝えました。彼は聖典と教えを通じて、実践的な真の神聖な知恵を私たちに与えています。彼が語った知恵を知り、神の印を身につけ、罪の赦しを受けてください。注意深く聞いて実践すれば、あなたは幸運です。聞かなければ、それはあなたのカルマです。すべては神の意志に従って起こっており、神はそれを知っています。

ヒンドゥー教徒はどの神を崇拝すべきかを知るべきです。

イスラム教徒は二人のアッラー（二人の創造主）が誰なのかを知る必要があります。

キリスト教徒は二人の息子が誰なのかを知る必要があります。

人間は決して神にはなりませんが、神は人間として来ることができます。人間の形をした神を認識するためには、まず私たちの中に彼の知恵がなければなりません。神を認識するためには、長老たちが言ったこれら二つの原則を知る必要があります。ヴェーマナ・ヨギが彼の詩は 1000 通りの方法で理解できると言ったように、同様にトレーター定理の知恵は 9000 通りの方法で理解することができます。「シュラッダーヴァン・ラバテー・グナーナム（関心を持つ者は知恵を得る）」という言葉の通り、思慮深く知的な人々はトレーターの知恵を理解することができます。

少なくとも今、カーストと宗教の考えを捨て、真の神聖な知恵を知ってください。今知らなければ、二度と知ることはないでしょう。時間は短いです。今すぐ行動してください。

私たちにさらなる神聖な知恵を与えてくださるヨギースワルルルの足元に香り高い花を捧げます。私の心と魂と精神のすべてを込めて、無限の敬意を捧げます。

あなたの従順なしもべ

ティルマレス

第二の神聖経典の宝石

(トライタ定理における福音)



著者：三宗教（ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教）の唯一の導師、霊的王国の帝王、100冊以上の神聖な書物の著者、インドゥ・グニャーナ・ダルマ・プラダータ、センセーショナルな作家、トライタ教義のアディ・カルタ. シュリー・シュリー・シュリー・アチャリヤ・プラボーダーナンダ・ヨギーシュワルル